
IS 何回か転生(?)する人の物語

起源はきっと厨二病の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 何回か転生（？）する人の物語

【Nコード】

N7031Y

【作者名】

起源はきつと厨二病の人

【あらすじ】

何処にでもいるような一般ピーポーが突然テレビからのなぞの光で別世界に来た！そして、その世界で「五臓六腑撒き散らしても生き残ってみせる！！」と頑張る物語

ブローグ的な（前書き）

はじめまして起源はきつと厨二病の人です

この作品が処女作となります

誤字脱字がかなり多くなってしまいましたが暖かい目で見守ってくださいとうれしいです。

なおこの作品は厨二病てきなものがありこんなの○○じゃないなどといったものがあると思いますですがそれが嫌な人は戻ることをお勧めいたします（汗

それでもよければぜひともご覧ください

ブローグ的な

皆はよくネットで見るような二次創作のように自分が転生や憑依、トリップをしてみたいと思ったことはあるだろうか？

俺もうらやましいと思っていたが・・・まさか、何処にでもいそうな一般ピーポアの自分が経験するとは思ひもしなかった、、

さかのぼること数時間前・・・

今日も仕事が終わリ自分が一人暮らししているアパートへ帰宅してP S 3を起動し、A C f aを始めて1時間ぐらいすると急にテレビが光り、気がついたら知らない部屋にいた

くそして現在く

ここに来て（？）から建物内をちよつと調べているとここはどこかの軍事関係の建物ということがわかった。

「なぜ、人が1人も見当たらないんだ？」

（それにしてもさつきから妙に体に違和感があるな、どうしたんだ・・・？）

などと思っれていても実際に体に怪我などをしているわけではないが

妙に違和感がある

「なんか目線が低いような・・・」

とぼそりとつぶやいた瞬間、ふと勘づき急いで近くのトイレに駆け込み鏡を見た

そして、そこには・・・昔の自分がいたのだ

「なんじゃこりゃあああああああああ！！」

（なぜ今まで気づかなかった！？）

彼はもう一度鏡で自分の姿をみて心を落ち着かせるためにゆっくりと深呼吸をし改めて今までの状況を整理してみた

A C f a を始める↓リリウムたんマジ可愛いよ↓テレビからなぞの光が！↓知らない天井だ↓俺、若返りました↑今ここ

「面倒なことになった・・・」

「悩んでいても仕方ないな、建物内をさらに調べるか」

彼はまた建物内を散策しそして一番奥のどでかい扉の前にきた横にはタッチパネルのようなものがありそこには手形のグラフィックがある

（なんだ、これは？

映画によく出てくるような手を触れてやるやつかな？

試しに触ってみるか）

そう思い彼はタッチパネルに手を触れてみると画面にCOMPLETEという文字が浮かびどでかい扉が重たい音を立てながら開いた

（なんか開いちゃったよ！）

そしておそろおそろ入っていくとそこにあつたのは・・・

・・・見覚えのある巨大なロボットだった

「なんだ、これは？」

「ものすごく見覚えがあるんだが、まさかな・・・」

彼は内心とても驚いている。

なぜならそこにある巨大ロボは・・・昔、自分がPSS2でやっていたACLRの機体にあまりにも似ているのだ

「まさか、ACの世界に来たとは信じたくないな」

彼はそう言つとため息をつき、呟いた

「面倒なことになった・・・」

ブローグ的な（後書き）

最初から駄文ですいません……

これから頑張っていきたいのでよろしくお願いします

第1話（前書き）

すいません今回も駄文です；；；

戦闘の描写が下手だったりしてわかりにくいかもしれませんが許してください（汗

あと独自解釈や独自設定が入るかもしれませんがそこら辺はご了承ください

第1話

第1話

俺はとりあえずあのAC中に乗ってみることにした

そして不思議なことに身体が覚えているように次々とコクピット内を操作することができた

その感覚を元にいろいろな情報を見てみるとこの建物の持ち主とこのACの所有者欄にレイジ・クゼと書いてあるのだ

ちなみに俺の名前は元の世界では久瀬 零治という名だ

要するに俺はいつの間にかこのでかい建物とACを手に入れてたらしい

なんともまあ良くできたご都合主義なことだ

そう思っているとコクピット内からpipipiと音がする音を聞いたほうをみるとそこには携帯端末らしきものがおいてあり画面には依頼主と書いてあった

(マジかよ・・・)

と心の中で呟きながらその携帯端末に手を伸ばしたときふと思ったのだ

この世界に来たということは戦場にたつかもしれないということ、すなわち死と隣りあわせということである

そう思うと携帯端末にを取ろうとしている自分の手が急に重くなったのだ

実際はその手に何か重いものが乗ったわけでもなんとも無いのだ

だが彼は一向にてを動かさないでいる。いや、動かせないでいるのである

そして次第に彼の鼓動は早くなり息も荒くなり体がかすかに震え始めている

さっきAC内のデータを見た限りでもそれなりに依頼をこなしていた、その中には襲撃の依頼も含まれていた

要するにこつちの世界での自分は少なくとも一人以上は殺しているのだ、もしかしたら殺した相手の家族や親しいものが復讐をしに来るかもしれない、いくら戦場だからといっても人殺しは人殺しだ戦場だったからなどの言い訳は通用しない

ならば自分は生きるためにたとえ無様に這いつくばっても足掻くしかないのだと自分に必死に言い聞かせる

なんにせよ兵器というものを持っているからには戦場からは逃れられないそう考えていると汗が彼の額から目のほうに垂れてきてふと思考の渦の中をさまよっていた意識が我に戻る

そうすると彼はやっと決心して携帯端末を手に取る

そして携帯端末からは男性の声が聞こえた

「どうした？随分と遅いんじゃないか、死んじまったかと思っただけだ
ガハハ」と相手の男は笑いながら言った

「すまない、少し仮眠をとっていたものでな」

「おいどうした？いつもなら皮肉のひとつでも返すのに今日はやけに大人しいなんかなかったのか？」

「いや大丈夫だ、少し夢見が悪かったただけだ」

「ほう、お前が夢を見るとは珍しいな。まあなんとも無いならよかったが」

「ああ、気づかいは無用だ。で依頼するために連絡をしたんじゃないのか？」

「おお、そうだったそうだった」

と男はまるで今思い出したかのように笑った言った

（どうやらこの電話の男とこっちの俺は知りあいようだな）

「お前さんへの依頼内容を渡したいからいつでもどおりのマールに2時間後に来てくれ」

「わかった2時間後だな」

「おうよろしく頼むぞ」

そういうと男はまた軽快にガハハと笑いながら電話を切ったのだ

「なんとかやり過ごせたか・・・」

そういうと彼は自分の携帯端末など建物内のあらゆるデータを見ることにした

そして2時間後

彼はマールという酒場のような場所に来ていた

最初は何処にあるんだろうかとあせっていたが携帯端末内に地図もあり看板もでかいためすぐに見つけることができた

（それにしても色々と情報を整理してみるとどうやら国家解体戦争の最初のほうみたいだな

まだ新兵器のネクストのも目撃例もないみたいだしな）

そう思っているとこちらに向かってくる身長が2メートルぐらいありそうな大柄の男が来た

「すまんすまん、待たせたか？」

とさっきの通信越しで聞き覚えのある声が軽く笑いながら言ってきた
「時間通りだ問題ない」

とあくまで冷静なようにかえした

「そうかそうか、ならいい」

といいながら男は席に着く

「ほら、これが今回の依頼内容だ確認してくれ」

そういうと男はデータチップのようなものを渡してきたおそらく携帯端末のものであろう

それを受け取るとレイジは携帯端末に差し込み依頼内容を見た

依頼内容は簡単に言えばアメリカにある大企業の兵器開発工場を潰すことであつた

（大企業の兵器開発工場ということはネクストG Aあたりのネクストを作っているところか？

まあ何にせよいつネクストが出てくるかわからないからなんともいえないが）

レイジがそう考えていると

「どうした？何か不明なところでもあつたか？」

と男が聞いてきた

「いや、大企業の兵器開発工場というのが少し不安だな

敵の新兵器でも出てくるんじゃないかと思っただけだ」

「ああ、そのことか

それについてなんだがゴジマなんちゃらを動力源として動かすACを作っているみたいだ」

「っ！」

（もうすぐネクストがでてくるのか！？できたらすぐにお陀仏じゃないか！）

「その新兵器に対しての情報はるか？」

「あるにはあるんだが不確かなもので向こうに潜らせてる奴からの

情報では7／8割程度完成しているという話だ、完成したら理論上では最強の戦力になるらしいが、まあ要するにそんな化け物みたいな兵器を作られる前に壊してしまおうということだ」

レイジはまだギリギリ完成していないと聞くと内心ほっとした

「そうか、それならいい」

「あとほかに不明な点はあるか？」

「いや、無いな。悪いが今日はもう帰らせてもらっ」

そういうとレイジは席を立ち帰ろうとすると男が

「今度は、ゆっくり酒でも飲もうか」

とニカツと笑う男に対して自然と笑みがでて

「そうだなと・・・」

というレイジは踵を返し出口へ歩いていった

あれから自分の家(?)に帰ってきたレイジはすぐさまACのシュミレーターを使い必死に訓練していた

(やはりこの体が本能的に覚えているらしいな・・・)

それにしてもまさかこの機体とはなんともいいがたいな向こうの世界でアセンをまじめに組んでおくんだった・・・)

そう、彼の機体はみんな大好き”ピンチベック”をもとにして右腕武装に N I O H 左腕武装に W L O 2 R - S P E C T E R というなんとも微妙なアセンである

(昔の俺は何をしたかったのだろうな・・・)

と内心ため息をつきながらもしっかりとシュミレーターで訓練をしているのであった

あれから数日がすぎ依頼当日

（これが初の戦場になるんだ、ゲームじゃない本当に命を懸けることになるんだ・・・）

レイジはもう一度依頼内容をしっかりと確認して心を落ち着かせようとしていた

（もうすぐ時間だな・・・）

と思うとコクピットの通信からあの男の声がした

「時間だ、はじめてくれ」

それを聞くとレイジは「了解」と静かに言いブー스트をふかし戦場にかけていった・・・

大企業職員 side

今日はコジマ粒子を動力源とするネクストの開発をしている、何とかネクストは9割ほど完成したのはいいがそれに乗る奴が過去の実験でほとんど使い物にならなくなっている

残念なことにAMS適正が低い奴しかここには渡されていないこんなのが最強の兵器を作ったって宝の持ち腐れにしか過ぎないんだがな

「もつといい素材を渡してほしいもんだ」

と彼が呟くと施設の警報がなり響いた

side out

レイジは最初に背中中のグレネードを打ち次々に建物の主要施設である場所を破壊をしていった

半分以上を破壊したところにMTなどができたがどうやら奇襲には成功したらしいMTからの攻撃を次々に避け左腕武装のWL02R-SPEC T E R をMTたちにあてていき破壊していく

そして一番重要そうな建物まできて扉を破壊して中に入ったそうするとそこにはネクスト次世代ACがあった

（後はこいつを破壊すれば終わりか・・・）

と心の中で呟き右腕武装のNIOHでコア部分を四回ほど打ち込み破壊した

（これで終わりか・・・）

そう思うとレイジは壊滅状態になった工場を見渡す、するとあたりは火の海である

死体や怪我をしてる人たちがあふれかえってその中には必死に助けてや死にたくないなどと言うものもあり、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図そのものであったそれをみると急に手が震えだし汗が溢れてきた（俺が殺した・・・この手で俺が）

そう思っていると建物の瓦礫の影からボロボロのノーマルACがこちらに向かって銃口をむけ攻撃をしようとしている姿があった

レイジはとっさに殺されると思い左腕武装のWL02R-SPEC T E R でひたすらに相手を撃った

相手のノーマルACの搭乗者は撃たれながらもオープン回線で

「ちく、しょう・・・よくも、俺の仲間を殺してくれたな・・・」

そういうとノーマルACは完全に沈黙した

彼は依頼主の男からの輸送用の乗り物に乗り

いまだに震えている自身の手をしっかりと握るようにしていたそして最後に倒した敵の言葉や悲鳴などが残っておりあの地獄絵図を思い出してしまい急に胃の中のがこみ上げてきて嘔吐してしまった（これが戦場・・・生きるために人を殺して、躊躇えばその先にあ

るのは・・・)

“ 死 ”

そう思うと彼は改めて自分は死と隣り合わせの場所にいることを実感したのであった

第1話（後書き）

次回も下手くそな文章が続いてしまいますがお許しを

そついや主人公設定など書いたほうがいいですかね？

第2話（前書き）

頑張って投稿してみました！

だけど相変わらずの駄文；；

心理描写や戦闘描写を上手く書きたい！

誰か教えてください！（D；）

オリキャラ的なのがいるのはあまり突っ込まないでください（汗
あと何とか4のキャラを出したり4の主人公になるであろう人物を
出してみましたか・・・なんというか

第2話

第2話

あの初（？）の依頼から一週間ぐらいすぎた頃に携帯端末が鳴り響いた

（また、依頼か）

そう思うとレイジは携帯端末を手に取った

「依頼か？」

「ああ、なんと今回は僚機をやとったぞ」

「僚機？」

「ああ伝説のレイヴンだそうだ」

（伝説のレイヴン？まさかLRの主人公か？）

「わかった、依頼内容の受け取りはいつもの場所か？」

「いやすまんが今は手がはなせなくてな、今回はデータをそちらにメールとして送らせてもらう」

「そうか、珍しいななんかあったのか？」

「いや、いろんな依頼を整理していてなちょっと忙しいだけだ」

「ならいい、無理はするなよ」

「・・・」

「ん？どうした」

「・・・つああ、お前さんこそ珍しいなと思ってな、いつもは心配すらないのに」

「なに、ただの気まぐれさ」

「では後ほど依頼内容を送らせて貰う」

「ああ、頼んだ」

そういうとレイジは携帯端末の通信を切った

依頼主の男side

「ああ、頼んだ」

という言葉と共に携帯端末の通信が切れると男は

「・・・すまない」

と静かに呟いたその声はまるで懺悔をするかのような声であった

side out

携帯端末の通信が終わってから数分後、端末からpipipiと鳴るとレイジは端末を取り依頼内容を確認する

今回の依頼内容はスウェーデンにある企業が管理する基地を襲撃するといったものであった

（スウェーデンというと北欧のあたりか？）

そして今回も依頼内容もネクストは居ないらしいそして下のほうにスクロールしていくと僚機についての情報が書いてありそれを見える

（なるほどどうやら情報を見る限りLRの主人公みいだな、頼もしい限りだ

さてミッション開始時は4日後だな今から現地の方へ行って合流するでしょう）

そう思うとレイジはすぐさま行動にでた

2日後、彼は上手くスウェーデンのほうに入ることができた
そして自分の僚機になる者に合流をしにいったのだ

レイヴン side

作戦決行まで2日前のこの日に俺は今回の作戦でのパートナーとなる男と会うことになった、たとえ今回しか仲間にならなかったとしても顔を知っておくぐらいはしようと思ったのだ、そして俺がこちらの喫茶店の奥のほうに座って待っていると自分と同じぐらいの青年がこちらを見て一直線に歩いてきて彼の座っている奥のテーブルの前に行くところだがあらかじめ端末通信で教えておいた軽いハンドサインをしてきたのでこちらもハンドサインを返した

（この青年が今回のパートナーかそれにしても若いな、いや俺と同じぐらいか？）

そう思っていると青年が話し始めた

「はじめましてだな、伝説のいや、最後の鴉といったほうが良いかな？」

と軽く笑いながら喋る青年に対してレイヴンは

「いや、どちらでも構わない」

と冷静に返した

side out

「いや、どちらでも構わない」

と表情をまったく変えずにそっけなく返されたレイジは内心焦ったのだ

（まずいな、急になれなれしく声をかけすぎたかな？

本人にしちゃ昔のこといちいち言われたくないのに失礼なことをしてしまったかな？）

とレイジが焦っているとレイヴンのほうも昔オペレーターから自分

は無表情で口数も少なく目も釣り目みたいな感じだから相手に怒っているような印象を持たせるとよく言われていたの思い出し

(いつもの悪い癖が出てしまったか・・・)

と後悔していた、するとレイジが

「昔のことを他人に触れてほしくないよな気に障ったようだな、すまない」

と謝ってきたのだ。それを聞くとレイヴンは

「いや、そのことは気にしていない」

こちらこそなんか怒っているみたいなの印象を与えてしまったようだ
すまない」

とあわてて返してきたのだ。そして二人は互いのその光景に面をく
らい思わず笑ってしまった

「おっとすまないそういえば俺の自己紹介をしていなかったな、依頼内容のところで知ってると思うが俺の名はレイジ・クゼだよろしく頼む」

そういうとレイジは右手を差し出しレイヴンは

「まあ短い間ではあるかもしれないが、俺の名はレイヴンと呼んでくれ」

と言い差し出された右手を取り握手を交わした

「ああ、よろしく頼むレイヴン」

こうして後にアナトリアの傭兵と呼ばれる男との初の対面だった

そして初めてレイヴンと会ってから二日後、作戦開日

「こちらレイジ作戦開始時間となった、戦闘を開始する」

「こちらレイヴン、了解したこちら也开始する」

そう通信するとレイジはブースターで移動をし始めた

（二回目の戦闘だって言うのに前回より心が断然なれてるな、一回でなれるとかどうやら俺の心は異常みたいだな）

と思っていると目的の建物が見えてきた

レイジは戦闘に集中して建物に向かって背中中のグレネードを発射した

戦闘を開始してから約10分ほどたち基地はほぼ壊滅状態となり作戦完了と思った瞬間発砲音とともに隣にいたレイヴンの乗るACの右腕部が吹き飛んだのだ

何事かと思いあたりをセンサーでさがすとそこには・・・ACネクストが三対もいたのだ

（なっ！まさかネクストだと！？どうしてこんなところに！？）

と思っていると通信から依頼主の男の声が聞こえたのだ

「偽りの情報すまん、悪いが俺はこの戦争に国家側の勝ち目はまったく無いと思ってお前らの情報売って安全を保障することにしてもらっただ」

彼は淡々と語る

「安心しろお前一人で死ぬわけじゃない、そのレイヴンも一緒に死んでもらうことになっているからな、まあ運が悪かったと思ってあきらめてくれ・・・じゃあな」

と言うと通信は切れて目の前にいるネクストからのオープン回線で喋り始める

「そういうわけで残念だったなあ、時代遅れの鴉どもめ。このエリートが葬ってやるよ喜べえ！」

ハハハと気がふれてるように笑って言った

しかしレイジはそんなことを気にせずにレイヴンに通信を送った

「レイヴン大丈夫か？」

「なんとかな、しかしACの右腕が一撃で吹き飛んだぞ何なんだあれは？」

アイマードコア・ネクスト

「新兵器AC・NEXTだあれは化物だ、勝ち目が無い」

「それは本当か？これからどうするんだ？」

「二手に分かれて逃げよう、近くに洞窟があるその付近でACを乗り捨てて逃げるんだ。」

いくらネクストでもそこに入り込まれたら探し出すことはほぼ不可能だ、一緒に逃げてもまとめて殺されるだけだ。安心しろ俺が劣り役に

なるお前は先に行け」

「そんなことしたらお前がただじゃすまないだろ！？しかも相手は三体いるだろ！」

「まかせろレイヴンが逃げる時間ぐらい稼げるさ、俺のほうがお前よりネクストのことを知っている」

そう言ってもレイヴンは一向に自分だけが生き残ることを選択しようとしないうといたすとレイジは

「いいから早く行け！！お前はこんなところで無様に死ぬのか！？違うだろ？お前は誇り高きレイヴンだろ！なら生きてレイヴンは誇れる存在だと、俺たちのためにも生きてくれ！！」
それを聞くとレイヴンは

「すまない」

とつぶやきオーバーボードスーツをふかし去っていくのを見て

敵ネクスト、赤色のアリーのパイロットは

「おい！なに逃げようとしてんだよ！？」

というと右手に持っている04-MARVEをレイヴンのACに向けて発砲しようとした瞬間に鈍い発射音と共に横からグレネードが

打ち込まれた

「ああ！？てめえなにしゃがんだ！！」

彼は自分の行動を邪魔されたことに異常な苛立ちをあらわにした

「ふっ、エリートは後ろから撃つのが好きな臆病者のことを言うのか？」

と小ばかにしたように言う

「てめえ、なめた口を利くんじゃねぞ屑が！！おいベルリーズ、アンジエてめえらはこいつとさっき逃げた奴には手を出すなよ！俺が始末してやるっ」

と言うと二人からは「好きにしろ」との言葉が返ってきた

（これでこいつ一体なら何とか時間を稼げるか？）

「てめえ、いまから絶対に殺してやるからなあ！」

「へえ、そいつは楽しみだ」

「死ねえ！」

その言葉と同時に04・MARVEが撃ち込まれた、そして左腕部が吹き飛ばされレイジは急いで建物の瓦礫など入り組んだ場所に逃げた

「おい！さっきの威勢はどうした？逃げるのかあ！？」

ヒヤヒヤヒヤと不気味な声を上げながら喋っているのに対してレイジは

「射撃を当てたぐらいで喜んでるとはくだらないな、レーザーソードでも当ててみるよ三流」

とまたも挑発すると

「てめえ今言ったことを後悔するなよ？お前のACの四肢を切って最後にじっくりコアを焼ききってやるよ！！」

そついうと彼は右手から04・MARVEをすてて左手の02・D RAGONS LAYERだけとなった

（下らん挑発にのるとは本当に馬鹿なのか？それともAMS適正で頭のネジが吹っ飛んだか？どちらにしてもこちらにチャンスはできたわけだ）

そう思うとレイジは右背のグレネードをパージして相手の目の前に
でた

「やっと観念したか屑野郎めが」

そっぴいこちらに向かつて突っ込んでくる赤いアリーヤそれに向か
い左背のグレネードを下半身に撃ち込む

するとアリーヤはバランスを崩した。いくらネクストにP A フライバルアーマーなどがあっても安定性が無ければノーマルが持つバズーカにすら一時的に
硬直するのだ

するとレイジはその硬直の隙を見逃さず左背のグレネードをパージ
オーバードフーストしてOBをふかし相手に向かつて突っ込む

すると敵も一時的な硬直が終わり再び左手の02 - DRAGONS
LAYERを振るった

だが02 - DRAGONS LAYERが直撃することは無かった、
なぜならば02 - DRAGONS LAYERはほかのレーザーブ
レードよりリーチが短いため、自身の武器の特性すら完璧に把握でき
てない三流リンクスが振るったところで一撃必殺にはならなかった。
だがレイジの乗るACの頭部に掠ってしまい頭部が吹き飛んだがレ
イジはとまらずに

「おおおおおおおおおおお!!」

と叫び相手のアリーヤのコアに右腕部のNIOHを撃ち込むと

「ガアアああアアああアああ!!」

と相手のリンクスはAMSから激的な痛みが伝わってもがき苦しん
でいる

レイジはその隙を見逃さずに立て続けにNIOHを3回撃ち込むと
赤いアリーヤは完璧に沈黙したのだ

(これでもう戦ったための武装は無いな、だがレイヴンが逃げるこ

ができるぐらいの時間は稼げただろう」

そう思うとレイジはボロボロのACを残りの2対の前に移動し自身ももうレイヴンの時間稼ぎをまだ行つかのように立っていた

それをみたベルリオーズは

「なるほど、そんなになつてまで仲間を助けようとするか

その行為はほかの奴らから見たら無意味や無様などと言われそうだな
なのになぜそんなことをする？死ぬことを受け入れたのか？」

「いいや、死ぬのは怖いさ、そしてなんもなく無意味に死んでいく
のはもっと怖い、

自分が生きた証を立てずに死んでいくのはそもそも生きていないの
とあまり変わらないと俺は思っている」

と今にも気を失いそうな自分の体に鞭を打ちそうこたえた。すると
アンジエが

「ならばなぜ今このときも逃げようとしない？充分にあのACが逃
げる時間は稼げただろう？」

と不思議そうに聞いてきた

「逃げる？それもいいかもな、だが前を向かぬものに勝利は無いと
思っただけさ」

その後、まあ生きることが勝利なら俺はもう負け確定だけどな
と加えて言った

それを聞いたベルリオーズは

「ほう、いい戦士だ。お前にもう一度チャンスをやろう」

レイジはその言葉がどういう意味かをわからずに自分の意識を手放
したのであった

第2話（後書き）

ベルリオーズやアンジエ、4の主人公はこんなじゃねえ！
と思われるかも知れませんがそこら辺はつつこまないでくれるとあ
りがたいです（・・・）

そして次も頑張りたいと思います

第3話（前書き）

えゝ前回の話でネクストに勝ってますがそこら辺はご都合主義という形で保管してもらえとうれしいです（汗

そして今回も微妙なですけど是非読んでください

第3話

第3話

「知らない天井だ・・・」

と言うと最初に目に入ったのは白い天井である

（俺はあの後、死んだのか？）

そう思っていると病院で嗅ぐ様な薬品の臭いが鼻を通ってきて、ぼやけた意識を覚醒させていく

（ここは天国じゃないと病院か？）

そう考えると体を起こし周りをみると自分の体に点滴やら医療用のチューブなどが繋がっているのを見る

（まさか気を失っている間に“ナニカサレタヨウダ”ってことになったのか！？）

などと考えていると見知らぬ男が入ってきた

「どうやらやっと目が覚めたらしいな」

と聞き覚えのある声

「あんたはまさかあの新型ACに乗っていた人か？」

（もし、そうならこいつの名は

「そうだ、私の名は

“ベルリオース”

だ。おぼえておいてくれ」

「ああ、それよりどうして俺は助けられたんだ？」

「ふむ、興味がわいたと言ったほうがいいのか？」

「興味がわいただけで助けるのか？まあ、助けてくれたことには感謝する。それとあのとき最後になんか言ってたがどういう意味だ？」

「言葉のとおりだ。お前にもう一度チャンスをやる、自分が生きた証を立てることができる、すなわち、もう一度戦場に立つチャンスをやると言っただ。」

「あんたはなぜそこまでしてくれるんだ？それこそあんたが言っていたように他人からみて無意味な行為など言われんじゃないのか？」

「そうかもしれないな。まあ個人的にだが、よい戦士だと思ってな、見てみたくなっただのさ」

なにをとは言わなかったがそれはレイジもなんとなく“それ”を理解したのだ

「そうか、そういえば外の状況はどうなっているんだ？」

「ああ、それならすでに企業側が圧倒的な勝利を収めて終わった」

とベルリオーズの言葉を扉から入ってきた女性がさえぎり、口にした。するとレイジは

「あの後、たった一日でか！？」

（いくらネクストが圧倒的に優れているといえ一日ですべてを潰したのか！？）

と驚愕の表情をし聞いてくると

「一日？なにを言ってるんだ？すでに一週間と数日はたっているぞ。」

と呆れたように答える女性

「俺は一週間以上も眠ってたのか！？」

とまたも驚愕の表情で聞いてくるレイジ。それを聞くと女性は

「まったくいちいちうるさい奴だ、いいかよく聞け、お前は私たちと戦った後なぜか知らんがそこにいるベルリオーズに助けてもらいこの療養施設に運ばれて、お前が眠っている間に企業側が圧倒的な勝利を収めて戦争は終わった。そして今日お前が目覚めたというわけだ。まったくなんでこんな奴を助けたんだ・・・」

と呆れたように肩をすくめて言う女性の言葉に対してベルリオーズは

「よい戦士だと思っつてな、興味がわいたんだ。そういう君もまっ

たく興味がないわけではないだろう？」

そう言われると女性性は「ふん」と言いそっぽを向いてしまった

「そついえば彼女の名を言つてなかったな、彼女は「アンジェだ」・

・それとまだ、お前の名前を聞いていなかったな」

「ああ、言つのを忘れていてすまない、俺の名はレイジだ。もう一度言わせて貰うが助けてくれたこと、感謝する」

と言つとレイジは軽く頭を下げた

「なに、あまり気にするな。そしてさっきお前にチャンスをやると言つたことについてだが、AMSを移植してもらつがいいな？」

と聞くとレイジは

「どのみちそうでもしなきゃこの先、戦場では生きていけないんだろ？移植するなら今からでも俺はかまわん」

と笑つて返した

「理解が早くて助かる。ならば私についてきてくれ」

と言つとベルリオースが部屋を出て行き、レイジはそのあとについていった

あれから俺はAMS移植手術をして数ヶ月後、はれてリンクスとなつていた

そしてレイジは助けてもらった恩を返すために2年程レイレナー社のリンクスとして動くことになった

因みにレイジのAMS適正は下の上、良く言えば中の下という微妙なものである

（どうやら神様は俺に厳しいらしいな・・・ん？でも確か、AC4の主人公のAMS適正は最悪だったよな、ならうじうじ文句は言つてられないか）

と思い今日もまたシュミレーターでネクストを動かし、少し休憩している

「ほう、少しはましな動きになってきてるじゃないか」とアンジエが言ってきたのだ

「ほぼ毎日乗ってるんだ少しぐらいましにならなかったら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな　と自嘲気味に返した

「確かに、どうだ私と戦ってみないか？」

「そうだな、よろしく頼むよ」

そう言い再びシュミレーターに乗り込んだ

アンジエ side

彼女は今日、珍しく、数ヶ月前に新しくリンクスになったレイジのシュミレーターの成績を見ている

正直、彼は彼女が思っているよりも成長の度合いが早かった。

（あいつのAMS適正は下の上であり低いほうだったな、なのにこれだけの成長速度・・・いや、むしろ速すぎるぐらいか）

と思っているとレイジがシュミレーターからでてきて近くのいすに座った

（ふむ、試してみるか・・・）

そう思い彼が座っているほうに歩いていき

「ほう、少しはましな動きになってきてるじゃないか」と言うレイジは

「ほぼ毎日乗ってるんだ少しぐらいましにならなかったら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな　と付け加えて自嘲気味に返してきた「確かに、どうだ私と戦ってみないか？」

と彼女はシュミレーターに指をさしながらレイジに言う

「そうだな、よろしく頼むよ」

と言いは再びシュミレーターのほうに歩き出し乗り込んだ。それを見て彼女は

(ふっ、これまでの力、試させる手もらっぞ)

と思いもう一台のシュミレーターのほうに歩き始めた

side out

シュミレーター内の仮想空間の戦場

そこにはアンジェが乗るネクスト・オルレアとレイジが乗るネクスト・アノーニモがいる

オレルアの武装は左腕武装に01 - HITMAN 右背武装にSULTAN 肩に09 - FLICKER そしてなによりも彼女の代名詞と言っているほどの特徴のある右腕武装“07 - MOONLIGHT”である彼女の振るう剣は誰よりも美しく、勇ましいものであり剣姫と言う名がふさわしく思えるものである

それに対してアノーニモの武装は右腕武装に03 - MOTORCOBRA 左腕武装に04 - MARVE 左背武装にTRESOR
というなんとも特徴の無いアセンになっている

そして二人のコクピットに開始の合図がでる

すると先に仕掛けたのはアンジェの乗るオルレアである

真っ先に肩の09 - FLICKERを撃つと同時に07 - MOONLIGHTで切りかかってくる

レイジはとつさに左にQBでよけるが07 - MOONLIGHTが
少しかすりPAをこつそりと削られる

そしてレイジはすかさずQBを使い多少距離をとるとQTで体勢を

立て直し左手の04 - MARVEをまだこちらに向ききっていない
アンジエに対して（もらった！）そう思い撃つ

しかしその行動を予めよんでいたかのようにQBで難なく避けたのだ
だがレイジもすぐさまにQBを使い、アンジエに張り付くように移動し、右手の03 - MOTORCOBRAと左手の04 - MARVEを撃つ

それに対してアンジエも左手の01 - HITMANで撃ち返ししながら右手の07 - MOONLIGHTで切り裂こうとどんどん近づいてくる

レイジも相手の必殺の間合いに入らぬようにQBを使い均衡を保っていた

しかしすぐさまその均衡をやぶったのはアンジエであった、アンジエはレイジの一瞬の隙をみて二段QBで一気に詰め寄り右手の07 - MOONLIGHTを振るった・・・が完全には切り裂いていなかったレイジの突発的な二連QBでなんとか致命傷を避けたのだ
（ほう、今のは完全に決まったとおもったんだがな、にしてもなかなか当ててくるじゃないか。なら次は強引にいかせてもらおう！）

そう思いながらアンジエは攻撃の手を休めずにいた。そしてレイジは（危なかった、何とか致命傷にはならなかったがAPとPAをこつアーマーポイントそり持つてかれたな、にしてもさっきから攻撃がどんどん鋭くなっているな・・・しかたないここは賭けに出るか）

と考え左手の武器を背中のTRESSORに切り替えアンジエに向かいQBをすると

アンジエは好機と考えレイジに向かい07 - MOONLIGHTで切りかかった

するとレイジは07 - MOONLIGHTがあたる直前でTRESSORを撃つと同時に右にQBをしたが避けきれず07 - MOONLIGHTがほぼ直撃してしまったのだ、するとアノ二モのAPは0となりLOSEと言う文字がレイジのシュミレーターに浮かび上がった

（やっぱりかー！）

と思いレイジはシュミレーターをでた

アンジエ side

（最後のあいつの一発もし直撃していたら私は負けていたかもな。
強いな・・・この先が楽しみだ）

と心の中で言うと彼女は自分でも気づかぬうちに笑っていた

（やはりベルリオーズの見込んだとおりかもな、よい戦士になりそう
うだ）

そう思いシュミレーターからでた

side out

アンジエがシュミレーターからでるとレイジは

「やっぱりアンジエは強いな、勝てんな」

「ふっ、お前も予想より強くなっただじゃないか」
と珍しくレイジのことを褒めたのだ

「そうか、ありがとう。だが次は勝てるようになってやるさ」

「よく言う、簡単には勝たせやしないさ」

そう言うアンジエはシュミレータールームを去っていく
そして扉をでると

「君が褒めるなんて珍しいな。いいことでもあったのか？」

と聞くベルリオーズに対して

「そうか？まあ、あいつはお前の言ったとおり、よい戦士になるかも
な」

そう言うとな彼女は廊下を歩いていった
するとベルリオースは彼女の言葉に対して「ほう」と言うとシュミ
レータールームに入っていた

そしてこのあとレイジはリンクスNo.29をもらい
シュミレーターでベルリオースにぼこぼこにされるのであった

第3話（後書き）

相変わらずベルリオーズやアンジェはこんなじゃねえ！と思われ
ますよね・・・orz

あとリンクスNo.29ですが実際はAC4開始前に倒されている
らしいんですがそこら辺は少し独自設定的なものを入れさせてもら
いました

次も頑張つて書きたいと思います

早く時間を進めたい・・・

第4話（前書き）

えゝ、今回も無駄に長いし駄文です

いろいろとキャラが安定してなく読みづらいと思いますが、すみません（汗

そして、IS出てこないやん！と思われる方もいらっしゃると思いますが

ISの世界に転生するのはもう少し先になりました

一応今週中にはISの世界にいくつもりでありますのでどうか温かい目で見守ってくださいm（―――）m

第4話

第4話

レイジ side

「リンクス、お疲れ様です。そちらに輸送用のトレーラーを回しますので、それに乗り帰還してください」

「言いオペレーターからの通信が切れるとPAをきり、肩の力を抜くと今までのことを少し思い出していた」

昔は戦場なんてものはアニメや漫画、ゲームでしかありえないと思っていたのに自分が今この場にいること馴染んできているのが非常に不思議に感じる。今でも夢を見ているんじゃないかと思うくらいだ、最初のミッションであの地獄絵図を見たときガタガタ震えて嘔吐をしてしまっていたのに今ではその地獄絵図の状態で敵の兵士などが命乞いをしても躊躇わずに引き金を引けるほどまでに自身の心は変わってしまったていると考えると複雑な気持ちになる。

アニメや漫画、ゲームの戦争の殆どは主人公達がいてその主人公達と敵対するものがほぼ必ずと言っていいほど世界を混乱に陥れるためにだの言い主人公達のほうに必ず大義名分があるようになっており、しかも事情があったり、悪に利用されて戦っている人達や事情を知った主人公達はその人達を殺さないで事情を解決したり悪を倒してハッピーエンドとなるようになっていく。

だが実際の戦場と言うものはそんなものではない。戦うものにはそれぞれの思惑があり片方が絶対的な悪というのは存在しないのである。

る。誰かが正義と知っていることは他の誰かからみれば悪になるかもしれないのだ。そして戦場^{いくさ}では一瞬でも引き金を引くことを躊躇えばその先に待つのは“死”というものだ。例え相手が家族を人質にとられて戦うしかないとしてもだ。そういう悲劇的な相手に対しても命を奪う非常さがなければ生きていくことは難しいのだ。

そう考えている間に遠くに輸送用のトレーラーが見えてきてレイジは考えることをやめて帰還の準備をした。

s i d e o u t

そしてレイジは輸送用トレーラーで近くのコロニーに帰ってきて町を歩いていると大きな荷物を必死に持っている少女がいた、見ていると今にも転びそうでもとも危なっかしい様子である。

（ふむ、手伝ってやるべきか？だがいきなり見ず知らずの他人が手助けしようとしても、不審者にしか見られないからなあ）

そう考えていると少女がとうとう転んでしまい中にあるものをばら撒けてしまい近くにいた軍隊のような服装をした男達3人ほどの集団に当たってしまったのだ。

すると少女は

「ご、ごめんなさい！」

と慌てて誤る。しかし男は

「おい、お譲ちゃんなにしてくれてんだ！靴が汚れちゃったじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と因縁をつけてきたのだ。だが少女は必死に謝ることしかできない

「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！
ともう一度謝るが

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」

と、さらに怒鳴りつける

「俺らはこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝っただけ許してもらえと思ってんのか？」

と他の男が言いそれに続きさっきの男が

「この靴とか高かったんだけどなあ、１０万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

そうは言っても子供が１０万などという大金を持っているはずがなく払えるはずがないのだ。しかし男達は無理に要求してくる

「なあ早く払ってくれよ」

とさらに催促してくる

「そ、そんな！わたし１０万なんてお金は持ってないです！！」

なみだ目になりながらも必死に訴えてる少女。

「へえ〜」

と言いながらその少女をなめまわすように見ると

「じゃあ悪い子にはちよつと、お話しないとね」

と言うと強引に少女の手を引き路地裏の暗いほうへ連れて行くところ。少女は助けを周りに求めるが通行人は見てみぬふりであるまあ軍人みたいな相手だと自分の身がかわいくて誰も助けることはしないだろう

（なんつつか、アニメや漫画でありそうな光景を目の当たりにするとは思わなかったが、まあ俺も流石に子供を見てみぬふりをするほど腐っちゃいないからな、全く面倒なことになった・・・）
そう言うとも男達がいるほうへ歩いていった

今日は、おつかいに来ました。そして今日のおつかいはいつもより荷物がいっぱいでも大変です。だけどほかの子のみんなのためにいっしょうけんめい運んでいます。するとつまづいてしまい途中で転んでしまいました、やっぱり一人で来ないでお姉ちゃんに手伝ってもらえばよかったなと少し後悔しました。

わたしは急いで散らばった荷物を拾おうとしました、すると男の人たちがこちらをにらんでいます。わたしはおそろおそろ男の人たちを見ましたすると荷物の中にあつたジャムが男の人たちの中の一歩背が高い人の靴にかかってしまっているのを見てあわてて

「ご、ごめんなさい！」

と急いで謝ります、ですが男の人は

「おい、お譲ちゃんなにしてくれてんだ！靴が汚れちまったじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と怒鳴られてしまいました。わたしは必死に謝ります

「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！」
ですが男の人は

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」

とさらに怒鳴りつけてきます。すると

「俺らはこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝っただけで許してもらええると思ってるのか？」

と二番目に背が高い男の人が言ってきました。どうしよう、偉い人なのにと必死に考えてると

「この靴とか高かったんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

とさっきの男の人から弁償をしろと言われます。そんなこと言われなくてもそんな大金は持っていないです。ですが男の人は

「なあ早く払ってくれよ」

とさらに言ってきました。ですがわたしは孤児でたとえ孤児院に帰ってもらってくることもなくてできません

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持ってないです！！」
と、わたしは泣きそうになるのを必死にこらえ言いましたすると男の人は

「へえ」

と言うと私のことを気持ち悪い目でじつと見てきます。すると

「じゃあ悪い子にはちよつと、お話しないとね」

と言うとわたしの腕をつかみどこかに連れて行くこうとしてきます。わたしは必死に抵抗しましたが大人の力には勝てず、どんどん引きずられていきます。わたしは必死に周りの人に助けを求めますが周りの人たちはみんなこちらをチラッとみるとすぐにどこかに行ってしまう。わたしを助けてくれる人が誰もいないのだと、そう思うと今まで抵抗してた自分の力がゆるみもう駄目だなと思うと

「おい、下衆どもその手をさつさと放してとつと消えうせろ」

と黒い髪に黒いコートを羽織った男の人が言いました。するとわたしをつかんでいた男の人が

「なんだ、てめえ？お前は関係ないだろすつこんでろ！」

と怒鳴りました。すると黒い男の人は

「さっきの会話からするにたかが10万払えばいいのだろう？」

と言うと財布のなかからお金をわたしをつかんでいる男の人にむかって放り投げました。すると

「さっき払えなかったから利子がついて合計100万払えば許してやるよ！なんせ俺は偉いからなあ！」

と笑いながら無茶な要求をしてきました。すると黒い男の人が

「そうか、貴様は自分が偉いとか思ってるのか？やれやれ、とうとう脳みそまでも力ビたか・・・」

と言うとわたしをつかんでいた男の人が急に黒い人に向かって殴りかかりました。わたしは思わず目をつぶってしまい。鈍い音がして、おそろおそろ目を開けると殴りかかった男の人がおなかの辺りを必死に押さえてうずくまっています。すると二番目に背の高い人が

「おい、てめえこの人はリンクスだぞ！てえだしてただですむと思
つてんのか？」

わたしは、それを聞いて、とてもあせりました。リンクスという人
は戦場で戦うとても強い人だと聞いたことがあります。そんな人に
手を出して大丈夫なんでしょうか・・・

「ほう、そいつはリンクスカ、笑わせる。俺もリンクスだがそいつ
のような奴は見たことが無いんだがな、因みに俺のリンクスNo.
は29なんだがな」

そう言うのと二番目に背の高い人は顔を真っ青にして

「ほ、本物のリンクス」

と言うとうずくまってる男の人ともう一人の男の人と一緒に急いで
遠くに行ってしまうました。そして黒い人はこちらのほうを向くと
近づいてきました。そして黒い人はわたしの頭に手をのせると

「大丈夫か？よく我慢したな」

と言いました。するとわたしは急に涙がでてきて泣いてしまい思わ
ず黒い人に抱きつき声を上げて泣いてしまいました。すると黒い人は
「もう怖くないから安心しろ」

と言いわたしをそっと抱きしめてくれました。黒い人は外見は真っ
黒だけど絵本に出てくるような白馬の王子様のようにみえました。

s i d e o u t

あのと少女は多少落ち着いたらしく泣き止んだ

「どうだ？もう大丈夫か？」

「は、はい。その、さっきは助けてありがとうございます！」

「なに、気にするな。そっぴゃお譲ちゃん、買い物してたみたいだが大丈夫か？」

「あ！どうしよう・・・」と言うと少女は俯き肩を沈める

「ふむ、買うものはまだ憶えてるか？」

突然の発言に少女はビクリし

「ふえっ？」と素っ頓狂な声を発してしまった。そして

「はい、一応憶えています・・・」そう答えると

「そっか、これも何かの縁だしな。俺が代わりに買ってやるよ」

「で、でも助けてもらったうえにそこまでしてもらうのは・・・」
と、ためらう少女

「だけどまた親御さんにお金をもらいにいくのも大変じゃないか？」

「あ、えっと、その、わたし孤児院に住んでいて、親がいないんです・・・」

と少女はだんだんと声を小さくしながら言っつのを聞くと

（やってしまった・・・あまりにもデリカシーの無いことをしてしまった・・・）

そう思い、レイジはどうにかしようと考え

「じゃあ、俺が君の住んでいる孤児院にお金を寄付するということでもいいね」と言うが

「で、でもそれは、」とまだ言おうとするのに対して少女の頬を軽く引つ張り言葉をさえぎると

「まあ、いきなりあった見ず知らずの人を信用しろと言うのなんだが、もうちょつと年上の人を頼っていいんじゃないか？」

と優しく語り掛けると少女は小さく　こくんと頷くとレイジは頬から手を放し

「やはり、子供は素直が一番だ」と言い笑った。すると少女は手に軽く力をいれ

「あ、あの！わたしは、リ、リリウムといいます！お、お兄さんの名前を教えてください！」と力強く聞いてきた

「そっぴゃ、言っつてなかったな。俺はレイジ・クゼだ、よろしくな」

そう言う席を立ちリリウムという少女と買い物をしにでかけた

そして買い物の途中

「そういえば、レイジさん、お金は大丈夫なんですか？」

「ああ、全然問題ないな。リンクスは高給取りだからな」

「リンクスですか、その、怖くないんですか？戦うことが・・・」

「怖いといえば怖いかな・・・けど、もう慣れてきてしまったかな？それに、もうこれしか生き方が無いからな」

「で、でも他のお仕事だって頑張ればみつけれらんじゃ」

「まあ、できないことも無いだろうが、戦うことしかしてきてないからな、他の仕事につくのは難しいだろうな」

（レイジさん、なんかとても寂しそうな目をしてる）とリリウムが思っている

「ほら、こんなくらい話はやめよう！子供には関係ない話だ。」

と言いいりりウムの頭をわしゃわしゃとなで「ふむ、綺麗な髪の毛しているな」と言う

「孤児院のお姉ちゃんがいつも丁寧にとかしたりしてくれるんです！」と嬉しげに話す。するとリリウムはふと足を止めとある商品棚に置いてある百合の花の髪留めを見ていた。それを見てレイジは

「どうした、それが欲しいのか？」と聞くと

「い、いや、とても、綺麗だなと思って」

「ん？欲しくないのか？」

「そ、それは・・・ほ、欲しいですけど・・・」とごにょにごにょと答えるリリウム

「よし、俺からのプレゼントだ、買ってやる」

「い、いえ大丈夫です！そこまでしてもらうのは」といいつつもやはり欲しそうに少し目を輝かせている

「遠慮するな、リリウムも女の子だ小さいころから髪留めの一つや二つみにつけないと将来もてないぞ」

といい髪留めを買いリリウムに渡すと、とても満面の笑みだった。

そして残りの買い物も無事に終わりリリウムを孤児院に送っていくと去り際に「縁があつたらまた会おう」と言いレイジも帰ることにした

そしてそれから数ヶ月後レイレナード社にレイジは来ていた

（ベルリオーズと呼ばれたが、どうしたんだ？二年間だけといったがそのあとも一応、レイレナードのリンクスとしているからな・・・）

と考えているとレイジが待っていた部屋の扉が開きベルリオーズが入ってきた、すると・・・

「世界を私たちとともに変えないか？」

第4話（後書き）

今回もびみようでした・・・

そしてリリウム登場させてみましたが、正直、無くてもいいんじゃない？って感じですが作者があまりにもリリウムたんと、きやつきやつ、うふふって感じのを書きたいがため頭の中の妄想を垂れ流しました（D、；；；

そして次から一気に時間を進めていきどうにか今週中にはISの世界にいけるよう努力いたしますのでよろしくお願いしますm（
| ;) m

第5話（前書き）

え、いつの間にか5000PVと1000ユニークを超えてました！

皆さん読んでいただき、本当にありがとうございます！

評価してくださったり感想を書いていただいた方にとっても感謝感激です。

自分は小説を初めて書く身なのでとても嬉しいです。

今回の話で時間をかなり進めました。

なので予定通り今週中にはISの世界に入ることができそうです。

そして後書きのほうにアンケートみたいなものをしておりますので是非ご協力をお願いします。

第5話

第5話

約三ヶ月前、G Aにコロニーアナトリアから傭兵が売り込まれたそう、リンクス戦争へのカウントダウンの始まりだ。

アナトリアの傭兵は次々と戦火をあげ、さらに、マグリブ解放戦線の出来事により瞬く間にその存在が知れ渡ったのだ。

そして約一週間前に、G Aグループ内である事件が発生することになる。G A Eが秘密裏にアクアビットと提携しG Aグループを離脱するという事件だ。そして、そのことがわかったG AグループはG A Eに対して、アナトリアの傭兵に粛清の意味を込めて“ハイダ工廠”で開発中の巨大兵器諸ともの破壊を要請したのだ。このことにより今まで水面下で対立していた企業間の争いが表面上に浮き出てきたのだ。

そして先ほど

「世界を私たちとともに変えないか？」

とのベルリオーズからの突然の申し出にレイジは驚きを隠せないでいた。

「なぜ・・・俺なんだ？」

「あれから、お前を見てきたが、私の予想通り、いやそれ以上によい戦士になっている。だからお前の力を借りたいと思ったのだ。」

そう言うベルリオーズに対してレイジは

「それは買いかぶりすぎだ、ベルリオーズ、俺なんかよりいい戦士は他にいるだろう？俺はあんたの言うような、よい戦士でもなんでもないただのリンクスさ、だからせつかくのお誘い悪いが、断らせ

てもらう・・・すまない。」

レイジは唇を噛み本当に申し訳なさそうにベルリオーズに告げる。
だがベルリオーズは

「そうか、やはりな。お前ならそう言うと思ってたぞ」

と言うベルリオーズの言葉を聞き

「なっ、あんたは俺が断ることわかっていたのか？」

「まあな、だが本当にお前のことはよい戦士だと思っているぞ。まあ、返事が変わることがあれば私に連絡してくれ」

ベルリオーズはそう言い静かに笑うと部屋を出て行った

するとレイジは「本当にすまない・・・だが、あんたの“答え”は俺がしっかりとみとめてやる」

と誰もいない部屋で言った

ベルリオーズ side

やはりレイジは、自身のことを過小評価しすぎだな、己を過小評価しすぎると自滅してしまうからな。だが私の思った通りだな。まあ、あいつが加わらないことは残念に思えるが。たとえあいつがいなくても私たちが世界を変えてみせる。

ふっ、それにしても私の“答え”を見届けるか、やはりよい戦士だ。

side out

そしてリンクス戦争は、次第に拡大していった。そして数カ月後、レイレナード本社はアナトリアの傭兵により壊滅し、アクアビット社はジョシユア・オブライエンの襲撃により壊滅。こうして主戦力たる二社が壊滅に陥りインテリオルグループは停戦を提議し、リン

クス戦争は幕を閉じたのだった。しかしこの戦争により企業はかつてないほどに消耗し、無秩序に地上のコジマ汚染はいつきに拡大し、多くのコロニーが消滅した。

それにより、人々は汚染された地上を捨て、人類の過半数は清浄な空でクレイドルと呼ばれる巨大プラットホームで生活をするようになった。

一方で国家解体戦争で企業が支配体制を確立した原動力アーマド・コア“ネクスト”と、その搭乗者“リンクス”その圧倒的な力の個体依存性に危機感を抱いた企業により、企業機構“カライド”管下の傭兵として地上に残されることとなる。

今や、企業軍の主力はアームズ・フォートであり、かつて戦場を支配したネクストたちは、この薄汚れた地上で延々と続けられる経済戦争の尖兵と成り果てていたのだ。

そして、リンクス戦争が終結してから約二年後
あの後レイレナードの多くの者達がオーメルサイエンス社に取り込まれていき、レイジもその中の一人であった・・・

「リンクス、実験を開始します」と通信がはいり
「了解」そう短く応えたとレイジは、ヴァンガード・オーバーボード・ブーストVOBがネクストにちゃんと接続されているかを確認しOBのスイッチを入れるすると次第に加速していきある程度加速するとVOBが点火しいつきに超加速をする。

レイジは、超加速によるGに耐えながらVOBの数値を確認していく、すると突然コクピットから警告音が鳴り響く。それはVOBに異常が発生しているという警告音だった。

(やはりな・・・)

とレイジは冷静に思う。それもそのはずだ。

レイジはもとはレイレナードの出身、リンクス戦争に敗退しオーメルに取り込まれたのはいいが、オーメルからみれば自分達がレイレナードを潰したようなものだ、もしかしたら復讐されるかもしれない。だがレイジは今までオーメルの新兵器の実験などになんもなく普通に受けていた。そう、別にレイジは復讐しようだのなんだのは全く思っていない、ただ実験の依頼が来たからそれをこなすというにしか考えていなかった。だが逆に、なにもしなすぎたのがオーメルから見れば不安だったのだ、以前はベルリオーズなどと一緒にいることが多かったので、実は何か企んでるのではと思い、事故を装いレイジを抹殺することに決めたのだ。

（俺は、こんなところで死ぬのか。今までの行いからみれば、まあ、当然か・・・）

と頭で自身の死を思っているても本能は生きようと必死にVOBのパージをしようとしている。考えていることは全く別の行動をとる体に対して思わず笑ってしまう。

（ふっ、そうだったな・・・俺はどんなに醜くても生きようとする奴だったな。なら足掻いてみるか）

そう思いどうにかVOBをはずそうと必死に操作する。やっこの思いでVOBをはずすことに成功したがその直後、VOBが爆発を起こしその爆発に巻き込まれる。するとレイジの乗るネクストはボロボロになり落下する。そして中のレイジも爆発の衝撃が凄まじくそのダメージを受けていた

「がはっ！ははっ、やっぱりこうなる運命なのかね・・・まったく、ついて、ない、な・・・」

吐血し、そう言うレイジは意識を手放した

とある扇動家 side

私は今日、とある企業の実験場に来ている。

（やはりな、彼のことを事故を装い抹殺しにかかったか。ふむ、企業としては正しい判断だな。企業の人間の9割は彼が死んだと思っているだろう。だが彼はおそらくだが生きているだろう。まあ、こちらには都合がいい。さて、あの人がよい戦士と認めた人物だ、接触を試みるか・・・）

そう思うと、とある扇動家は移動し始めた・・・

side out

レイジはふと目が覚めると目に映るのは白い天井である

「知らない天井だ・・・」

（あれ？なんかこんな状況前にも経験が・・・）

そう思っているとドアが開き、そちらのほうに顔を向けると一人の青年が立っていた

「どうやら目が覚めたみたいだな」

「お前が助けたのか？」

（どっかで見たことある顔だな？どこだったかな・・・そしてどことなく雰囲気がいっしょにしているしな、こいつもしかして・・・）

「ああ、そのとおりだ。まず名前を伺ってもいいか？」

「名はレイジだ、お前の名は？」

「私の名は“マクシミリアン・テルミドール”だ」

「お前、もしかして昔、何回かベルリオーズと一緒にいたことある奴だろ？」

「なんだ知っていたのか」

（やはりな、レイレナード時代にたまにベルリオーズと一緒にいるところを見たことがあるしな）

「いや、思い出したただだ。で、わざわざ助けたからには何か用があるんだろ？」

「まあ、用はあるが、まず先に話をしてみたくてな」

「話？俺なんかにか？」

「ああ、あの人が高く評価していたから気になってな」

「あいつは俺のことを高く評価していたが、実際そんないような人間じゃないさ」

（ふむ、聞いたとおり自身のことを過小評価しすぎているな）

「まあ、絶対にありえないが、俺が加わって戦況が変化するほどのものだったら、俺は、あいつの誘いを断り、見殺しをしたようなもんなんだぞ？」

「戦況が変わるかはわからないとして、見殺しにたと言うのは少し違うのではないか？あの人から聞いたぞ、あなたが断ったのを聞いて部屋をでたあと“答え”を見届けると言ったらしいじゃないか。確かに他の人間からすれば見殺しにしたのと同じになるだろうだが少なくとも私は、そうは思わない」

レイジは今回の実験も自分が事故に装い殺されるであろうと、わかっていてもそれは自身の贖罪だと思い受け入れようとしていた。もしあのときベルリオーズの手をとっていたら、ベルリオーズやアンジエ、友と呼べる者が死なずに違う未来が訪れたかもしれない。だが自身はそれを拒んでしまった。そして友と呼べる者達が死に、気づいたときには遅かった。“答え”を見届けると言っても他人から見ればしょせんは自己満足からでた言葉なのである。だが目の前の

男はそのことも理解したうえでレイジの行動を否定せずにいてくれた。もしかしたら利用するために言ってるのかもしれない。だが、そのことがレイジにとってどこか救われるような気がしたのであった。するとレイジは「ありがとう」と静かに呟いた

「感謝される憶えはないんだがな、受け取っておこう。」

（ベルリオーズ、やはり彼は、あなたの見込んだとおりかもしれない）

「ふむ、話はこれぐらいにして。本題に入っていていいか？」

「ああ、かまわない」

「まず私たちがやるうとしていることはクレイドルの前提を覆す明確な反逆行為だそれを理解したうえで聞いてくれ。

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめている。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にすぎない、このままでは、人は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。

これは扇動だが、同時に事実だ。

それをよしとしないのであれば、是非、私たちと共に世界を変えないか？」

「ふつ、いいだろう。こんな奴でよければ、仲間になる。」

「そういう不適に笑ってみせる

「じゃあ俺はこれからどうすればいいんだ？」

「そのことだが、もう一度、カレードに特定の企業に深く関わらないリンクス、つまり独立傭兵として加わり行動してもらう方がいいか？」

「かまわないが、大丈夫なのか？俺は一度、殺されそうになった人間だぞ？そんなやつがまた表舞台にたったら面倒なことになるんじゃないか？」

「やないか？」

「大丈夫だ。そのことも折り込み済みで君にはもう一度、表舞台に立ってもらう。まあ、死んだことになってるから名前などは変えてもらうことになるかな」

「わかった」

「では、新たな名前を決めてくれ。そうすれば私のほうで手をまわしておこう」

（名前か・・・ふむ、少し皮肉をいれてみようか、ならば・・・）

「きめたぞ、新たな名は“ジョン・ドウ”だネクストのほうは“ネームレス・ワン”で頼む」

「“ジョン・ドウ”と“ネームレス・ワン”か・・・ふっ、ずいぶんと意味ありげな名前だな」

「そうだろう？では、これから俺のことはジョン・ドウ、略してジャックとよんでくれ」

「そうか、よろしく頼む。ジャック」

そして、この日からレイジは新たな名、ジョン・ドウとなりORCA旅団に加わったのだ

第5話（後書き）

一応、この後は首輪付きは首輪付きで出します

そしてアンケートみたいなものですが、ISの世界に転生させる人で主人公とリリウムを入れる予定でいます

その他に首輪付きも入れようかと思っているんですが

入れてもありじゃないか？と思われる方は 1 で

首輪付きを入れるなんて絶対に許さない！みたいな方は 2 で

感想の一言のほうにお願いします。

締め切りは一応土曜の昼の12時までとしますのでご協力お願いします。
m (_ _ _ ;) m

第6話（前書き）

アンケートにご協力の方本当にありがとうございます。

アンケートのほうは、明日の昼の12時までとなっておりますので
ぜひ他の方もご協力おねがいします。

そして今回も時間をそれなりにすすめた感じがします。

なので結構無理やりな点がいくつかあると思いますがそこは見てみ
ぬふりをお願いします（汗）

第6話

第6話

レイジがジョン・ドウと名乗りORCAに入ってから約2年がたつ

新人リンクス side

俺は今、企業連からのラインアーク襲撃の依頼を受けた。

力をちらつかせた交渉は、我々の本意ではない、ねえっうん、絶対嘘だな。でもまあこれをやらなきゃカラードに登録されないだろうしな。

「おい、ミッション開始だ。下らんことを考えてないでさっさと行け。」

「了解」

いま通信で厳しいことを言ってきたこのバブ「貴様、ミッションが終わった」ゲフンゲフン！この綺麗なお姉さんは、俺のオペレーターをしてくれるセレン・ヘイズだ。

俺は約一年前に拾われてから、独立傭兵のリンクスとなるべく鍛えられてきた。

そして今回、カラードに正式に登録するために企業連のこの依頼をこなすわけだ。

ちなみに今、俺が乗っているネクストは旧レイレナードの03-A ALIYAHを ベースにしたのをストレイドという名でセレンさんが用意してくれた。

どうやって手に入れたのか気になり一度、聞いてみたんだが…

「なに、ちよつと話をしたら譲ってくれたぞ。」

とかなんとか言っていた。しかも話し相手は顔を真っ青にしてたら

しいとのことだ、恐ろしい…

「企業のネクストだと？」

「畜生、こんなときに限って！」

（さて、さつさと終わらせるか）

そう思うと次々と守備部隊をに倒していく

「目標、残り約半数」とセレンから通信が入る

「クソツ、効いているのか？」

「プライバル・アーマーだ、まずはプライバル・アーマーを減衰させるんだ！」

そう言いながら必死に抵抗してくる相手をさらに倒していく

「目標、残りわずかだ」とまた通信が入る

「通常兵器では太刀打ちできん！」

「ノーマルはまだなのか！ノーマルは！」

相手の言葉を気にせずに残りの敵を排除していく、最後の敵を排除したかと思うと

「敵、増援を確認。ノーマル部隊だ、油断だけはするなよ」と通信が入った

（めんどくさ！さつさと終わらせよう）

そう思い、増援できたノーマル部隊を殲滅していき。すべて倒すと

「よくやったな、ほぼ完璧だ」とは言え、あまり調子付くなよ。敵が弱すぎたのだからな。」

とミッション終了の通信が入った

（やっと終わったか…あれ？でもこのまま戻ってもさっきのことで俺、セレンさんに殺されるんじゃない？でも、ミッションはほぼ完璧だったから見逃してくれるかな…無理だな、あきらめよう。）

そう思い帰還を始めるのであった。

side out

そして、ラインアーク襲撃のあとカロードに新たなリンクスが登録される。そう…このあと次第にカロード全体を騒がせることになる後の首輪付きである。

そしてラインアーク襲撃から2ヶ月ほどたつころ、ジョン・ドウ
スピリット・オブ・マザーウィル
(レイジ)はカブラカン撃破の依頼を断り、SOMの撃破の依頼を受けることになっていた。

(オーメルからの依頼か、まあ俺は構わんが…メルツェルめ、何を
考えている?)

そう思いながらもオーメル仲介人の説明を受ける

(VOBの使用か、また小細工して爆発されそうだな…まあ、いい
か)

などと考えている間に仲介人の説明も終わっていた。

(それにしても、あの仲介人の話し方、イラッとするな…俺だけか
?)

とくだらないことを考えながらも依頼を遂行するべく準備をしていた

そして数時間後、ミッション開始時間

「では、リンクス。ミッションを開始してください。」

「了解」そう言いレイジはOBを起動する。すると次第に加速して
いきVOBが点火し、いつきに超スピードになる。

(どうやらVOBに異常はないみたいだな)

そう思いながらも迫り来るSOMの砲撃をかわしながら彼我の距離
をつめていく

「VOB使用時間、限界近いです。通常戦闘の準備をお願いします。」

「そう通信がはいり、少しして

「VOB使用限界です。パージします。では御武運を」

「そう言い通信が一旦、切れると同時に

「どりゃああああああ」

と場違いな声がしたほうを見ると、ギルドーザーが突っ込んできたのだ

「場をわきまえない解体家が、悪いがお前に構っている暇はないんでな」

「そう言うとレイジはOBをふかしSOMの懐に入り、次々に迫り来るミサイルをQBをうまく使いかわしていき右手の03-MOTORCOBRAと左手の051ANNRで発射口を潰していく

「ふむ、ミサイルの発射口はすべて潰したか、なら次はあの馬鹿でかい砲台か」

「そう呟いていると

「どすこおおおおおい」

とまたも場違いな声がする

「しつこい奴だ、まあミサイルの発射口はすべて潰したからないだろう、相手になってやる」

「そう言い右背をEC-0300に左背をDEARBORN03に切り替えギルドーザーに対して撃ち、QBを使い死角へと回り込むと03-MOTORCOBRAと051ANNRでひたすらに撃ち続ける。」

「そしてギルドーザーは両手のGAN01-SS-WDを当てようと突っ込むが難なく回避され銃弾の雨を浴びせられさらにボロボロになる。」

「めんどくさくなってきたな…もう終わらせるか。」

「そう言うと両手の03-MOTORCOBRAと051ANNRを捨てて格納してあるレーザーブレードのEB-0600で死角

から確実にコアを切りつける。するとギルドーザーは
「やっぱりかああああ！」

と叫び声が聞こえると沈黙した。

「さて、予定より時間をかけてしまったな。さっさと砲台を壊しに行くか」

そう言い、砲台に近づき一閃、二閃と切り裂き、もう一つの砲台も同じように切り裂き破壊するとSOMが崩壊し始める

「総員、地上装備！総員退避！退避しろ！マザーウィルが崩壊するぞ！」

そうSOMの隊員が言うのを聞き、OBをふかし爆発に巻き込まれないように離脱する。そして安全圏まで離脱すると

「こちらネームレス・ワンだ、SOMを撃破した。」

「マザーウィルの撃破確認しました。速やかに帰還してください、お疲れ様です。」

そう聞くと通信を切り帰還する。

そしてほぼ同時刻、レイジが断ったもう一方のカブラカンを撃破するミッションは首輪付きがこなしていたのであった

カロードside

「あの無名のリンクスが、あのマザーウィルを……？」

「はい、間違いありません、ローディー様、カロードは情報の精度を確認しています」

「……」

「仮にもリンクス、本来そういうものだろう」

「だいいいがな…それよりアルテリア襲撃犯はどうなっている？堂々とクレイドルの要諦を狙われ、すべて不明、全く打つ手無しなど、管理者の存在意義が問われるだろう」

「その通りだ、ルールを守れないのであれば、静かに退場してもらう他はない。それがラインアークであれ…レイレナードあたりの亡霊であれ…」

side out

リリウムside

私は今回のマザーウィルが撃破されたことに興味を持っていました。いえ、マザーウィルが撃破されたほうではなくて、撃破したリンクスについて興味をもっていました。もしかしたらあの人ではないかと、そしてマザーウィルを撃破したリンクスは、あの人が死んだと言われてから数日の内に急にカレードに正式に登録をされ、その内容はあまりにも自然すぎるもので、私は、あの人は実は生きているのではないかと…そして今回のことでよりいっそう真実に近づけたと思いました。

side out

ORCAside

「カブラカンをおとすか。どうして、なかなかいるものだな」

「ああ…モノによつては、首輪をはずそうと思う」

「ハリのように、か？それもいいがなメルツェル」

「案ずるなよ、ジュリアス」

「間もなく、マクシミリアン・テルミドールは我々に戻る…それで準備は終わりだ」

side out

カブラカン撃破から約1ヶ月後、首輪付きのもとへ企業連からホワイト・グリント撃破の依頼が来て首輪付きはそれを受託する。

そしてレイジの方にはラインアークから依頼が来て、それを受託した。

「これで、後は計画通りやればいいのか…」

そう言い、依頼の為に準備を始めるのであった

そしてラインアーク防衛戦が始まる。企業連側は、ランク1のステイシスと首輪付きのストレイド2機に対して、ラインアーク側はランク9のホワイト・グリントとネームレス・ワンの2機で応戦する。戦闘は最初から激しかった、そして中盤に差し掛かった頃、最初に落ちたのはネームレス・ワンである。ステイシスのレーザーバズーカER-0705により戦闘不能となり海中に没する。そして次にステイシスは距離をとるためか、OBを使い移動し、それをホワイト・グリント逃がさんとはかり追う。結果ホワイト・グリントの撃った弾丸がステイシスのメインブラスターに直撃し水没し、1対1になり、ホワイト・グリントもすでに疲弊しきっているにもかかわらず2機の戦いは凄まじかった、そして最後に勝ったのはストレイドであった。

ラインアークの最も重要な戦力、ホワイト・グリントは失われ、オツダルヴァとジョン・ドウも水中に没する。こうしてラインアーク

クでの戦闘はただ一人のリンクスだけが生き残って終わる。そしてクレイドルは、安定期に入った。誰もがそう考え、企業は来るべき経済戦争の激化に備えはじめる。だが、まさにこのとき、濁り水はゆっくりと流れはじめていたのだ。

ORCAside

「ホワイト・グリントは戦闘不能。ステイシスとネームレス・ワンは海中に没し、オツツダルヴァとジョン・ドウは生死不明、か」
「これはちよつとな」

「ああ、やりすぎだな、メルツェル」

「よく言う、誰が手間を掛けさせたのか」

「すまん、完璧主義者なんだ」

「…まあいい、これでやっと元に戻ったんだ。時期もある、クローズ・プランを開始しよう」

「そのことだが…少しだけ待てないか？」

「パートナー、か」

「ああ、強いだけの阿呆でもないようだ、試す価値ぐらいはあるだろう。」

…状況は既に手遅れだが、同時に緩慢だ。今更焦ることもあるまいよ」

（さて、あの首輪付きは俺たちのところに来るかね…？）

side out

そして数日後、首輪付きのもとへとある依頼が届いたのであった…

第6話（後書き）

このペースで行くと明日にはA C f aの世界が終わり、I Sの世界に突入することができそうです。

なので一生懸命頑張るので、よろしくお願いします。

第7話（前書き）

更新が遅くなってまことに申し訳ありません

リアルの用事がかなり伸びて家に帰ってくるのが遅くなり更新が遅りました。

すいませんm(_ _)m

いろいろ独自設定みたいなものを加えたルートとなっております。

そして、一応今回の話でACの世界は終わります。

そして無駄にながいですけどどうぞご覧ください。

第7話

第7話

首輪付き side

首輪付きのもとへ、一件の依頼がくる。依頼人は“ORCA”そして依頼内容は

「初見となる。こちらマクシミリアン・テルミドールだ。

GAのアルテリア施設、ウルナに侵入しすべてのアルテリアを破壊してほしい。

この作戦は、クレイドルの前提を覆す、明確な反逆行為だ。それを理解した上、で私の言葉を聞いてくれ。

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめている。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にすぎない、このままでは、人は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。

これは扇動だが、同時に事実だ…それをよしとしないのであれば、私の依頼を受けてみないか？

勿論、報酬は払おう…期待して待っている。」

との内容のことであった。そして、首輪付きはこの依頼を受けることにした…

そしてアルテリア・ウルナ破壊ミッション、開始。

「ミッション開始、目標は遥か上だ、登っていくぞ…」

わかってるな？自分がやろうとしていることの意味が…」

「わかってるよ、セレンさん。今からやろうとしていることによつてどうなるかは…」

俺は、今まで他人から言われたままにしか行動しないでいたけど、今回は違う。

確かに扇動されたと言われればそれでおしまいかもしれないけど、俺は今、自分自身で出した“答え”によつてここにいるつもりだよ」「そうか…」

セレンはそう呟くと、そこで通信がいったん途切れた。

そしてストレイドは、最短ルートで上昇していき目標までたどり着くと、周りの防衛部隊を壊滅させ、目標を次々と破壊していく、そして最後の1つを

「これが、俺の出した“答え”だ」

そう言つと、いつもより重く感じる引き金を引いた。

そしてミッション終了後

「君の答えは、見せてもらった、ようこそORCA旅団へ」

と連絡が入り、このときをさかいに首輪付きは、ORCA旅団へ加わったのであった

そして首輪付きがアルテリア・ウルナを破壊してから約1週間後
レイジと首輪付き、二人にはほぼ同時刻に依頼がはいる

レイジside

「さてクロース・プランを開始する。ジャック（レイジ）、君にはアルテリア・カーパルスを首輪付きとともに襲撃してもらいたい。」

「首輪付きと一緒にか？別にかまわないが、あいつ一人でも充分だろ、保険だとしても後方で待機していればいいと思うんだがな」

「まだ、完全に彼の力を把握しきれてないからな……」

「ふむ、そういうことにしておこう。それにしても、ずいぶんとあいつのことを気に入っているみたいだな」

「ふつ、まあな……」

「では、俺は行かせてもらおう」

「ああ、最悪の反動戦力、ORCA旅団のお披露目だ、派手にいこう」

side out

首輪付きside

「マクシミリアン・テルミドルだ、クローズ・プランを開始。主要アルテリア施設に対し、ネクストによる同時攻撃をかける。

君のターゲットは、大規模アルテリア施設、カーパルスだ、防衛施設の要、ノブリス・オブリージュをジョン・ドウのファンタズマとともに撃破してくれ。

施設には多数の防衛部隊も展開している、ノブリスの到着前にこれを叩くことができれば、その後の戦闘が幾分か楽になるだろう。

最悪の反動戦力、ORCA旅団のお披露目だ。諸君、派手にいこう」
(ジョン・ドウ？ラインアークのホワイト・グリント撃破のときのやつか？まさか生きてたのか？どちらにせよ今回は味方らしいから、まあいいか)

首輪付きはそう思うと、ミッションの準備をしにかかった

side out

アルテリア・カーパルス襲撃ミッション開始

「ミッション開始、カーパルスを制圧する。

ノブリス・オブリージュが戻る前に、可能な限り防衛設備を破壊しておけ、それだけ楽になるのだからな」

とセレンからの通信が入る

「お前が、噂の首輪付きか。今回のミッションをともにする、ジョン・ドウ、ファンタズマだ。よろしく頼む」

「ああ…なあ、あんたは」とレイジに質問をしようとすると

「すまんが、聞きたいことがあるならこのミッションが終わった後にしてくれ」

とレイジの言葉にさえぎられる

そして二人は次々とカーパルスの防衛設備を破壊し、約2分ほどで全て壊滅させる、するとセレンから

「敵ネクスト反応、急速接近。くるぞ！本番だ。敵ネクスト、ノブリス・オブリージュを排除する」

と通信が入る

「ほう、意外と早かったじゃないか。いくぞ首輪付き、まあ見物するならするで構わんがな」

そう言いながらリーダーを確認するレイジ。すると

「空き巣とは、なんとも情けない…匪賊には、誇りもないのか？生き易いものだな、羨ましいよ」

と言いながら、ノブリス・オブリージュがOBで突っ込んでくると右手に持っているMR-R102を撃ってくる

「さあな…たとえあつたとしても貴様に教える気は無いがな」

レイジはそう応えながら右手の03-MOTORCOBRAと左手の051ANNRで応戦する

そして首輪付きは、右手の063ANARと左手の01-HITM

ANでレイジにあたらないようにノブリスを横から撃っていく

「そうか、2対1でいどんでくるとは…さらに情けないな」

「ジェラルド・ジェンドリン、貴様は勘違いしているぞ。これは決闘ではなく戦争だ、戦争に2対1で卑怯などとは言ってられないんだよ。それなのに誇りだのなんだのと言ってたら無様に死ぬだけだ」

「なんだと…？」

「ふむ、いいだろう。貴様が望むように1対1で勝負をしてやろう。まあ、貴様の誇りなんぞ興味無いがな」

「その行動…後悔してもらおう」

「てことで、すまんな首輪付き」

「いや、構わない」

そういうと首輪付きは攻撃をやめ離れる。そして真っ先に動いたのがノブレスである

右手のMR-R102で弾幕を張りながら左背のEC-O307ABを確実に当ててこようとする。だがレイジはそれを、QBを使い難なくよけていき03-MOTORCOBRAと051ANNRで撃ち返し確実にノブリスのAPを削っていく。

「どうした？そんなものか…誇りだのなんだの言っというてその程度とはな、だったらそんなもの（誇り）、狗にでも喰わせておけばいい」

「貴様っ…！」

ジェラルドは珍しく、怒気を含んだ声で言い、左背のEC-O307ABをパージし地面に落とすと、左手のEB-O305でレイジに切りかかる。

が、レイジはそれをあっさりと避け右背のEC-O300でノブリスのコアを確実に撃ち抜く。

「信じられん…ノブリス・オブリージュが、こうまで押さえられんとは…」

そう言い、ノブリス・オブリージュは沈黙した

「ネクスト、ノブリス・オブリージュの撃破を確認」

とセレンから通信が入る。

「身勝手な行為、すまなかったな。首輪付き」

「気にするな、こっちは楽できたと思えばいいさ」

そう会話していると

「やはり敗れたな…ジェラルド・ジェンドリン。貴族の務めなど、大層な御託の割に…クククツ。まあ、俺が尻拭いをしてやるとするか」

と声がする。するとセレンが「増援か、なるほどな。」とどこか納得したように言い

「二機でかかればよいものを…敵ネクスト、トラセンドだ。これも排除する。」

別行動を後悔させてやれ」と続けて言った。

「了解。じゃあ、さっさと終わらせちまおう」

「了解した」

そう言うと言輪付きとレイジはトラセンドに向かっていき銃弾の雨をひたすらに浴びせる。トラセンドは必死に振り切ろうとするが全く振り切ることができず一方的にやられた

「フツ…勝って、勝って、最後に負ける運命か…お前らも同じだ。」

それまで、精々浮かれてるがいい…」

そっぴい残すとトラセンドも沈黙する

「ネクスト、トラセンドの撃破を確認。ミッション完了だ。…クローズ・プランのはじまりか」

と言い、首輪付きだけに

「後悔するなよ、お前の選択だからな」と通信を入れる

「わかってるよ、セレンさん」

こうしてアルテリア・カーパルス襲撃のミッションは完了した

7月、多くにとって突然に、それは起こった。

正体不明の、複数のネクススト機による、アルテリア施設の同時襲撃、その殆どは成功し、クレイドルは、拠って立つエネルギー基盤を大きく揺るがされた。

そして、ORCA旅団と、旅団長マクシミリアン・テルミドールの名で、ごく短い声明が、世界に発信される。

“To Nobles Welcome to the Earth”

それは、すべての空に住む人々への、明確な宣戦であった。

企業は、安全な経済戦争を放り出し、狂気の反動勢力にたいすることを余儀なくされ、

人々は、覚束ない足元にはじめて気付いたかのように、それを恐怖するしかなかった。

ミッション終了後、首輪付きとレイジはとある部屋で話していた

「なあ、あんたは、ラインアークで俺と戦ったやつで間違いないよな？」

「その通りだ」

「なんで、ORCAに入ったんだ？俺みたいにテルミドールに誘われたのか？」

「そうだ、と言っても俺の場合は、ずいぶんと前に企業に殺されそうになつてな、瀕死のところをあいずに助けてもらっただけだな」

「企業に殺されそうになって、じゃあ企業に復讐のためにいるのか？」

「違うぞ。まず、俺は復讐なんてものは考えたことがない。俺がここにいるのは企業が支配するこの世界に未来はないと考えるのと、ある意味、贖罪のためだと言ってもいいな」

「贖罪？」

「そうだ、贖罪だ…自分の友を、見殺しにしたとも言えることをしてしまっただけだな」

「でも、戦場だったなら仕方ないんじゃない？」

「確かに、そう言えば楽かも知ない…だが、戦場だったからなと何かを理由にして自分の罪から逃れようとしてはいけない。たとえ自身の罪から目をそらしたところでその罪は消えないんだ。だからこそ自身の罪と向き合い生きてかなければいけない。少なくとも俺はそう思っている…お前も自身の罪から目をそむけないようにな」
そう言うときレイジは部屋を後にした

そして三日後、

レイジのもとへ衛星軌道掃射砲防衛の依頼がはいる

「衛星軌道掃射砲の存在が、企業側に漏れた」

「なるほど、企業連は全力で潰しにかかるだろうな。で、クローズ・プランの要諦である衛星軌道掃射砲を守ればいいんだらう？単独でか？それともパートナーをつけてくれるか？」

「話が早くて助かる、銀翁と共に守ってくれ。そしてすまないが、銀翁以外に追加の戦力を用意することはできない」

「そうか…ん？首輪付きはどうした？」

「彼には、オールドキングを粛清しにいつてもらおう」

「なるほど…やはりオールドキングは、クレイドルを落とそうとするか」

「なんだ、気づいていたのか？」

「まあな、じゃあ、さっそく準備をさせてもらおう。前のミッションで手に入れたものも試してみたいからな」

「そうか、では、頼む」

そして通信が終わるとレイジはネクストのある格納庫へ歩いていった

衛星軌道掃射砲防衛ミッション開始

「この作戦のパートナーは、お前さんか、期待させてもらうぞ。あと私は、アサルト・キャノンを使う、くれぐれも巻き込まれるなよ。君だと手、無事では住まんのだからな」

「了解した。」

レイジはそう短く応えたとOBを使いAF・イクリプスの上に取り付き右手の03-MOTORCOBRAと左手の051ANNRをひたすらに撃つ。

そうすると、あっという間にイクリプスがボロボロになり撃破される。

「アンビエント、目標を確認しました。問題ありません、作戦を開始します」

と言いながら、攻撃してくるネクストを確認する。するとレイジは「っ！」

と、思わず驚きの声をあげようとしてしまふ。それもそのはずかもしれない…なんせ、目の前にいるのは昔、自分が助け、髪飾りをプレゼントした少女。そう、リリウムなのである。

レイジはどうしようもなく叫びたかった。なぜ、なぜ、こんな所（戦場）にいるんだ！と、だがここで冷静さを失えば全てが終わってしまうと考え必死に冷静さを取り戻した。

（どうする？どうすれば殺さずにすむ？どうすれば…）

彼は今、自分の中の矛盾に酷く焦っていた。そう例えどんな相手だろうと戦場に生き残るために殺すという考えでいて、今回も心を非情にしてそうしようと思っても、なぜかそれができないのである。もしここで選択を間違えたら取り返しの付かないことになるかと直感的にわかっていた。

（今までさんざん自分に非情になれ。そう言ってきたのにな、笑わせるだが…たとえ矛盾で、身勝手な自己満足で他人から偽善者と罵られようといいさ、今回は俺のやりたいようにやるさ）

そう決断すると先ほどまでアンビエントの攻撃をほぼ避けるだけでいたレイジは03 - MOTORCORAと051ANNRで応戦しはじめる。

レイジはアンビエントの死角に必死に回り込み腕か足の間接部とコアをあまり大破させないようにメインブースターなどを攻撃していくだが相手はランクはNo.2である。いくら政治的な理由でNo.2とされたからといって弱いわけではなくしっかりと強いのである。ただ倒すだけであつたら何の問題もないだろうが、今回は殺さないようにとしているのである。

そしてアンビエントとファンタズマが激しい攻防を繰り返していき消耗戦になると思われたが、突如均衡が崩れたのである。

遠距離からネオニダス（銀翁）のネクスト月輪の左腕のプラスマライフルFLUORITEが撃たれリリウムが慌ててそれを回避しようとし隙ができるレイジはその隙を見逃さず左手の051ANNRを捨てて格納されているレーザーブレードEB - O600でアンビエントの片足を確実に焼き切り、バランスを崩したところをすかさず03 - MOTORCORAで追い討ちをかけ行動不能状態にする。「アンビエント、戦闘不能、作戦は失敗です。」

すみません、王大人。リリウムはご信賴に背きました」

そういつてると突如、弾丸が飛来し、その弾丸は、アサルトキャノンサイレント・アバランチを破壊するために撃った直後でありP

Aが回復しきつてない月輪のコアにあたる

「ぐっ！」

「遠距離射撃…まさかストリクス・クアドロか！銀翁、大丈夫か！」

「ほう、さすがに気づくか。よい勘をしている」

「なんとかな、にしても密かに狙撃とはな、実にあの男らしい」

そう言いながら月輪がストリクス・クアドロに近づいていき交戦を始める。すると王小龍は

「リリウム」と呼びかけ言葉を続ける

「貴様は私が貴様に信頼しているのだと思っているが勘違いをするな、私は今まで一度も貴様を信頼だのとは思ったことが無い。それにしても役に立たない駒だったな。ネクスト一機すら落とせずにいるのだからな。まあ貴様の代わりなどいくらでもいるからなもう用は無い、消えろ」

そう言うとしりりウムは

「そん、な…」

と今にも消え入りそうな声ので喋る

そして王少龍は動けないアンビエントに対しコアに狙いを定め引き金を引いた

だが弾丸が到着する前にレイジのファンタズマが間に入り盾となる

「下種野郎が…」

レイジはそう言うとしりりウムのEC-O307ABをストリクス・クアドロに向けて撃つと相手の左腕を吹き飛ばす

そして立て続けに月輪がHLR01-CANOPUSを当てると

「ふむ、やはり私ではこの程度か」

そう言うとしりりクス・クアドロは撤退していく

「尻尾を巻いて逃げるがよいよ、王小龍。戦場に陰謀家は不似合いだ。

それにしても、どうやらわしもここまでのようだな」

「銀翁、すまない…」

「なに、気にするでない。もともと長くない命だ、なに、作戦は果

たせた悔いはない。君が気負うことではない。この後のことは頼んだぞ？」

「ああ、まかせろ」

「そうか、遂げるよメルツェル。」

そう言うのと銀翁からは通信が一切返ってこなくなった

そしてレイジはアンビエントに近づきファンタズマを降りコクピットのハッチを外部のスイッチで強制的にあける。すると中にいたリリウムはレイジのことを見ると

「あなたは…レイジ、さん？よかった、また、会うことが、できた…」

そう言うとりリリウムは気を失う。するとレイジはリリウムを自分のネクストに乗せ帰還した。

そして衛星軌道掃射砲防衛の作戦の翌日

「作戦の翌日ですまないが、さっそくミッションの説明をさせてもらう。

ミッション内容はインテリオルⅡオーメルの最新型AF・アンサラーを撃破してくれ」

「あの、最新コジマ技術の塊か」

「ああ、他のAFと比べても、圧倒的な戦闘力を持っている」

「だが、それを制すれば、一気に最終段階、だろ？」

「その通りだ、そしてメルツェルの予想だと相手はこれにさらに追加の戦力、恐らくネクストあたりを入れてくると思っっているらしい」「アンサラーとにもか？」

「ああ、どうやら使い捨てをするつもりようだ」

「なるほどな、いかにも企業連らしいな」

「確かに、そしてこのミッションの開始は6時間後だ、頼んだ」
「わかった」

そう言いレイジは自分の部屋にいったん戻った

リリウムside

「ここは…」

リリウムは目を覚ますと目の前には白い天井がある。

そして上半身を起こし周りを見てみるとリリウムには見覚えが無い部屋だった。

そしてリリウムは、起こった出来事を思い出そうとしていった。

（そう、私は王大人に捨てられたのでしたね…でも最後に気を失う寸前にレイジさんが助けに来てくれたような気がします。たとえ夢だったとしてもまた会えて嬉しかったです）

そう思うと。リリウムは急に涙を流し始める。

すると、扉が開き部屋に誰かが入ってきた。そして

「どうした、泣いているのか？なにか怖い夢でもみたのか？」

そう言ってくる人を見ると、その人はレイジだった

side out

レイジはテルミドールからミッション内容を聞くとリリウムを寝かせている部屋にいき、そしてドアを開けるとリリウムは泣いていた
「どうした、泣いているのか？なにか怖い夢でもみたのか？」

そう言くとリリウムはこちらを向き

「レイジ、さん？」と言う

「ああ、久しぶりだな、リリウム」

レイジはそう言いリリウムの頭を撫でる。するとリリウムは「会いたかった、ずっと、ずっと会いたかったです…！」
そう言うところリリウムはレイジに抱きつき涙を流す。そしてレイジは泣いている妹を落ち着かせるかのようにして頭を優しくそつと撫でるのであった。

そしてリリウムが落ち着くと、二人は今までのことを話していた。
レイジはリンクス戦争のあと自分がどうなり、どうしてORCAに入っただのかを、そしてリリウムのほうもウォルコット家に迎え入れられてからんどを、そしてあつという間に時間がすぎ、ミッシヨンの時間が迫る

「レイジさんは、だからORCAに入っただのですか…」

「ああ、他人からみたら笑える話だろ？」

「そんなことないです！少なくとも私はそうは思いません！」
リリウムはそう力強く言う

「そう言ってくれるか、ありがとう」

そう言い微笑みながらリリウムの頭を撫でるとリリウムは少しうつむき頬を赤らめる

するとpipipiと携帯端末から電子音がし、見てみるとミッシヨン開始の2時間半前であることをアラームが知らせてくれた。

「悪いが、今からミッシヨンなのでな私は行くとするか」

そう言い椅子から立つとリリウムが袖をつかむ

「さっきも言ったが、ミッシヨンには連れて行けないぞ」

「大丈夫です。だから考えました、私をオペレータとしてください
！」

「オペレータはいなくても大丈夫なんだがな…」

「いえ、今回のミッシヨンはとても危険なんですよね？でしたらリリウムが引き受けます！」

「だが、オペレーターの知識は」と言おうとしたところをさえぎられ
「いえ、ウォルコット家の教育の中にオペレーターとしての教育も
あったので、完璧にすせてあります」と言う

それを聞きレイジは自分のこめかみを軽く押さえ考え込む。すると
リリウムが

「私は、不安なんです。もしかしたらレイジさんがまた急にどこか
遠くへ行ってしまふのではないかと…」そう静かに言う。それをレ
イジは見て

「わかった、よろしく頼む」

「はい！」とリリウムは力強く返事をした

そしてAF・アンサラー撃破ミッション開始

「ミッション開始です。AF・アンサラーを撃破してください」

「了解。さてあれをどうするか…」

「そうですね…もしかすると、あれほど巨大なものを浮かしている
ということは、無理をして浮かしているかもしれません。どこでも
構わないので外装を破壊していつてください。そうすれば何れもた
なくなり、崩壊するはずです」

「わかった、助かる」

そうレイジは、言うアンサラーに近づいていき外装部分を左腕の
“07-MOONLIGHT”で切り落としていく。そう、この
“07-MOONLIGHT”は先日ミッションから帰還後に真改か
ら、ずいぶんと昔、アンジェが死ぬ前にレイジに渡すように伝えら
れてたらしく左腕の“07-MOONLIGHT”を受け取ったのだ
「まず一枚目」

そういいながら次の外装部分を破壊していく、すると

「作戦エリア全域に高濃度コジマ粒子確認！これではP Aがやくにたちません、こちらだけP A無しと言うことになります。それにしてもこのあたりは閉鎖空間ではないはないんですよ！企業はこの地上をどうするつもりなんでしょうか…」

「さあな、それを考えるのは後にしよう」

そう言っているあいだも無数のミサイルがまた襲ってくる

（やはり、このミサイルの発射口から潰していくか）

そう考えるとレイジはミサイルの発射口を潰しにかかる。そして天辺の発射口を潰しにかかる

「中心に大規模コジマ収縮、離れてください！消し飛ばされてしまいます！」

とりりウムが焦りなが言っているとレイジは急いで退避し直撃はしなかったものの少しくらってしまふ。そこに追い討ちをかけるかのごとく無数のミサイルが来る。それをなんとかQ Bを使い避けようとするがいくつか当たってしまう。

「A P 40 % 減少！」

その言葉を聞き必死に発射口を潰す。

（これでミサイルの発射口はすべて潰した、次だ！）

そう思い次々に外装を破壊していく

「アンサラー、そろそろ限界です。アンサラー落ちます、巻き込まれないでください」

そういいQ Bを使いその場を離れるレイジ

「アンサラーの大破を確認しました。…っ！そちらに高速で何か接近してきます！これは…プロトタイプネクスト！どうしてそこに！？」

（やはり、O R C Aだけではなく企業側ももっていいいたか）

「おそらく企業のだろう、そいつも破壊する」

「無茶です！すでにA P が半分をきっています、撤退してください！」

「心配するなりリウム、俺を信じろ」

「わかりました…必ず、必ず帰ってきてください」

「ああ」

レイジはそう言うとプロトタイプネクスト、00 - アレサARETHAに向かつていく

プロトタイプネクストはレイジの乗るファンタズマを確認すると右腕のガトリングでうってくる

それをなんとかかわしながら右手の03 - MOTORCOBRAで撃ちながらどうにか隙をついて左の07 - MOONLIGHTで切り刻むがプロトタイプネクストはまるで消えたかのような速さのQBを使われせいぜいかすらせることしかできない、そしてガトリングによりどんどんボロボロになるファンタズマ

（もう限界が近いか…だが確かやつは、コジマキャノンを使う前に動きを止めるはず、そこにかける！）

そう思い必死に避けるレイジ、そしてついにプロトタイプネクストは動きをとめコジマキャノンを使うとする。するとレイジはプロトタイプネクストに対して突っ込み左手の07 - MOONLIGHTで切りかかる、するとプロトタイプ・ネクストはコジマキャノンを発射する。だが直撃はせず、ファンタズマの右腕と右背のEC - 0307ABが吹き飛ぶ。だがレイジはそれでもとまらずに左手の07 - MOONLIGHTを振るつうとプロトタイプネクストのコアを完璧に焼き切った。するとプロトタイプネクストはコジマ粒子を漏らしながら爆発していった。すると

「レイジさん！大丈夫ですか！？レイジさん！」

リリウムが泣きそうな声で通信をしてくる

「ああ、なんとか、終わ、った…そして、すま、ない

俺は、もう、駄目、みたい、だ…」

「そんなことつ、そんなこと言わないでください！」

通信越しに必死に叫ぶリリウム

「いや、いい、んだ、最後、に、お願い、が、あるん、だが」

「大丈夫、です。なんでも言ってください」と泣きながら答える

「俺、の、死を、気負、わないで、くれ、そして、つよく、生きて、くれ…」

（テルミドール、先に逝って待ってる、首輪付き、成し遂げるよ…

そして、ベルリオースにアンジェ、今、そっちに逝くよ…）

その言葉を最後にレイジからは一切、返答が返ってこなくなった…

第7話（後書き）

前回の話みたいに結構無理やりなところがありますがそこら辺はできればスルーの形でお願いいたします（汗）

なんはともあれこれでISの世界に飛び立つことになります。
そしてアンケートの結果ですが

首輪付きもISの世界に突っ込むことになりました

アンケートにご協力してくださった方本当にありがとうございます。

ぜひ、これからもよろしくお願いします。 m ((m

第8話（前書き）

はい、前回ACの世界で死んだので
今回からISの世界にきましたがまだIS本編にはなりません
本当に申し訳ない。

次からはだんだんとISに関わるようになっていきますので、
よろしく願います。

第8話

第8話　　真・プロローグ的な

冷たい雨が降っているなか、とある少年が目を覚ます。

「ここは…」

そう言いあたりを見回すとどうやらどこかの路地裏みたいだ。

「なんで、こんなところに…俺は死んだんじゃないかったか？」

そうばそりと呟くと、はっと気づいたかのように自分の体を見ると驚きの声が隠せなかった。

「なん、だと…？」

それも、そのはず。彼の体は5歳ぐらいの少年になっていた。

（あれか？コジマの力か？それともスタンドの能力か？もしかして某少年探偵コ○ンの黒ずくめのあの薬か？）

そう冗談まじりに思いながら自分の服装を確認する。

彼の服装は、ボロボロの長ズボンに、長袖か、そしてこのでかいマントのようなボロボロの布切れである。

そしてその服装から自分がどのような状況を推察してみることにした。

（おそらく、また別の世界に来てしまったのか？そしてあれか、この世界では親に捨てられたかなんかか？それとも誘拐事件などに巻き込まれたか？まあとりあえず人通りのあるところにでてみるか）
そう思い、めんどくさそうに片手を首に軽く当てると手に違和感を感じ慌ててもう一度手で触り確認する、しかし触れば割るほどとも覚えのあるものだった。

「まさか、AMSか？鏡を使って見ないことにはなんともいえないが、おそらくそうだろうな」

そう愚痴りながらも人通りのあるほうへ歩いていき、路地裏をぬけ

ると目の前の光景に少し驚く。

「まさか、俺は戻ってこれたのか？」

そう、目の前には少し変わっているが自分がいぶん前に、日常的に見ていた日本の光景であるからだ。

「あたりに所々置いてある店の看板も日本語だ」

そう言いながら突っ立っていると行き交う人々からかく視線を感じると自分の姿がのことふと思い出す。すると慌ててその場から離れるためにどこかに走っていき、ある程度離れると止まり、辺りを見渡す。どうやらいつの間にか人通りの少ないところに来てしまっているようであった。すると体の力が急に抜け倒れてしまう。

「あれ？力が、はいんない…？」

そう、さっきまでは無我夢中で動いていたが、この体はおなかが極限にまで減っており、栄養不足とも言わんばかりの状態であった。

「これって、まずいんじゃないか？はあ…転生そうそういきなりこれとは、運が無いなまったく…」

そう言いただボーっと何も無いような景色を見ていた。すると

「孝弘さん、子供が倒れてるわ！」

と言い慌てて駆け寄ってくる女性。すると男性が近づいてきて

「君！大丈夫か！？今、僕の病院に連れて行くからね、もう少し頑張ってくれ！」

そう言う孝弘と呼ばれる男性はレイジを車に乗せ移動していった。

とある男性 side

僕は三嶋 孝弘といい、とある町の小さな病院の院長だ。

今日は、病院の皆が、娘の由利香の誕生日だからと言って妻の裕子と共に早く帰るようにと気を使ってくれたから、その言葉にあま

えて妻と一緒に帰ることにした。そして帰り道の途中に妻が急に「孝弘さん止まって！」

と言ったので慌ててブレーキをおもいつきり踏んだ。すると道の端の方に人のような大きなものがあつた。すると妻は慌てて車を降りて駆け寄っていく。僕も降りようとすると

「孝弘さん、子供が倒れてるわ！」

と聞くと僕も急いでその子の近くにいき声をかけた。

「君！大丈夫か！？今、僕の病院に連れて行くからね、もう少し頑張ってくれ！」

僕はそう言つと妻と共にその子を車に乗せると病院にむかいアクセスルを踏んだ。

side out

「…ここは？」

そう言い目を開けるレイジ

（何度目だろうか？この状態になるのは…）

そう考えてると扉の開く音がして白衣姿の男性が入ってくる。そして男性はレイジが目を見ましたんだね

「よかった、目を覚ましたんだね」

と安堵の表情で言つた。

「あなたが助けてくれたんですか？」

「そうだよ、僕の名前は三嶋 孝弘っていうんだ、この病院の院長をやっているんだよろしく。でも驚いたよ、僕が帰る途中に妻が倒れてる君を見つけたんだ」

「そうですか、ありがとうございます。あつ、あと俺の名は久瀬零治です」

「零治君か、よろしく。」

そう微笑みながら言う

「あと、起きたばかりで悪いけど質問をしてもいいかな？」

と少し真面目な表情になる孝弘。

「ええ、大丈夫です」

と零治が言うと

「まず君の親御さんはどうしているかわかるかい？」

「いえ…わかりません」

「そうか…次に、なぜあんなところに倒れていたんだい？」

「気づいたら、路地裏にいてそこから途方もなく歩いていたら、急に体に力が入らなくなっ

「てことは、その路地裏にいた前の記憶はないということかな？」

（やってしまったな、名前はおぼえてるのにそれ以外が都合よくぬけているとなると、あやしまれるだろうな、さてどうする…）

そう自分のミスをどうフォローしようか必死に考えていると孝弘は「ふむ、過去の出来事はとも思い出したくなって自分の名前以外を思い出さないようにしているのか？それとも…」

などと、ぶつぶつと独り言のように喋っていき

「多分、君は本能的に嫌なことを思い出さないようにしているんだろうな」

と零治の状態を告げたのであった

（まさか、納得したのか？まあ何も追求されずにすむならそれでいいが…）

と思っていると

「最後に1つだけいいかな？」

「はい…」

「首のところに埋まっている機械は、なにかな？」

そう言われると零治は一番聞かれたくないことを聞かれて一瞬、とても驚くがすぐさま冷静に落ち着き

「首…？」

と知らなかったかのように言い、自分の首を触りまるで初めて気づいたかのように演じた。それを孝弘はみて

「どうやら知らなかったようだね、すまない。もしかしたら君はそのことが嫌で記憶を閉ざしたかもしれないのに」と申し訳なさそうに言う。

「いえ、驚きましたけど記憶が無くてなんとも感じないので大丈夫です」

「そうか、ありがとう。で、今の君にこんなことを言うのもあれだが…さっき警察の知り合いに聞いたんだが、どうやら最近是谁の捜索願いも出されて無いらしくてな…」

となんとか濁そうとしているが

「要するに、俺は捨てられたんですね？」

そう聞くと孝弘は

「すまない…」

と言い頭を下げる

「孝弘さんが謝る必要はないですよ。俺もなんとなく気づいていましたし、親の顔も思い出せませんから」

「そうか…なあ、急に言うのもなんだが、もしよかったら僕の養子にならないか？」

と突然の申し出に驚く

「いいんですか？俺みたいなものを養子になんてして」

「もちろん構わないさ。まあ、君が嫌でなければの話だけど」

「じゃあ、ぜひよろしくお願いします」

「そうか、じゃあさっそく色々としなきゃいけないね。あと一応今日で退院できるけど明日までいるかい？それとも今日からうちに来るかい？」

（ふむ、AMSのこともあるからな…もしこの人しか知らないなら他の職員の目にふれる前にいったほうがいいな）

「はい、じゃあよろしくお願いします」

「わかった、じゃあ準備が終わったらよびにくるよ」

そついい孝弘は部屋を出ていった

孝弘 side

僕は零治君の病室をでると妻が待っていてくれた。

「孝弘さん、あの子どうだった？」

と心配そうに聞いてくる

「ああ、零治君は目を覚まして元気だったよ。しかも養子にもなるって」

そう言うとき妻はほっとし、喜んでいた

「でも、首の機械のことは知ってみたいだったよ。そのことを聞くとほんの一瞬だけど動揺していたしね。どうやら彼は記憶を閉ざしてるんではなくて話したくないみたいだ。まあ、それもそうだと思うよ。推測だが首にあんなものを埋められたんだ、きつととても酷いことをされたんだろうね。」

僕がそう話すと妻の表情は暗くなる

「私たちじゃ、あの首の機械をとってあげることができないのよね……」

「ああ、あそこまで脊髄に近いとね、悔しいけど今の医療技術じゃ絶対に無理だろうね、正直どうやったらあんなことができるか知りたいぐらいだよ。まあなんにせよ、あんな子供にあれほどの非人道できることをするなんて許せない」

僕はそういつてるといつの間にか爪が食い込むまでこぶしを握っていたらしく手から血が流れる。そうすると妻は僕の手をそつと握り「大丈夫ですよ。孝弘さんたとえ今、あの機械をとってあげられなくてもあの子に人並みの幸せを与えてあげることができるはずだから」

「ああ、そうだね」と静かにうなずいた

「それにしても由利香をずっと待たせてしまってるがどうしよう…」
「それなら大丈夫ですよ。さっき由利香に電話をしておきました。
ついでにもしかしたら家族が増えるかもしれないと言ってあげたら、
電話口ですごいはいはいでしたよ」
「それはよかった。君は零治君が断わらないとわかってたのかい？」
「ええ、それは一児の子を持つ母親の勘です！」
そう自信満々に言う妻を見て思わず笑みがこぼれた
「さて僕は、色々と手続きをしにいくよ」
そう言う僕と僕は廊下を歩いていった

side out

零治と孝弘の会話から数時間後、零治は孝弘とその妻、裕子とともに三島家に向かっていた

そして、三島家の前にきて孝弘が家の扉をあけ

「ただいまー」

と言うと奥のほうから足音が近づいてきて

「おかえりー！わたし、いい子にしてまっただよ！」

と元気よく走ってきた女の子を孝弘さんが

「えらいぞ、由利香！」

と言いながら頭を撫でる。どうやら女の子の名前は由利香というらしい。

「ほら、由利香。電話で言ってた新しく家族になる零治君よ。ちなみに由利香より1つ年上だからお兄さんね」

そう言い、裕子は零治を自分の娘に紹介する。

「わたしの名前は、由利香っていいですよ！」と元気よく挨拶をしてくる

「俺の名は、零治という。よろすしく」

「うん！よろしくね、れいじお兄ちゃん！」

と言うと勢いよく零治に抱きついてくる。それに対し零治は少し照れくさそうにする。

そんなやり取りを孝弘と裕子の2人はみて微笑んでいる。

そして零治もこれからこの温かい家庭がずっと続くと思っていた…
そう、あの事件が起こるまでは…

第8話（後書き）

いろいろとありえねえと思われませんがそこら辺はどうかご都合主義で通してください。

お願いします。

そして首輪付きやリリウムが入ってくるのはもう少し先になるかと思えます。

第9話（前書き）

今回からISにふれてきます！

そしてちょっとグロ（？）シーンのものがあったりなかったりします。

第9話

第9話

零治が三嶋家の養子になってから約2年がたちとある休日、家族皆で昼食をとっていた。

「れいじお兄ちゃん、ご飯食べ終わったら一緒に遊びにいこう！」と元氣よく言う由利香

「ああ、いいよ。ただし嫌いなトマトをちゃんと食べたらな」

「うう、がんばって食べるもん！」

「あらあら、すっかりお兄ちゃんね」

「由利香が人懐っこいのもあるしね」

二人がその光景を見ながら微笑む。

しかし突如家の外の町内放送から緊急の避難警報が鳴り響く。

「〇〇町の皆様にお知らせします。たった今、各国のミサイルが日本に向かって発射されました！直ちに外に出て政府の役人の非難にしたがってください！」

それを聞くと零治たちは、必要最低限のものを持って急いで外に出る。すると今の放送を聞いたであろう人々が慌てていた。それをスーツを着た政府の役人と思われる人たちが指示をだしている。

「さあ、早くいくよ！」

孝弘はそう言うのと零治の手をしっかりと握り、裕子は由利香の手をしっかりと握り役人の指示にしたがい移動し始める。

「れいじお兄ちゃん、いまなにがおっこてるの？」

不安そうに聞いてくる由利香に対し、あいてる左手で由利香のあいてる右手をしっかりと握り

「大丈夫だよ。父さんや母さん、俺もついてるからね」

そう優しく言う。すると遠くのほうから轟音がきこえる。おそらく

ミサイルが落ちたのだらう。そしてその轟音をきいた人々は、パニックに陥る。すると人の波が荒れて、零治たち家族を引き裂くかのようになり、人がぶつかり、とうとう孝弘の左手を握っていた零治の右手が放れてしまい、由利香も裕子の右手を握っていた左手が放れてしまふ。

孝弘と裕子は同時に叫び、再び手を掴もうと伸ばす。しかし人波は残酷にも孝弘と裕子を飲み込んでいき見えなくなってしまう。すると近くの建物にミサイルが落ちてくるのが見える。そしてすさまじい爆発音とともに破壊された建物の破片と衝撃が襲いかかる。零治はその衝撃にうたれ意識を落としゆくなか、絶対にこの手だけは放さない、由利香の手をいつそう強く握った。

零治は氣を失ってから、1分程で氣がつく、そして意識が回復するとすぐに左手の手を握る感触に気づき多少安堵し自身の左手を見ると由利香の右手がありそのさきを確認すると……右手は腕の途中で切れていたそして先には建物の巨大な瓦礫があり下のほうには血が飛び散っていった。

しかし零治はすぐさま目の前の光景を理解できなかった、いや、理解したくなかった零治は必死に瞬きをする。何度も、何度も、何度も、何度も、しかし目の前の光景は変わることとはなかった。すると必死に否定し続けてきた事実が頭の中に入ってくる。

「ああア ああアア ああアア ああ ああああ ああアア ああ ああアあ
ああアア ああああ あ！」

零治は涙を流しながら叫び、こう思った

“たとえどんな世界だろうと、世界は常に残酷だ”

そう思うと零治は意識を手放した。

そして零治は気がつくともた病室のような場所にいた。

「ここは？」

そう言いうと近くの男性が零治が起きたことに気づいた

「ここは、どこですか？」

と男性に聞いてみる。

「ここは、昨日起きた“原因不明の爆発”によって独りになってしまった子供たちなどを保護する施設だよ」

そう男性が言つたのを聞くと零治はふと理解する。

ようするに日本政府や他の国の政府はミサイルは約一ヶ月前に発表されたISに約半数をそしてその他は各国の軍などが打ち落としたことになり。ミサイルが落ちた事を無かったことにしたのだ。そしてもしこのことを外に漏らそうとすれば消すであろうと、いわばこの施設は本当の真実を知る者の監視場所であるとそしてこの施設に日本各地で起きた“原因不明の爆発”による集められた被害者の人数はたった16人ほどである。そしてその16人は全員子供である子供ならあの事件のことを上手く言い包められると思ったためである。と零治は理解したのだ。

「少しでも無事な人がいてよかったよ。すまないが今忙しくてね、また後で来るよ」

と言い病室を出つた。すると零治は最後の光景を思い出し泣くかと思えたが涙がでてこなかった。

（ははっ、俺の心は本当に狂っているらしいな）

そう自分を嘲笑う。零治は前の世界で、戦争をしていて親しい仲間たちが次の瞬間には絶命してたりする状況に馴れてしまったために心の感覚が少々麻痺しており、とても悲しい気持ちだが泣けないという状態になってしまっている。しかしそれが皮肉にもそのおかげであんな光景をみても精神が崩壊せずにすんでいるのであった。

そして零治が施設に来てから約半年後、他の子供たちとともにとある部屋に集められていた。

「今日から君達は新しい施設に移動してもらうことになった。なので今から君達は外の車に乗って移動してもらう」
男はそう言い子供たちはみな中から外が見えないようになっていいる車に乗せられると出発する。そして車に乗ってから数分、いや数十分あるいはそれより長い時間かもしれない時間がたち車が止まる。するとドアが開き降ろされ目の前の建物をみると研究所のようなところだった。

そして建物中から数人男が出ると子供たち全員を中に連れて行き、とある部屋に連れてくるとそこには眼鏡をかけた研究員のような薄気味悪い男がいて、子供が全員いるのを確認するとしゃべりはじめる。

「初めまして、僕は、ISの研究をしているキール・マルセスと言う。これから君達には被検体になってもらうよ。」

キールという男がそう言う子供たちは騒ぎ始め、それをみたキールが部屋の隅にいた一人の男に目で合図する。するとがたいのいい男が子供たちに近づき騒いでいる子供の中の一人を掴み見せしめのように殴る。すると子供たちは怯えて静かになった。

「うんうん、僕は静かな子は好きだよ」
と薄気味悪く笑いながら言う。

「さて、まずは男の子と女の子に別れてね。そして男の子は僕についてくるように」

そういう子供たちは嫌だと思ったがその言葉に従わなかったらさっきの男の子のようになると思うと、零治と殴られた男の子を含め12人はついていった。そしてまた別の部屋に入るとまたキールが

喋りだす

「みんな最近TVとかで話題になっているISを知っているね？
だけどねそのISはなぜか女性にしか動かせないんだよ、現行の兵器を凌駕するのに女性しか動かせないなんてもったいないよね。」
しかし僕はね、どうにかして男性が動かせないかと考えているんだ。
そしてもし動かせるようになったら凄いいことなんだ。だからね、君達にはその為に協力をしてもらうんだ。」

クククツと気持ち悪く笑うキール

「ああ、そうだそうだ、君達には拒否権は無いからね？君達は哀れなことに国から捨てられちゃったんだから」
アハハと可笑しいように笑う。

（やつぱり、か。国は口封じのために変態科学者にモルモットとして渡したのか）

と零治は冷静に考えていた。すると笑い終わったキールが零治のこ

とみて
「そういや、そこにいる零治君だったかな？君面白いもの首につけてるよね？」

「っ！」

「どこの誰がそんなものをつけたのかわからないけど、僕はそれに興味があるんだ」

口の両端を上げてにやりと笑うキール

「ちよつと調べさせてもらうよ、大丈夫解剖は絶対もしないし丁寧に扱うから、乱暴に扱って貴重なサンプルが使い物にならなくなつたらいやだもん」

零治は近くにいた大柄の男二人に掴まれ抵抗するが体格差が違いすぎるためにあっさり押さえ込まれる。そして実験室のような場所につれてこられる。するとそこには組みかけのISと呼ばれるものがあった。

「来てそうそう悪いけどすぐに実験させてもらうよ。さっそくISを動かせるか試してみたいけどまずそれがどうなってるかを知り

たいからね」

そう言つと零治を台に固定して機械からいくつも伸びるコードの中の1つをAMSにとりつなげる。

「すこし苦しいかもしれないけど頑張つてね」

そう言つと零治はネクストを動かすためにつなげたときよりは軽い
が似たような精神負荷をうけ

「がつ！」と苦しそうにする。

「うーん、どうやら脳からの電気信号を首のそれで制御して機械とかに送りだすみたいだね。これは義手や義足のために使われるものだったのかな？それにしても精神負荷がかかるみたいだね。ねえねえ君はなんでこんなものをつけられたんだい？」

「知る、か！」

「そうか、残念だ。まあそれじゃあ仕方ないか、悪いけど君にはその首のものと似たようなものができるまで頑張ってもらつからよろしくね」

その日から零治は辛い実験の日々を繰り返す。

そして実験を始めてから約1ヶ月半後

「ねえねえ零治君、今日はねISを動かしてもらいたいんだ、君のね首と同じようなものがね試作品だけでもできたから、まずは君がISを動かせるか試してみたいんだ。もしかしたらいつもより精神に負荷がかかっちゃうかもしれないからがんばってね？」

そう言つと零治をISに乗せISから伸びるコードを首に刺す。すると精神負荷がかかり苦痛そうに表情を歪めた。するとISが起動したのだ。キールはそれを見て

「すごいよ、零治君！」

アハハと愉快そうに笑う

「本当に凄いよ君は！今、IS適正を見たけどA+だよ！さっそく他の子に取り付けてあげなきゃ」
そう言うときールはモニター室を飛び出していった。

そしてその日から零治は生身でもISでも戦闘訓練を強いられ、他の子供は擬似的AMSをつけられ精神負荷に耐えられるようにとされていった。そしてそこから1ヶ月ほどたった。

とある研究室で

「やっぱりすごいな、僕は！まあ大きさが首輪と同じぐらいになつてしまったが、男性はISが使えるようになり元々IS適正のある女性は1〜2ランク上がるようになる」
と一人で興奮しだすキール

「うーん、でもまだ改良しなきゃな、残念なことに精神負荷に耐え切れなくなった子供たちがでちゃったし、あと2人しか使えないがないのはつらいな。だけど零治君はすごいね、あの精神負荷にずっと耐えてるんだから。」

そして急に立ち上がり

「あつ、そうだ！前に拾ってきたあのISみたいなのを零治君に動かしてもらおう！あの子なら僕らでもISばい何かとしかわからなかったあれを動かせるかもしれないしね、やっぱり僕は天才だ！」

そう言うとき実験室に向かっていった。

「零治君、君に動かしてもらいたいものがあるんだ」
そう言うとき零治の前にあるものが出された

「前にねそのISばいものを拾ったんだけどね僕ら研究員がどんなに頑張っても解析もできなくて女性にも触らせてみたけどまった

く反応しないんだ、外見からしておそらくISだと思うんだ。だから是非、君に動かせるかを試してもらいたいんだよ」

零治はそのISらしきものをみるとどこかで見た記憶があるのだ、そして少し考えるとふと思い出す。

（こいつは、まさか…）

零治は自分の勘が正しければ、自分はこのつを動かせるのではないかと。そう思うと零治はそのISらしきものにふれる。するとAMSをつなげてないのにISが起動した。すると機体の情報が零治に流れ込んでくる。

AC・NAME ファンタスマ
f a n t a s m a

HEAD・HD・HOGIRE

CORE・CR・HOGIRE

ARMS・03・AALIAH/A

LEGS・LG・LANCEL

R ARM UNIT・03・MOTORCOBRA

L ARM UNIT・07・MOONLIGHT

R BACK UNIT・EC・O307AB

L BACK UNIT・EC・O307AB

R HANGER UNIT・EB・O600

- COMPLETE SYSTEM CHECK -

システムチェック完了の情報まで流れ込み、それが終わる。

（どうやら、ネクストの出力をほぼ完璧に再現してある。そしてPAも機能するとは驚いた。だがPAは展開しないほうがいいな）
そう考えているとキールが

「マジKoolー！最高だよ零治君！」

などと五月蠅いが気にせず。ファンタズマのそれなりに情報をよみとると零治は研究員達の方へ向き右手の03 - MOTORCORAをガラス越しにいる研究員にむけて撃つがガラスは壊せなかった。「おやゝ？今までの恨みをはらそうとしてるのかい？だけど残念だったねゝ、このガラスは対IS用のバリアがはってあるから無理だよ」

とケラケラ笑うが零治は左手の07 - MOONLIGHTを最高出力でガラスの目の前にいた他の研究員2人ごと焼き切ると、警報になる。そしていつも人を馬鹿にしたように笑っているキールが慌てていた。

「な、なんでIS用のバリアを壊せるんだ！？クソッ！」

そう言うとき急に部屋をでて応援を呼ぶキールそれを逃がさないとして07 - MOONLIGHTで壁を壊していく。

「さて、今までの礼をたっぷりとさせてもらうぞ」

と言い研究員を殺害しながら追いかけると外に出た。

するとキールはへばっていき転んでしまう。そして零治は近づくと

「貴様は、さんざん俺らのことを好き勝手にしてくれたな！」

「だから、どうした？それで僕を殺して他のやつを救うってか？だったら無理だな！他のやつらは精神負荷に耐えられなかったからな！残りの2人はちよつと手を加えてやってもう無理だ！」

ヒヤヒヤヒヤと狂ったように笑う。それを聞いて零治は

「五月蠅い」

と言いキールに対して03 - MOTORCORAを撃つと片足が吹き飛ぶ

「うがあああああああああああ！！」

僕の、僕の足があああああああああああ！！」
と言つてのた打ち回る

「もういい、貴様は今すぐ殺してやるっ…！」

そう言い03 - MOTORCORAをキールに向けると横から斬りかかれると零治は後ろに避け距離をとり、攻撃してきた相手を

見た。するとそこにはISをまとっているものが2人いた

「ははは！もうお前は終わりだあ！見る、さっき言っていた残りの2人だ！もう廃人確定の人形だよ！さあ、お前たちあいつを殺せ！」

そう言う2人は零治むかつて近接ブレードで切りかかってくる

「下種がつ！」

そう言いキールを睨みながら相手の攻撃を避ける。相手は素人同然の動きで力任せに振るうブレードは決して零治にあたらないだが零治は反撃をしないでいた。たとえ手遅れだとわかってても2人を手にかけたくないと思っている。すると2人からオープン・チャネルでしゃべってくる。

「オレタチハ、モウタスカラナイ」

「コレイジヨウハ、モウイヤダ」

「ダカラモウ、コロシテ」

それを聞くと零治は

「……わかった、そしてすまない。俺のことは恨んでくれて構わない」

そう言う07・MOONLIGHTで絶対防御を貫き2人を倒す。そして2人とも切られる前に「アリガトウ」と言い残した。そして再びキールの元へ近づくと

「クソツ！あの役立たずどもめ！」

そう言うキールに03・MOTORCOBRAをむけ

「死ね」

そう短く言い引き金を引いた。そして

「こんな場所はまだあるべきではない」

そう言う程度の高さまで上昇し、両背のEC・O307ABを高出力で研究所に向けて撃つと研究所を跡形もなくすべて吹き飛ばした。そして、静かに地上に下りるとファンタズマを解除すると左手に腕輪状になった。そして零治は今までの疲労のせい、膝をつき倒れてしまう。

すると遠くからヘリコプターや車の音が近づいてきて、ヘリコプターが近くに着陸して中から初老の男性が降り零治に近づいてくる。

そして零治はその姿をみながらゆっくりと意識を手放した。

第9話（後書き）

まあ、なんというか、ご都合主義まっしぐらなうえに無理やり感はんばないですがそこら辺はスルーをお願いします（汗

そしてもうすぐIS本編に入れそうです。
なので頑張らせていただきます！

第10話（前書き）

今回は短いと思います。

そして次から本格的に本編に介入する予定となっております。

第10話

第10話

とあるヘリコプターの中

零治はゆっくりと目を開け

「また気を失ったのか…」

と静かに呟く。それに気づいた初老の男性は

「おや？もう目を覚ますとは丈夫な子だな。私の名はルーカス・レイレナードという。一応外傷は無かったがどこか痛むところはあるかな？」

「いえ、大丈夫です。俺の名は三嶋 零治です。そして助けられて、ありがとうございます。」

「いや、礼を言うのはこちらだ。生きていてくれてありがとう。そして、すまない」

零治はむこうの急な感謝と謝罪にとまどった

「なぜ、そんなことを言うんですか？」

「実はあそこの研究所が非人道できな実験をしているのがほぼ確実にわかっていたんだが、決定的な証拠を入手できずに突入するこ
とができずにいてな。そして今日になってクラッキングでやっと入
手ができ急いで来てみたが、それは遅すぎた。結果、君の手を汚し
てしまい他の子供を誰一人として救うことができなかった」

「でも、国が関係していますから、仕方ないと思いますよ」

「それでもだ。少し無理してでも早く行くべきだった…すまない」

「いえ、少なくとも俺は許しますよ。なにはどうあれあなたが俺
の命の恩人ということに関しては変わらないんですから」

「ありがとう、優しいんだな君は。罪滅ぼしと言ってはなんだが、君を我が社で保護させてもらえないか？」

「保護、ですか？」

「まあ今の君の状況では、私が例えどんな理由を述べようと、君は私達があの研究員達のようにISが使える男性として利用すると思うのは承知だ。そのうえで君を保護させてもらいたい」

「確かにそうですね、ですけど俺は普通の生活に戻るのが難しい今、頼るしかないのが事実ですから」

「そんなことはない！君は普通に生活していいんだ、今からでも遅くは無いんだ！」

今まで冷静だったルーカスが急に声を大きくして言う。その光景を見て零治は思わず軽く笑ってしまう。

「やっぱり、あなたはいい人ですよ」

零治がそう言うのとルーカスは、はっと冷静に戻りと笑う

「ハッハッハッ！私もしてやられたな、こんな子供にのせられてしまったよ」

「では、これからよろしくお願いします」

「ああ、任せてくれ。一応君がISを動かせる事は我が社の職員全員で外部に漏らさないようにするがいいか？」

「そのかたちでお願いします」

そう話しているとヘリが着陸し外に出ると目の前には見覚えのあるマークが入ったでかい建物があった。

「見てくれこれが我が社、レイレナード社だ。そして、ようこそレイレナード社へ」

それを零治はみて哑然としていた。

（あれ？やっぱり名前を聞いたときから思ったけど、マークまで一緒とは驚きが隠せん）

「ん？どうした、そんなに驚いたか？」

そう言われはつと我にかえる

「え、ええ。あまりの大きさに驚いてたので」

「そうか、だがISが発表されてから業績が落ちてきてな」

「俺も手伝いますよ？」

「ハッハッハッ！気持ちだけ受け取っておこう。ではついて来てくれ」

そういい歩き出すルーカス、そしてその後に零治はついていった。

こうして零治はレイレナード社に入社（？）したのである。

そして、あれから3ヶ月ほどたち零治は社内の人々から可愛がられていた。零治もまんざらではないがどうしても手伝いと思っていた。しかし社内の皆はあの実験の被害者だからと気遣いIS関連の仕事は手伝わせないようにしていた。だが零治からすると恩返しができないのがもどかしかった。そこで零治はルーカスに仕事をどうしても手伝いたいとしつこく頼み込むと、とうとうルーカスは折れてしまい無茶はしないようにと条件付で承諾を出した。

すると零治は自身のISファンタズマを調べることにした、さすがにコジマが害があるかないかはISのみの情報では判断がつかず、精密に調べると、どうやらコジマ粒子は害をなさないようになっていた。そしてブースターやPAはネクストと同じ出力であり背中のEC-O307ABも数値をみるとネクストのとき（Ver・フロムマジック）と変わらずAAも同じだった。アサルト・アーマー

武器のほうは両腕に07-MOONLIGHTを装備した状態で持てるようになっていた。

そして格納されてる武装は32個と多いのである。これはあまりにも危険だろうと思い、PA、AA、ブースター、EC-O307AB、07-MOONLIGHTの出力には制限をかけたのであった。

た。

そして零治はまず開発から手伝おうと思うと、零治は向こうでの知識をある程度使いいろいろと助言をしていく。しかし皆、最初は子供の戯言だと思っていたがその有用性がわかれると驚き零治の助言とともに一緒に開発していった。そして零治がレイレナード社で手伝うようになってから徐々に業績が伸び始めたのである。

それから時はたち、零治が高校1年になるころに前から患っていた持病にルーカスが倒れてしまう。それを聞き急いで病院に向かう零治

「爺さん大丈夫か!？」

「ああ、零治か。学校はどうした？」

「爺さんが心配だから早退してきたさ。で、医者は何んだって？」

「病の進行が思ったよりも早くてもう、長くないと言ってた。長くもって一ヶ月だそうだ」

「…そうか」

「なに、私もうすうす感づいてたことだ。それにしても改めて見ると随分と大きくなったなあ」

「あれから何年たつてると思ってたんだ？」

と笑いながら言う

「そうだったなあ。なあ、ところで零治」

「ん？なんだい爺さん」

「お前、次の社長を任せていいか？」

「はあ!？なに言ってるんだよ爺さん、俺なんかよりユーリ力さんとか大介さんとかいるだろ？」

「ああ、その2人にも社長にならんかと聞いたら零治を指名した

ぞ、他の社員たちにも聞いたら皆お前さんがいいって言うてたぞ。因みに私もそれを望んでるぞ」

「みんな、買いかぶりすぎだよ、俺のこと」

その言葉をルーカスは聞くと大きな溜息をつく

「はあ、お前は自分のことを過小評価しすぎだ。もっと自身を持って、お前にはそれに見合うだけの能力があるのだから。まあ死にそうな年寄りの最後の我俣を聞いてはくれんかね？」

それを聞くと零治は拳を強く握り。

「わかったよ、爺さん。だけど爺さんには悪いが、あと1年程待ってくれ。俺はその間にもっとがんばるから、それじゃ駄目か？」

「ああ、それで構わない。こんな年寄りの我俣を押し付けてすまん」

「気にしないでくれ、爺さん」

そのあと零治とルーカスは他愛のない話をして一日をすごしていった。

そして、その日から一週間と数日たつとルーカスはとうとう帰らぬ人となった。

零治は涙を静かに流し見送る。そして自身が言った言葉を果たすために努力をするのであった。

時は過ぎ、翌年の2月、世界中を騒がせる出来事が起きる。

“ 男性初のIS操縦者が表れる ”

第10話（後書き）

やっとIS本編の一手手前です。

そして終わり方が微妙なのもいつものこと、ということでお願いします（汗）

今回もいろいろと都合主義でおしてます。

一応、零治のISの武装は設定などでだすことにします。

あと因みにでてきたレイレナード社の皆さんはとても心が綺麗な人達なのでご安心してください。

どのくらい綺麗かと言うと、アクアビットの研究員達が「コジマなんて害のあるものを使ってはいけないんだ！」と言うくらい綺麗です。

そして次も頑張っていきたいと思います。

誰も得しない主人公設定的な何か（前書き）

一応、本編突入前なので主人公設定的な

誰も得しない主人公設定的な何か

誰も得しない主人公設定的ななにか

名前：三嶋（久瀬） 零治

原作開始時は高校2年

背の高さは185ぐらい

IS名：ファンタズマ

形みたなの

HEAD・HD・HOGIRE

CORE・CR・HOGIRE

ARMS・03・AAL IYAH/A

LEGS・LG・LANCEL

R BACK UNIT・EC・O307AB

L BACK UNIT・EC・O307AB

をフルスキンではなく都合よくハーフスキンにしたもの

機体武装

ライフル

051ANNR×2

アサルトライフル

063ANNAR×2

MR-R102×2

04 - MARVE × 2

スナイパーライフル

050 ANSWR

061 ABSR

マシンガン

XMG - A030 × 2

03 - MOTORCOBRA × 2

ガトリングガン

GANO1 - SS - WG × 2

ショットガン

MBURUCUYA × 2

SAMPAGUITA × 2

ハンドガン

LARE × 2

グレネード

GRA - TRAVERS × 2

レールガン

RG01 - PITONE

レーザーライフル

ER - O705

ハイレーザーライフル

HLR01 - CANOPUS

HLR09 - BECRUX

パルスガン

EG - O703 × 2

ブレード

KIKU × 2

レーザーブレード

07 - MOONLIGHT × 2

あと天使砲（フロムマジック使用）

他、首輪付きのとかもそのうち追加予定

誰も得しない主人公設定的な何か（後書き）

ぶっちゃけ形はビジュアル使用なのでゲームで参考にしないほうがいいと思います。（汗

そして天使砲の威力はフロムマジックと同じって考えるとんでもないきが…

あと機体性能は超スペックということでお願いします。

第11話（前書き）

やっと本編突入です。
長かった、なあ。

そういえばほどうでもいいことですがアサルトライフルやライフルの連射速度もフロムマジックでOPと同じというのを忘れてました。

第11話

第11話

IS学園の1年1組の教室で真ん中の最前列に織斑一夏という男子が座っている。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRをはじめますよー」

そう言うのは子供が大人の服を無理に着ましたという印象の女性、山田麻耶先生である。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……」

しかし教室内は変な緊張感から生徒の反応が誰一人として無い。それに対して山田先生はちよつとうろたえてしまう。

「じゃ、じゃあ自己紹介を出席番号順でお願いします」

と言い自己紹介が始まっていく。そんな中、織斑一夏は別のことを考えていた。

（これは…想像以上にきつい…）

と考えていた。それもそのはず、クラスの殆どが女子であるために数少ない男子にみな注目しているのだ。そして一夏はちらりと窓側の女子、六年ぶりの再会である幼馴染の篠ノ乃箒の方へ助けを求めようにして目をやるが、ふいつと窓の外に顔をそらした。

（うう、薄情な…）

そう思い他に助けを求めようとしてもあといるのは、後ろにいる男子生徒だけであるが、今の状況では後ろに振り向くことはできなくて悩んでいると

「……………くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

いきなり大声で呼ばれて声が裏返ってしまった。周りからはくすくすと笑い声をする。

「あつ、あの、お、大声出しちゃってご、ごめんね。お、怒ってる？ゴメンね、ゴメンね！でも、あのね、自己紹介、“あ”から始まって今“お”の織斑くんなんだよね。じ、自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？や、約束ですよ。絶対ですよ！」
そう聞くと一夏はしっかりと立って、後ろを振り向く。

(うつ…)

「えつと……お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

そう言くと周りの生徒からは、それだけで終わり？もつと色々と喋ってよ！などという期待の視線がつきささる。すると一夏は決心したように深呼吸して思い切って口にした。

「以上です」

そう言うとがたとずっとつけてしまう女子が何人かいた。するとパアンツ！後ろからいきなり叩かれおそるおそる後ろを振り向いてみると、とある人物が目に入り。

「げえつ、関羽！？」

と言うとパアンツ！とまた叩かれる。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

一夏の頭を叩きそう言う人物は織斑千冬である。

「山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつたな」

「い、いえ副担任ですから、これくらいはしないと……」

山田先生はそう言いさっきの涙声とは変わり笑顔でこたえた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、理解しろ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

千冬がそう言くと

「キャーーーーー！本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に会うために沖縄から来ました！」

「千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

などと黄色い声援が響く

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。で？挨拶も満足にできるのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は——」パンツッ！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「よし、他のものも静かにしろ。次のやつ自己紹介をしろ」
そう言うで一夏の後ろの男子が立ち上がる。

side 首輪付き

どうも、全く出番がなかった首輪付きです。え？あの後どうなったかって？それはまた今度話すとして、俺は約一ヶ月前にこの世界に来て右左もわからず途方に暮れて2日ほど過ごしてたらとうとう空腹で倒れたんだ。そのところを織斑千冬に助けてもらい、なんか俺の手首についてるアクセサリーがISというものらしく俺はそれを使えるがためにここににいるわけだ。もちろん自分の素性のことは殆ど隠して首の後ろのAMSのことを利用して実験施設から逃げてきたことにした。そしてなんか織斑千冬が根回ししてくれたみたいで政府のほうに正式に登録された。

それにしても周りの声がでかすぎるだろ。お、そう思ってたら自己紹介の番が回ってきたみたいだな。

「あー、俺の名はオルカ・リンクスだ。一応ISを使える三人目の男子だ。テレビに出てないけど、政府の方にはちゃんと登録してあるからよろしく。趣味は特に無い。まあ、そんなもんで」と俺が言つと周りがまた騒ぎ始める。あゝめんどくさかった。え？名前が安直すぎる？・hackのオルカもといヤスヒコとユニコーンのバナージの名前を馬鹿にするなよ？

パンツ！

「いつ！」

「お前もまともに自己紹介ができんのか？」

「…すみません」

なぜあの自己紹介ではいけなかったのだろう…

side out

そして自己紹介が進み一人の女子にあたる

sideとある女子

私の名前はリリウム・シェリーと言います。珍しいことに私は生まれたときから前世の記憶があります。名前のリリウムは一緒ですがファミリネームは変わりました。そして前世の世界は戦争が当たり前の世界でした。そしてあの人も死んでしまった悲しい記憶もあります…と暗い話は無しにしましょう。前世のことはいつか語るとします。で、あのオルカ・リンクスと名乗った男子は前世のストレイドのリンクスに瓜二つですね、もしかしてあの人もそうなんでしょうか？後で話してみましよう。それにしてもあの出席簿とても痛そう…私は叩かれないように気をつけなきゃ。あ、どうやら私の番のようですね。

「私の名前はリリウム・シェリーです。趣味は読書で、好きな食

ベ物はスイーツ全般です。日本にはつい最近来たばかりなので色々教えてもらえると嬉しいです。一年間よろしく願います」
そう私が言い終わり次々と進み全員の自己紹介がちょうど終わると教室のドアが開き制服をきた男子が入ってきました。それは約一週間前にテレビに出てきて、そして私の前世の記憶でとても見覚えのある人でした。

s i d e o u t

一組の自己紹介が終わると教室のドアが開く、すると男子生徒が入ってくる。

「遅れてすみません、織斑先生」

「大丈夫だ、事前に連絡はもらってある」

「そうですか。ならよかったです」

「ちょうどいい、お前も自己紹介しろ」

「わかりました。」

そう言う男子生徒はクラス皆の方を向いた

s i d e 零治

俺は織斑一夏がISを使えると発表したのを見てから、約2週間後、3月の初めに政府のほうへISが使えることを報告した。そして俺がレイレナード社の社長へと就任するのと同時に発表して欲しいと頼み約一週間前に発表された。そして入学式当日、俺はIS学園の

理事長室で少し話をしたためにSHRに遅れてしまい、最後のほうに来了。どうやら自己紹介が行われているみたいだな、では入らせてもらおう。

そしてドアを開けたて織斑先生に謝罪などを言うと言いつつ自己紹介をすることになった。なので真ん中のほうに行きクラスメイトを見渡すと、向こうの世界で見覚えがあるのが2人ほどいて驚いた。そして2人のほうを見ると、向こうも驚いていた。どうやら十中八九あたりだろう。そう思うと自己紹介を始める。

「始めまして、多分テレビや新聞をみて知っている人はいるだろう。俺の名は三島零治で本当は今年で高校二年になるんだがあまり気にしないで接してくれると助かる。趣味は特に決まったものは無いが暇なときは読書をしている。もし質問があるなら後で聞いてくれ。一年間よろしく頼む」

そう言い終わると

「キヤー！うちのクラスに男子が三人も、さらにみんなイケメン！」

「そして年上キター！」

「神様ありがとう！」

なぜこんな騒ぐんだ？俺の自己紹介に変なところでもあっただろうか？

まあいいか、とりあえず後で見覚えのあるやつには接触を試みるか

side out

零治は自己紹介が終わり一夏の左隣の席に着くがクラスはずっと騒いでいる。するとチャイムが鳴った。

「SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが基本動作は半月で染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事しろ」

そして一時間目が終わり、休み時間

一夏は近くの男子2人に話しかけていた

「な、なあ」

「「ん?」「」」

「い、いや、男子が俺たちしかいないから仲良くしようぜって思ってる」

「ああ、そういうばそうだったな。改めて自己紹介させてもらうが、三嶋零治だ年上だとか関係なく接してもらえると助かる。呼び方は好きに呼んでくれ」

「あ、俺の名はオルカ・リンクスだ。オルカでもリンクスでも好きなほうでよろしく」

「おう。俺は織斑一夏だ一夏って呼んでくれ。零治、オルカ」

そう話していると

「「「ちよつといいか」

と箒が話しかけてくる

「「「ん?」「」」

「誰かに用か?」

「ああ、ちよつとそこの」

と言いながら一夏の方をみる箒

「一夏、どうやらご指名のようだ」

「おう、悪いちよつといってくる」

そう言つと一夏は箒とともに教室からでていく

(ふむ、では俺も聞いてみるかな)

そう思つと零治はオルカに聞こえる程度に小さく

「首輪付き、リンクス」

そう、ぼそつと呟くとオル力は

「！やつぱり、あんたか」

一瞬驚くと納得したようであった

「久しいな、首輪付き。それにしてもその名は安直すぎやしないか？」

「とつさに思い浮かんだ名前がこれだったから仕方ないだろう。ていうかあんたの名はどうなんだよ」

「俺は苗字は違うが零治というのは本名だぞ。因みにお前はいつごろこつちに来たんだ？」

「一ヶ月ぐらい前かな、あんたは？」

「もう十二年ぐらいかな？」

「12年前！？随分早いな」

「そうでもないさ、で話は変わるがあの後どうなった？」

「成功したよ……」

その言葉を聞くと零治は

「そうか」

と納得したように短く言った。するとチャイムが鳴り一夏達が帰ってくる。

「まあ、つもる話はまた後にしよう」

「ああ、そうするか」

こうして一時間目の休み時間は終わる。

一方リリウムのほうは聞きに行こうかどうかとうしようかと悩んでいた。いつの間にか終わりのチャイムが鳴ってしまっていたのであった。

（うう、次の休み時間は必ず聞いてみせます！）

と心の中でガッツポーズをとるのであった。

そして二時間目の途中

「織斑くん、何かわからないことがありますか？」

と山田先生が訊いてきた

「あ、えっと…」

「わからないところがあつたあら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

と胸を張りそう言うで一夏が元気に

「先生！」

と言い、山田先生も

「はい、織斑くん！」

とやる気に満ちた返事で返す。

「ほとんど全部わかりません」

「え…。ぜ、全部、ですか…？」

「…織斑、入学前の参考書は呼んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

と言うとオルカが

「ハハハッ！古い、古い電話帳と、間違えて」

と一夏のこたえがつぼつたらしく笑う。すると

パアンッ！パアンッ！

と一夏とオルカの頭に出席簿が落ちる。

「リンクス静かにしろ。そして織斑、必読と書いてあつただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちよつと…」

「やれと言っている」

「…はい。やります」

そしてなんとか授業は進み二時間目の休み時間

「ちよつとよろしくて？」

と金髪の女子が偉そうなたいどで話しかけてくるが一夏たちは気に

せず話している

「ちよつと」

そうまた話しかけるが一夏（一夏は本当に気づいていない）達は話している。

とうとう我慢できなくなったのか、金髪は机をたたき

「無視しないでくださります？」

と言ってきたそれに対し

「へ？」と一夏は言い

「はあ…」と零治は溜息をつく。そしてオル力は

「やれやれ、空気にもなれんか」と言う

すると目の前の金髪はわざとらしく声をあげる。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのに、なんなんですよその態度？」

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

（貴族の務めか、レオハルトやジェラルドのほうがましだったな）

「代表候補生ってなに？」

それを聞いて零治が説明する。

「はあ、一夏。読んで字の如く国家代表の候補生だ。まあエリートみたいなものだ」

そう言うときセシリアはずっこけそうになっていた体を持ち直し

「そう！エリートなのですわ！」

びしつと指をさして言い、続けて

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスが同じなだけでも幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「「「そうか。それはラッキーだ」」」

「…あなたたち、馬鹿にしていますの？」

（（お前が幸運だつて言ったんじゃないか））

と見事に三人とも息がぴつたりになった瞬間である。

「まったくあなた達は男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい期待していたのに、まったくもって期待はずれですね」

「俺に期待されても困るんだが」

「確かに一夏に期待するのは間違っているな」

とオルカが言い

「まあ、参考書を古い電話帳と間違えて捨てるぐらいだからな」と零治も言う

「お前ら！そんな馬鹿にしなくてもいいじゃないか！」

そんなコントみたいなことをしているとセシリアが咳払いをし

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたがたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

（こんなやつの優しさを貰うんだつたらバファリンの半分を貰ったほうがずっといいよな）

とオルカはくだらないことを考えている。

「ISのことであれば、まあ…泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくつてよ。何せわたくし、入試では唯一教官を倒したエリートの中のエリートですから」

「入試つて、あれか？ISを動かして戦うやつなら俺も倒したぞ、教官」と一夏

「ああ、あれか！俺も倒したなあ」とオルカ

「残念ながら俺は無かったぞ」と零治

三人がそう言うと、セシリアは驚いている

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子だけではっておちじゃないのか？」

そう言々とセシリアからはピシツと亀裂の入るような音がした

「あなた！あなたがた2人も教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ。たぶん」

「一夏、たぶんって？」

「いや、だから、たぶん倒した」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら！？」

「えーと、落ち着けて。な？」

「これが落ち着いていられ——」

とそこで三時間目のチャイムが鳴る

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

というセシリアの言葉に対して零治たちは

（（これは、面倒なことになった）（）

と思っていた。

一方リリウムは

（うう、今度こそはと思ったのに、セシリア・オルコットって言う人に先を越されて話せなかったです……）

と机の上になだれていたのだった。

第11話（後書き）

やっと本編に入ったんですがたぶんこれからリアルの用事が忙しくなり更新速度が落ちてくるかもしれません。本当に申し訳ないです。

一応、はやめに投稿していくつもりでいるので、どうぞよろしくお願ひします。 m (_ _) ;) m

第12話（前書き）

今回も頑張ったお！

ていうわけでどうぞ

第12話

第12話

三時間目の授業

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

と一、二時間目とは変わり、千冬が教壇で説明しようとしている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

そう、ふと思いついたかのように千冬が言い、さらに

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな」

と簡単な説明を付け加える。すると女子数名が

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

と一夏を推薦する。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

そう千冬が言っていると

「お、俺！？」

一夏がつい立ち上がってしまう。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやらな——」

そう一夏が言いかけるが千冬の

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権など無

い」

という言葉にはつきり切られてしまう。すると一夏は苦し紛れに

「じゃあ、オルカを推薦します！」

と言った。それを聞きオルカは

「まで、一夏。おれを巻き込むな！俺はやらんぞ！」

思わず立ち上がりそう言うが

「リンクス。邪魔だ、席に着け。それと拒否権は無いと言ったはずだ」

と一蹴されてしまう。するとオルカは零治のほうを見るとニヤリと笑い

「じゃあ、零治を推薦します！」

そう発言するのであったが零治は依然として涼しい顔をしている。

「他にはいないか？いないならこの三人の中から選ぶぞ」

千冬がそう言う。セシリアが机をバンツと机をたたき立ち上がる

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？実力からいけばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

というのを聞いて

（ほう、よくまあ、あの歳であんだけ長いセリフを咬まずに喋れるな）

と内容のほうは興味無しの戯言と思い別のところを感心する零治。

「一夏。お前、猿だつてよ」

「いやいや、オルカのことだろ？」

とオルカと一夏はヒソヒソ話す。

そしてセシリアはさらに言葉を続けて

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそ

れはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で―」
そこでカチンというような音がすると

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

と一夏が頭にきて思わず反論してしまう。

「なっ……!？」

と、セシリアは顔を真っ赤にして怒っている。

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの!？」
そう言うセシリアにたいして零治は軽く溜め息をつき

「はあ、先に日本は文化として後進的などと言って侮辱してきたのはそちらのほうではないか？それなのに自分だけが被害者面とは、まったくもって情けないな。代表候補生の名がきいてあきれる」
そう言い肩をすくめる。するとセシリアはわなわなと肩を震わせ

「決闘ですわ!」

と言い机をパンツと叩くセシリア。

（言い返せなくなったからってそれは無いんじゃない?）と思う
オルカ。

（やれやれ、上手くいかなくなると暴力で解決しようなどとは情けない。まあ、力づくでやるならこちらと同じやり方でやらせてもらうだけだか）と思う零治。

「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」と意気込む一夏。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

そう言い敵意をむけた目で睨むセシリアを見て一夏は

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」と言う

「そう？何にせよちょうどいいですね。イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですね！」と威張るセシリア。

「ハンデはどのぐらいつける？」

一夏は男が本気で女子と力比べしたらまずいだろうと思いつくそう聞くが

「あら、早速お願いかしら？」

とセシリアは嘲笑うかのように言った。

「いや、俺がどのぐらいハンデをつけたらいいのかなーと」

そう言うところからドツと爆笑が巻き起こった。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんたちは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言いすぎよ」

「しかも、もし男女間で戦争が起きたら男性陣は三日と持たないと言われているんだよ」

と、みんな本気で笑っている。すると零治が口をゆっくり開く

「やれやれ、女性もISが使えて強から偉いとは、くだらんな。

男女間で戦争をしたら確実に負ける？確かに、戦力だけでみれば負けるだろう。まあ、第一に貴様らは戦争と言うもの勘違いしてると思うな。戦争と言うのは、ただ正面からどうとぶつかり合うような、おままことではない。その君」

と言い、適当な女子を指差し

「君に守りたい家族や友人、親しいものはいるか？」
そう問うと

「は、はい。います」

「では、君が国家代表やトップレベルの实力をもつ専用気持ちのIS操縦者でしょう。だが、もしも君の守りたい人が男性陣に人質としてとられ、助けるには女性陣と敵対して殺さなきゃいけないと

言われたら君は女性陣の勝利のために人質を見捨てるかな？」

「そ、それは…」

と零治の問いに答えることができない女子に構わず喋りだす

「そして戦争というのは、人質をとったり暗殺など当たり前だ、とくに死に物狂いでもがくやつらは、どんなことをするかすらわからない。そして君たちは誰一人として死なずに戦争が終わるとでも思ってるのか？」

そう言う別的女子が

「でも、ISの力をもつてすればできるんじゃない
と言ってくる。しかし零治はさらに問いかける

「いや無理だな、それはほぼ絶対といっていいほどありえない。
戦争は始まったら死人がでる。たとえ戦地にいなくてもな。そして
君たちは最前線にたったとき目の前の相手を殺せるか？」
それを聞くと皆黙ってしまう。

「人類は古来から今日まで多くの戦争があつた。そしてその戦場に立つものは相手を殺し、殺した者の家族や親しい者から死ぬまで恨まれ続ける。たとえ自分は直接手を掛けてなくてもそんな言い訳は通用しない。殺された側の人間は殺した側全員を同じように恨むだろう。そして君たちは殺した側にたったとき、それを背負えるのか？戦争と言うのはそういうものだ」

そう言うクラスの皆は少し想像したのだろうか、さっきまでの笑っていた雰囲気が消えていて、零治の話に集中している。

「そして現在の女尊男卑は今まで男尊女卑の時代を続けた愚か者のしつぺ返しだろう、だが女尊男卑を男尊女卑の時のようにくだらない理由でこのまま続ければ、やがて人類は壊死するだろうな…
つとすまない。話が随分と脱線してしまったな。まあ、今までの頭の片隅にでも置いてくればいい。だが、君たちが使うISと言うのは条約で禁止されているが、普通に人を殺してしまう“兵

器”だ。たとえ物を切るためのカッターだって使うやつが使えば、人殺しの道具になる。つまりISはそういうことなんだ。君たちには、それだけは覚えておいて欲しい。長々すまなかつたな」

そう言うとしばしの沈黙が流れる。そしてその沈黙の中、千冬がきりだす。

「三嶋の言うとおり、ISはあくまでも“兵器”だそのことはしつかり覚えて置け。さて話がうやむやになりそうだったから戻すが、クラス代表の件は織斑、リンクス、三嶋、オルコットの四人で一週間後の月曜。放課後第三アリーナで行う。四人はそれぞれ準備して置くように。それでは授業を始める」

ぱんと手を打って千冬が説明を始めていき三時間目の授業が終わり。休み時間は先ほど一夏たちを馬鹿にしていた女子達が馬鹿にしてすまないなどと。謝罪をしてきたりしていたが一夏やオルカは「別に気にしてないから大丈夫」などと言い零治も「さっきのことを少しでも理解してくれば構わない」などと言っていた。

そして四時間目の授業も無事に終わり。昼休みの時間

「零治、オルカ、飯を食べに行こうぜ」
と誘ってくる一夏。

「そうするか」
とオルカが言っていると、リリウムが近づいてきて零治に話しかける。

「あの、三嶋零治さん。ちょっと話をしたいんですがいいですか？」

それを聞くと零治は承諾し、一夏達には

「悪いな、一夏。先に行って食べてくれ」

と言って、リリウムについて行く。そして零治は屋上に来た。そし

て零治が喋りだそうとするトリリウムが

「いきなりすみません。あの、トリリウム・ウォルコットと言う人は知っていますか？」

とおそろおそろ訊いてくる。

「ああ、知っているよ。俺が昔に買い物の途中に転んでチンピラに絡まれたところを助けて百合の花の髪飾りをあげた子の名前だったな、そのとき俺はレイジ・クゼという名前だったかな」

と零治が言つとトリリウムは少し涙目になり訊いてくる

「やっぱり、あのレイジさんなんですよね？」

「そうだ、久しぶりだな。トリリウム」

と答えるとトリリウムは零治の胸に飛び込み涙を流す。

「また、会えてよかったです。あのとき、あなたが死んで、とても辛かったです！」

そう言いながら零治の制服をぎゅっと掴み喋る

「本当に、本当に辛かったです」

「悪いな」

と静かに言いながら軽く頭を撫でる零治。そして少ししてトリリウムは落ち着くと顔を上げると

グウと空腹の音がした。するとトリリウムが顔を真っ赤にしてあたふたし始める。

「い、いえ、こ、これはその、あれでして」

身振り手振りして何か言おうとしてるのを見て

「飯を食べにいくか」

そう微笑みながら言つと

「ううー、はい…」

と顔を真っ赤にしたままで軽く俯き答える

「じゃあ、一夏達の所へいくか」

零治がそう言つと

「えっ？2人でじゃないんですか!？」

と驚くトリリウム

「ん？ご飯は皆で食べたほうが美味しいぞ？」

そうさも当たり前のように零治は言うのにたいしてリリウムは零治の脛をゴツツ！と蹴る

「っ！ど、どうして蹴るんだ？」

とあまりの痛さに脛を押さえるしかしリリウムがなぜ怒っているかわからない零治

「さあ、知りません」

そう言いそっぽ向いてしまいうりりウム。

（まさか、まさかここまで鈍感だったとは…）

と怒る反面シヨックをうけるリリウムであった。

そしてこのあと零治は何とかリリウムを説得し、一夏たちとともに昼食をとったのであった。

「ぐぬぬ…」

放課後、そう言いながら机の上にぐったりとうなだれる一夏。となりをチラッとみると余裕の表情のオルカ

「ほら、どうした」

と片手に参考書を持ちながら喋る零治。

「い、意味がわからん…」

そう一夏が頭を抱えていると

「ああ、織斑くんたち、まだ教室にいたんですね。よかったです」

「…はい？」

三人とも呼ばれて声がしたほうへ顔を向けると山田先生がいた

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って三人に番号が書いてある紙とキーを渡す。

「えつと、俺の部屋は決まっていなかったんですか？前の話だと一週間は自宅通学してもらおうと言う話でしたけど」

と一夏が言うと、零治が

「一夏、そんなことしてたら誘拐されるぞ
肩を軽くすくめそう言う」と

「あゝなるほど」

と納得する一夏。すると山田先生が説明しだす。

「えっと、まあ、そういうことなので政府特命もあつて寮に入れるのを優先したみたいです。一ヶ月もすれば三人とも個室の方が用意できますので、それまでは相部屋で我慢してください」

「あの、部屋はわかったんですけど、荷物のほうは一回家に帰らないと準備できな——」

「荷物のことなら、私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」

と、一夏の言葉をさえぎり千冬が言った。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。因みに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑くんたちは今のところ使えません」

そう山田先生が説明すると

「え、なんでですか？」

一夏がそう聞き、不思議そうにしているとオルカが

「一夏、年代の女子と混浴したい気持ちはわかるが、我慢しろ」と一夏の肩をポンポンと叩きながら言うてくる

「お、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だ、駄目ですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

山田先生の質問に慌てて答える一夏

「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それは問題のような…」

そして山田先生がそう言うと、廊下で女子達が

「織斑くん男にしか興味ないのかしら…？」

「それはそれで…いいわね」

「まさか、オルカくんか三嶋くん…！？」

「オル×織、いや三×織、逆もありかも！」

「三嶋くん、オルカくん、織斑くんの三角関係」

「それだ！」

「中学時代の交友関係を洗って！　すぐに！　明後日までには裏づけとって！」

などと騒いでいる。そしてオルカと三嶋は

「ま、まさか伝説のゲイヴンがここにいるとは…」

そう言い一夏の肩に乗せてた手をすぐさま放して距離をとり尻を押さえるオルカ

「人の恋愛の価値観は自由だからいいんじゃないか？」

と先ほどの位置よりも２メートルほど離れたところで言う零治

「ち、違っって俺はノーマルだ！」

そんなやり取りをみて山田先生は

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで失礼しますね。織斑くんたち、道草をせずにちゃんと寮に帰るんですよ」

そう言々と千冬と共に教室を出て行くのを見ると零治たちも部屋へ向うことにした。

「えーと、1025か。オルカと零治の部屋は何号室だ？」

「1026で一夏の隣だな」と言う零治

「あつ、俺も1026だぞ」と続けるオルカ

「いいな、俺も一緒の部屋になりたかったな」

一夏がそう言うと

「俺の尻が危なくなるからやだな」

とオルカと零治が同時に言う

「だから違うつて！そういう意味じゃねえよ！」

三人はそんなやり取りをしているといつの間にか部屋の前に来ていた。

「おつ、1025はここか。じゃあ俺はここだから、また後でな。夕飯のときに誘いに行くよ」

「ああ、わかった待っている」

零治はそう言いオルカと共に自分の部屋へ入っていきしばらくすると隣でもものすごい音がする。そして零治たちのところに夕飯を誘いに一夏が来てドアを開けるとボロボロの姿の一夏がいた。そして夕飯はリリウムも呼び零治、オルカ、リリウム、一夏、箒の5人であり、こうして一日が終わる。

そして翌日の放課後

「頼む、零治、オルカ。俺にISの使い方を教えてくれ！」

と一夏が零治、オルカ、リリウムの三人で話をしているところに助けを求めるように言ってくる。

どうやら凶暴な幼馴染と剣道をやって腕が落ちているから鍛えなおすと言われ命の危険を感じ取り零治たちのところに逃げ込んできたのである。零治は若干同情するが

「悪いな、教えてもいいんだが、クラス代表戦の後じゃなきゃ手の内を明かすことになってしまっからな」と丁重に断る零治

「そ、そんなあ……」

ガクツとうなだれる一夏。すると後ろから

「一夏、情けないぞ」

と言いながら追いかけてきた箒。

「一夏さん、いきなりISの操縦をするのも大切ですが、生身で鍛えておくのも大切なことですよ」

とリリウムが一夏を説得する。

「まあ、確かにいきなり専門外のことを付け焼刃でやるよりも、そっちのほうがいいかもしれないぞ？」

と付け加えるオルカ

「だから、せっかく幼馴染の箒さんが手伝ってくれるなら力を借りるべきです」

そうリリウムが言うと

「そうだな。みんなが、そういうなら頑張ってみるよ」

とやる気になった一夏。それをみてリリウムは箒に目で軽く合図を送ると箒はコクツと頷き一夏と剣道場に戻っていった。

そして零治はリリウムに少し手伝ってもらい、オルカは個人で訓練していった。

翌週の月曜。クラス代表決定戦

「——なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

「……………」

「目をそらすな」

一夏は箒と特訓していたがISのことを教えるのをすっかり忘れてしまっていた。それについていろいろと2人で話していると一夏

のISが届く。そしてさっそく装着しピットゲートに進む。

「行ってくる」

そう一夏が、箒、零治、オルカ、リリウムの方に向けて言うと

「あゝああ。勝ってこい」

「一夏、お前の可能性をみせてみる」

「ま、気張れよ」

「頑張ってください」

と上から順に箒、零治、オルカ、リリウムの順に言うと、一夏はセシリアの方へ向かっていった。すると零治とオルカは第三アリーナのAピットから出て行こうとする。

「零治さん、オルカさん。どこに行くんですか？」

とリリウムが聞いてくる。

「いや、相手の手の内がわからないほうが楽しいかと思ってな」

と零治

「俺も同じ理由だ」とオルカ

2人はそう言うとAピットから出て行った。

30分ちよつと時間がたち。一夏対セシリアの戦いが終わった。結果は一夏がギリギリのところで負けである。

そして15分後に零治対セシリアの試合が行われることになっているので零治は再びAピットに来た。

「一夏、お疲れ。次は俺だな」

「ああ、零治も頑張れよ」

そして開始5分前

「では装着するか」

零治は自身のISを呼ぶ。

「来い、フアントズマ」

すると零治を一瞬光が包むとその姿を現した

「す、すげえ」

一夏が驚いて言うと

「ああ、まるで天使みたいだな」

そう箒がかえす。

「では、いつてくるか」

零治はそう言うとピットゲートを出て行った。

第12話（後書き）

ISのラウラがVTシステムで暴走するときに

「力が欲しいか」ていう台詞が

プロジェクトアームズのジャバウォックの

「力が欲しいか」という台詞とかぶるの自分だけだろうかと思うところ

そして次はとうとう戦闘シーンだ！

なので頑張ります。

よろしくお願いします。

第13話（前書き）

今回は短いです

第13話

第13話

零治がピットゲートをでていくと同時に反対側からセシリアがでてきた。

「あら、あなたも逃げずに来ましたのね」

と腕を組みながら喋るセシリア。

「まあな。それより連戦でいいのか？負けたときに続けて戦ったからと言いつかれては困るからな」

そうセシリアを軽く挑発する。

「お気遣いはいりませんわ。代表候補生である、わたくしはあなたたちのような、男性が二人、三人とかかってきたところでわたくしは負けませんので」

「そうか」

零治は短く答えると試合開始のブザーがなる。すると真っ先にセシリアがスターライトmk?を零治に撃ったが零治はそれを難なく回避する。そしてセシリアもまた狙いを定めて何度も撃ってくるが零治には掠りもせずにいる。

「どうした、代表候補生とはそんなものか？」

と余裕の表情で回避しながら言う。

「あら、あなたはさっきから避けてばかりですけど反撃はされないのかしら。それとも避けるのが大変で反撃できないのかしら」
そう挑発をして返すが、セシリアは相手がいくら回避に専念しているとはいえ自身の射撃が一度も当たらないのには少しイライラしていた。すると零治はやっと反撃にでた。

まずは左手に アサルトライフル、04-MARVEをだしセシリアに対して撃つ。しかしセシリアも伊達に代表候補を名乗っているわけではなく、零治の射撃を回避していく。だが得意げに回避すると突如弾丸が直撃し、ひるむ。セシリアは零治の方をみると零治の右手にはレールガンRG01-PITIONEが握られておりセシリアが体制を立て直そうとしている間にも零治の射撃は襲ってきてシールドエネルギーが削られていく。

「どうした、いい的だぞ。お前」

「くっ！」

セシリアが苦い表情をする。だがセシリアもただ撃たれるだけではなくなんとか体制を持ち直すと

「あなたのことを少し侮っていましたわ。ここから本気でいかせてもらいますわ！」

そう言うときセシリアはブルー・ティアーズのビット兵器を四つ出すと、それが零治にむけて攻撃してくる。

「さあ、わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲で踊りなさい！」

しかし零治は先ほどと変わらず余裕の表情で避けていく。そして何回か避けていくと

（…やはりな）

と何かに気づいた様子である。

「あら、また避けてばかりですか。さっきのように攻撃はしてきませんか？ さあ、あなたにはこのブルー・ティアーズを攻略することができまして？」

そうセシリアが言うと

「バカバカしい」

と呆れる零治

「なんですって？」

「貴様の弱点はズいふんとわかりやすい。故に俺から見たら貴様は只の的だ。まと相手に攻略も何も無いだろう」

そう言い嘲笑う。

「なら、わたくしに勝ってみせまして！」

そう言い再びブルー・ティアーズを差し向けるセシリア。すると左手の武器をレーザーライフルER-0705に変えてビット兵器を撃ち落し右手のRG01-PITONEでセシリアに当てていく零治

「貴様はビット兵器を使うとき制御に意識を集中していてそれ以外の攻撃が出来ない。しかもさっきより動きが鈍っているぞ」

「…！」

セシリアは自身の弱点を的確に指摘され少し苦い顔をする。そしてさらにビットを撃ち落していく零治。ビットを全部破壊してセシリアに突っ込む。するとセシリアがニヤリと笑う。

「——かかりましたわ」

そう言うときスカート状のアーマーの突起が外れて動く。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

するとミサイルが発射され零治に襲い掛かり爆発する。

「どうです？あなたが的だと言って侮った結果でしてよ」

そう勝ち誇ったように言うセシリア。

「いや、やはり只の的だ」

と煙の中から声がし、そして煙が晴れると、そこには…ほぼ無傷の零治がいた。周りには薄っすらと緑色の膜が一瞬見えて、消えた。

「終わりだ」

そう言うとき零治は両手のER-0705とRG01-PITONEをしまい、イグニッション・ブースト瞬時加速を使い両手のレーザーブレード07-MOONLIGHTで切り裂いた。するとセシリアのブルー・ティアーズのシールドエネルギーが0になり試合が終了した。

「お前は何のために戦う？お前の果たすべき貴族の務めとやらはなんだ、男を見下すことなのか？自分が果たすべき務めをもう一度見直し答えを見つけるべきだ。少なくとも俺はそう思う」

零治はそう言うときビットゲートにいったん戻り次のオルカとの戦い

に備える。

そして十五分後。

零治とオルカがアリーナの中央で向かいあっている

「お前と戦うのはラインアーク以来か」

そう懐かしそうにいう零治

「そうだな、あのときはあんたらの茶番につき合わされたただけだな」

と皮肉に返すオルカ

「じゃあ、今度は本気で戦うか」

そう言つて下に降りる。オルカもその意図を理解したらしく下に降りる。

「PICなどはいじつておけQBを使ったら一瞬で壁に激突するぞ」

「わかつてる」

と注意する零治に答えるオルカ。二人は自身のISの設定を少々いじっている。

「終わったか？」

「ああ、終わったよ」

オルカがそう言うところちょうどよく試合開始の合図が鳴る。

すると最初に仕掛けたのはオルカである。

オルカのISストレイドが右手のアサルトライフルMR-R102と左手のマシガンXMG-A030で撃ってくる。零治はそれをQBを使い避けライフル051ANNRとアサルトライフル063ANNARで応戦する。オルカもQBを使いながら零治に再び攻撃し

ていく。

そして次第に二人の攻防は激しさを増し観客達の目を釘付けにする。

「す、すげえ…」

と大きく口をあけて驚いている一夏。

「ああ、どうやらオルコットのときは本気じゃなかったらしいな」と箒も隣で見ていると驚いている。

「やはりオルカさんも強いですね」

と、平然と言うリリウム

「はああ…すごいですね。三島さんとリンクスくんは」

山田先生もあの二人の動きにはとても驚いているようだった

「ああ、そうだな。この学園でトップレベルだろう」

（二人のあの動きはなんなんだ！？どちらも尋常じゃない）

と表面上は冷静に見せても内心ではかなり驚いている。

そしてそんなやり取りをしていると戦局が大きく動いた。今まで二人とも手で持っている武器で削りあっていたが、オルカが右背のグレネードGOTOを零治の一瞬をつき撃つ。すると零治は、直撃はしなかったもののダメージ大きく受けよろめいた。そこにオルカは零治に対して追撃をしに突っ込んでくる。零治はそれを好奇にして両背のレーザーのEC-0307ABを撃つ。するとオルカはとつさにQBで避けるが半分ほど当たってしまった。オルカはすぐさま体制を立て直し零治を見ると両手の武器で再び攻撃を再開する。そして零治も同じように両手の武器で攻撃を再開した。

「ふむ、今のでしとめる事ができたと思っただがな」

涼しい表情で言う零治

「誰がそう簡単にやられるか」

そして再び撃ち合ってから少しするとオルカのシールドエネルギーは0になり零治も残り二桁ギリギリのところまで削り勝ったのだ。

「やっぱり、あんたは強いな」

「お前もな、そっちの弾丸があと一発でも貰ってたら負けてたのはこちらだ」

そっ言い合うと二人ともピットへ帰還した。

（俺、あの2人と戦うんだよな。勝てるかな）
一夏は2人の戦いが終わるとそう思っていた。

そしてその後はオルカ対セシリアであり。勝敗はオルカの勝ちであり、勝負の途中オルカも零治と似たようなことをセシリアに言っていた。その後の一夏対オルカ、零治対一夏は両方とも一夏の負けでクラス代表決定戦が終わった。

セシリア side

セシリアはシャワーを浴びながら今日のことを思い返していた。

織斑一夏、セシリアは自身が勝ったのに腑に落ちないでいた。セシリアは思う。その原因はきっと彼の目だろうと、他のものに媚びない目であった。

（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった…）
セシリアの記憶には自身の父親が弱々しい態度でいたことを思い出す。そしてISが発表されてからはそれが更に著しくなったセシリアの父親。それとはまったく逆の目をしていた一夏。いや、一夏だけではなくほかの二人もそうだったと思うセシリア。

そして他の二人を思い出すと「何のために戦う？自身が果たさなければいけない貴族の務めは何か？」その問いかけが蘇ってくるセシリア。

（自身が果たすべき貴族の務め…）

そう思うとセシリアは母親を思い出す。セシリアの母親は女尊男卑の前からいくつもの会社を経営し、成功を収めていった人だった。厳しかったが、憧れの人だった。だがもういない。三年前の大規模な事故で両親が二人とも他界してしまう。そして残されたのは莫大な遺産。それを金の亡者から守るために必死に努力をした。そしてやっとの思いで国家代表候補生に選ばれ両親の遺産を守ることができた。だがいつからだろうか、自身は相手のことをよく知らずに自分の勝手な思い込みによって格下だと決めつけていくようになったのは。セシリアはもう一度、自分の憧れていた母親を思い出す。すると自身の母親は相手を一方的に見下してなどいなかったことを思い出す。

（母は、相手の評価できるところはちゃんとして認めていました。なのに、今のわたくしは…）

そう思うとセシリアは、今まで自身がしてきたことは自身が憧れていた母の背中とは全く違うことに気づく。

（今までのわたくしは空っぽのままでしたのね）

そうセシリアはわかると

（きつと今からでも遅くはないはずですわ。見付けてみせます。わたくしの答えを）

そう決意するのであった。

翌日、朝のSHR

「では、一年一組の代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」

と嬉しそうに喋る山田先生

「先生、質問です」と一夏が聞く

「はい、織斑くん」

「俺は昨日全敗したのですが、なんでクラス代表に？全勝した零治がなるんじゃないんですか？」

「それは――」

と山田先生が説明しようとする

「それは、俺が辞退したからだ」

そう言う零治

「俺は、一応あくまでも社長というものになっていて、いつ緊急の呼び出しが来るかわからんからな」と、続けていった。

「因みに、俺はISの男性操縦者というのが発覚したのが遅かったためにIS学園に入れることを優先して企業からちゃんとしたバックアップをうけてないからな、それにくらべ一夏は倉持研究所からうけているから一番データを取りやすくなっているだろ、だからだ」そう言うオルカ

「じゃあオルコットさんじゃ駄目なのか？」

と聞く一夏

「いえ、わたくしも辞退させていただきましたわ。理由は実力が全てなどと安直すぎる考えではいけないと思ひまして辞退させていただきましたわ。なので一夏さんよろしくお願いしますわ」そう言う

「では、クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

千冬がそう言い、織斑一夏がクラス代表に決定された。

第13話（後書き）

相変わらず戦闘描写が下手くそですいません（汗
本当に難しいなあ…

そういやA C f aでアルテリアカーパス襲撃のブリーフィングで
てくるノブリスってレオハルトの時のアセンというのを今更気づい
た自分

第14話（前書き）

とりあえず次回はきつとみんな大好き酢豚ちゃんが登場します。

そして今回も駄文で申し訳ないです。

第14話

第14話

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、三嶋、リンクス、オルコット。試しに飛んでみせろ」
千冬がそう言うで一夏以外の三人はすぐに展開するが一夏は展開ができずにいた。

「早くしろ。他の三人は展開し終わってるぞ。熟練した操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

一夏はそう千冬にせかされると右腕を突き出し集中して心の中で

（来い、白式）

と呟くと展開に成功した。すると千冬から飛べと指示が出る。四人はそれを聞くと急上昇するが一夏だけはまだ慣れて無い様で上昇速度は三人よりも遅かった。すると千冬から

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

とお叱りの言葉をつける一夏。するとオルカが

「一夏、イメージは所詮イメージだ。やりやすいようにやればいい」

そうアドバイスをする。

「そう言われても、大体空を飛ぶ感覚が上手くつかめないんだよ。だいたいなんで浮いてるんだこれ？」

一夏のその言葉に対して零治が

「半重力力翼と流動波干涉の話になるがそれでもいいなら説明してやるぞ」

ニヤリと笑いそう言うのに対して一夏はすぐさま「いやいい、俺の頭ではは理解できない」そう断る。

そのやり取りをみてセシリアは微笑むと一夏は

「どうした、なんか楽しいことでもあったのか？」
とセシリアに尋ねた。

「いえ、とても仲がいいのですねと思ひまして」

「そうか？ 今のはなんか遊ばれてた気がするけど」

そう答えてガクツと肩を落とす一夏。

「そういえば一夏さんは零治さんやオルカさんと放課後訓練していらつしやるのですよね？」

とふいにセシリアが聞いてくる。

「ああ、そうだけど。どうしてだ？」

「もしよければ、わたくしも御一緒にしたいと思います」

「いや俺も零治達も大丈夫だろうけどいいのか、そっちの練習のを遅らせたりしないか？」

「いえ、それは大丈夫ですわ。あの戦いの後、代表候補と驕つていた自分が馬鹿らしく思ひまして、一から改めることにしましたの。ですのももしよければと思ひまして」

そう言うとその会話を聞いていた零治とオルカが「いいんじゃないか」とすぐに言つてきた。

そしてそんなやりとりをしてるといきなり

「一夏！ いつまでそんなところにいる！ 早く降りてこい！」

と篤が山田先生からインカムを奪ひ怒鳴つてゐる。そして千冬が指示を出す。

「四人とも地表から十センチのところに急降下と完全停止をやつてみる」

それを聞く四人。

「では、零治さん、オルカさん、一夏さん。お先に」

そう言いセシリアは地上に向かう。それを見て零治も

「では、俺も先に行かせてもらおう」

と言い指示を完璧にこなす。その2人を見て一夏は

「二人ともすごいな」

と感心している。そしてオルカも

「じゃあ次、俺行くわ。一夏、地面に激突するなよ」

そう言い残しオルカも指示通りに十センチのところに止まる。

そして一夏も同じようにやろうとする。するとものすごい衝撃音と共に地面に突っ込んでいた。

「馬鹿者。地面に激突しろとは誰も言っていないぞ。しかもグラウンドに穴を開けてどうする」

千冬が呆れたように言う。すると箒が

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えただろう。大体だな一夏、お前と言うやつは昔から」

そう腕を組みながら言っている

「やっぱり激突しやがったな。で、大丈夫か？頭とかに怪我は…ああ、頭は手遅れだったな」

オルカがやれやれといった感じでそう言う「手遅れじゃねえよ！」と返している一夏。

「…ISを装備していて怪我をするはずないだろう…」

と自分が一夏に話しかけているのをさえぎられて機嫌がよくないのか少しとげとげしく言う。

「篠ノ之さん、例え怪我をしなくても衝撃を完璧には消せませんのよ」

箒の発言に対してそう言うセシリア。すると箒は黙ってしまう。

そして一夏が立ち直ると千冬が

「四人とも武装を展開しろ」

そう言うつまり一夏が展開する。

「遅い、0.5秒で出せるようにしろ」

と厳しいことを言われ次にセシリア

「さすが代表候補生。だがそのポーズは横に向かって撃つ気か？正面に展開できるようにしろ」

これもまた厳しい評価をだされ、セシリアは返事をする。そして零治とオルカはほぼ同時に出す。

「ふむ、特に言うことはない」
と及第点を貰う。

「三嶋、リンクス、オルコット。近接用装備を展開しろ」
そう言われると零治とオルカは両腕についているレーザーブレード
をしまい零治は射突ブレードもといとつきのKIKUを装備し、
オルカもとつきのMUDANを装備する。だがセシリアだけはな
かなか出せずにいる

「まだか？」と千冬にせかされる。するとセシリアは
「インターセプター！」

とほぼヤケクソ気味に叫び武器を呼び出す。

「…何秒かかっている。だから三嶋やリンクスに近接武器でやら
れるんだ」

と注意されガクツと肩を落とし落ち込んでいるセシリアであった。
すると授業終了のチャイムが鳴る

「今日の授業はここまでだ。織斑ブランドを片付けておけよ」
と言うと授業が終わる。すると一夏が零治とオルカのほうを捨てら
れた子犬のような目で助けを求めてくる。すると零治とオルカは一
夏のほうを向き親指をグツと立てると更衣室の方にむかって歩き出
していった。

そして夕食後の自由時間

「織斑くんクラス代表決定おめでとう！」
「「「「おめでとう」！」「「「「

クラッカーが鳴りクラスメイトたちが盛り上がっている。

そんななか零治やオルカ、リリウムの三人は騒ぎの中心ではないところで飲み物を口にして喋っている。するとセシリアが近づいてくる。

「あら、シエリーさんたちはあの中に入られないのですか？」

と聞いてくるセシリア

「私は賑やかなのは好きですが、あれはなんと言うかちょっと」

そう言い、零治も

「いや、騒がしいのは嫌いじゃないが流石にあれほどになるとちよつとな」

と苦笑いしながら返しオルカも

「右に同じ」

と返すのであった。

「それはさておきまして、前のクラス代表戦のときに言われたことなんですが、まだ自分がどのようにすべきかなどと決められてまさんの」

そう言い話をきりだすセシリア。

「いいんじゃないかそんなに急がなくても、まだ若いんだ時間はある」

と零治は言った。

「ふふ、そのように言ってくれると思っていましたわ。ですのでわたくしは自信をもって言える答えをきつと見つけてみせますわ」セシリアは自信満々にそう宣言する。

「そうか、せいぜい頑張れ」

とオルカは短く返すがどこか期待しているような感じに言う

「では、いつか聞かせてもらえる日まで楽しみに待たしてもらおう」

そう零治は微笑みながら言う。そんなやりとりをしていると

「はいはい、新聞部二年の黛薫子です。話題の男子三名に特

別インタビューをしに来ました〜！」

と女子がやってきてまず一夏にインタビューする。

「クラス代表になった感想を、どうぞ！」

そう言いながらボイスレコーダーを一夏に向ける黛薫子。

「えーと…まあ、なんというか、頑張ります」

「えー。もつといいコメントを言つてよ」

「自分不器用ですから」

「うわ、前時代的！まあ適当に捏造させてもらつよ」

と堂々と捏造発言をして次にオルカに対してコメントを貰いに行つた。

「はい、男子二人目リンクスくん！いろいろ謎に包まれていて知りたいけど、今はなんでもいいんで是非一言コメントを！」

「じゃあ、俺に挑むやつはマツハで蜂の巣にしてやんよ」

「いい！そういうの待つてたんだよ！」

と言いはしやぎながらメモしていく黛薫子。そして次に零治に対してボイスレコーダーを向ける

「男子三人目の三嶋くん！レイレナード社の社長でもあり男性操縦者！社長としてのコメントを貰いたいけどそれはまた今度にさせてもらつよ。今は学園の生徒、一個人としてのコメントをちょうだい！」

「ふむ…では、誰であろうと、俺を越えることなど不可能だ。はどうだろうか」

「いいね！そういうのしびれる！じゃあ最後にセシリアちゃんも」

「そうですね、わたくしの名にかけまして頑張らせていただきますわ」

「うーん、かっこいいんだけどパンチが効いてないというか…そうだ！織斑くんに惚れたからでいいよね」

「なっ、違います一夏さんには惚れてませんわ！」

「そつか、一夏くんには惚れてないんだ」

と意味ありげに言う黛薫子。

「じゃあ、とりあえず四人とも並んでね。写真撮るから」

そう言い一夏、零治、セシリア、オルカの順に並ぶ

「あ、あの撮った写真はいただけますよね？」

と聞くセシリア

「そりゃもちろん四人ともあげるから心配しないでね。それじゃあ撮るよー。 $35 \times 51 \div 24$ は？」

「え？えつと…」

一夏が困惑していると零治とオルカが

「 74.375 」

そう答えると「せいかい」と返ってきてデジカメのシャッターが切られる。しかし写真にはいつの間にか他の生徒が大量に入り込んでいた。そしてリリウムはちゃっかり一夏と零治の間に入り零治の腕を掴み勝ち誇ったような顔をしている。

「いつのまにはいったんだリリウム？」

零治はあの一瞬でよくはいれたなと感心している

「さあ、いつでしょう？」

と微笑みながら言うリリウム

そして周りは男子の中に一人だけ写るセシリアに

「抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

などと女子がキャッキャッ騒いでいる。

そしてこの騒ぎは夜の十時過ぎまで続き幕を閉じた。

第14話（後書き）

最近、A C f aでアステリズムを使ってみたがジュリアスはよくあんなに上手く動けるよなと関心します。

第15話（前書き）

最近、気温の変化が激しいけど殆ど室内にいる作者は大丈夫！って
自慢できないことなんですけどね…orz

今回はみんなのアイドル酢豚ちゃん登場！
因みに作者は酢豚ちゃんは結構好きです

第15話

第15話

一夏のクラス代表就任パーティーの翌日の朝

「織斑くんたちおはよー。転校生の噂、聞いた？」

零治たちが席に着くとクラスメイトに話しかけられる。

「転校生？この時期に？」

（あれか、男性操縦者に接触するためにきたのか）

零治は一夏がクラスメイトに答えてるときにそう考えていた。

「なんか中国の代表候補生らしいよ」

「へー、どんなやつだろうな」

一夏は中国というのに何か関心があるのか少なくとも興味がわいていた。

「さあな、まあ少しは気をつけることだな」

と零治が少し警戒するように促す。

「えっ？なんでだ？」

そう一夏がぼかんとして聞いてくる。

「お前は、自分の立場がわかってないのか…」

少し呆れたように言う零治。

「要するに男性操縦者である一夏さんたちになんらかの接触をするために来たかもしれないというわけです」

リリウムが零治のかわりに説明すると一夏は納得した。

「まあそういうことだ。とりあえずは来月のクラス対抗戦のことを考えておけ」

零治がそう言った。

「そうだな、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困るぞ一夏。男たるものそのような弱気でどう

する」

一夏の発言に対していつの間にか幕がずいっと割って入ってくるとクラスメイトが次々に

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

「織斑くんフリーパスのためにも頑張ってね！」

「代表が専用機持ちはいまのところうちのクラスと四組だけだから余裕だよ」

などと言ってくるのにたいして一夏は適当に「おう」と相槌をうつていると

「ーその情報、古いよ」

教室の入口のほうから突然声がする。

「二組のクラス代表も専用気持ちになったからそう簡単には勝たせないよ」

腕を組みながらそう言う女子。するとその女子をみて一夏が言った。

「もしかしてお前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告にきたってわけ」

不適に笑いながら言うが

「何格好付けてるんだ？ すごい似合わないぞ」

とせつかくの登場を一夏に台無しにされてしまう。

「んなっ…！？ なんてこと言うのよあんたは！」

さつきとは口調が変わる鈴。すると後ろから声がかかる。

「おい」

「なによ！？」

鈴は呼ばれた相手にとっさに強く返事をしてしまうとバシッ！と爽快な音が鈴の頭に落ちる。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん…」

鈴はまるで熊でも見たかのようにしている。

「織斑先生と呼べ。そして入口を塞ぐな」

「す、すみません…」

さっきまでの威勢は嘘のように静かになっている鈴。

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」

そう少し威勢を張るものの

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

と千冬に一蹴されてしまい脱兎のごとく二組に戻っていく鈴。そんな光景をみて零治とオルカは

（（こいつはまた面倒なことになりそうだ…））

そう心の中で呟いた。

「さて、シエリー」

「はい、なんでしょうか織斑先生」

千冬がリリウムを呼ぶ。

「お前の専用機が今日届くそうだ。放課後にでもチェックしておけ」

「わかりました」

それを聞くとクラスメイトたちは「いいな～」など羨ましそうに言っている。

「リリウムは専用機あったのか」

零治は若干驚きリリウムに聞いた

「はい、私の親が勤めているBFFという企業のテストパイロットをやっていますから」

「よりによってBFFとはまあ、なんとも」

BFFというのを聞いて零治は苦笑いしながら言う。

「私もそう思いますが、こちらのBFFの社員はなぜかみな心が綺麗みたいです」

「こっちの会社もそうだよ。そういえばBFFとは企業提携してたよな」

「はい、なので今日の放課後に、その、専用機の調整を少し見てもらっていいですか？」

「ああ、構わない。俺でよければ手伝おう」
零治がそう言うとりリウムは思わず顔が綻んでいた。

そして午前中の授業が終わり昼休み、零治は一夏たちと学食に行く。

「待ってたわよ、一夏！」

とラーメンを持ちながら立っている鈴がいた

「鈴、そこにいると食券出せないし、通行の邪魔になるぞ」

一夏はまたも鈴の登場をスルーした。

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

鈴は朝のときもスルーされて少し落ち込んでいるようである

「ラーメンのびるぞ」

一夏はすかさず注意をすると

「わ、わかってるわよ！大体、アンタを待ってたんでしょうが！早く来なさいよ！」

とヤケクソ気味にいう鈴。

「ちょうど一年ぶりか？元気だったか？」

「元気だったわよ。あんたこそ、たまには怪我病気をしなさいよ」

「どういう希望だよ……」

そうやりとりをしていると注文の品ができて席に着く

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさんは元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそニュースで見たときびっくりしたじゃない」

などと鈴と一夏が話していると

「一夏、そろそろどういふ関係か説明してほしいのだが、まさか付き合ってるのか!？」

疎外感からか筈が少し棘をふくんだ声で聞いてくる。

「べ、べべべ、別に――」

「いや、全然違うぞ。ただの幼なじみだよ」

と鈴が何か言いかけたが一夏がすぱっと切ると鈴が無言で一夏を睨んでいる。

「？何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

鈴が一夏に怒るが一夏は理由がまったくわからず頭の上に？マークを浮かべている。

「ほら鈴、こっちが前に話した筈だ。小学校の頃、俺が通っていた道場の娘」

「ふうん、そうなんだ…初めまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

鈴と筈が挨拶を交わす。

「ねえねえ一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「まあ、成り行きでな」

「あ、あのさあ。アンタのISの操縦、見てあげてもいいけど？」

そう鈴が唐突に話を切り出す。

「そりや助かー」

一夏が助かると言おうとしたときダンツ！とテーブルが叩かれる。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

とものすごい勢いで言う筈。

「あたしは一夏に言ってるの。関係ない人は引ッ込んでよ」

「か、関係ならあるぞ。一夏にどうしても頼まれてるのだ」

鈴と筈が言い争っているとき零治は二人をこれ以上ほうっておくと厄介なことになると思い

「まあ、二人とも落ち着け」

と、いったん止める

「凰、お前は二組のクラス代表だろう。まだクラス対抗戦が終わってないんだ。ここで一緒に練習をするということは互いに手の内を明かすことになる。しかも一夏は初心者だ、代表候補のお前に手

の内をばらしてしまつたら、もはや勝負にならないから、せめて終わるまで待てないか？」

零治はそう言いこの場を鎮めようとする。鈴は少し考えると

「まあ、そう言われるとそうね」

そう言い納得する。

「で、あんたは誰？なんで一夏以外に男がここにいんのよ？」

「ふむ、一応それなりに有名だとは思つたんだが」

と零治が言つと鈴はじろじろと零治をみて

「ああっ！アンタ、レイレナード社の社長じゃない！」

と思わず大声を出してしまう鈴。

「ああ、そのとりだ。初見となる、三嶋零治だ。ここでは社長とかそういうのは気にしないでもらえると助かる」

「そう、あたしは凰鈴音よ。よろしく」

お互いに自己紹介をする零治と鈴。

「そういえば鈴、親父さん元気にしてるか？」

と一夏がふと思ひ出したかのように鈴に聞いた。

「あ……。うん、元気ーだと思う」

鈴は言葉を濁すようにすると急に表情が陰りだす。それを零治はチラッとみると

「さて、一夏。もうそろそろ授業の準備をしないと織斑先生にどやされるぞ」

そう話を切り出した。

「やべ！もうそんな時間か」

と、あわてだす一夏につられて聞き耳を立てていた周りの生徒たちも、いそいで片付けを始める。

「悪いな鈴。積もる話もまた後でな」

そう言つと一夏はすまんと軽く謝り教室に向かつていきセシリアやオルカ、リリウムも他の生徒とともに移動しだし、零治も教室へ向かおうとする。

「ねえ、アンタ。今の私のために言ってくれたの？」

鈴が唐突に零治に聞いてくる。

「何のことだ？俺は、いつもどやされている一夏のために言っただけだ」

「そっか、ありがと」

「礼を言われる覚えはないんだがな。それよりも鳳お前も、早く教室に行ったほうがいいぞ」

「そうね。あつ、あとあたしのことは鈴でいいわよ」

「そうか、では俺のことも零治でかまわん。ではな」

そう言い零治は教室に入ってしまった。

そして放課後第三アリーナ

零治はピットのほうでリリウムの専用機の調整の手伝いをしている。オルカ、一夏、セシリア、箒はグランドのほうで練習をしている。

「零治さん、普通のISでもQBをすることってできるんでしょうか？」

「できなくもないだろうがPICやら何やらをいじらなければいけないから少し面倒だぞ」

「では、BFFとレイレナードが共同して作ったブースターをスカート部分につけてみたらどうでしょう」

「そうだな試しにやってみるか」

そう言うとりりウムの専用機、名は向こうと同じでアンビエントという。それに粒子変換などして付け加えいく。

「PICの調整をすっかりしろよ。でないと壁に衝突することになるぞ。なんなら前にオルカと戦ったときのデータを参考にするか？」

「そうですね、じゃあお借りします」

リリウムはそう言うとき零治が出してくれたデータをもとに調整して

いきなんとか完成する。

「試しに動かしてみるか？」

「はい。そうしてみます」

するとリリウムはISを装着する。リリウムのISはアンロックユニットが盾に似たような形が二つありそこに自信をレーダーから身を隠すためのECM発生装置とミサイル、そして先ほど追加したブースターが付いており、スカートの部分には左右の横にブースターが1つずつ、後ろの腰のところに2つとなっており全体的に見るとリリウム自信が小柄なためISが少しごつくみえる。

「では、さっそくいきます」

リリウムはそう言うのと擬似的なQBを確認する。昔のように動いてみるが前より体に負担がかかる。

（やっぱり、AMSがなければ乱用するのは難しいですね）

そう思いながらも確認していく。そして擬似QBが問題ないと確認すると次に武装の確認をしていきなにこともなく無事に終わるとピットゲートに戻る。

「どうだった？こっちもデータを見た限りでは問題はないが」

「そうですね、データ上では問題ないですが乱用すると体に負担がかかりますね」

そう言いながらISを解除して地面に付くと先ほどの擬似QBの反動だろうか、足元が一瞬ふらつき転びそうになる。すると零治がとっさに抱きかかえるように支えた。

「つと、大丈夫か？」

「え、ええ。大丈夫です」

「ん？どうした、顔が赤いぞ。本当に大丈夫か？」

「ふえ？だ、大丈夫です」

と慌てて必死に言うリリウム

「そうか、あまり無理はするなよ。少し休んでおけ」

「は、はい」

「では、俺はちょっと一夏たちの所へ行ってくる」

「…えっ？」

「どうやら向こうが少してこずっているようだからな」

そう言うとき零治はISを展開して一夏達のところへ向かった。リリウムはそれを見送るとガクツとうなだれていたのであった。

こうして放課後の練習が終わり零治たちは部屋に戻る。そして夕食が終わり八時過ぎ。

零治は職員室でとある用事をすませて部屋にむかって歩いている。

そして角を曲がるとボストンバックを持って走ってくる鈴とぶつかり二人とも転んでしまう。

「っ痛！なんなのよもう！」

「すまん、こちらの不注意だったな」
まず謝っておく零治

「なんだ、アンタか」

鈴はぶつかったのが零治だと気づく

「ああ、鈴か」

そう言い鈴を見ると目が赤く少し腫れてるのを見ると泣いていたのだろうと気づく

「どうした、なにかあったのか？」

「なんでもないわよ」

と言い俯く鈴だが今にも泣き出しそうな声である。

「なんでもないなら、なぜ泣きそうなんだ？」

そう言うとき鈴は

「だ、だつてえ」

と再び涙を流し始める。

（まで、これでは周囲から見ると俺が泣かしたように見えるんじゃないのか？）

「まあ、なんだ。オルカもいるが、よければ俺の部屋で茶ぐらいはだそう。それで落ち着け。こんなところで泣いているのもあれだろっ」

「…うん」

零治の言葉に対してそう言い頷く鈴。

「ほら、立てるか」

そう言う鈴は無言で頷き立つ。すると零治たちは部屋へ行きドアを開ける。するとオルカがベットの上で寝そべっていて零治の方を見る

「わー。しゃっちゃんか女の子を泣かしたヨ。しかも部屋にまで連れて来たヨ。あれか押し倒したのか」
と微妙な日本語でしゃべってくる。

「へんな言い方をするな。そしてあからさまに面白がつて誤解をうむような言葉を発するな」

「きやー、怖いヨ」

「その口を閉じなければ、足をまったく動かないように地面に固定して上半身にVOBをつけるぞ」

「すまん。俺が悪かった」

オルカが謝ると零治はお茶を入れて椅子に座っている鈴に渡す。

「すまん、緑茶しかないが我慢してくれ」

零治は鈴にお茶を渡し鈴は「ありがと」と言い受け取ると一口飲む。そしてどうやら落ち着いたのか泣き止んでいた。

「どうだ、少しは落ち着いたか？」

「うん。大丈夫」

鈴が大丈夫と言うのを聞くと「そうか」と短く答え自分も茶を飲む。そして少し沈黙が続くと

「ねえ、理由聞かないの？」

と鈴が聞いてくる

「そうだな。さっきは、ああ言っただがよく考えれば人に話したく

ない理由もあるだろうと思っただけ」

「そっか、じゃあ言えば聞いてくれるの」

「ああ、聞いて相談に乗るまでだがな」

「なあ、お前が泣いている理由って、さっき隣の一夏の部屋でものすごい音がしたのも関係あるの？」

とオルカが聞いてくる。

「多分そうかな。さっきさ、一夏の部屋で喧嘩しちゃって」

鈴が話し始めると二人は静かに理由を聞く。そして要約すると

鈴が一夏に中国に帰るときに日本で言う“私の作った味噌汁を毎日”の味噌汁の部分を酢豚に代えて言ったのだが一夏は毎日ただ単に酢豚をご馳走してくれると思っていたというのだ。

「なんていうか、なあ…」とオルカ

「ああ…」とそれに肯定するかのように零治

「なんなのよ！」と二人の微妙な反応に少し怒る鈴

「いや、な。あの鈍感にそんな言い回しをしたら…なあ？」

とオルカは言い、それに続いて零治も

「まあ、例え味噌汁のほうで言ったとしても気づかなさそうだけどな」

そう言い軽く肩をすくめる零治。

「うう。そんなこと言ってもそのときはそれで精一杯だったのよ」と落ち込む鈴。

「まあ、俺やオルカがどうしろだとは言えないがもう一度話し合ってみたほうがいいとおもうぞ」

「そうね。そうしてみるわ。じゃあ今日はありがとう色々話したら少し楽になったわ」

「そうか。まあ、愚痴ぐらいだったら俺もオルカもまた聞いてやる」

「そう。じゃあそのときにはお願いね」

そう言うと鈴はボストンバックを持って零治たちの部屋をでて自分

の部屋に帰っていった。

第15話（後書き）

次はやつとクラス対抗戦だ…

そういえばフロムがガンダムUCのゲームを作るとか言ってたがどうなるんだろうか？

第16話（前書き）

今回はいつもより無駄に長いですがよろしく願います。

第16話

第16話

一夏と鈴が喧嘩をしてから数週間がたち五月になるが二人はいまだに仲直りができずにすごしていて零治たち（主に零治）が鈴から愚痴などを聞くのがほぼ日課になりかけていた。

そして来週から対抗戦が始まるので、零治は自分で愚痴を聞くなどと引き受けたがせめて対抗戦が終わる前後には仲直りをして欲しいと切実に願っていた。

そして放課後、実質最後の訓練をしようと零治たちは第三アリーナのAピットにきてドアを開ける。

「待つてたわよ、一夏！」

鈴が腕をくんでピットにいるのである。零治はそれを見ると

（ふむ、やっと仲直りをするのか。長かったな）

などと今までのことを感傷していると、いつの間にか鈴と一夏が言い争っていてだんだんと雲行きが怪しくなっていき零治が現実に戻り耳を傾けると

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアンタよ！」

鈴が怒っておりそれに対して一夏は

「うるさい、貧乳」

と口にするが、その言葉は鈴に対して、いや、全国の胸の大きさに悩んでいる女性をすべて敵にまわす発言であった。するととても大きな轟音がピット内に鳴り響きまわりをみると壁に直径三十センチほどのクレーターができていた

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

と一夏はあわてて誤るが

「今の『は』！？今の『も』よ！」

一夏の謝罪は今の鈴には逆効果だったらしく更に怒らせてしまう

「もう、いいわ。全力で叩きのめしてあげる」

鈴は最後に一夏をキツと睨みピットを出て行った。零治とオルカはその後姿をみて

（（今日もか…これは、面倒なことになった））

と思うのであった。そして零治とオルカはその日の夕食が終わった後の自由時間は鈴の相談（愚痴）を聞くのであった。

試合当日、第二アリーナ第一試合 一夏対鈴である。

二人は空中で向かい合っている。そして試合開始のブザーが鳴ると鈴が近接武器で先制攻撃をしかけそれを一夏は雪片二型で応戦する。そして一夏が距離をとろうとすると鈴の肩アーマーがスライドして中心が光った瞬間一夏は見えない衝撃によって吹き飛ばされる。

そしてそれをピットからリアルタイムモニターで見ていた篤が

「なんだあれは……？」

と呟き、それに答えたのはセシリア。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成して、余剰で生じる衝撃自体を砲弾化して撃ち出す。ブルー・ティアーズと同じ第三代型兵器ですわ」

「砲身が見えないんじゃない？どうするのだ！？」
そう言い篤が少しうろたえている。

「なんだ、発射口が見えるなら避けれるじゃないか」

と余裕の表情で答える零治に篤とセシリア、近くにいる山田先生も驚いている。そして千冬もその言葉に興味をもったのか少し耳を傾けている。

「な、なぜそんな簡単に言えるのだ？」
そう篤が質問してくる。

「ん？そんな単純なことを説明するのか」
零治はめんどくさそうに軽く肩をすくめる。すると零治の変わりにリリウムが説明をはじめめる。

「まあ、殆どの人もそうだと思いますが、鈴さんは射撃をするときに自分が撃つ場所を無意識的に見ています。そして発射口が見えてるということは撃つてくる場所がわかります。さらにあの衝撃砲の弾道は直線にしか飛びません。さらに撃つ瞬間には中心が光るということはタイミングもそれでわかりますし、さらに相手の目線や空気の歪みなども合せて見ればそれなりの操縦者なら避けるのにはそんなに苦労はしないかと思われます」

とリリウムが言うとき零治は「そういうことだ」と言った
それを聞いた篤はそんなことが人間にできるものかと思うがセシリアは零治と戦ったことを思い出すと零治やオル力ならできるだろうと思った。

「だが一夏は初心者だぞ、そんなこと出来るはずがないだろう」
と篤が言うのにオル力が

「まあ、確かにそうだな。だが初心者でも勝ちようはあるぞ。あいつは確か瞬時加速が使えただろ？それを上手く利用して雪片二型のあの攻撃を入れれば勝てるぞ」

そう言った。そしてそんなやりとりをしてるとモニターの一夏たちのほうは

「鈴。本気でいくからな」

一夏はそう言うとき鈴に向かって瞬時加速を使い一太刀浴びせようとすると突如ものすごい衝撃がアリーナに走りステージ中央に土煙が舞い上がりその中になにかいるのである。一夏は何事かと思っっているとき鈴からプライベート・チャネルで

《試合は中止よ！すぐにピットに戻って！》

と告げられると一夏のISのハイパーセンサーが中央の熱源、所属不明のISからロックされていると警告される。

《一夏、早く!》

鈴が再び一夏に逃げるように言う

「お前はどうするんだよ!？」

「あたしが時間を稼ぐからアンタはその間に逃げなさいよ!」

「女を置いて逃げれるかよ!」

「馬鹿! アンタのほうが弱いんだからしょうがないでしょうが! 第一あたしも最後までじゃなくて時間稼ぎをするだけよ。すぐに学園の先生たちがやってきて自体を収拾!」

鈴がそう言いかけると突如、敵のISからビームが放たれる。

「あぶねえ!？」

一夏そう叫び鈴を抱えて避ける。

「セシリアより高出力のビーム兵器かよ…!」

自分たちがさつきまでいた場所を見ると一夏は相手の攻撃の威力に驚いていた。

「ちょ、ちょっと一夏。アンタどこ触って!」

「!来るぞ!」

鈴がそう言つて軽くジタバタもがいていが敵の攻撃がくると一夏はすぐさま避ける。そしてだんだんと土煙がはれていき敵のISが見えてきて、一夏はその姿をみると驚いた。

「なんなんだこいつ…」

そうそのISの姿は全身装甲という異形なものであった。

「お前、何者だよ」

「……………」

一夏は相手に問うたが無反応である。

《織斑くん! 鳳さん! 今すぐに脱出してください! すぐに先生たちがISで制圧に行きます!》

山田先生は突如通信に割り込んで一夏たちに脱出の命令をしたが

「いや、先生たちが来るまでは俺たちで食い止めます」

と命令に従わず時間稼ぎをしないといたすのであった。

「織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあったら――」

山田先生がそう言いかけるとき敵ISが一夏たちのほうへ突進してきて最後まで言葉が聞き取れなかった。

「一夏、向こうはやる気満々みたいね。あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。アンタの武器ってそれしかないんでしょ？」

「その通りだ。じゃあいくか」

そう言くと二人とも敵に向かっていった。

一方山田先生たちのほうは

「聞いてますか！？織斑くん！凰さん！二人とも聞いてますか！？」

プライベート・チャネルは叫ぶ必要性がないが必死に叫んでいる山田先生。

「本人たちがやると言ってるのだから、やらせてみてもいいだろう」

千冬は山田先生とは反対に静かに話す。

「お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？生徒さんたちが、織斑くんと凰さんが危ないんですよ！？」

そうやり取りをしているときに零治は箒が出て行くの横目でチラッと見た。

《オルカ気づいているか？》

《ああ、出て行ったな》

とオルカもそのことに気づいているようであった。そして二人とも箒が起こしそうな行動もなくなっただが見当がついた。

《俺はあの侵入してきたイレギュラーを排除する》

《わかった。俺はあの考え無しのアホを連れ戻す》

オルカは零治に言われると幕を探しに気づかれないようにさっさとでていった。そうやりとりしてると

「先生！わたくしたちにISの使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

セシリアが千冬に対してそう自ら申告する。

「そうしたいところだが、――これを見る」

千冬がそう言うのと第二アリーナの情報を出すとそこに映し出されていたのは

「扉が全てロックされていて、遮断シールドがレベル4設定……？まさかあのISの仕業ですの！？」

「そのようだ。これでは非難も救援に向かうこともできないな」

千冬が冷静のように言うがよく見ると手が苛立ちを隠せずに画面をせわしなく叩いていた。零治はその情報を見てある程度推測する。

（あのIS自信がこちらの遮断シールドを全てロックしているのか。だが今は三年の専門家たちがクラッキングを行っているが全く進んでいない……ウイルスか？いや、ウイルスごときでは流石にここまで時間はかからない。そうするとやはりIS自信がやっているとなるが、そんなことをやりながら戦闘をすることができるのか？片方はあくまでも代表候補生だ。その攻撃をかすりもせず避けて反撃するなど普通の人間ならできないな。てことは他に協力者がいてそちらがアリーナのシステムを乗っ取っているのだろうな）
そう軽く推測すると

「織斑先生自分が行きますのでISの使用許可を」

千冬にそう言う零治

「三嶋。お前は人の話を聞いていなかったのか？」

「いえ、遮断シールドをぶち破ります」

「なんだと？お前のISはそういうことができるのか？」

「はい。できます」

「……………」

千冬は零治のその淡々と答える言葉に少し驚きちよつとの間沈黙す

る。まあそれもそう思うだろう。零治のISにはあの敵と同じ威力の出せる武器が備わっているということなのだから。

「…わかった。まかせる」

千冬は考えた結果そう言ったのである。零治はそれを聞くとアリーナの方へ向かっていった。

そして零治は第二アリーナのAピットの前までいくと周りでシステムクラックをしていた生徒たちに離れるように言いISを展開すると両手の07-MOONLIGHTの出力を調整してシールドを焼き切ると一夏たちのところへ向かった。

そのころ一夏は鈴とともに謎のISに挑むが攻撃が殆どあたらずエネルギー残量がどんどん減っていく。しかし一夏は戦っているうちに相手に妙な不信任感を抱いていた

「なあ、鈴。あいつの動き妙に機械じみていないか？本当に人が乗ってるのか？」

「なに言ってるの、無人機なんてあり得ない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

鈴は、一夏が言ったことを否定するが一夏はどうしても人が乗っているとは思えなかった。

「仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？無人機だったら勝てるって言うの？」

「ああ、それなら全力の雪片二型が使えるからな」

そう自信満々に話していると敵のISが一夏たちに向けて攻撃を仕掛ける。

一夏と鈴はとつさに避けていくが相手の攻撃は激しさを増す一方であり鈴が直撃コースの攻撃をぎりぎりでかわすが無理に避けたせいでバランスを崩してしまう。すると敵は鈴に完璧に狙いを定めて撃とうとしている。

「鈴！」

と一夏が叫ぶが敵は無慈悲にもビームを撃つ。鈴はもう駄目だと目を瞑るが体に軽い衝撃がはしり引つ張られる感覚がする。鈴はゆっくり目を開けると零治の右腕に抱えられているのがわかった。

「すまないな、遅れてしまった」

「なんでここにいるのよ!？」

そして零治をもう一度みると零治の左腕が少し火傷しており若干血が出ている。

「アンタ、その腕…!」

「なに、只のかすり傷だ。戦闘に問題はない」

零治はそう言い敵から少し距離をとる

「もう放すが大丈夫か？」

そう聞き鈴が短く頷くと零治は鈴を放す。

「俺は今からあのイレギュラーを倒しに行く。鈴、お前は一夏と一緒に下がっている」

「アンタ、ちょっと何言って―」

零治は鈴が何か言い終わる前に敵に向かっていく。

「零治! そいつは無人機かもしれない!」

一夏は零治が敵に向かっていくのを見てオープン・チャネルでそう叫んだ。

「なるほど。では遠慮なく壊させてもらおう」

零治はそう言うとともにさらに近づいていく。そして相手は近づかせまいと迎撃をするがそれを難なく潜り抜けて近づいていく。

その光景をみた鈴は

「なんなのよ、あいつ…」

と自分達があんなにも苦労していた相手に対して簡単に接近をしているのに驚く。

そして零治はある程度近づき隙を見るとQBを使い左手の07・MOONLIGHTを振るい敵ISの右腕を焼き切る。そして敵は左手で零治を殴るがそれは空をきりその隙に右手の07・MOONL

I G H Tで左腕も焼き切り、そのまま流れるようにして敵I Sのコアごと切り裂くと敵I Sは完全に沈黙した。

それを見ていた一夏たちは終わったと思い零治の方へ向かうとすると突如敵にロックされているという警告が零治のハイパーセンサーから知らされる。

「一夏、鈴。こちらにくるな！」

そう言う上空から零治にめがけてビームが撃たれるが零治はそれを避け上空をみるとさっき倒した相手と同じ敵がいた。

「やはりもう一体いたか」

零治がそう言っていると敵I Sが零治にむけて射撃をしてくる。

「やれやれ、貴様ら無人機には有人機故の強さと言うものを教えてやろう」

そう言い応戦しようとする

「一夏あつ！」

と箒の大声がスピーカーを伝わって響きわたり中継室の方を見ると審判とナレーターがのびていた。おそらく箒がやったのであろう。箒の行動に零治も一瞬呆気にとられ少し苛立ちを覚える

（チツ。空気にもなれんか…！）

「男なら…男なら、そのくらい敵に勝てなくてなんとする！お前の―「黙れ」がっ！」

最後になんか言おうとした箒だがオルカが箒に一発入れて気絶させる。

「箒！オルカ、お前っ！」

と一夏は叫んでいる。

そして敵I Sは中継室のほうへ向けて攻撃をしようとチャージをしていた。

「させるか。消えろ、イレギュラー！」

そう言い二段Q Bで一気に距離を詰めてチャージをしている腕ごとコアを07-M O O N L I G H Tで切るがチャージ中のエネルギーが暴発して爆発に巻き込まれてしまう。

「『零治！』」

と一夏や鈴、オルカも叫ぶ。そして煙がはれると左腕を負傷しているが致命傷は負ってなかった零治の姿があった。

「織斑先生、こちらは終わりました」

零治は千冬にそう通信する。

「ごくろうだった。こちらシステムのコントロールは取り戻した。お前は早く怪我の手当てをしろ。いいな？」

「わかりました」

そう言い通信を切って一夏たちとピットに戻ると医療班が待機しており零治はすぐさま連れて行かれる。

こうして正体不明のISの襲撃は終わり、約二時間後零治が保健室で休んでいるとドアが開き一夏、セシリア、鈴、リリウム、そして一時間ほどで起きた第の4人が入ってくる。

「零治もう大丈夫なのか！？」

と言い寄ってくる一夏

「まあ、少し落ち着け一夏」

「あ、ああ。悪い」

するとまたすぐにドアが開くと千冬、山田先生、オルカの三人が入ってくる。

「三嶋、腕は大丈夫か？」

「はい、見た目の割にはそこまで酷くないらしいので一週間もすれば完治だそうです」

「そうか」

千冬は零治の怪我の具合を聞くとほっと安心する。

そしてオルカが千冬と山田先生の陰から出るのを一夏はみると

「オルカ、お前。さっきなんで第を殴ったんだ」

静かに言うもののかかなり怒気の含まれている声だった。

「そんなの黙らせる必要があったからだが、なにかおかしいか？」
オルカは一夏の怒りを軽く受け流しさも当たり前のように答える。

「だから、殴る必要はなかっただろうって言ってるんだよ！」

一夏はオルカに対して怒鳴った。

「じゃあ、普通に言ったところで辞めたか？中継室の審判とナレーターを気絶させたんだぞ。非難させるでもなく自分がやりたいことのために中継室の二人を危険にさらしたんだ。もしかしたら俺までが気絶させられるかもしれないなかったんだけどな。しかもその行為により中継室が敵の攻撃の標的にされ、あの時叫ばなければ零治もそこまでの怪我にはならなかったかもしれないんだぞ」

「だ、だけど、もっと別のいいやり方があったかもしれないじゃないか」

オルカは一夏のだだをこねるような言葉に苛立ちがだんだんと抑えきれなくなつて舌打ちをする。

「ああ？その別のいい方法ってなんだよ、言ってみろよ」

「そ、それは……」

一夏は答えようにもまったく思いつかずに答えられない状態である。

「お前な、今回は人が死ぬかもしれない状況だぞ？それをわかつて言ってるのか？たった一人の身勝手な行動により人が死ぬんだぞ。それが分かっていてのか？って言ってんだよ！」

普段のオルカからは考えられないほどの怒りが発せられていて零治、リリウム、千冬以外は皆今のオルカに対して少し怯えていて山田先生に関しては若干涙目である。

「チツ、胸糞悪い。俺は部屋に戻る」

オルカはそう言い出て行ったがそれでも保健室はまるで通夜のように静まり返っていた。

すると零治が

「織斑先生、もし俺に他に用事が無いのであれば俺も部屋に戻ってもいいですか？」

と話を切り出した。

「いや、三嶋には話すことがある。他はもう部屋に戻れ。あと今回の件はあまり口に出さないようにしろ。いいな？」

千冬がそう言うのと千冬、山田先生、零治以外が保健室から出て行き、保健室の周りにも誰もいないのを千冬が確認すると零治の方を見る。

「で、話ってなんですか？」

「ああ。お前のISはなぜあそこまでの出力が出せるんだ？数値を簡易的に調べたが異常だったからな」

千冬の質問は零治にとって予め聞かれるだろうと思っていたことであつた

「あれは我が社の試作品を出力をオーバーロードさせて無理に使っただけですよ。なのでもう使い物にならなくなっていました。なんなら後でその試作品のデータを渡しますが」

零治は淡々と答える。もちろん嘘であるがそう言われると千冬もこれ以上追及ができない。

「そうだな、明日にでも提出してもらおう」

「話ってそれだけですか？」

「いや、今のもそうだが。今回の襲撃の件についてお前の考えを聞きたくてな」

「なぜです？俺なんかに聞いても意味ないんじゃないですか？」

「なに、一企業の社長の意見も聞きたくてな」

「そうですか…」

そう言うのと零治は少し考えるような仕草をとる。

（ふむ、当たり前のことを言っていけばいいか）

零治はそう考えると喋りだす

「そうですね。今回の襲撃は戦力の偵察に専用機の奪取、あわよくば男性のIS操縦者の確保。そうでなければ愉快犯かと思っています」

「ほう、なぜそう思うんだ？」

「それは、まずはなっから殺すことを目的としていれば最初の奇襲で確実に一人殺すことができました。なのにそれをせずに派手に登場するだけでした。そしてもう1つの愉快犯の考えはわかりません。あと今回の敵のISの無人機に関してはおそらくどこかしの企業が作ったわけではないと思います」

そう言うのと千冬の眉がほんの僅かだが動いた。

「もし企業が作ったとしたらそれに対して特許をとろうかと動きます。さらにあのＩＳたちは捨て駒同然に扱われているのを見るとおそらく企業は貴重なＩＳコアを無駄遣いしないはずです。もしＩＳのコアが篠ノ之束以外の人間が造れるなら、それこそ世界に向けて自慢をするでしょう、自分は篠ノ之束と同等の天才だと」
そう言うのと少しの間沈黙が流れる。

「まあ、俺の考えはそんな感じですかね」

「…そうか。わざわざすまん」

「いえ、大丈夫です。では俺も部屋に戻っていいですか？」

「ああ。構わない」

零治はそう言い保健室のドアをあけ外にでようとするとピタリと足を止める。

「ああ、あとオルカから聞いたんですが、学園全体の扉が完璧にロックされていたのに篠ノ之箒が通ったところだけ偶然にも開いたのは何故でしょうかね？」

そう言い残すと保健室をあとにした。

そして廊下を歩いていき自分の部屋がある通路に出ると鈴が壁にもたれかかっているのが零治の目に入る。

「どうした、部屋に帰らないのか？」

「いや、アンタを待ってたのよ」

「俺を？何故だ…？」

「その、言うのが遅くなったけど、ごめん。あたしのせいでアンタの腕に怪我させちゃった…」

そう言つて謝る鈴。

「あたしがもっと慎重に動いていれば―」

「そう自分を責めすぎるな」

零治は言葉をさえぎりそう言う

「でも…」

「なに、友の命を救えたと思えば安いものさ。そしてあまり落ち込むな、お前らしくないぞ」

「なによ、人が心配してるのに！」

「ふっ。やはりそう元気があるほうが似合うよ」

そう軽く笑いながら言う

「っうー！」

軽く俯き少し頬を赤く染める。

「ん？どうした？」

「な、なんでもないわよ」

「そうか、ならいいが。まあそれよりも一夏との約束のことや仲直りはどうするんだ？」

「そう言っても今日はさすがに…」

「ふむ、それもそうか」

「まあ、明日ぐらいいにでも仲直りはするわよ。でも約束のことはもうどうでもいいかなって。あんたと話しているうちに、いちいち過去のことにこだわすぎるのがアホらしく思えちゃったわけよ」

「そうか、それがお前の出した答えなら俺はどうこう言ってもりは無い。まあ頑張れよ」

零治はそう言うのと鈴の頭を軽くポンポンと撫でる。

「き、急に頭を撫でるんじゃないわよ！」

「おお、それは悪かったな」

零治は軽く笑いながら言うのと再び部屋に向かおうとする

「ね、ねえ！」

「ん？」

鈴が再び呼んだのに対し軽く振り向く。

「また、あんたの部屋に遊びに行つていい？」

と聞いてくる鈴。

「ああ、構わない。来たいときに来ればいいさ」

軽く微笑みながら答えると部屋に向かったのであった。

そして零治は部屋に着き入りオル力に話しかけた。

「さつきは妙にらしくなかったじゃないか」

「ああ、そうかもしれないな」

「いったいどうしたんだ？」

「いや、あいつらはISが本当に人を殺せる道具だというのを解かっていなさ過ぎる。しかもあの状況がどんな状況だったかも本当に解ってないと思ったただだよ」

「…そうだな。ここの教員の大半もISは人を殺せる道具と言うのをちゃんと理解してないようだからな」

「このままいくと、いずれは本当に人が死ぬかもしれないぜ」

「ああ。俺もそう思う」

「そして篠ノ之束と言う人間はなんのためにISを作ったんだろうなって思っている」

「さあな。篠ノ之束は確かに技術者としては天才だ。だが人としては歪んでると思うな。ISは宇宙に行くためと言ってるが実際は宇宙のことを考えてないだろう。どこの企業も兵器として扱っている。このままではいずれあの世界と同じことが起きるかもしれない」

「それだけは勘弁してほしいな」

オル力がそう言うのと二人とも自分達が昔いた場所を思い出していた。

「この世界は俺たちがいた世界とは別の意味で命が軽いな」

零治はそう口にする。零治達がいた世界も戦争が当たり前で戦場で戦うもの達は企業の駒でしかなく軽い命と思われているとは別にこの世界では軽いと言ったのだ。

「確かに。あの世界も歪んでいたけど、こっちも十分に歪んでいるよ」

オル力はそう言いあの世界で言われたことをふと思い出していた。

「だが俺たちでは正直、世界を変えることなどできないだろう」

零治がそう告げる

「だからってなんもしないのかよ？」

「なにもしないとは言っていない。なに、やれることはやるさ」「オルカはそう言われると」「そうだな」と言い返したのであった。

こうして長い一日は幕を下ろした。

第16話（後書き）

やっと一巻が終わりました（汗

最近友達からネットゲのAVAを勧められたんでやってみましたがF
PS初心者の作者は殆どフルボッコされるとい…orz
まさに乙樽の「戦場に迷い込んだのか？素人が…」という台詞がぴ
つたりの状態という

そして次は日常回となりますのでよろしくお願いします。

第17話（前書き）

今回は日常編です。

第17話

第17話

六月の初めの日曜日。

零治は前日の土曜午後から日曜の午前中にかけてレイレナード社に顔を出したていた。

そして用事が終わると浅間大介という男性に途中まで送ってもらうことにする零治。

「わざわざ送ってもらってすみません」

「いやいや、僕は構わないよ。それにしても皆久しぶりに零治君が顔を出したら喜んでいたね」

「そうですね。でも研究員のはしゃぎようは流石に」

そう言い苦笑いする零治

「ははは。それほど嬉しいってことだよ」

「そういうことにしておきます」

「それより、学園生活はどうだい？」

「いろいろ大変だけど、楽しいですよ」

「それはよかった。学生の青春は一度きりだからね」

そんなやりとりをしていると零治が

「大介さん。この辺で大丈夫です」

と止めてもらうように言った。

「いいのかい？モノレールの駅まで距離あるよ？」

「いえ、せつかなので少し散歩をしようかと思ひまして」

「そっか、そう言うなら仕方ないね」

大介は零治に言つと車を邪魔にならないように車を止めて零治を降ろす。

「じゃあ、僕はこれで」

「はい、ありがとうございました」

零治がそう言っていると車は去っていきそれを見送ると携帯で時間を確認する。

「ふむ、12時ちよつと前か。昼食を摂れるところを軽く探すか」
そう言つと零治は歩き出した。

一夏はあの襲撃の日オルカに対して自分の言っていることが只の我侭であると思うと次の日にオルカに謝りにいき謝るとオルカは「殴った俺も悪いんだ。気にするな」と言つて仲直りをした。

そして今日一夏は自分の家の様子を見に行つたついでに友人の五反田弾という友人のところに来ていて久しぶりに会う友人と楽しい時間をすごしていて12時頃になると弾の定食屋の食堂で昼をご馳走になるために表から食堂に入り昼飯を食べることにする。

「やっぱり羨ましいいなー」

弾がそう一夏に言う。

「お前、さつきからそう言ってるけど、こっちはかなりきついぞ。幼馴染と他の男子がいなかったらと思うと……」

「そういやお前以外にも男がいたんだっけ」

「ああ。あと二人ほどいるぜ。一人はオルカつてやつでもう一人は――」

そう言つてると食堂の入り口から一人のスーツを着た男性が入ってくる。一夏はその男性がふと目に入り

「零治つて言うんだけど。ほら今、入り口に入ってきた人にそっくり、な……あれ？」

一夏はその男性をまじまじ見るとそれはとても見覚えのある人物であつた。

「零治……!？」

そう言つとスーツを着た男は一夏の方を見て。

「おや、一夏じゃないか。奇遇だな」

「お前、どうしてここにいるんだ？」

「どうしてと言われても昼ごはんを食べるためだが。あと席が結構埋まっているから同席してもいいか？」

「ああ。いいぜ」

そんなやりとりをしていると弾が

「一夏、この人がお前以外の男子か？」

「ああ、そうだ。零治って言うんだ。零治、こいつは俺の友達の弾だ」

「そうか。初めまして、俺は三嶋零治だ一夏のクラスメイトだよしく」

「おう。俺は五反田弾だ。一夏とは中学からの友達だ」

お互いに自己紹介をしていると。弾の妹の蘭が

「お、お兄」

「ん、どうした？」

「その人、前テレビで出てたレイレナード社の社長さんじゃないの」

弾はそう言われるとどうやら思い出したようであつた。

「あつ！」

「ああ、そういえば零治って社長だったな」

「一夏。そういうことは先に言えよ！」

と弾は先ほどより若干緊張していた。

「ふむ、俺のことはこういう所では社長の肩書きは無しに一個人として接してくれ。俺もそのほうが嬉しいからな」

「ほら、零治もそう言ってるんだしさ」

「いや、お前はもう少し考えたほうがいいと思うが」

「そうか？」

そう言つてると零治が頼んだ野菜炒めが持つてこられていただきま
すと言つと食べ始める。

「でよう一夏。誰だっけ鈴以外に再会した幼馴染って」

「ああ、筈な」

「ホウキ……誰ですか？」

「ん？俺のファースト幼馴染。まあ誰も知らない中、同じ部屋で助かったぜ」

「お、同じ部屋！？」

とその言葉を聞くと急に取り乱す蘭

「ど、どうした？落ち着け」

「そうだぞ落ち着け」

一夏に続いて弾もそう言っていると蘭に鋭い目付きで睨まれると小さくなる

「い、一夏さん？同じ部屋ってことは寝食をともに……？」

「まあ、そうなるかな。でも先月までで今は違うとけどな」

蘭はそう聞くと弾にアイコンタクトを送ると弾は汗をだらだら流している。

「……。決めました。私、来年IS学園を受験します」

「あ、IS学園は推薦とかなしで筆記だぞ」

と弾が言ってるが

「お兄と違って、私は筆記で余裕です」

「いや、でも……な、なあ、一夏！あそこって実技あるよな！？」

「ん？ああ、IS起動試験というのがあって、適性が全くないやつはそれで落とされるらしい」

一夏がそう言っていると蘭は無言でポケットから紙を取り出し弾に渡し弾はそれを開く。

「げえっ！？IS簡易適性試験……判定A……」

それをみて哑然とする弾。

「問題はすでに解決済みです」

「勝手に学校を変えるとか、いいのか、じーちゃん！」

「蘭が自分で決めたんだ。どうこう言う筋合いじゃねえわな」

「いやだって……れ、零治さんからもなんか社会の厳しさみたいのを言ってくれ」

「いや、他の人の家庭の事情に首を突っ込むのは悪いだろ。まあ、なんならウチの企業がサポートしてあげようか？」

「あら、いいわね。大企業のサポートが受けられるなんてにこやかにそう言っ出てきたのは弾の母親である」

「母さん！零治さん、冗談だよな」

「ああ、半分以上は冗談だ」

「全部じゃないのかよ！」

そう言いガクツと肩を落とす弾であった。

そして昼食が終わると零治は半ば一夏に強引に連れてかれるように一夏たちと遊びに行くことになった。

一方学園にいるオルカはISの整備室で自信のISを調整していた。

「整備するのってこんなに大変だったけ」

そう愚痴を言いながら零治が向こうの世界での武器をこっちの会社で作ったのを試射などをするために色々といじっている。

零治から送られた武器は背中武器のチェインガンXCG-B050、分裂型ミサイルSALINE05、プラズマキャノンSULTANそしてグレネードキャノンYAMAGAの四つである。オルカはXCG-B050とYAMAGAの試射は問題なく終わり残りはSALINE05プラズマキャノンSULTANである。

「ミサイルとかFCSの数値を一番気にしなきゃいけない気がするしプラズマに関しては燃費を報告しろとか…めんどくさ！」
そう言い大の字に寝そべる

とある女子生徒side

名は更識簪という女子生徒である。彼女は自分の専用機、打鉄二式

の機体を完成させるために整備室きたが自分より先に来ている人物がいるのに気づきその人物を見る。

（…あれって、皆が噂してる男子…確かオルカって名前だっけ？）
そんなことを思っている。

「めんどくさ！」

とオルカは言って大の字になるのを見てると目が合う

s i d e o u t

オルカは大の字に寝転がっていると先ほど入り口から入ってきた簪と目が合う。

（だれ？なんでこっちみてるの？）

オルカは不思議そうに思うが、周りから見れば面倒だとそれなりに響く声で言って大の字に寝転がるのであれば殆どの人間はみるだろう。

「ん？なんか用か？」

突然にオルカが話しかけると簪は少しビックリする

「…別に、特に…用事は、無いけど」

「そうか…」

そして再び目が合ったまま沈黙が流れる

（なんだこの空気は！？）

（…どうしよう、この空気…）

と二人ともさつさと整備に戻ればいいのにこの微妙な空気に身動きをとれずにいた。

（どうするか…そうだ！自己紹介でもすればなんとかなる！）

オルカは頭の上に電球が光ったようになるのと口を開いた

「なあ、アンタの名前は？」

いきなりの言葉に少し驚くが

「簪。…更識、簪」

「俺はオルカ・リンクスだ。それにしても更識か、どこかで聞いたことあるな…」

オルカがそう言うのと簪はまた自分の姉、更識盾無。あの何においても完璧な姉と比べられると思い心が少し苦しくなった。

「ああ、思い出した。四組のクラス代表だっけ？間違えてたらすまん」

だがオルカはこの学園のほぼ全ての人間は知っているだろう生徒会長の更識盾。その妹と言わなかった。そのことに少し驚いている簪。

「…あつてる」

「そうか、ならよかった」

簪は本当に更識の名を知らないのかと不思議に思い聞くのが怖いがオルカに更識と言う名を知らないか質問してみることにしたのだ。

「ね、ねえ」

「ん？」

「他に、聞き覚え…ないの？」

「なにが？」

「な、名前…」

「いやだから四組のクラス代表のじゃなくてか？」

「それ、以外で…例えば、生徒会長…とか」

「生徒会長？誰だそれ？」

「…本当に、知らないの？」

「ああ、第一更識なんてそれなりに珍しい苗字だったら忘れないと思うけどな」

そう聞くと簪は少しほつとする。

「で、更識もISを整備しに来たのか？」

「うん…自分の専用機を、組むために」

「へえ、すごいんだな」

「すごくなんか、ないよ…」

オルカは素直に関心するが簪は表情を少し曇らせてそう言った。

「そうか？お前が言うならそうかもれないが、俺からみれば充分すごいと思うのけどな」

簪は今まで何をやっても更識盾無の妹なら当たり前と思われていたが、目の前にいる男。だが目の前にいるオルカがそういうのを無しで凄いや言ってくれたのが正直に言えば嬉しかったのであった。

「リンクスくんは、何をしてるの？」

「零治の会社の試作武器のテストみたいなこと」

「零治って…一組の三嶋、零治のこと？確か、レイレナード社の、社長…」

「そう、そいつの頼みでやってるんだ」

「じゃあ…リンクスくんも、レイレナード社の、人なの…？」

「いや、違うぞ。俺は今のところはどこにも属してないぞ」

「じゃあ、なんで…？」

「なんでと言われても…まあ、色々あるんだよ。あとさ、初対面で悪いんだけど…よければ手伝ってくれると助かるんだが」

オルカのいきなりの発言に驚く簪。

「わ、私…自分の専用機、やらなきゃ、いけないから」

「まあ、そうだよな。ごめんな、いきなり」

「別に…大丈夫」

「そっか、俺はもう作業に戻るわ。悪いな時間とって、あと頑張れよ」

「…うん。ありが、とう。そっちも、頑張つて…」

簪はそう言いうと自分の専用機を完成させにいき、オルカは再び作業を始めるのであった。

そして時間が過ぎ、夕食の時間になる。

リリウムは零治を夕食に誘おうと部屋の前に来ると鈴と鉢合わせになる。

「あ、鈴さん」

「リリウムじゃない。どうしたの？」

「鈴さんこそどうしたんですか？一夏さんなら隣の部屋ですよ」

「用があるのは一夏じゃなくて零治よ。夕食を誘いに来たのよ」

「あら、奇遇ですね」

「へえ、アンタも」

そう言つと二人とも

（まさか鈴さんは今まで相談をしに来てるだけだと思ってましたが、まさか一夏さんではなく零治さんを最初に誘いに来ると言うことはやはり…）

（前からよく話すからそうじゃないかと思っていたけど、まさかリリウムもあいつのこと…）

と似たようなことを思つリリウムと鈴。そして二人とも同じ結論に至り。

（（ある意味で敵！））

と同時に心の中で言つと二人の間に火花が散り始めた。

「ふふふ…」

二人とも不気味に笑い出す。すると廊下の奥のほうから零治が来る。

「ん？鈴とリリウムじゃないか」

「あ！あんたいいところに来たわね。今から夕食を食べに行くわよ」

「なつ！零治さん私と行きましょう！」

と二人とも零治に言つと鈴とリリウムの間で再び火花が散る。零治はなんなんだと思つてみていると

「零治、夕食に行こうぜ」

一夏がそう言い出てくる

「俺も行くぞ」

とオルカもどこからかぬつと出てくる。

「そうだな。鈴、リリウム。先に行ってるぞ」

そう言い一夏たちとさっさと歩き出す。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ」

「ま、待ってください」

鈴とリリウムは急いでその後を追いかけて行き食堂に入る。

「ねえ、それって本当!？」

「マジ、マジ。超マジだよ!」

「それって織斑くんだけなの？三嶋くんやリンクスくんは？」

「三嶋くんたちはわからないけど織斑くんのは確かだよ!」

そう話している女子達の中の一人が零治たちに気づくと近づいてきて

「ねえねえ、織斑くんたちのあの噂ってほんーむぐっ!」

何かを話そうとした瞬間別の女子に口を塞がれる

「あはは、なんでもないよ。本当になんでもないから!」

そう言い残すと走り去っていく。

「なんだったんだ?」

一夏が目の中の出来事に理解できずに頭の上に?をつけている。

「気にしても仕方ないだろう。それより早く夕食を食べてしまおう」

零治が一夏にそう促すと席に着き五人で食事することにした。

その間も周りが少々騒がしかったが気にせずに食事を終えてそれぞれの部屋に戻り一日が終わる。

そして次の日、朝のSHR。

「みなさん、今日はなんと転校生を紹介します!しかも二人です

!」

山田先生の発言にクラスはざわめき始める。

(この時期に転入とはきな臭いな……)

零治はそう考えていると教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきた二人を零治は見ると片方は男の制服を着た人物
もう一人は眼帯をしたした人物であった。

(…男?)

と男子の制服を着た人物を見て色々と疑問を持ち、もう一人の方を
見る。

(歩き方が軍人みたいだな…)

今までの経験を活かして見ると軍人のように見えた。そして二人を
もう一度見ると

(はあ…これは、なんともまあ、面倒なことになりそうだな…)

と心の中で溜息を吐き、そう思うのであった。

第17話（後書き）

やっとシャルとラウラの登場です。

そしてACVの発売が待ち遠しい最近です。

第18話（前書き）

今回はそれなりに独自解釈などが含まれていますのでご注意ください（汗）

第18話

第18話

転校生の自己紹介が始まる。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

「お、男…?」

クラスの誰かがそう言う。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を―」

自己紹介をしていると

「きゃ…」

「…「きゃあああああ―っ!」」「…」

とクラス中の黄色い歓声によりさえぎられてしまう。

「男子! 四人目の男子!」

「しかもうちのクラス!」

「美形! 守ってあげたくなる形の!」

「この地球に生まれて良かった!」

「神様、今だけあなたに感謝します!」

などと好き勝手に騒いでるクラスメイトたちに

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから!」

千冬と山田先生がいったん鎮めるが

「……………」

ともう一人の転校生は口を開かないでいた

「…挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬がそう言うのと反応をした

「ここではそう呼ぶな。織斑先生と呼べ。あと私はもう教官ではない」

「了解しました」

そう言うのとラウラは背筋を伸ばし喋りだす

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

ラウラがそう言うのとクラスの皆は他には！？というような感じで黙っている。そしてラウラのほうもそれ以上は何も言わないように沈黙が流れる。そんな状態に不安を抱いた山田先生が

「あ、あの、以上……ですか？」

と聞くがラウラは

「以上だ」

そっけなく返す。そしてラウラは一夏と目が合うと

「！貴様が――」

と言いながら一夏に近づき右手を挙げ、一夏の頬をめがけて平手打ちをするが「ぐえっ！」と言う一夏の声と共に空をきる。

なぜなら後ろにいたオルカがラウラの行動にいち早く気づき一夏の襟をつかんで後ろに引つ張ったからである。

「貴様、何のつもりだ」

「アンタこそ何のつもりだよ？アンタの育った場所では挨拶の代わりに平手打ちをくらわせるのが礼儀なのか？」

ラウラが邪魔をしたオルカに対して鋭い目つきで言うがオルカは何事も無いかのように皮肉をこめて返した。そして再び沈黙が流れる。その状況を千冬は見ると軽く咳払いをする

「では、HRを終わる。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。各人はさっさと着替えて第二グラウンドに集合しろ。解散！」

そう言って手を叩き行動を促す。そして零治たちが移動しようとする

「三嶋。お前たち男子がデュノアの面倒を見てやれ」
と千冬に言われる。

「えっと、三嶋君にリンクス君、それと織斑君だよね？初めまして。僕は―」

「すまんが。自己紹介は後だ。先に移動するぞ」

零治はそう言つて一夏たちとさっさと外に出る。すると

「ああっ！転校生を発見！」

「遅かったじゃないか」

「しかもリンクス君たちと一緒に！」

などと言いながら学園中の生徒が集まってくる。

「黒髪もいいけど金髪もありね」

「金髪男子とは、新しい…惹かれる」

「お父さん、お母さん今日だけは感謝します！」

だんだんとカオスな状況になりつつある廊下

「な、何でみんな騒いでるの？」

今起こってる状況をシャルルは飲み込めないのか困惑気味の顔で聞いてくる

「まあ、男子が少ないからだろうな」

と冷静に返す零治

「で、どうするよ？」

オルカがめんどくさそうに聞いてくる

「よし、一夏逝ってこい」

零治が一夏に逝けのサインを出している

「な、無理に決まってるだろ！」

「なに、相手もここまで来るのに全力疾走してきて疲弊している。

お前なら

やれる筈だ」

と零治が言つても一夏は逝くのをためらっている。そんな一夏をみて

「さっさと逝け…！」

とオルカが一夏を足で前の大群に押しこむのであった。

「驚いているヒマは無い、今のうちに行くぞ」

零治はそう言うのと嘩然としているシャルルの手を掴み走り出しオルカもその後に続くのであった。

そして第二アリーナの更衣室に無事到着する。

「時間も無いから早く着替えたほうがいいぞ」

そうオルカが言い零治も「そのようだな」と言って着替えを始める。するとシャルルが

「わあっ!？」

と驚いたような声をあげる。

「どうした、荷物でも忘れたのか？」

零治が何事かと思いシャルルに聞く

「い、いや。大丈夫だよ！」

と少しオロオロとしていてなぜか顔も赤い。零治は何が原因かと思つてると

「アレじゃね？俺らの背中中の傷とか見て驚いているんじゃないか？」

そうオルカが言うのと零治はそれもそうかと思つた。

「すまないな、見苦しいものを見せてしまったな。俺たちは向こうで着替えて待っている」

零治がそう言うのとオルカと自分たちの姿が見えないように着替えた。そしてシャルルが着替え終わり零治たちと共にグラウンドに集合する。

「おい、織斑はどうしたと」

千冬が零治たちに聞いてくる

「女子の大群と戯れています」

その問いにオルカが答えるとちょうどよく一夏がやってくる。

「遅い、貴様はもつと早く行動ができんのか！」

そう言われて一夏は頭を出席簿でたたかれると、授業が始まった。

「では本日から射撃と格闘を含む実践訓練を行う」

「……はい!」

と千冬の言葉に元氣よく返事をする一組と二組の生徒たち。

「今日は戦闘を実演してもらおう……鳳、オルコット。お前たち二人だ」

二人ともその言葉を聞くと何故! ? といった表情になっている。

「何故という顔をしているな。理由は専用機持ちならすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

千冬がそう言うのと二人は

「なんでアタシが……」

「わたくしが何をしたっていいですよ……」

と不満を漏らしていると千冬が

「お前ら少しはやる気をだせ——あいつ等にいいところを見せれるぞ?」

小声でこつそりと二人に言ったのである。すると

「まあ、アタシの実力を見せるいい機会よね!」

「そうですね、やはりわたくしの出番ですわね!」

と急にやる気を出す二人。

「相手はセシリアかしら?」

「わたくしは構いませんわよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は——」

千冬が言おうとすると空気を裂くような音がする。零治はその音のする方向を見ると山田先生がこちらに向かってくる、いや、墜落してきているのが見えた。そして零治はとつさに近くににいるシャルルを軽く持ち避け、オルカもすぐさま退避し他の生徒たちも退避するが一夏は逃げ遅れギリギリのところまで白式を展開してなんとか受け止める。その光景を見て千冬はやれやれという感じであった。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だったんだ。腕前はかなりのものだ」

そう千冬は褒めるが山田先生は

「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし…」
と自身のことを謙遜している。

「さて小娘ども、さっさと始めるぞ」

「え？二対一で…？」

「それでは、さすがに…」

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

そう千冬に言われると妙に力がみなぎっている二人である。

「では、はじめ！」

千冬の号令とともに戦闘が開始されると生徒たちは夢中になって見始める。

「さて、今の間に…そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい。」

そう言い一呼吸おき喋りだすシャルル。

「山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発最後期の――」

そう説明をしているとオルカが小声で

「ありゃあ、勝負は見えたな」

呟くと零治も「そのようだな」と言った

「ん？やっぱり山田先生が負けるのか？」

とオルカたちの発言に疑問を持ち聞いてくる一夏

「いや、負けるのは鈴たちのほうだ」

「え、なんでだ零治？二対一でセシリアたちの方が有利じゃないのか？」

「確かに数的に有利なのは鈴のほうだろうな。だがそれはお互いが連携できていたときの話だ。お互いがしっかりとパートナーの動きを理解してないと逆に足を引っ張り合うことになる。一夏、お前はスポーツなどで初対面のやつと何も打ち合わせもしないで完璧に連携がとれるか？」

「いや、それは無理だな」

「だろっ？まあ、簡単に言えばそう言うことだ」

「なるほど。だけど、それでも第三世代二体はきついんじゃないか？」

「まあ、二人とも自分のISの性能を完璧に理解していたらの話だがな。さつきも言ったとおり連携ができてないと足を引っ張ると言っただろう。まず二人ともお互いのパートナーの位置を把握しようとしていない。そして鈴は射撃方のセシリアがいるのに衝撃砲を乱射しすぎているせいでせっかくの近接パワータイプが活かされていない。そしてセシリアもすぐにビットを出しすぎで、オールレンジ攻撃していたら鈴が近接戦闘をできないでいることになる」

零治が話していると他の生徒も零治の話を聞き始めているが零治はそんなことも知らずに喋り続ける。

「本来ならセシリアが射撃で鈴を援護して、鈴は近接戦闘で仕掛けていく。そしてインファイトに持ち込もうとすると、おそらく射撃を主に行っているの山田先生は距離をとろうとするだろう。その回避行動を先読みしてセシリアが射撃をしていくのがいいだろう。そして相手が近、中距離ではなく、中、遠距離の戦い方をしてくるなら誘導ミサイルを撃ったあとビットで追い詰めていき注意がそれてきたところを砲身と砲弾が見えない衝撃砲で撃つ。衝撃砲とは本来奇襲や不意をつくための武装だろうからな…おや、もう終わるようだ」

零治がそう言うのと鈴とセシリアは一まとめになったところをグレネードでやられて負ける。

「さて、これで諸君にもIS学園の教師の実力がわかっただろう。以後は敬意をもって接するように。それと三嶋。他人の説明中に喋るな」

「はい、すみません」

「でもまあ、戦闘の解説はなかなかのものだった」

「そうですか、ありがとうございます」

「では織斑、三嶋、リンクス、オルコット、シェリー、凰、デュノア、ボーデヴィツヒの専用機持ちは一人ずつ各グループのリーダーになれ。そして他の生徒はそれぞれ平等にわかれる。因みに一組から出席番号順だ」

そう言う生徒たちは皆分かれてISの装着と歩行の訓練をする。そして授業は無事に終わる。

「シャルル、着替えに行こうぜ」

と一夏がシャルルを誘った

「い、いや。僕は機体の微調整をしてから行くから先に行つてよ。あと時間かかるから待たなくていいからね」

「ん？いや、別に待つても平気だぞ？俺は待つのに慣れてるし」

「一夏。そこまでして男の裸を見たいとは…やっぱりお前、ゲイヴンだったんだな！」

「一夏：残念だ。シャルルお前も気をつけおけ」

一夏にオルカ零治の順でそう言う。

「だから、ちげえよ！」

「はいはい、わかったから」

一夏の反論を適当に流すオルカ

「まあ、昼の時間も少なくなってしまうからな。ではシャルル、先に行つて」

零治はそう言い、一夏とオルカと共に更衣室に向かった。

昼休み、零治たちは屋上にいた。

「…どういことだ」

と篤がそう呟く。

「ん？天気がいいから屋上で食べるって話だろ？」

一夏がそう答えるが

「そうではなくてだな……！」

箒がそう言いながら横に視線をやるとそこにはセシリア、オルカ、リリウム、鈴、零治、シャルルがいた。箒はもと一夏と二人つきりで食べようと思ってたが

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。シャルルは転校してきたばかりなんだし」

「そ、それはそうだが」

一夏がそういう理由で他の人を呼び二人つきりということができなかったのである。

「はい一夏。前に作ってくれて言ってたから」

そう言い鈴は一夏に小さめのタッパーを渡し一夏はそれを開ける

「おお、酢豚だ！」

「まあ、アタシの分を作るついでだけどね」

鈴も自分の弁当箱を開ける。

「そういえば鈴は酢豚を作るのが得意とかいってたな。なかなかに美味しそうじゃないか」

零治は鈴の弁当を見て感心する。

「あ、アンタもいる？」

「そうだな、貰えるなら是非もないな」

「そ、そう。じゃあ食べていいわよ」

と言い、ずいっと弁当箱を突き出してくる。零治は貰おうと思ったが自分の昼食は購買で買ったサンドイッチだけであり箸がないことに気づく。すると鈴がそれに気づき

「べ、別に。アタシの箸を使っていいわよ」

と言ってくる。

「そうか、助かる」

零治はそう言つと鈴から箸を貸してもらい酢豚を食べる。

「ど、どう？」

「ああ、美味しいな。さすが得意と言っただけはあるな」

「ま、まあね！アタシにかかればこんなもんよ！」

そう言つて勝ち誇つたように胸を張る鈴。

「零治さん。私のお弁当も味見してみてください」

そしてリリウムも負けずと言つてきた。

「ああ、そう言うなら頂こう」

そう言つてリリウムの弁当のおかずを1つ口にする

「うむ。リリウムのも美味しいな」

と零治が言いリリウムも勝ち誇つたように胸を張ると鈴とリリウムの間で火花が散っているように見える。

「オルカさん。わたくしも今日はこういったものを作つてみましたの。よろしければ、おひとつどうぞ」

セシリアがバスケットを開きサンドイッチをオルカに差し出す。

「ああ、あんがと」

そう言つてセシリアが用意したサンドイッチに手を伸ばし食べると

「……！」

オルカの体がビクツとなり汗がだらだらと流れ始める

（なんだこのサンドイッチは？ありえるのか、こんなサンドイッチが……！）

「オルカさん。どうかしまして？もしかして口に合いませんでしたの？」

と弱々しく聞いてくるセシリア

「いや、一瞬喉に詰まつただけだ。美味しいぞ」

オルカはその表情に負けてしまい。美味しいと言つてしまった。そしてセシリアはそれを聞くとパアツと明るくなりさらにオルカに進めてくる。

「よかったですわ。さあ、まだ沢山ありますのでどんどんお食べになつてくださいませ」

「あ、ああ……」

軽くごちない笑みでそう言うオルカ。するとその光景を見ていたシャルルが

「えっと、本当に僕が同席してよかったのかな？」

すこし遠慮がちにそう言った。

「まあ、そう言っな。そんなことを言ったら誘ってくれた一夏に
対して失礼になってしまうぞ」

「そうだぜ、男子同士仲良くしようぜ」

零治と一夏がそう言った。

そして楽しく賑やかな昼食を過ごし午後の授業も無事に終わり、夕
食を食べ終えて零治とシャルルは部屋に戻る。

因みに先月から零治、オルカ、一夏は三人とも別々の部屋になった
のである。

「じゃあ、改めてよろしく。零治」

「ああ、よろしく頼む」

零治はそう言いながら緑茶を入れてシャルルに渡す。

「紅茶とはずいぶん違うんだね。でも美味しいよ」

「そうか。気に入ってもらえて何よりだ」

「うん。そういえば朝からあたふたして聞けなかったんだけど、
零治ってあのレイレナード社の社長なんだよね」

「その通りだ。だがここでは只の一人の友人として見て貰えると
助かる」

「うん、わかったよ。正直大企業の社長を目の前にして内心はち
よつと慌ててたから」

「まあ、普通はそうなるかもな」

零治はふつと軽く笑いそう言った

「そういえば、零治たちはいつも放課後に訓練をしてるって聞い
たけど、そうなの？」

「ああ。俺は主に指導していることが多いがな」

「僕も加わっていいかな？」

「構わないがシャルルが思ったとおりに訓練はできないかもしれ

ないぞ」

「それでも大丈夫だよ。まあ正直に言つと零治の専用機を間近に見てみたいって言うのがあるけどね」

シャルルは軽く笑いながらそう言った。

「まあ、数少ない男性操縦者のISを間近で見たくなる気持ちもわからんでもないかな」

「やつぱり誰でも興味はあるよ」

「では、明日からよろしく頼む」

「うん。任せて」

二人はこの後、他愛の無い話をしていき、就寝時間になると寝るのであつた。

そして深夜二時ごろになると零治は目を開けて布団から出る。シャルルのほうを見るとどうやらぐっすり眠っているようであつた。零治はそれを確認すると廊下にて誰もいない場所に行くとポケットから携帯を取り出し電話をかける。

「やあ、零治君」

「こんな時間にすみません。大介さん」

「いやいや、大丈夫だよ。で、午後に言つてた頼みたいことって？」

「いえ、ちよつと調べて欲しいことがあります」

「調べて欲しいこと？」

「はい。デュノア社についてと、フランスの戸籍にシャルル・デュノアがいるかどうかについてです」

「わかつた。調べてみるよ。報告は少し時間が掛かるかもしれないけどいいかな？」

「はい。全然大丈夫です。助かります。あと、もう一つだけ頼みたいことが——」

「…わかった。最後のことに關してはやれるだけやってみるよ」

「わざわざ大変なことを頼んですみません」

「大丈夫だよ。むしろもっと頼っていいんだからね。なんせまだ君は子供なんだから」

「そうですか、ありがとうございます。では、これで」

「うん。じゃあまたね」

二人ともそう言つと電話をきつた。

そして零治は誰にも見つからないように再び部屋に戻り眠りについた。

第18話（後書き）

もうすぐ赤いアイツがやってくる日が近づいてきてだんだんとテンションが下がってくるこのごろです…

そして次回はアレですねギャルゲーなどでは必須イベントのアレですね

主人公のうっかりスケベスキルが羨ましい限りです…orz

てなわけで次回もよろしくお願いします。

第19話（前書き）

今回も、軽い捏造やら独自解釈が含まれますので気をつけてください（汗）

20：55に少しばかり加筆修正をさせてもらいました。
本当に申し訳ありません！m（＿）＿；）m

第19話

第19話

シャルルが転向してきてから六日目の土曜日午後、第三アリーナで訓練をしている。

「えつとね、一夏が零治たちに勝てないのは、単純に射撃武器の特性をきちんと把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？でも零治とオルカに関しては次元が違う気がする」

「まあ、あの二人はすごいからね。で、一夏はそれなり解っているけど、どちらかというと知識として知ってる感じのほうが大きいかな。あと一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く把握しなきゃ勝てないよ。特に瞬時加速は直線的だから軌道予測で攻撃できちゃうからね」

「…なるほど」

と一夏はシャルルの言葉をしっかりと聞いている

（シャルルの説明もわかりやすいなあ。そして実戦ときもそれに優しいし。まあ、零治とオルカもわかりやすいんだけど戦うとな…）

そう思い今までのことを軽く振り返る一夏。

（回想）

「さつきも言っただろう。ワンパターンで動くな」

「だから、そこで瞬時加速を使ってどうするよ。そんなのバレバレだぞ。ほつら、また直撃だ」

「もっと早く体制を立て直せ。そんなのでは、只のいいだぞ」
「そうそう、もっと避ける。じゃなきゃ風穴が開くことになっちゃうぞ」

〈回想終了〉

（ああ、本当に辛かった。あの二人は容赦なく攻撃をしてきて……。それに比べてシャルルはなんて優しいんだ。涙が出てきそうだが）
そう思っている一夏。

「一夏の白式って後付武装がないんだよね？」

「ああ。そうみたいなんだよ。しかもセンサーリンクも無いんだよ」

「そつか。じゃあ僕の射撃武器を貸すよ。それで難しいかもしれないけど目測で撃ってみようか」

シャルルはそう言って55口径アサルトライフル”ヴェント”を一夏に渡す。

「おお。零治やオルカのアサルトライフルとはなんか違うな」

「うん。零治たちのは特殊だよ。扱いは少し難しいけどね」

「ああ。使わせてもらったときは大変だったぜ。で、この構えはこつか？」

「えっと……もうちょっと脇を締めて。うん、そんな感じ」

「じゃあ、行くぞ」

一夏はそう言うのと引き金に力を込めるとものすごい火薬の炸裂音がある。

「おお。やっぱり速いな」

「そう。弾丸は面積が小さいから速いんだよ。だから、軌道さえあっていれば簡単に命中させられるし、外れても牽制になるからね」
一夏たちがそうやり取りをしていると

「おい」

とオープン・チャネルでラウラから声が飛んでくる。その相手はとうやら一夏のようなものである

「…なんだよ」

「貴様も専用気持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

ラウラはそう言っで一夏のことを鋭く睨む。そして一夏はそのことについて少し心当たりがあるのであった。

一夏は第二回IS世界大会、通称モンド・グロツソの決勝戦の日に誘拐されたのである。そして千冬が一夏を助けるために決勝戦を放棄したのである。それにより大会二連覇が確実と言われていたがそれが果たせなかったのであった。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成し遂げることができたのだ。だから

、私は貴様を―貴様の存在を認めない」

「また今度な」

一夏は戦う意思は無いというように言った。

「ふん。ならば―戦わざるを得ないようにしてやる!」

そう言い、突如ラウラはISを戦闘状態にすると左肩のレールガンから弾丸が発射された。

しかしその弾丸は一夏にあたることは無くゴギンツと鈍い音がするだけであった。

「…こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホツトなのかな?」

鈍い音の正体はシャルルが割り込んできて弾丸をはじいた音であった。

「貴様…」

ラウラは邪魔されたことに苛立ちを覚えてシャルルを睨みつける。

「ぷっ、ははは。ははは！」

と突如ラウラの後ろから声が聞こえるとラウラの後頭部に銃口のよ
うなものが押し付けられているのがわかった。

「零治、今のジョーク聞いたか？ドイツ人相手にビールだけでな
く頭もホットとか、はははっ！駄目だ、笑いがこらえられない」

どうやらその声の主はオルカであった。オルカは笑っているがしっ
かりとラウラから照準をはずさず、いつでも撃てるようにしてある。

「ふむ、今のジョークはなかなか良かったな」

と零治は関心している。

「なっ！貴様いつの間に後ろに…？」

「いつの間について、そりゃあお前が戦闘態勢に入ってレールガン
を装備して照準を定めたことからだけど？」

「そんなはずは…レーダに映ってなかったはずだ！」

「おいおい。自身のみを隠す用のECMを使っただけだぞ。そん
なことも説明しなきゃわからないのかよ」

オルカはやれやれといった感じで肩を軽くすくめる。

そして少しの間、硬直状態が続く。

「そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え
！」

突如アリーナにスピーカーから担当の教師の声が響いた。どうやら
騒ぎを聞きつけてやってきたようだ。

「…チッ。今日は引いてやる。次もこう上手くいくと思うなよ」

ラウラは悔しそうにそう言うと言いつと戦闘体制を解除して去っていく。

「一夏、大丈夫？」

「ミスタートラブルメイカー。大丈夫か？」

とシャルルとオルカが聞いてくる

「あ、ああ。助かったよ」

「では、今日はもうあがることにするぞ。四時を過ぎてアリーナ
の閉鎖時間にだからな」

零治がそう言う

「おう、そうだな。あ、銃サンキュ。色々と参考になった」

「それなら良かった」

そう言うてにつこりと微笑むシャルル。そして

「えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて」

とそう言うのに対し一夏は

「たまには一緒に着替えようぜ」

と、喰いついてくる

「い、イヤ……ちょっと」

シャルルがあたふたとしてしているとオルカが

「一夏、そこまで強引にすると本気でゲイヴンって呼ぶぞ」

「なっ！だから俺はそういう意味じゃなくてだな」

「一夏、もしかしたら俺やオルカのように背中などに生傷とかあってそれを見られたくないかもしれないじゃないか」

零治がそう言うで一夏はそれ以上詰め寄れなくなる。

「では、先に行ってる」

零治はそう言うオルカと一夏と共に更衣室に向かった。

一夏達の着替えが終わると

「あのー、織斑君、三嶋君、リンクス君、デュノア君はいますかー？」

山田先生の声がドア越しに聞こえる

「デュノア以外います」

零治がそう答える

「着替え中で無ければ入ってもいいですかー？」

「はい。大丈夫です」

山田先生の確認に零治がそう答えると「失礼しますね」と言って山田先生が入ってくる

「えっと、皆さんに朗報です。今月下旬から男子も大浴場が週二回ですが使えるようになりました」

「本当ですか！」

大浴場が使えるというのを聞いて喜んだのは一夏である。

そしてそんなやり取りをしていると

「…あれ、零治たち？何してるの？」

とシャルルが入ってきた。

「山田先生が大浴場を使えることを知らせに来てくれたんだ」

「そ、そう」

零治がそう説明するがシャルルはどこか焦っているようにみえた

「ああ、そういえば織斑君とリンクス君にはもう一件用事があるんです。二人とも専用機の正式な登録などといった書類を書いて欲しいんですが」

オルカと一夏は「わかりました」と言うと言山田先生とともに出て行った。そして二人が出て行く直後に零治の携帯の着信音が鳴り出し零治は電話にでる

「はい。三嶋です」

「ああ、零治君かい。言われてた調べものの報告だよ」

相手は大介からである。すると零治は

「シャルル。すまないがこの電話、ちょっと長くなりそうだから今日は先にシャワーを使ってくれ」

そう言うと言零治は更衣室からでていき人気の無いところへ行った。

「すみません。お待たせしました」

「大丈夫だよ。じゃあ報告してもいいかい？」

「はい。お願いします」

「じゃあまずは、シャルル。デュノアに関してから。零治君の予想通りシャルル・デュノアは偽装戸籍だったよ。本名はシャルロット・デュノアだね。どうやらデュノア社の社長の愛人だった人の娘だよ」

「愛人だった？」

「うん。その愛人は二年前に病気で死んでいるんだ。かなりの難病で現代医学では治せない状態だったらしい。フランスの国立病院

に一ヶ月以上入院して治療を試みたけど駄目だったみたいだ。その愛人が死んでからその娘はデュノア社に引き取られたみたいだね」

「…なるほど。それはなんともまあ」

「言いたいことはなんとなくわかるよ。じゃあ次はデュノア社についてだね。デュノア社は公式にシャルルという人物を専属のテストパイロットとはしてないみたいだね。まあ、ばれたときの逃げ道だろうけどね。ようするに使い捨ての駒にするんだろう」

「自分の実の娘を使い捨ての駒にするように指示を出すとは…」

「最悪だね。でも本当かどうかはわからないんだけど実際にそういう指示を出しているのは社長の本妻らしいって聞くね。もしかしたら泥棒猫の娘が！って感じなのかもね。まあ僕からはこんなものかな。なんか質問はあるかい？」

「いえ、特には…ん？」

「どうしたんだい？」

「ええ。確かシャルロットの母親はフランスの国立病院に一ヶ月以上も入院してたんですよね？」

「うん。そうだよ」

「じゃあ、そのときの治療費って誰が負担したんですか？」

「確かに、誰かわからないね。でも恐らく社長だろうね。毎月、愛人のところに多額のお金が振り込まれていたからね」

（自分の娘を駒としか扱わないような人間がわざわざそんなことをするか…？）

「大介さん。デュノア社の社長の愛人についてはスキャンダルなどでフランスの新聞とかに載ってたりしましたか？」

「そこも調べてみたけど過去20年近く漁ってみただけどそんなものは一つもなかったね」

（なるほど、そういうことか。だいたい見えてきたな）

「わかりました、ありがとうございます。そしてあの件について

はどうですか？」

「それについてはもう殆ど終わったよ」

「そうですか。助かります」

「じゃあ、他に何か用事があつたらまた電話してね」

「はい。では失礼します」

零治はそう言うと言つて電話を切ると部屋に向かつて歩き出した。

シャルル side

「……はあ……」

シャルルは自室に一人になると思わず溜め息が漏れる。

（僕は、零治や皆を騙してるんだよね…）

そう思うと再び溜め息がでてしまう。

シャルルはこの学園に転校してきてからまだ数日しか経っていないがとても楽しいと感じていた。零治をはじめ皆ととても仲良くなっている。まさに自身に下された命令を忘れてしまいそうになるくらい楽しい学園生活をおくっている。

シャルルはふと思うもし自分が性別を偽らないで女子として転校してきたらと想像すると皆は今と同じように接してくれる光景が頭に思い浮かぶ。同室の零治も女子ということで少しは遠慮がちになるかもしれないが今までとは差ほど変わらず接してくれるのであろうと思った。

しかし、そんな周りを自分は騙しているのだと思うと心が苦しくなる。

（…っ。そんなもしものことなんてあるはず無いのに…）

そう思うと更に心が苦しくなるような感じがするのである。

（…。シャワーでもして気分を変えよう）

シャルルはクローゼットから着替えを出すとシャワールームへ行きシャワーを浴び始める。

そして少しするとボディーソープが無いことに気づく。

（そうだった…昨日でできたんだっけ）

シャルルはどうしようかと思い悩む。

（そういえば、零治は長くなるかもって言ってたっけ）

そう思うと零治が帰ってくる前に取りに行こうと決断してシャワールームのドアを開けた。

S i d e o u t

零治は電話が終わり自室にたどり着き部屋に入る。

「今、帰った」

そう言っただけで部屋を見るとシャルルがいないことに気づくがシャワールームからの水音が聞こえるとシャワーの最中だとわかった。

（そういえば、ボディーソープが無いとか言ってたか？）

そう思っていると脱衣所と部屋の間のドアが急に開く。そこにはバスタオル一枚のシャルルの姿があり不自然なところといえば胸がついていることである。

「れ、零治…？」

とシャルルは急な出来事で思考が停止しているようである。

だが零治はそんなことを気にせずにクローゼットから予備のボディーソープを出すと。

「予備のボディーソープを取りに来たのだろう？」

と言ってシャルルに渡す。

「あ…うん…」

シャルルはボディーソープを手取るがまだ思考が停止しているようである。

「そんな状態でいると風邪を引くぞ」

「きやあ!？」

零治の言葉を聞きハツと我に返ったシャルルが急いでシャワールームへ逃げ込んだ。

そして数分後、再びドアが開く

「あ、上がったよ…」

零治は「そうか」と短く答えてシャルルの方を見ると今までとは違いもう男装をやめていた。

シャルルはベットに腰をかけると

「とりあえずお茶でも飲むか？」

「う、うん」

零治は緑茶を入れるとシャルルに渡す。

「あ、ありがとう」

シャルルはお礼を言うと言ったお茶を一口飲んだ。

「どうだ、少しは落ち着いたか？」

「うん。もう大丈夫だよ。それにしても零治はあんまり驚かないんだね」

「まあ、すまないが軽く調べさせてもらったからな」

「そっか…」

そう言うで一瞬沈黙が流れる。

「では、一応なぜ男装をしていたか聞かせてもらえるかな？」

「それは、その―実家からの命令。つまり僕の父親であるデユノア社の社長、その人からの命令なんだよ」

「愛人の娘だからか…」

「すごいね。そこまで調べてあるんだ…そう僕が引き取られたのは二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査している過程でES適応が高いのがわかって、非公式だけどテストパイロットをやることになったんだ。そして一度だけ本邸に呼ばれたときは本妻の人に殴られたよ『泥棒猫の娘が!』って言われてね」

シャルルはそう言うとはは、と愛想笑いでいてそれはとても乾いた声だった

「それから少し経つとね、経営危機に陥ったの」

「イグニツション・プランか…なるほど、それで広告塔ための男装か。そしてES学園に来てデータを盗む、か…」

「うん。そんなところかな。でも零治にバレちゃったし、きつと本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど。まあ今更、最初から何もできない僕には関係の無いことだけだね」

シャルルはもう諦めきっている様子であった

「なんだが話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと今まで嘘をついていてゴメン。あとは僕自身もどうなるかわからないけどね」

そう言つて頭を下げるシャルル。零治はそんなシャルルに対して口を開く

「無様だな」

零治の口から出た言葉は慰めや同情のものではなかった

「利用するだけ利用されて捨てられる。意思があつて利用されているならまだしも、そこには自分の意思も無く、全くの空っぽ。ただの操り人形。そしてその役目を果たせなくなった今も同じようにしているとは、本当に滑稽だな」

「っ！」

零治の言葉にシャルルは唇を噛み締める

「ふん。他人の敷いたレールの上を走り続けているとは…自分にはどうすることもできないから仕方ないという様に自分自身にもいいわけをしてるのであるうな」

「…るさい」

「ん？」

「うるさい！零治に僕の何がわかるんだよ！？」

シャルルは零治の今までの言葉を聞いてとうとう怒鳴ったのである
「僕を育ててくれたお母さんが死んじゃって、実の父なんか僕のことを見もしない！そんな中で誰も助けに来るはずもないでしょうっ！」

「はっ。なんだ、自分は悲劇のヒロインの様にしていれば誰かが勝手に助けてくれると思っっているのか？バカバカしい。自分から助けを求めずして一人前に悲劇のヒロインを気取っているとは…」

「じゃあ、助けを求めたら救われるって言うの！？」

「ああ、救われるんじゃないか？ただ、絶対なんてことは無いがな」

零治のその発言に更に怒りが増してきているシャルル

「お前は勘違いをしているようだから言っておこう。世界というものはな常に残酷なんだ。誰もが救いや幸福を求めれば幸せになれるわけではない。誰かが不幸になってこそ違う誰かが幸福になれるのさ。全員が幸福であつたら、もうそれは幸福とは言わない。そして救いなどを自分から求めない奴の所には絶対に幸福は訪れない」その言葉を聞くとシャルルは先ほど怒りが頂点まで達する寸前だったかそれがいつきに悲しみに変わった

「じゃあ、僕はどうすればいいの？」

シャルルは今にも泣きそうな声で喋る

「他人にどうすればいいと訊くのではなくて、自分がどうしたいかだ」

「僕は…僕は、助けて、欲しいよ…」

シャルルは消え入りそうな声で喋っている

「ねえ、お願い。助けてよ…もう他人が敷いたレールなんかやだよ。自分の意思が欲しいよ…！」

零治の服を涙を流しながら掴み言ってくる

「…わかった」

そう静かに言う零治

「え…？」

「なに。あんなことを言ったがシャルルのことは俺の中では大事な友人の一人だ。その友人が本心から助けると言っているなら、俺はできる限りのことをするまでだ」

シャルルは零治の助けしてくれるという返答に驚き、そしてほつとすると声を出して泣くのであった。

そして少し時間が経つとシャルルは落ち着いたのか泣きやんだ

「どうだ、落ち着いたか？」

「う、うん…ね、ねえ」

とシャルルは何か聞きたそうにしている

「なぜあのようなことを言ったか解らないって感じだな。簡単に言えば強引に無理やりでもシャルルの本心、要するに意思を聞きたかったわけだ」

「僕の、意思…？」

「そうだ。シャルルが助けてと願わずに勝手に助けてもらったとしよう、その状態だとシャルルの意思は無しに勝手に行動をして只の結果だけが残すことになってしまう。それでは駄目なんだ」

「なんで…？」

「それは、シャルルが…いや、その答えは自分で探してみたほうがいいな」

「えっ？教えてくれないの？」

「ああ。他人から与えられるだけは駄目だからな」

「わかったよ。頑張ってみる」

そう話しているといきなりドアがノックされる

「零治、夕食まだみたいだから来てあげたわよ」

と鈴が言ってきた

「シャルルとりあえずベッドの中に隠れておけ」

「わ、わかったよ！」

零治がそう言うときシャルルは慌ててベッドの中に隠れる

「零治、聞いてるの？ちよつと入るわよ」

そう言いドアを開ける鈴。だがなんとか鈴が開ける前にシャルルはベッドの中に隠れることができていた

「なによ、いるんじゃない」

「いないとは言つてないがな」

「返事しないのは似たようなもんよ。…あれ？ベッドで寝てるのはデュノア？」

「ああ。熱を出してしまつてな」

「もしかして風邪？」

「いや、あまり馴染んでない場所に急に転校したから疲労が溜まつてな。今日、一日寝ていれば治るさ」

「ああ、わかるわ。アタシも昔、こっちに来たばかりのときはそうだったもの」

「そういうことで俺一人で行くと言つていたところだ」

「デュノアの看病はしなくていいの？」

「凰さん。ぼ、僕は大丈夫だから」

「そう？じゃあ、その言葉に甘えさせてもらつたわよ。零治、行くわよ。それとデュノア。あんまり無理しちゃ駄目よ」

鈴はそう言つと零治と一緒に部屋を出て行き食堂に行と途中でリリウムと遭遇して三人で食べることになった。

そして夕食が食べ終わり部屋に帰る零治。

「すまない。遅くなつたな」

「ううん。大丈夫」

「一応、焼き魚定食を貰ってきたが食べられるか？」

「うん、ありがとう。いただくよ」

そう言つてシャルルは焼き魚定食をみるとどこかぎこちない笑みを浮かべる。零治はなんかあったのか？と思うがシャルルの様子を見てすぐに理由がわかった。

「あつ、あつ……」

と気弱な声を出している。どうやら箸が上手く使えないようである。

「すまんな、スプーンやフォークを貰ってこよう」

「だ、大丈夫だよ。頑張ってみるから」

「無理をするな。他人に頼ったほうが良いと思うがな」

「うん……」

と言ってシャルルは少し迷っている

「じゃ、じゃあ……えっと、ね。その……零治が食べさせて」

モジモジとしながら上目遣いで言ってくるシャルルを見て

「やれやれ、仕方ないな。今回だけだ」

そう言つてシャルルにご飯を食べさせて、食事が終わると二人は雑談をした。

零治はシャルルの夕食からの行動を見ていて

「ふつ。まるで妹のようだな……」

ポロツと言葉が漏れてしまう。そしてシャルルはその言葉を聞いて

「ん、零治に妹っているの？」

と訊いてみた。

「あ、ああ。シャルルのように世話の焼けるような妹だったよ」

「え？それって……」

シャルルが零治に何か言おうとすると

「もうそろそろ寝る時間だ。俺のことはまた今度に話すでしょう」と話を打ち切るようにした。

「う、うん。そうだね」

シャルルも普段と少しだけ違う零治に驚きそれ以上は聞けなかった

（確かに『だった』って言ったよね……）

零治の普段と少し違う様子に心配するシャルルであった。

「では、明かりを消すが。いいか？」

「うん。大丈夫だよ」

そついうと零治とシャルルは「おやすみ」と就寝の言葉を言い眠り

についたのであつた。

第19話（後書き）

今回も色々無理矢理がある気が…

そして今更だけど Fate / zero のアニメの作画が映画のらっきよ並ですごいと思いましたね。

ギルのバビロンなんか UBW のときよりかなり気合が入ってますし、でもあのクオリティーを維持しているということはスタッフが血反吐を吐いてそうですよね…

そんなこんなで次回も頑張ります。

第20話（前書き）

今回は多分無双ですね（汗

第20話

第20話

月曜日の朝

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、嘘ではないんですよ!？」

「それ、信じてもいいのよね!？」

一夏、シャルル、オルカ、零治が教室に向かってしていると廊下までに響く声に少し驚く。

「なんだ?」

「さあ?」

「どうせまた面倒なことだろうな」

「確かにな」

上から順に一夏、シャルル、オルカ、零治の順で言う

「本当だつてば!月末のトーナメントで優勝すれば織斑君たちと交際でき——」

「俺らがどうしたつて?」

「「「「「きゃあああつ!」「「「「「

一夏が会話をしている生徒に話しかけると会話していた生徒たちは驚きの悲鳴を上げて取り乱す。

「で、なんかあったのか?俺や零治、オルカの名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん?そうだった?」

「さ、さあ?気のせいですよ一夏さん」

「そ、そうですわ。きつと聞き間違いでしょ」

鈴、リリウム、セシリアはぎこちない笑みを浮かべて話をそらそうとする。

「わ、私は授業の準備のために席に戻ります！」

「じゃ、じゃあアタシは自分のクラスに戻るから！」

「わ、わたくしも自分の席につきませんと」

三人とも急いで移動するのであった。

「…なんなんだ？」

「さあ…？」

「興味なし」

「とりあえず席に着こう」

一夏、シャルル、オルカ、零治はそう言うと言いつと席に着いたのであった。

そして放課後第三アリーナ

「「あ」」

鈴とセシリア、二人ともISを装着して出てきてみると偶然鉢合わせして二人そろって間の抜けた声を出してしまう。

「奇遇ね。あたしはこれからトーナメントに向けて特訓するんだけど。セシリアも？」

「そうですね。わたくしも特訓をしに来ましたの」

「じゃあ、たまには一緒に特訓でもする？」

「そうですね。前の授業での反省もしっかりとしたいですし、お願いできますかしら」

そう話していると突如超音速の弾丸が飛んできた。

「「！？」」

二人はとっさに避けると弾丸が飛んできたほうを見る。するとそこにはラウラがいた。

「あら、いきなり攻撃とは何のつもりでしょうか？」

セシリアはラウラに尋ねるが返答がこない。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……」

ふん、データで見たときの方がまだ強そうであつたな」

セシリアの質問の答えとはまったく別のことを言ってきた。しかもその言葉はとても挑発的である。

「で？だから、何なのよ？」

「用が無いのでしたら、邪魔をしないでもらえます？」

鈴とセシリアはラウラの挑発に対して軽く受け流しているがラウラはそれが気に入らないらしく苛立ってきている。

「チッ」。二人がかりで量産機に負ける程度のものが専用機持ちとはな。数くらいしか能のない国と古いだけの国はよほど人材不足と見える」

「…それで、言いたいことはそれだけ？終わったならさっさとどっか行つてくれない？」

「できれば早くして欲しいですわ。時間がもつたないですわ」
依然と態度を崩さない二人に更に苛立ちをおぼえるラウラ

「はっ！いいだろう。貴様ら二人とも潰してやる」

「なに勝手に逆ギレしてんのよ…」

「まったく、ドイツの軍人というのは勝手に攻撃してきて更に逆ギレをするなんて、ずいぶんと落ちぶれたものですわね…」

鈴とセシリアは呆れたように言う。

「ほざくな。下らん種馬共を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

「—今なんて言った…？まったくこんな奴に話し合おうなんてしてたあたしがバカだったみたいね」

「場にはいない人間まで侮辱をするとは、ますます底が知れましてよ」

ラウラの言葉にとうとうキレた二人である。

「さっさと二人まとめて来い」

そのラウラがの言葉が戦闘開始の合図となった。

セシリアがまずスターライトmk.？を撃つとラウラはそれをかわ

し、そして鈴が死角から双天牙月で追撃をする。ラウラはその攻撃をとつさに避けるが別の方向からセシリアの攻撃にあたる。鈴は更に手を休めずに追撃を行う。その連携は前のときより格段と良くなっていた。

「チイツ！」

ラウラはだんだんと苛立つてくる。

そして鈴が攻撃を続けていると急に体が止まる

「！？」

鈴が驚いているとラウラが手についているプラズマブレードで鈴を切りつける。

「っ！」

そしてラウラが好機と思い鈴に追撃しようとするがセシリアの射撃により成功しなかった。

「鈴さん。大丈夫ですか？」

「大丈夫よ。それより、ありがと。助かったわ。けど今のつて…」

「ええ。おそらくAICですわね」

「やっぱりね。でもそうになると厄介、ねっ！」

そう言いながらラウラが撃ったレールガンの弾を避ける鈴。

「ふん。戦闘中にお喋りとは余裕じゃないか」

ラウラはそう言いながら攻撃を続けてくる。

《セシリア、作戦があるんだけど。いい？》

回避行動をとりながらプライベート・チャンネルでセシリアに呼びかける鈴

《ええ、聞かせてもらえます？》

そうセシリアが答えると鈴は説明する

《それは―》

そして戦闘が開始してから二十分ちよつと経つ。

「さつきからちよこまかと、鬱陶しい！」

ラウラは相手が思ったよりも実力があり怒りが増す。そしてわずかな隙ができる。鈴がセシリアに合図を送る。

するとセシリアのビットがラウラに対してオールレンジ攻撃をしかける。

「くっ！」

ラウラは若干かするが攻撃を避ける。すると鈴が双天牙月で切りかかる。それをギリギリの所で避けるラウラ。

「ふん。貴様等の攻撃などわかりやすい」

「そう、でしたらこれはどうかしら？」

余裕の表情を浮かべているラウラのところにセシリアが近接装備で切りかかるラウラはあまりの予想外の行動に驚く。そして絶対防御が発動しやすい鳩尾の近くを攻撃されてしまふ。そして少しひるんだ隙に鈴が衝撃砲を撃つ。

「バカめっ！」

ラウラはそう言う。とA I Cで衝撃砲を完全に無効化する。

「詰めが甘かったな。所詮はその程度だ」

ラウラは今度こそ勝ったと思いい隙ができている鈴に対しレールガンを向ける。

「あら、詰めが甘いのは誰でして？」

その声に対しラウラはハッと振り返るとそこにはセシリアが発射したミサイルが目の前までできていた。

「なっ！」

ラウラの驚きの声とともに爆発音が鳴り黒煙に包まれる。

二人は煙を見つめている。すると突如鈴に向かって何かが進んでくる。それはラウラが瞬時加速して鈴に突っ込んだものであった。

鈴は完璧な不意打ちをくらい壁に叩きつけられる。

「うっ！」

「鈴さん！」

セシリアが鈴のことを心配するがそれは致命的なミスだった。セシリアの一瞬の隙にラウラはワイヤブレードをセシリアに絡めせると

地面に叩きつける。

「きゃあっ！」

そして鈴が体制を立て直しラウラに向かって行くがAICにより動きを止められてしまう。

セシリアは鈴を助けようとするがラウラはそれに気づくとワイヤブレードをセシリアの首に巻きつけ、動けない鈴にも同じように巻きつける。

「やってくれたな貴様等。もういい、本当に潰してやる」

ラウラはそう言うワイヤーを締め付ける。いくらISには絶対防御があるとはいえ首を締め付けられてはどうすることも出来ないのである。二人は苦しそうにもがくが首のワイヤーはほどけない。

（これ以上はもう、駄目ですわ…）

（もう無理、意識が…）

セシリアと鈴がそう思っている。

すると突如レーザーが二人の首を絞めているワイヤーを焼き切る。

ラウラは突然の出来事で一瞬動揺する

「がはっ！」

すると突如ラウラの脇腹に膝蹴りがはいりアリーナの壁に吹き飛ばされる。

セシリアと鈴は首の締め付けが解けると咳き込む。そしてラウラを蹴り飛ばした人物を見ると、それはオル力であった。

「すまない。助けるのが遅くなった」

後ろのほうから零治の声も聞こえてくる。

「二人とも！」

「鈴、セシリア大丈夫か！」

それに続きシャルル、一夏。そしてリリウムと続いてやってくる。そしてさっきのは、どうやら零治がワイヤーを射撃で焼き切りその隙にオル力がラウラの脇腹にISの膝の突起部分で蹴り飛ばしたようである。

「う……。零治……」

「オルカ、さん。無様な姿を…お見せしましたわね…」

「無理して喋るな。零治……」

「ああ。オルカ、リリウム。悪いが二人を安全な所に頼めるか？」

「まかせろ」

「わかりました」

そう話していると壁まで吹き飛んだラウラが起き上がる

「またも貴様らか…！つくづく邪魔な奴らめ」

「…おい」

「なんだ？」

「なぜあそこまでした？」

「ふん。ただ単に強者としての私の力を見せ付けたただけだ」

「……」

零治はラウラの返答を黙って聞いている

「しかも、この生徒達もその代表候補生らも我が軍隊では生き残れない程に腑抜けているからな。私が軍人として教えてやったのだ。教官が私に教えてくれたようにな」

フハハハと笑いながら喋るラウラ

「貴様にも教えてやろう私の強さを」

「…喋るな、餓鬼が」

「！？」

いつもより低く、怒気を、いや、殺気を含んだ声に一夏やシャルル周りにいる人物は恐怖を感じていた。

「訓練しかしてないような軍人風情が本物の戦場をしまったような口を利くな」

「ふん。貴様のような奴よりは知っている」

「…そうか」

零治はそう言うとQBと瞬時加速を使いラウラの目の前まで迫りその勢いのままラウラの鳩尾に膝蹴りを入れる

「ぐうつ！」

ラウラはとつさの出来事に対処しきれずに直撃する。そしてラウラはなんとか体制を立て直し零治のほうをみるが、零治はすでに目の前まで迫ってきていた。

「チイツ！」

とつさに手をかざしてA I Cを発動するが零治はQ Bで回避してラウラの後ろに回りこみ右手にアサルトライフル04 - M A R V E、左手にショットガンS A M P A G U I T Aを出してラウラにほぼゼロ距離で撃つ。

ラウラは攻撃に怯み体制を立て直そうとするが零治が上手く立ち回り追い打ちをかけて相手に隙を与えず自分のペースに持っていく。

「どうした？本物の戦場とやらを教えてくれるのだろう？」

「くう……！」

周りはその光景に驚く。なぜなら学年でトップレベルに入るラウラ・ボーデヴィツヒに対して零治はワンサイドゲームを繰り広げているからである。まるでB級アクション映画で最強の主人公とやられ役という様にいと簡単にあしらっているのだ。

ラウラは必死に防御をしようとしているが零治は完璧に死角から攻撃してくる。そしてラウラはどうすれば反撃できるかと考える。I Sのシールドエネルギーはもう少しで三桁をきるまでに減ってくる。

「他の奴らと一緒にだと思ったか？」

そう言ってくる零治に恐怖心を覚えるラウラ。

「くっ……なめるなあ！」

決死の思いでプラズマブレードを振るうがその攻撃は空をきる。

「終わりだ」

零治はそう言い後ろに回りこむとラウラに04 - M A R V Eを突き刺そうとする。

しかし零治の攻撃は突如乱入してきた者によって止められる。

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

攻撃を止めたのは千冬だった。千冬は打鉄のブレードで零治の攻撃を止めたのである。

「模擬戦をやるのは構わんがここまでの事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントで安全に決着をつけてもらおうか」

「わかりました」

零治がそう言い武装を解除する。

「ラウラもいいな？」

「は、はい。教官」

ラウラも頷くが零治との戦いの恐怖からかほんの僅かに肩が震えていた。

「では、トーナメントまで私闘を一切禁止する。解散！」

千冬がそう言う。そして零治はオルカたちの方へ向かおうとすると

「三嶋。お前には話がある。この後着替えたら来い」

「すまない。俺は用事ができた後は任せた」

零治はそう言うのと更衣室に行き、着替えると千冬の所に行った。

そしてとある部屋。そこは密室空間で机を挟み向かい合うように椅子が二つある。零治は片方の椅子に座り、千冬は向かい側の椅子に座った。そして千冬の隣には山田先生が立っている。

「なぜ、あそこまでした？」

「あそこまでとは？」

「殺す気でいただろう」

千冬は元教え子のやられた状況に対して少しばかり怒りを覚えている

「殺すですか？そんなつもりはありませんよ。まず俺が本当に殺すつもりでいたらあそこまで時間は掛けません」

その発言に千冬と山田先生は驚く

「今、なんて言った？」

「ですから、殺すつもりでしたらとつくに終わってますと言ったんですよ」

「貴様っ…！」

ダンツと机を叩き立ち上がる千冬

「何を怒っているんですか？俺があなたの元教え子に過度な攻撃を行った事ですか？」

「それいがいに何があるかつ！」

その発言を聞いて零治はやれやれといったように肩をすくめる

「では、ボーデヴィツヒが鈴やセシリアに対して行った攻撃はどうなるんですか？」

「なんだと…？」

「知らないんですか。では管制室で監視カメラが録画してあるのを見てみたらどうです？」

「山田先生お願いします」

「は、はい！」

千冬が山田先生に言うのと山田先生は部屋を出て走っていく。そして数分後、千冬の通信端末に山田先生から連絡が来る。

「織斑先生。い、今からそちらのほうに映像データを送ります」

「わかった」

千冬はそう言うって端末に送られてきた映像データを開示してみるとそこにはラウラが愉悦に口元を歪めて鈴とセシリアの首をワイヤーで肉が食い込むほどに締め付けている姿があった。

「なっ！？そんな…」

そんな馬鹿な、と続けようとしたがあまりの驚愕でそこまで声が出なかった。

「わかってもらえましたか？確かに俺のあまりに過度な攻撃をしたことは認めます。ですがそいつの表情は楽しんでいるように見えますが？肉が食い込むほどまで締め付けいるのにですよ」

零治がそう言っているが千冬はいまだにこの映像が信じられないといった表情で見っていた。

「で、織斑先生。俺の処罰はどうなるんですか？自室謹慎ですか？」

「いや、いい。今回は両方とも悪かったということとで片を付ける」

「…そうですか。では俺はもう帰らせていただきます。鈴やセシリアが心配なので」

そう言つて席を立ちドアを開けて部屋をでていく零治。

「私は、アイツに間違つて教えてしまったのか…」

千冬は静寂に包まれた誰もいない部屋で拳を握り締め一人そう呟くのであった。

そして保健室にたどり着く零治

「すまない。遅れてしまったな」

そこにはベッドの上で休んでいる鈴とセシリアがいて周りにはリリウム、オルカ、シャルル、一夏がいた。

「怪我の具合はどうだ？」

「体もＩＳのほうも大丈夫よ。先生が今日一日休めば明日には登校できるつて」

鈴が元気をアピールするようにしてそう答えた。

「そうか。それはよかった」

「それよりも、助けてくれてありがとう。そしてゴメン。アタシを助けるためにやったのにそのせいで呼び出されたんでしょ？」

申し訳なさそうに言ってくる鈴

「なに、気にするな。呼び出されたといつてもどどういう経緯であそこまでいったかを聞かれたただけだ」

零治は心配を掛けないように軽く笑つて答えた

「それにしても。なんであんなことになったんだ？」

一夏が唐突に聞いてくる

「いや、そ、それは…」

「ま、まあ、なんと言いますか…」

と二人とも言いにくそうに、ごにょごにょと言っている。

「どうせあれだろ？向こうが突然発砲してきてたりするのに加えて挑発的なことを言っただらう？」

オルカがそう言ってくる

「え、ええ。そうと言えばそうなんですが…」

「挑発って、どんなこと言われたんだよ？」

一夏が再びそう聞いてくる

「そ、それは、なんていうかその…女のプライドを傷つけるような、みたいな」

鈴がおずおずと答える

「『女のプライド…？』」

零治、オルカ、一夏が同時に言い、いったい何のことだろうと思い鈴とセシリアに視線を送る三人。その視線に対してある意味で気まずそうにしている二人。

リリウムはその光景をみてどういうことかと察した。

「あの、一応病みあがりなのであまり詰め寄るのも少し控えたほうがいいと思いますよ」

と鈴とセシリアに助け舟を出す。そして三人とも口では了承していたがどうも女のプライドと言うのが気になるらしく鈴とセシリアのほうをチラッとみる。

「三人とも。女子には乙女の秘密がありまして、あまりずかずか入っていくのは止めたほうが身のためですよ」

リリウムは笑顔で言っているがあまりの気迫に三人とも冷や汗をかくと今度こそ止めたのであった。

そんなやりとりをしていると突如廊下のほうからドドドドッ！と地響きが聞こえてくる。すると

「三嶋君！」

「リンクス君！」

「デュノア君！」

「織斑君！」

とパンツと勢いのいい音とともにドアが開かれる

「……これ！」「……」

そう言つて女子達は申込書の紙を出してくる。

「ああ、学年別トーナメントの奴か」

零治がそう答えると周りの女子は私と組んで！などなどと言つてくる。

「すまないが、俺はシャルルと組むことになっている。そしてオルカも一夏とともに組むとなっているんだ」

そう言つと女子達は

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士というのも絵になるし……ごほんごほん」

「零×シャルにオル×一。夏の薄い本はこれで決まりね……」

などと言つて保健室を去つていく女子達

「ちよつと、待ちなさいよ零治！」

「オルカさんどうのことですの！」「

「零治さん、私との約束は！？」

などと詰め寄つてくる三人

「すまないが、昨日の内にもう出してしまつてな」

「ああ、だから今更は無理ということだ諦めてくれ」

零治とオルカがそう言つと

「そ、そうなのか？俺はまだ――グフツ！」

一夏が何か言おうとしたがオルカがそれを阻止する

「まあ、そういうことだ。悪いがもう部屋に帰らせて貰うぞ。さっきのようにまた集団で来られたらどうしようもないからな。ではシャルル行くぞ」

そう言つと零治とシャルルは一緒に出て行きオルカも一夏を引きずりながら出て行く。

そして零治とシャルルは部屋に戻る。

「あ、あのね、零治」

「どうした？」

「さつきはありがとう」

「なんのことだ？」

「ほら、保健室でペアのことを言い出してくれたの、凄く嬉しかった」

「そのことか。なに、気にするな」

そう言いながら零治は茶を入れてシャルルに渡す。二人とも茶を一口のみ一息つく。

「シャルル」

ふと零治が呼ぶ

「ん、なに？」

「今から重要なことを言うから聞いてくれ」

「……？」

シャルルは零治の言葉になんだろうと思う。

少しの間を空け零治は口を開きそこから出る言葉は驚愕のものであった。

「今週の日曜日にデュノア社の社長とISS学園で話し合いをすることになった」

第20話（後書き）

ACVの動画と言うか映像と言うか昨日の奴を見ました！
オーバードウェポン超カッケエエエエエエエエ！

特に若本砲がいろんな意味で最高すぎると思いました！

ていうか全身パルスとか流石変態企業ですねw

そして次の話はオリジナルになると思いますのでよろしく願います。

第21話（前書き）

今回は色々と独自設定が酷いかと思われませんが、
どうぞよろしくお願いしますm(____;)m

第21話

第21話

第三アリーナでの出来事から六日後の日曜日

零治は朝、起きると制服ではなくてスーツに、シャルルは制服へと着替え朝食を済ませると対面するための部屋へ向かう。

そして部屋の前まで行くと今回の対面で必要となる人達が見えてくる。

今いる人物はIS学園からは千冬、山田先生、シャルルの三人。

レイレナード社の方からは零治、大介、ユーリカ、リリウム（護衛として）の四人である。

「では、シャルルは隣の部屋にいてくれ。リリウム、ユーリカさん、山田先生。お願いします」

零治がそう言うとシャルルたちは隣の部屋に待機する。今回零治たちが使う部屋の構造は隣の部屋からマジックミラー越しで見えるようになっていいる部屋である。

そしてこの部屋に残ったのは零治、大介、千冬の三人である。

「あなたが織斑先生ですか。初めまして。僕は浅間大介といいます」

「初めまして。織斑千冬といいます。今日はよろしくお願いします」

そう言つて軽く握手を交わす二人。

するとドアが軽くノックされて「失礼します。」の言葉とともに一人の教師が入ってくる。

「もうすぐデュノア社の社長を他の教員がこちらに案内をしてい

ます」

「わかった。ありがとう」

千冬がそう言うとその教師は部屋を出て行き少しすると再びドアがノックされる。

「デュノア社の社長がお見えになりました」

そう言うとは今度は零治が「どうぞ」と言う。するとドアが開かれ男二人女一人、計男女三人が入ってくる。

男性のうち片方はサングラスを掛けていてよく見ると上着の懷が少し膨らんでいる。どうやらボーディーガードのようであり、女性のほうも同じくボーディーガードのようである。そしてその二人の間に立っている見た目はやわらかい男性がデュノア社、社長である。

「わざわざ、お忙しい中、すみません。初めまして。私はレイレナード社の社長を務めさせて頂いてます。三嶋零治です。お会いできて光栄です」

「おお、私はデュノア社、社長のアルベル・デュノアだ。こちらこそ会うことが出来て光栄だよ」

二人は軽く握手を交わすと席に座る。

「それにしても、この部屋でするのかな？」

「ええ。すみませんが、この件は色々と面倒なのでIS学園という中立の立場である者が安全に記録できるようにこの部屋にさせて頂きました」

「ほお、それなら仕方ない」

「では、さっそく話しに入りたいと思うのですが。よろしいですか？」

「ああ、大丈夫だよ。確か私の息子が君のISのデータを盗もうとしただったかな？」

「ええ。こちらで只の学園の生徒なら好奇心で終わらせたかったのですが、デュノア社の息子となると、流石にそうもいきませんので、もしかしたらと思ひまして」

「すまないね。私はそのようなことをしてくれと頼んだ憶えは無くてね」

アルベールはあくまでも白を切るつもりでいる。その態度に千冬は苛立ちを感じてくる。

「そうですか。ではこの件はあくまでもシャルル・デュノアという人物が単独で行ったと、そう言いたいのですね？」

「ああ、その通りだよ。なので、この後にシャルルを本国へ連れ戻して、しかるべき罰を与えなければならないと思うと本当に残念だよ」

アルベールのその発言に対して千冬が口を出してしまう。

「待つてください」

「なにかな？そして君は誰だい？」

「織斑千冬といいます。このIS学園の教師です」

「おお、どこかで見たことがあると思えば、第一回モンドグロッソ優勝者の織斑千冬ではないか。で、どうしたのかな？」

「本国へ連れ戻すと言いましたか？」

「ああ。言ったがそれが何か？」

「ええ。このIS学園では特記事項の第21により本人の同意が無ければ外的介入は許可されないはずですが」

「ふむ。確かにそのようなものがあつたな。だがそれは、あくまでも原則としてであろう？今起きている問題は企業間の大きなものまでに発展しそうなだよ。このいざこざがきちんと解決されなければ最悪戦争までになってしまうかもしれないのだよ？」

千冬はその言葉を言われると何も出来ないのである。

「では、シャルルを連れて帰りたいのだが」

「いえ、それはもう少し待つてください」

「今度はなにかな？」

少し急いでいるような感じがし始めるアルベール。

「どうしたんですか？そんなに急いで、なにか急がなければなら

ないことでも？」

「別に、そんなことは無いが」

「そうですか、ならよかったです。そういえばシャルルはアルベルさんと誰の子供なんですか？」

「昔に付き合っていた人と私の息子でね。産まれた後にすぐ別れてな、二年前ほどにその母親が死んでしまったから私が引き取ったのだよ」

「そうなんですか。でも驚きですね。いくら昔とはいえ大企業の社長と付き合っていた女性が妊娠したとなればスキャンダルなど大きくされそうですがね。ちなみにその女性のお名前はなんというんですか？」

「名前はレティシア・フェレルだよ。まあ報道などされなかったのは、たまたま運がよかったただだよ。ではもういいかね？」

そう言つて話を終わらせようとするが

「まあまあ、そう急がなくても」

零治は再びアルベルを止める。

「まだ何かあるのか？いい加減にしないか、さっきから相手に失礼だと思わないのか！？」

アルベルは少し大きな声で言ってしまう。

「これは失礼。そうですね。ではそろそろ聞きましょうか」

零治は涼しい顔でそう言う。

「早くしてくれ」

「ええ。では…シャルル・デュノアという男性操縦者をなぜ世界に向けて公表をしないのですか？」

「それは、まだ時期でないからだよ」

「そうですね？今、業界ではデュノア社は第三世代のことなどで経済危機に陥っていると言われてますが、もし男性操縦者の情報を公開すれば他のところからいくらでもバックアップを受けることが出来て第三世代も開発がしやすくなると思うのですが」

「そうかもしれないな。だが下手に情報を公開すると危険な目に合わせてしまうかもしれないと思ってね」

「そうですか、確かに親としては心配でしょう。ならば何故、シャルルを公式ではなく非公式のテストパイロットとしているのですか？シャルルを守るためであれば公式にしてあげたほうが何かと守りやすいと思うんですが」

「公式にしたらデータが漏れてしまうかもしれないだろ」

「いえいえ、非公式でもデータを取って保管している以上リスクは同じですよ。それとも公式に出来ない理由でもあるのですか？」

「まったく、さつきからなんだね？何を言いたいのだ？」

アルベールの苛立ちがだんだんと増してきている。

「そうですね。そろそろ茶番も飽きてきましたし、本題に入らせてもらいます」

「ああ。そうしてくれたまえ」

やつとかというような表情になるアルベール。

「では…本当にあなたとレティシアさんの間にシャルルと言う名の男の子はいるんですか？」

「なにを言っているのかね？」

アルベールはその零治の言葉を冗談を聞くようにして軽く笑いながら答えた。

「ですから、シャルルという子は産まれてないんですよ」

「バカなことを言うんでないよ。きちんとコンピューターのデータ上にも出産記録もあり、戸籍もあるのだよ」

「ええ。偽りのものですが」

「ほう、そのデータは偽りと言うことかね？戸籍は出来るかもしれないが、流石に出生記録は――」

「出来るんですよ国とグルならば」

零治がアルベールの言葉を遮りきっぱりと言った。

「可笑しなことを言うな君は。もし国とグルだったとしてなにか

証拠みたいなものはあるのかね？」

「はい。残念なことにあるんですよ」

余裕の表情で言っているアルベールだが零治の言葉に眉をピクリと動かしただけ。

「本当に手に入れるの苦労したんですよ。大介さん例のものを」

零治がそう言うとは大介はスーツケースの中から大きな封筒を出し、その封筒の中から紙を一枚出す。

「これです」

そう言うてアルベールにその紙を渡すと、アルベールは驚愕の表情をみせる。

「最近の病院は出産記録などPC上のデータで済ます所が多くて困ったんですけど、レティシアさんが出産した病院は紙の方でも記録をとっていたらしくて助かりましたよ。最初はそれまでフランス政府に奪われた人ではないかと思ひやひやしましたが、運がよかったです」

零治が渡した紙はレティシアの出産記録である。そしてそこに書かれていた子供の名前は

“シャルロット”

と言う名であり性別は女と記されている。

「つまり、あなたとレティシアさんの間にはシャルルと言う男の子はいないんですよ」

事実がアルベールに突きつけられる。そして今まで付き続けた嘘が明らかとなった。しかしアルベールは

「だから、どうしたというのかね？」

嘘や秘密がバレたが依然とした、いやむしろ開き直っているように見える。

「さっき、国とグルだと言ったかな？まあ、君の言うとおりだ。」

だからと言って君たちにはどうすることも出来ないと思うがね？」
その言葉に千冬と隣で聴いているシャルル、山田先生は軽く絶望している。確かに国グルみとなればどうしようも無いであろうが零治は「ふつ。私が勝てない交渉をするとも思っていたのですか？」
「なに？ならばどうすると言うのかね？」
アルベールがそう言うのと彼の携帯電話が鳴り出す。
「どうぞ、出て貰って構いませんよ」
そう言うときアルベールは電話に出る。そしてその相手は

「だ、大統領」

フランスの大統領である。

「久しいね。急で悪いが君に伝えなければいけないことがあったな」

「はい。なんでしょうか？」

「君にはデュノア社の代表を辞めて貰うことになった」
突然の言葉に驚愕するアルベール。

「な、なな、何故です、大統領！」

そう大きな声を出しながら立つアルベール。

「我が国の為だよ」

そう話していると零治が

「フランス大統領、聞こえてますか」

と言うとその声が電話越しにフランス大統領に聞こえたらしく

「アルベール君。そこに三嶋零治というレイレナード者の代表はいるかね？」

「は、はい。いますが…」

「そうか。なら変わってくれたまえ」

アルベールは顔を強張らせながら携帯を零治に渡す。

「お久しぶりです。エドモン大統領」

「おお、久しぶりだね。で、私の役目はやったぞ」

「はい。ありがとうございます。ではこちらにも約束はしっかり守

ります」

「なら、いいんだが。ついでにアルベール君に説明は」

「私の方からしておきますのでご安心を」

「そうか。なら後は任せたぞ」

会話が終わるとアルベールに携帯を返す

「そういうことだ、アルベール君。後の説明はそこにいる三嶋君から聞いてくれたまえ」

そう言うのと電話が切れる。するとアルベールの携帯を持っていた腕が力なく垂れる。

「なぜだ… いったいどうして…」

「なに、簡単なことですよ。この件を黙る上にISの第三世代開発などのことで交渉したら簡単にOKをくれましたよ」
簡単に言われるがアルベールは飲み込めないでいた。

「わからないようなので説明します。今回の件でフランスが我が社に喧嘩を売ったことになります。もちろんフランス政府は知らないなどの一点張りでしたが、さっきの出産記録を出し矛盾点を指摘しましたがそのことは黙ってあげようとして、更にデュノア社をレイレナードとBFFの企業連携に参加させてフランスのデュノア社のおかげで第三世代の開発が更に進んだということにすると言ったら簡単に食いついてきましたよ。それでデュノア社の権利を全て私にくれるという条件を出したらOKをくれました。要するにあなたは国に裏切られたんですよ」

零治がそういうとアルベールは力なく椅子に座り込んでしまう。すると近くに立っている男性のボディガードの電話に着信があったようでその相手を確認する。するとその相手はアルベールの今の妻オレリー・デュノアであった。

「社長、奥様からお電話です」

そう言っただけ携帯をアルベールに渡す。

「あなた、いったいどういうことなの!？」

電話を出ると急に怒鳴り声が聞こえる。

「デュノア社の社長で無くなっただって今連絡が」

「ああ。その通りだよ」

「…そうですか。ならあなたと離婚させていただきます」

「ああ。構わない」

アルベールは力なく答える

「では、あなたの側近に私がサインした離婚届けを持たせますので帰ってきたらサインをして出しといてください」

そう言うと言話はぷつりと切れてしまう。

「私がやってきたことは、いったい…」

アルベールがそう呟いていると

「無駄だったんですよ」

と無慈悲な声をする。その言葉に僅かながら苛立ちを覚える

「まあ、所詮実の子を道具扱いしてるんです。あなたにはお似合いの結果でしょう」

零治は皮肉を込めてアルベールに言う。アルベールは肩を震わせる。

「…さまに、貴様に何がわかると言うのだ!？」

きつと零治の言葉に怒りがきたのだろう。

「貴様のようなガキに子を守りたいという親の気持ちがわかるのか!？」

そんなことを零治は言われるが涼しい顔をしたままである。するとアルベールは息を切らしていたのを少し落ち着かせしゃべり始める。

「私は愛していたさ。レティシアをシャルロットを、だが別れなければならなかった。そうしなければあの二人を守ることができなかった。私とレティシアは親に交際を反対されていた。だが私は本当に彼女を愛していた。二人で駆け落ちをしようとさえ思っていた。するとシャルロットが産まれてな、私は嬉しかったよ。ああこれが私の愛しい子だと、そしてこれから幸せが続くと思っていたさ。だが私の親は今の妻である、いや“だった”だな。そのオレリーと

知らないうちに強制的に結婚をさせられていた。そして私はそのことに気づかずいつものようにレティシアとシャルロットに会いに行っていると突然あの女がやってきてな、何事かと思つたよ。だがあいつらは急に『私と結婚することになってます』といい始めたんだよ。私はもちろんそのことは知らないから『何のことだ！』つて言つたよ。そこで私がいつの間にか結婚させられてたことに初めて気づいたよ。私はそれでも断固反対したが、あの女は『あなたと私のお母様達の決定に逆らおうとするとはどういうことかわかつてますよね？』と脅してきたんだよ。その言葉とても絶望的だった。だから私は頼み込んだ。『どうか、レティシアとシャルロットだけは助けてくれ！』と頼み込んださ。そしたら二人に絶対に会わないと誓えつて言われたよ。私はその条件を飲むしかなかった。もし私が逆らえば二人は無事じゃすまない。だから私はその日を境に会うことはしなくなつた。本当に辛かつたよ」

淡々と語るアルベールのその姿はまるで懺悔をするかのようであつた。

「そして私は二人と離れることになつてからせめてもの罪滅ぼしで不自由な暮らしをさせまいと思ひ多少だが毎月お金を振り込んでいた。だが私はそんなことより二人に何よりも我が子に愛情を注がないのが一番苦しかった。新聞の小さな欄でシャルロットが絵画のコンテストで入賞したと知つたときなんて、すぐにでも会いに行つて、よく頑張つた、凄いじゃないか！と言い抱きしめたかつた。だがそれすらも叶わないんだ。その辛さが君にはわかるかい？そして約二年と半年前のことだレティシアが前から患っている持病が著しく悪化したと私に協力的であつた側近から聞いてな、なんとかして治せないかと思ひ秘密裏に国立病院を手配して治療をしてもらつていた。だが結果は残念だった」

そう言うアルベールのその表情はとても辛そうであつた。

「私は愛する人の最後を見送るどころか葬式にすら出ることが出来なかったのだ。そして私は一人となってしまったシャルロットだけはなんとしても守ろうと思い、シャルロットを引き取ることにした。ただあの女は断固拒否した。しかし私はシャルロットのIS適応値が高いことを知ると、テストパイロットと言うことで無理やり通した。するとあの女は渋々とその条件を飲み込んだ。私はそれを聞いたときやつと普通に会えることができると内心喜んだ。しかしあの女は必要最低限しか接するなと言い、それを破れば即追い出すと言ってきた。私は言い返したかったがISが出てきて女尊男卑の風潮が強まっており何一つ言い返すことが出来なかった。そのときにISなんてなければ良かったのと思ったよ」

ハハハと無理やりに乾いた声で笑うアルベール

「そして私は今年の初めになってシャルロットをIS学園にラフアールのデータを取る名目で行かせようとした。IS学園ならば少なくとも三年間は今までの生活より苦しくないように過ごせると思つてな、だがそれも却下されてしまつてな。そして2月、3月になるとISの男性操縦者が表れたと知ったとき、私はふと思いついたんだ。男性操縦者のデータを採取させる名目で行かせれば良いんじゃないかとな、そう思っているのと皮肉なことにあの女も同じことを考えてたようだったよ。そこからは今に繋がるわけさ」

アルベールが全ての思いを告げるとその場は静寂に静まり返る。

その静寂の中、千冬はふと思う。

もし自身等が無理やりな形でISを世に広めずにいたらこれほどまでに女尊男卑が酷くならなかったかもしれない。そしてもしかするとシャルロット達はもっと早くに救われたかもしれない。そう思うと悔しさからか拳を強く握る。

「さて私はもう帰らせて頂くよ。もう何も残ってないからね」

静寂の中アルベールはそう言う。

「娘さんには会っていきらないのですか？」

零治がふとそんなことを訊いた。

「それはやめておくよ。娘も家を捨てて親らしいことを1つも出来なかった、こんな親のことなど嫌ってるでしょう」

アルベールがそう言うのと零治たちのいる部屋が急に開く。

「そんなことないよ、お父さん！」

そう言うて入ってきたのはシャルル改めシャルロットである。アルベールはその姿を見て驚く。

「お父さんが僕のことをそんなにも必死に守ろうとしてくれてたなんて、知らなかった…」

シャルロットはそう言いながら涙を流し始める。

「なのに、僕は、僕はお父さんのこと…酷い父親だって、最低だって思ってた…ごめん、なさい…」

人前にもかかわらずボロボロと涙を流しているシャルロット。

「いいんだよ。私こそシャルロットやレティシアの傍に居てやれなくてすまない…本当にすまない」

そう言うたアルベールも涙を流し始めシャルロットとアルベールはお互いのことを抱きしめている。やっと親子の絆が戻った瞬間であった。

「お父さんの思いを聞いて、お母さんが言ってたことが、やっとわかった気がする」

「レティシアが…？」

「うん…よく僕に『お父さんはどんなときでもシャルロットと私の二人のことをずっと愛してくれているのよ』って」

「…そうか。そうか」

そう言うてシャルロットを抱きしめている力を少し強くする。

「シャルロット」

「なに、お父さん？」

「もし…もしこんな親でも良ければ私ともう一度やり直さないか？」

「そんなの、もちろんだよ。お父さん」

そう言う二人とも心のそこから嬉しそうに笑う。

「そういえば、伝え忘れていた事がありましたね。アルベールさん」と零治が切り出す。その言葉にアルベールは息を呑む。そしてシャルロットはアルベールの手を不安そうに握るがアルベールは大丈夫だよというようにしかつりと握り返す。

「デュノア社を実質上買い取ったのはいいんですが、そこをほぼ完璧に任せられる優秀な人材が居なくて困っていました。そこでアルベールさんほどの優秀な人物ならちよいどいいと思ったのですが」零治がニヤリと笑いながらそう言った。

「な、なぜ……!?」

「ですから人手が足りないんですよ。安心してください。社員はそのままですから。そして何よりもその社員達はアルベールさんを慕っているように見えるので。まあ、悪い話では、ないと思いますか?」

その言葉を聞くとシャルロットは啞然としている。

「フハハハ、ハハハッ!」

とアルベールは笑い出してしまう。

「何もかも君の手のひらの上で踊らされていたわけか。本当にまさかだよ」

「さあ、それはどうでしょう?」

「何にせよ、君には感謝をしなければならぬ……ありがとう」そう言うて頭を下げるアルベール。

「ふむ、私は貴方の会社を奪った人物ですよ。憎まれ口を叩かれても感謝される憶えは無いのですが」

「それならただの独り言と思ってくれたまえ」

「そうですか。では、先ほど言ったことの書類です。サインをお願いします」

零治はそう言うとき大介が出した書類を渡し、アルベールはそれを受

け取るとボールペンでサインをした。

「では、契約は成立ということ。あとのことは後ほど大介さんから説明をもらいますので」

アルベールがサインを書いた書類をそう言いながら受け取る。

「もう一度聞いても言いかね？」

突如アルベールが零治に言う。

「何をですか？」

「何故ここまでしてくれるのだね？これは君の一個人としての意見を聞きたい」

零治はそう言われると軽く考えるような素振りを見せてしゃべり始める。

「そうですね、子は何歳になろうと親は必要なものですよ。まだ未成年なら特に…そして親、家族に会え無いのは辛いことだと思いますね」

「そうか。つかぬ事を聞くが君の家族は？」

「私の産みの親は知りません。そして育ててくれた家族も十年前に他界し、その後に拾ってくれた恩師も去年に…」

その言葉に大介とユーリカ以外の聞いていた者は驚いた。

「…すまないことを聞いてしまったね」

アルベールは申し訳なさそうに言う。

「いえ、大丈夫です。今の私には大介さんとユーリカさんをはじめとする、我が社の皆が家族同様ですので」

「そうか。良き者に恵まれているのだな」

アルベールがそう言うのと零治は静かに頷く。

「では、私たちは退出させてもらいます。親子が久しぶりの再開をしたんです。積もる話もあるでしょう」

零治はそう言うのと席を立ちシャルロットとアルベールを残し部屋を出る。そしてボディガードの二人も気を利かせ部屋の外で待機することにしたのである。

「では、大介さん、ユーリカさん。後のことは…」

「わかった。任せておいて」

「大丈夫よ。零治君とリリウムちゃんは部屋に返っても大丈夫よ」
そう言うとお介はその場に留まり、ユーリカは千冬と山田先生と共に歩いていった。

「お疲れ様です、零治さん。では、行きましょう」

「ああ。そうしよう」

そう言うとお介とリリウムは歩き出した。

「それにしても、やっぱり優しいですね。零治さんは」

「優しい、か…」

「どうしたんですか？」

「なに、俺のやっていることは只の偽善だと思ってな」

「…そんなことはないです」

「いや、自己満足の偽善だよ」

「零治さんの中ではそういうふうに関め付けてるならそうなんでしょうが、私から見れば、たとえ偽善でも善ですよ。そしてそれによつて救われた人もいます。だからそこまで言わないでください」

リリウムは少し悲しそうな顔をして言う。

「…そうか。リリウムこそ優しいんだな。ありがと少し気が楽になった」

「そうですか。それはよかったです」

零治の言葉に軽く微笑むリリウムであった。

こうしてアルベールとの話し合いは終わった。
そして夜、夕食後。零治の部屋。

「ただいま」

とシャルロットがドアを開けて入ってくる。

「おや、まだ男子の格好をしているのか」

零治の目の前にいるシャルロットは男子の制服を着たままであった。

「うん。とりあえずは月末のトーナメントが終わるまではね」

「そうか」

「あと、ありがとう。零治。」

シャルロットはそう言って零治に頭を下げる。

「零治のおかげでお父さんともやっとちゃんと接することが出来たんだ。本当にありがとう」

「なに、結果的にそうなっただけさ、気にするな。あの人の気持ちを自ら受け入れることをしたのはシャルロット自身だ」

「でも、きつかけを作ってくれたのは零治だよ。だから感謝したいんだ」

「そうか、好きにすればいい」

そういうとシャルロットはえへへと笑う。

「そういうえば、まだ男子の制服のままと言うことはシャルルと呼んだほうがいいのか？」

「うーん、折角だからできれば名前前で呼んで貰いたいんだけどね、まあ後もう少しだし頑張るよ」

すると零治は少し考える。

「では、シャルと呼んでもいいか？」

「ふえ？」

突然の言葉に間の抜けた返事をするシャルロット。

「いや、シャルロットの名を親しみを込めた愛称みたいな感じで呼ぼうと思ってな。これならもう名前を偽らなくても大丈夫だと思っただが、嫌なら止めるが…」

「う、ううん。いいよ！すごくいいよ！」

シャルロットはそう言ってはしゃぎだす。零治はそれに少し驚く

「そ、そうか。まあ、気に入ってもらえて何よりだ」

「ま、まあね。シャル…シャル、かあ。ふふふ」

そう言って満面の笑みを浮かべているシャルロットをやれやれと言

ったかんじで見ている零治。

「では、明日は月曜だからな。もうそろそろ寝るとしよう」
「うん、そうだね」

そういうと二人とも寝る準備を（別々の場所で着替えたり）して明日のために寝たのであった。

第21話（後書き）

シャルロットの問題はやっと終わりました。
ああ…長かった。

てなわけで次回も頑張ります。

第22話（前書き）

昨日更新するつもりだったのにできなくてすみません！

事情はいろいろあるんですがただの言い訳になってしまっんで何も
いえません。

本当に申し訳ないです。

今回は長めなのでお願いします。

第22話

第22話

シャルロットの問題が解決して数日後、六月の最終週の月曜日。学年別トーナメントが開催されるのである。

そしてこのトーナメントでは三年はスカウト、二年には一年間の成果の確認のために色々なところから人が来ている。

一年には今のところ殆ど関係ないが上位入賞者にはチェックが入るであろうと思われる。

そしてチェックがそれ以外にも入るのは、男性操縦者の三人である。

一人目は、レイレナード社の社長でもある三嶋零治。

二人目は、第一回モンド・グロッソ優勝者の弟、織斑一夏。

三人目は、殆ど情報が公開されていないイレギュラー、オルカ・リンクス。

この三人にもそれぞれの意味を込めてチェックが入るだろう。

零治に関してはレイレナードの主戦力でもあるかもしれないISの性能がどれ程のものを企業、国家などといった所から見ると、その役職の人物が来ている。

一夏に関しては、知らされている情報では千冬と同じ単一使用というのもあり興味を持った者どもが見に来ている。

そしてオルカに関しては、公開されている情報では、ISの構成は零治と似たところがあることからその繋がりについても調査を含めて見に来ている。

そして零治と一夏に対してはスカウトをしようにも後ろ盾があるが、

オルカに関しては学園で匿って貰っていること以外では何もなく、あわよくば数少ない男性操縦者を取り込もうと会場に来ているそっち関係の人間はそう考えているのであった。

そして零治たちは更衣室のモニターを見ていた。

「やれやれ、ここまで人が多いとはな」

零治がそう言って軽く肩をすくめる。

「そうだね。でも零治たちのことを見に来てる人も少なくとも無いと思うけど」

「純粹に応援に来てくれているなら歓迎はするが、残念ながら違うからな」

シャルロットの言葉に対して零治は皮肉交じりに答え、その言葉に「あはは」と苦笑いをするシャルロット。

「まあ、このトーナメントは、やることもやりそれなりに上までいったら適当に負けるさ」

と零治は言う。零治の考えではあまり他企業や国家のものに戦力を教えたくないという考えである。そしてシャルロットにもそのことを伝えると理解をしてくれたようであり、このトーナメントは中盤で負けるシナリオにしてあったのだ。

「俺も面倒だから、やることやったら後は適当にやるか」

とオルカもそうは言ってるが自身に後ろ盾がないことを理解しているために、あくまでも自分の手札を外に明かすつもりは無いのである。

「……」

その言葉に対して一夏は、いつもならばツツコミを入れるはずであるのだが沈黙している。

「どうした一夏？ やっぱり、あの眼帯ロリ娘との対戦を気にしているのか？」

その言葉に一夏は「ああ」と短く答える。どうやら鈴やセシリア。友達があそこまでされたのに対して怒っているのである。そしてそんな会話をしていると

「そろそろ対戦表が映し出されるはずだね」

そうシャルロットが言う。今回の対戦表は今までとは違う形、ペア対戦へと急になったので従来までのシステムが正常に機能しなかったので直前の発表となってしまった。

するとモニターの画面が変わり、待ちに待った対戦表が映し出される。

「――え？」

「ほお……」

と一夏、シャルルは同時ぽかんとした声を上げて、零治とオルカはとくに驚いたようではなかった。

そう、画面に映し出されていたのは、Aブロック一回戦二組目である。そして対戦あいてはラウラ、箒のペアであった。

因みに一組目は鈴&・セシリア対リリウム&・桐島（1組クラスメイト）のペアであった。

（Aブロック一回戦一組目）

「まさか、アンタと戦うとはね……」

「私もビックリしました」

鈴とリリウムがそういう。

「まあ、いろんな意味ではつきりさせるにちょうどいいかもね」「そうですね。では、勝たせていただきます」

「ふん。いいじゃないの、振り返ちにしてあげるわよー！」

そう言っていると試合開始のカウントダウンが始まり、残り五秒、四、三、二、一。そして試合開始のブザーが鳴る。

するとリリウムはまず最初に両方の背中の武器にハイレーザーキャノンHLC02-SIRIUSを出して直ぐに撃つが鈴とセシリアには避けられてしまうが二人を分断することには成功し、リリウムは鈴へと向かう。

《では、桐島さんお願いします》

《わかった。こっちは任せて、シェリーさん！》

リリウムはペアである桐島へとプライベート・チャンネルでそう言い、桐島もそれに応えた。

桐島の使用ISは打鉄である。彼女は家が剣術道場をやっているらしく剣を振るうことに関してはそこらの一般人よりも上である。

「やっぱり来たわね」

「では、いかせて貰います！」

そう言いながら両手にアサルトライフル063ANARを呼び出し撃ち始める。鈴は回避運動を行いながらリリウムに近づこうとする。しかしリリウムの射撃の腕は恐ろしく、なかなか思うように接近することが出来ないでいる。すると鈴は衝撃砲を牽制に使いながら近づくことにした。

「このっ」

そう言いながら左右の衝撃砲を左、右と一定間隔で撃ちながら来るが、リリウムは避けながら引き撃ちをする。

「に、逃げんじやないわよ！」

「ええ！？嫌ですよ！」

衝撃砲で牽制しながらもあまり近づけないことに若干ムキになり理不尽に言ってくる鈴に驚くりりウム。

そしてリリウムは桐島の方をチラッと見る。すると、やはり代表候補生相手ではかなり苦戦しているようであり、無駄に時間を掛けられないと思い軽く勝負に出ることにした。

「よそ見をしてんじやないわよ」

鈴はそう言つとさつきよりも強めで衝撃砲を撃った。するとリリウムはギリギリの所で避けてバランスを崩したように見える。鈴はそれを好機と思い一瞬で接近できる距離ではないので双天牙月を連結させて投げた。

するとリリウムは二連擬似QBを使い双天牙月を避け鈴の目の前にいつきに接近する。

「え……？」

鈴が少し驚いている隙に両手をショットガンSAMPAGUITAに変えるとほぼゼロ距離で連射する。

数発撃ち込まれると鈴は距離をとろうとするがインファイトの距離からはなかなか離れられないでいる。しかし鈴はリリウムの後ろから胴体めがけて、戻ってくる双天牙月を見てニヤリと思う。

なぜ戻ってくるかという、鈴が投げた双天牙月はブーメラン状でありブーメランとは投げた人物の手元に戻ってくるのである。

そして鈴が当たるとそう確信をしたときリリウムは、自身の肩辺りを中心に、足についているスラスターの推力を前に、上半身のスラスターの推力を後ろにして吹かし、戻ってくる双天牙月を綺麗に一回転、バク転をして避ける。

「はあ!？」

鈴はその動きに驚く。鈴だけではなく会場にいる殆どの者が驚いていた。

「貰いました」

リリウムはそう言つと右手をレールガンRG03-KAPTEYN、左手をグレネードランチャーGRA-TRAVERSに変えて左手のみ鈴に向けて撃つ。

そしてリリウムが放った弾が鈴に当たると爆発し黒煙に包まれる。その隙にセシリアのほうに右手のレールガンを撃つとセシリアは桐島への攻撃を止めて緊急回避をする。

《桐島さん大丈夫ですか?今から相手を交代しましょう》

《シェリーさん！助かったよ。じゃあ私は鳳さんのところに行くね》

そう言い。桐島は鳳のところへ、リリウムはセシリアの方へ向かう。

「あら、今度はリリウムさんですの」

「はい。では、参ります」

そう言つて両背を分裂型ミサイルS A L I N E 0 5（通称白栗ミサイル）に変えてセシリアに撃つ。セシリアはただのミサイルだと思ひ普通の回避行動をとろうとするとミサイルが分裂し小さなミサイルが八発でくる。そしてもう片方のミサイルも同じように分裂して合計十六発のミサイルがセシリアに向かう。その光景にセシリアは驚愕した。

「ミサイルが分裂なんて……くっ！」

セシリアは必死に避けようとするがミサイルの追尾性能が異常すぎて焦っている。そしてセシリアは重力も利用し下にいつきに下降し反転すると自身もミサイルを撃ち追ってくるミサイルと触れさせ爆発ですべて破壊する。

（なんなんですよ、あの異常な追尾性能は？）

そう思っていると突如ハイパーセンサーに警告音が鳴る。セシリアは慌ててリリウムのことをレーダーで探すがレーダー上には見当たらない。そしてハイパーセンサーで周りを見ると真後ろにリリウムの姿を捉えたが、すでに遅かった。

「これで……！」

そう言うリリウム。腕にはいつの間にか武器が射突ブレードK I K Uに変わっていた。リリウムはセシリアに対してK I K Uで打ち込む。ズトンッ！と大きな音が鳴り響きセシリアの表情が軽く歪み吹き飛ばされる。そしてセシリアが体制を立て直す前に右手のレーリングで追い討ちの一発を撃つとセシリアにヒットし、シールドエネルギーが0になった。

するとリリウムに大きな衝撃が襲い掛かり、シールドエネルギーがかなり削られる。

「っ！」

何事かと思うが、すぐに結論がでた。そう鈴の衝撃砲である。リリウムは鈴のほうを見るとペアの桐島が地面に吹き飛ばされていた。

「さあ、さっきの続きをやるわよ！」

そう言つて鈴が突っ込んで切りかかってくるのを回避する。

リリウムも反撃をしようとするが衝撃砲の強襲が完璧であり、鈴のペースに持つてかれて思うように反撃できない。

（あのと看倒してればよかったです）

そう少し後悔するリリウム。

「これならっ！」

リリウムはなんとかアサルトライフル063ANARを両手に出して弾幕をばら撒くが殆ど完璧に鈴の間合いになっていた。

そしてその状態が5分ほど続いている。

「しぶとい、わね……！」

「鈴さん、こそ……！」

鈴のシールドエネルギーはすでに二桁であり、リリウムも擬似QBや鈴の攻撃で地道に削られてギリギリ三桁である。一見リリウムが有利に見えるがペースは鈴のペースなので有利とはいえない状態である。

すると突如鈴が双天牙月でいつきに勝負を仕掛けてきた。リリウムは避けずに063ANARを交差させて斬撃を受け止める。

「このっ！」

「くっ！」

鈴とリリウムは鏖迫り合いのようになっている。そしてやはりパワータイプの鈴が勝ちリリウムを下に弾き飛ばし、鈴は衝撃砲でどめをさそうとして、リリウムも右手をレールガンRG03-KAPTEYNに変えて鈴に銃口を向け、二人とも撃とうとした。

すると、鈴の頭にゴンッ！と何かが当たると、シールドエネルギー

が0になり試合終了のブザーが鳴る。

二人とも何が起こったのかと思いあたりを軽く見ると、先ほどまで倒れていた桐島が打鉄の近接ブレードを鈴に向かって投げているのだ。彼女は鈴に吹き飛ばされたが若干シールドエネルギーが残っており、ひっそりと息を潜めてチャンスをつかっていたのだ。

「な、なんなよ〜！」

鈴は悔しそうにそう叫んで一組目の試合が終わった。

□

男子更衣室で一組目の戦いを見ていた零治たち。

「……」

零治はこめかみを軽く押さえやれやれといった感じである。

「「アホだな〜」」

とオルカと一夏は同じことを言う。

「さ、最後のあれ、結構痛そうな音したけど、大丈夫かな？」
とシャルロットだけは心配していた。

「まあ、そんなことより、次はお前らの出番ではないのか？」

零治がオルカと一夏にそう言った。

「そーい、や、そうだったな。じゃ、行くか」

「ああ、行ってくる」

オルカと一夏はそう言うのとピットゲートに向かった。

□

一回戦二組目

オルカと一夏はラウラ、第ペアの前に来た。

「こんなにも早く当たるとはな。しかも邪魔な相手を二人まとめでだ。まさに手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

ラウラの軽い挑発に一夏はそう答えるとカウントダウンが始まり、試合開始のブザーが鳴ると同時に

「叩きのめす」

とラウラと一夏は同じことを言った。そして一夏は瞬時加速を使う。

「おおおおっ！」

「ふん……」

突っ込む一夏に対しラウラは冷静に、右手をかざしAICで対処する。

「くっ……！」

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

ラウラが嘲笑うように一夏に言い、一夏も負けんばかりにそう言った。

「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

そう言うトレイルガンを一夏に向けようとする。

「——いや、お前は攻撃できずに俺に吹き飛ばされる」

そう言葉が聞こえると突如ラウラは膝蹴りにより吹き飛ばされる。そうあのときのように膝の突起部分で吹き飛ばされるのであった。

「また貴様か！」

ラウラは壁に激突する前になんとか体制を立て直す。

「やれやれ。一夏、感情に飲み込まれて行動をするな。それが命取りになる」

「すまん」

一夏がオルカの指摘に対し謝罪をすると

「私を忘れてもらっては困る」

そう言いながら第が現れるとオルカがマシンガン01-HITMA

NとショットガンSG・O700で迎撃をするが箒は実体シールドを展開して銃弾を防ぎながら切りかかる

「一夏」

オルカそう言うのと横に避ける。すると後ろから一夏が瞬時加速で出てきて切りかかると箒の近接用ブレードとぶつかり鍔迫り合いになると一夏が箒を押し始める。

「くっ！この……！」

箒はブレードをはじきいったん距離をあけようとする。

「オルカ！」

「言わなくてもわかってる」

そう言つてQBを使い箒の目の前に行く。すると箒は焦りブレードをオルカの頭上へ振り下ろすが、01-HITMANで受け止められ腹にSG・O700の銃口を当てられオルカが引き金を引く瞬間に箒は目の間から姿が消える。

「邪魔だ」

その言葉とともにラウラが急接近してくる。その姿を見るとラウラのISから伸びているワイヤーブレードが箒の足に巻きついていて、そのことからオルカは、ラウラが箒を投げ飛ばしたのだと判断した。そしてラウラはオルカにプラズマブレードで切りかかるが難なく避ける。

《一夏、こいつの相手をして時間を稼いでくれ》

《俺が！？流石に一人じゃ倒せねえよ》

《誰が倒せと言った？時間を稼げと言ったんだ。やれるな？》

《……ああ、わかった。任せてくれ》

一夏とオルカはプライベートチャネルで短くやりとりをする。

《そうか、じゃあ頼りにするぜ》

そう最後にオルカはそう言うのと箒の方へ向かった。そして一夏はオルカの最後の言葉を聞いて少し嬉しく感じた。

一夏はオルカや零治、シャルロット達とはレベルがかなり離れていていつも助けてもらったばかりで情けないと思っている一夏にとっ

ては、今まで助けられっぱなしの人物が自分のことを頼りにしていると言っ言葉がとても心強く感じるのであった。

（そうだよな、頼りにされたなら、期待に応えなきゃな！）
そう思いラウラに向かう。

「自らやられに来たか。いいだろう。まずは貴様からだ！」

そしてオルカはラウラの射程圏外にでると箒に突っ込む。

「む、オルカか……！」

「一夏じゃなくて悪かったな」

「な……！？バカにするな！」

箒は大きな声を出してオルカに切りかかるが、さっきと同じように01-HITMANで受け止められSG-O700をゼロ距離で撃つ。

「やれやれ。少しは学習しろ。そして感情に飲まれるな攻撃が単調になってる。それでは早死にするぞ」

「う、うるさい！」

そう言って再び切りかかる箒。

その光景をラウラは軽く目にする

「先に一人を潰すか。無意味だな」

「そう思ってんなら、そう思ってる」

「ふん。よく吠える。しかし貴様は近接戦闘しか出来ない身、選択を誤ったな」

ラウラはそう言っで一夏にプラスブレードとワイヤーブレードを使い切りかかってくる。それに対し一夏は必要最低限を捌き後は回避する。

「逃げ回るので精一杯か。ならもつと私を楽しませろ」

そう言ってラウラは更に攻撃してくる。そして一夏は前、オルカに教えられたようにして攻撃を捌きながら避ける。一夏はオルカとの特訓で回避だけはそれなりに上手くいくようになったのである。

オルカが言うにはISのハイパーセンサーは確かに全方位見ることが出来るが、だからと言って全方位を理解しているわけではない。そもそも視界とは人間が目にするものを頭がちゃんと理解することである。もし目に映るものだけが視界なのであれば、人間はほぼ180°。全てを見ていることになり、横から衝突する物体に気づき対処することだって出来るのである。そしてハイパーセンサーは全方位のものを映し情報として送るが、頭がそれを完璧に理解できずにいるため必ずしも死角と言うのは出来るものなのである。

「くつ。さつきからちよこまかと……鬱陶しい！」

ラウラが自分の攻撃が当たりはするものの、完璧に直撃はせずにいることに苛立ちを感じ始める。

（オルカに教えてもらった通りだ。これならいける……！）

そう思うがそれが一瞬の隙になりワイヤブレードの一本が直撃し体制を崩してしまう。

「ぐっ！」

「ふはははっ！これで終わりだ」

ラウラはそう言うと言った通り、プラズマブレードを解除し両手を交差させ手のひらを一夏に向けてとAICを発動し、六つのワイヤブレードが一夏に向けて発射される。

「ちくしょおっ！」

一夏が悔しそうに言うのと同時にワイヤブレードが全身を切り刻みシールドエネルギーを半分以上もってかれる。そしてラウラは更に攻撃をしていき一夏を地面に叩きつけると、レールガンの照準を一夏に合わせると突如横から音速を超えた弾丸がラウラへ飛来する。

「「！？」」

「すまない。遅くなったな」

そう言っただけで来たのはオルカだった。

「本当だぜ」

一夏は軽く冗談を言うようにオルカに言う

「少しばかり遊んでいたら遅くなった」

「おいおい、マジかよ……」

一夏はオルカの言葉に苦笑いをする。そして筭の方を見るとシールドエネルギーが0になり膝を突いている姿が目に入る。

「そして一夏。良くやったな。ここから反撃の時間と行くか」

「ああ、もちろんだ！」

そう言うトラウラに向かっていく二人。

□

そのころ観察室では、千冬と山田先生が試合を見ていた。

「す、すごいですねえ。たった二週間であそこまでの連携が出来るなんて、やっぱり織斑君ってすごい才能がありますよね。しかも回避行動に関しては前よりは断然よくなったと思います」

「いや、あれはリンクスが合わせているからであって、織斑自身はそこまで連携の役には立っていない。だが山田先生のように回避行動は良くなっているな。まあリンクスの教え方が上手いというのもあるだろうがな」

「そうですね。でも、リンクスくんって何者なんでしょうか？あれだけの操縦技術は私から見ても少しばかり、す、凄すぎるかと……」

山田先生ですらその操縦技術が異常に秀でていることがわかるのである。

「わからんな。ただ言えるのは三嶋、リンクス、シェリーの三人は異常に戦いなれているということだけだ」

「えっ！？シェリーさんですか？」

「ああ。他人の目を誤魔化しているつもりだろうがあの射撃の腕といいとっさの状況判断がずば抜けている」

千冬はリリウムのこともしっかりと観察をしていて、そこらの人間

じゃ気づかないことに気づいていたのだ。

「まあ、そんなことより試合を見たらどうだ山田先生」

「そ、そうですね。……あつ。織斑くんが零落白夜を出しましたね！」

「そうだな、どう転がるか見ものだぞ」

そう言う二人ともモニターに注意を向けた。

□

「うおおおっ！」

そう言いながらラウラに切りかかるが

「ふん。いくら威力が強かろうが当たらなければ意味は無い」

そう言うラウラはA I Cで一夏の動きを止める。

「別に腕のみにこだわらなくてもいいだろう。残念だったなここで貴様は終わ——」

「終わるのはお前だ、眼帯ロリ娘」

そう言うオルカは左手のレーザーブレード02・DRAGONS LAYERでラウラのレールガンを切ると、爆散した。

「くうっ……！」

「やれ、一夏」

「わかった！」

オルカの呼びかけに一夏は零落白夜を発動させるがエネルギー残量が0近くになりすぐに刃が消えてしまった。

「詰めが甘かったな。エネルギーの使いすぎとは、貴様は学習しないのだな」

そう言うラウラが一夏に切りかかろうとすると。

「詰めが甘く学習しないのはお前のほうだろう」

そう言い横からオルカがラウラに向かって突撃をする。

「また、貴様かつ！だがこの停止結界の前では」

ラウラはオルカをA I Cで捕まえる。

「これで私の勝——」

「負けだ」

そう言うオルカの腕をみるとオルカの右腕は射突ブレードM U D A Nを持つておりその腕はラウラの鳩尾に伸びている。

「まさか……！だが、それごとくでは」

「悪いがこいつはそこらのパイルバンカーと一緒にするなよ。安心しろ威力は保障済みだ！」

オルカはそう言うつとM U D A Nを打ち込む

「がはっ！」

ラウラの鳩尾に直撃するとあまりの威力に意識が一瞬飛んだが何とか意識だけはしっかりと戻す。しかし意識が一瞬飛んだためにオルカを捕まえていたA I Cが解除される。

「A I Cが解除されたか。なら左腕の方も貰っていけ！」

そう言うつと左腕のM U D A Nもラウラの鳩尾に入れる。するとラウラとその機体に紫電が走り異変が起こり始める。

ラウラ s i d e

（こんなところで負けるのか……いや負けるわけには！）

ラウラは今までのことを思い返していた。

自身は試験管ベイビーであり戦うために産まれた。そして最強の戦士の証、越界の瞳、ヴォーダン・オーシエナノマシン移植処理を行ったが、不適合も起きないと言われていたはずのこの処置は制御不能の状態になった。そして最強の戦士の称号の変わりに出来損ないの烙印を貰うことになる。

そんなときに織斑千冬とであつた。今まで暗闇だつたラウラに光をさすかのように現れた。

「私が教えるのだ。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう」

そう言ったのだ。そしてその言葉どおりラウラは瞬く間に成績を伸ばしていき、最強の兵士ではなく兵器として君臨したのであった。そしてラウラは自身をその座に導いてくれた千冬という教官に憧れた。

（あの人の様に力に、力があれば他の奴を黙らせることだって出来る。そう、力さえあれば……！）

そしてあるときラウラは千冬に聞いた。

「どうして、どうすればそこまで強くなれるのですか？」

「私には弟がいる」

「弟……ですか。大切なんですか？」

「ああ、大切だよ。そしてあいつを見ると、強さとはどういうものなのか、その先に何があるのか」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいさ」

ラウラは自分が見ていた千冬と違う表情を見ると、それを否定し始める。

（違う、そんなのは教官の顔ではない！そうだその男を認めない。大切？大切なものを見て強さを知るのか？ならば私が憧れていて大切な教官を見ればわかるはずだ！そうだあの人は強い、圧倒的な力で周りを捻じ伏せる。あの人がその弟をみて弟のように強くなれるんだったら私はあの人を見れば強くなれる！そうだあの人になつてしまえばいいのだ！）

ラウラは産まれてから人との関わりをとっていなかった為、人の感情と言うのは理解できないでいた。そしてだれにも教えもされずにそこで唯一することが出来た人物にしか目を向けていないそこからラウラは自分の求める理想像を完成させるために力をより欲した。そして力を付けるたびにあの人へと近づけたと自分の中で勝手に実感していた。

そしてIS学園にきて初めて味わった敗北。

（三嶋零治。あの時の、あの男の目はとてつもなく恐ろしかった）
そうラウラは零治と戦ったときに最後の瞬間自分の死のイメージが
零治の瞳を映して見えた気がしたのだ。今まで味わったことの無い
死の恐怖にとまどっていた。

彼女は軍でもそれなりに訓練もして外へと行くが実際に人を殺した
ことは無いのである。そして零治の目はたまに会う歴戦の軍人の目
より恐ろしかったのである。

そして今戦っているオルカの目も零治と似ている事に気づく。そし
て二人の目の奥底を見ると直感的にわかった気がする。

この二人は本物の戦場を知っており人を殺したんだと。

（だから、だからどうした！なら私がまず目の前のこのオルカ・
リンクスを叩きのめせば、それ以上の力があると証明される！そし
てあの人へとまた一歩近づけるのだ！ならば……ならばもっと力が
欲しい。力が、欲しい！）
するとどこからか声がする。

「——力が欲しいか？」

（ああ、欲しい）

「——力が欲しいなら」

（さあ、私に）

「——くれてやる！」

（力を！）

Damage Level……D・

Mind Condition……Uplift・

Certification……Clear・

「Valkyrie Trace System」……boot・

side out

「あああああつ!!」

ラウラが叫びだし走り出した紫電が一層増す。オルカはとっさに放れた。

するとラウラのISの装甲がドロドロになり生き物のように姿を変えていくそれは変形と言うより変体である。そしてだんだんと形を成していき、最後には闇の底なし沼のようにラウラを飲み込んでいった。そして出来上がった形は千冬にとっても似ていた。

するといきなりその物体は一夏に向かって攻撃を仕掛けてきた。

「くっ!」

一夏とっさに避ける。すると白式はとうとうエネルギーが切れて装甲が解除される。しかし一夏は

「……がどうした……それがどうしたあつ!」

怒りに任せて生身で突撃をするが

「この単純馬鹿が、死ななきゃ治らないか!？」

オルカはそういつて一夏の首元を掴み後ろに放り投げる。しかし一夏はそれでも立ち上がり再び向かおうとするがその目の前に箒とオルカが邪魔をする。

「どけよ、二人とも!邪魔をするなら——」

そう言おうとするとオルカが一旦ISを解除し

「頭を冷やせ」

と一夏を殴る。

「状況を説明しろ。二度は言わない」

「あいつは……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉だけのものだよ。それを……くそっ!」

一夏はそう言つと拳を強く握る。

「あと、それだけじゃねえ。あんなわけのわからない力に振り回されているラウラも気にいらねえ。一発ぶっ叩いてやらねえときがすまねえ」

「それだけの理由で生身でいったのか……呆れるな」
「なっ！」

「お前は自分が何でもできると思っているのか？」

「だけど、俺は！」

「なら、お前はどうかやって戦う気だ？」

「そ、それは……」

そう言っていると

「トーナメントは中止！状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！」

とアナウンスで言っている。

「ほら、聞いている通りだ」

「だから、無理に危ない場所へ飛び込む必要はない、か？」

「その通りだ」

「違うぜ。全然違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃないんだよ。これは『俺がやりたいからやる』んだ。他の誰がどうだとか、知るか。大体ここで引いちまったならそれはもう俺じゃねえよ。織斑一夏じゃない」

その言葉にオルカはとても呆れた表情で喋る。

「やりたいからやるだと？お前、正義の味方にでもなったつもりか？自分の出来ることと出来ないことを解らない癖に一人前にぼさくな」

「じゃあ、じつとしていうのかよ！？」

「なに、お前のその理想みたいな妄言はよしとしてもな、そんな単純で済む物事じゃないんだよ。俺のようにお前より力があれば何でもできると思うか？いいや、何も出来ないんだよ。人、一人すら守れなかったんだよ俺は」

「……っ！」

オルカの発言に驚愕する。

「いいか、人、一人にできることなんてたかが知れている。だからこの場合は俺に任せろその後好きに説教でもしてろ」

オルカはそう言うで一夏たちの言葉を聞かずにラウラの方へISを装着し向かう。

「さて、眼帯口リ娘ちゃんよ。お前のくだらない妄想をぶち壊してやろう」

そういうと右腕にレーザーブレード02 - DRAGONSLAYER、左腕にLB - ELTANINを装備する。すると相手はそれを敵と判断して袈裟斬りをする。するとオルカは左腕のLB - ELTANINを高出力で出し相手の刃を蒸発させ右腕の02 - DRAGONSLAYERを出力を少し抑え一閃した。すると再び紫電が走り黒いISが二つに割れてそしてラウラが気を失うまでの数瞬に眼帯の外れたラウラ。そしてオルカは捨てられた子犬のようなラウラの目と自身の目が合った。

「やれやれ、手間のかかるやつだな」

そう言うてオルカは力なく倒れるラウラを抱きかかえた。

□

あの騒ぎから数時間後。保健室でラウラが目を覚ます。

「……ここは？」

ラウラは天井を見上げてそう言う

「保健室だ」

突如、横から声がする。

「お前は確か……」

「オルカだ」

ラウラは横見るとそこにはオルカがいた。

「何が……起きたんだ……？」

「機密事項だから俺の口からは言えないな。まあお前のとても懂れで、必死に真似をしようとした教官様とやらにでも聞けば、教えてくれるんじゃないか？」

「いや、いい。今のお前の言い方からして予想はついた」

オルカの意味深な言い方で大体の意味を察したラウラ。

「そうか……私が望んだからか。力を……」

ラウラはそう言うと言いつつ俯き自分が何をしたかったのか、何故あのようなことをしたかったのかと自分自身が解らなくなってきた。そんなラウラを見るオルカ。

「私は、いつたいだ——」

「誰なんだろうな。てか？」

ラウラが言おうとした言葉を先に言ったオルカ。

「……………」

その言葉に黙ってしまうラウラ。

「……やれやれ」

オルカは軽く溜息をつく。

「お前は自分のことを戦うために産まれてきたといったな」

「あ、ああ」

「じゃあ、お前はなんの為に戦う？」

「……わからない」

そう言うと言いつつ沈黙をってしまうラウラ。

「まあいい。お前にとある話をしてやろう」

「とある話？」

ラウラの言葉に軽く頷くオルカ。

「とある所に男の子がいてな。その男の子は、決して環境がいい場所では無い所で育っていてな。その男の子はな母親と二人暮らしをしていた。父親はこの誰だか知らない奴だ。そんな奴との間に産まれた子だ。だからと言って母親が子に暴力を振るっていたわけではない、むしろ大切に育てていた。そしてある日、母親と一緒に買い物に行くと街中で殺された。酔っ払いの喧嘩に巻き込まれてだ。そして男の子は一人なってしまう、それから数ヵ月後。とある研究員のような奴らがやってくるやと独り身の子供たちを連れて行った。そして連れて行かれた場所とはある兵器開発の研究所だ」

オルカは淡々と語る。

「その研究所で男の子はとある兵器を動かすための部品にされた。そこでの訓練は凄まじいものだった。使えないものや使えなくなつた奴は、すぐに廃棄される場所だ。男の子を含め部品となつた奴らは生き残るために必死にもがいた。そんな地獄のような場所で男の子は思つたんだ。『ああ、何のために産まれてきたんだろ』とな。その男の子はそこからただ命令されるがままに動いていた。そんなある日にその男の子は青年へと変わり、一人の女性と出会つた。その女性は青年の事を部品ではなく兵士として見てくれて、戦い方をはじめ色々なことを教えてくれた。青年はいつの間にかその女性に憧れていたんだろ。そして青年は戦う理由も無くその人のようになろうとしていたんじゃないかな。だが結局は自分は自分でしかない。そう気づいた。すると足元が不安になつたんだ。そんなときにその人から『お前は、何の為に戦う？』って言われてな。その青年は最初はわからなかったけど、とある戦いなどに触れていつて、やっと自分と言うものがわかり、自分は何の為に戦うのかと言う答えも見つけることが出来た。こうして空っぽな青年は答えを得たのさ」

オルカは何処か懐かしいような寂しいような目をして言っている。

「な、なあ」

ラウラがオルカに呼びかける。

「ん？」

「私でも……こんな私でも見つけれられるのか？」

「見つけれられるんじゃないか」

「試験管ベイビーの、この私が」

ラウラのその言葉を聞きオルカはやれやれといった感じで肩をすくめる。

「お前の産まれがどうだろうが、俺から見たお前は、傲慢で負けず嫌いなどといった様に見えるぞ。要するに、お前個人として見てるんだよ」

その言葉を聞くとラウラは初めて自分と言う個人を認められ、人の温もりを感じたのか安心の表情になると涙が流れる。

「あ、あれ？どうなっているんだ……？」

そんなラウラにオルカは頭を軽くポンポンと手を乗せた。

ラウラは、自分のこの不可思議な状態に戸惑ったが、オルカの手に触れると安心するのであった。

「あと、さっきの話だが」

そしてラウラが少し落ち着き質問をしてくる。

「その青年と女性は今はどうしているのだ？」

その言葉に一瞬ビックリするオルカ。てっきりその青年は自身のことだろうと聞かれると思っていたのだ。

「……そうだな、もう会えないな」

静かにそう言った。

「……すまん」

「いちいち、気にするな」

「あと、最後に1つだけいいか？」

「ああ、いいぞ」

「私にまあ言ったが、お前は何の為に戦っているんだ？」

「うん。昔は世界を変えるために戦っていたが、今は――」

「今は？」

「とりあえず、必死に生きるためだな」

ラウラはその言葉に啞然とする。

「なんだ、その顔は」

「い、いや。てっきりもつと凄いのが出てくるかと」

「やれやれ、人の理由なんてそんなものだぞ」

「確かに」

そう言くとラウラはクスクスと笑う。

「笑えるほどには元気が出てきたようだな」

ラウラの笑っている姿を見てそう言うオルカ。

「では、後は保健室の外で立ち聞きをしている先生に任せても平

「気そうだな」

「えっ？」

ラウラはその言葉に？を頭の上に出していた。

「やれやれ、気づいていたのか」

「そりゃあ、まあ」

「じゃ、俺はこれで失礼するんで」

「わかった」

千冬がそう言うのとオルカは立ち上がり、ドアを開け外に出ていった。

□

夜、食堂で零治達が食べ終わり片付けていると周りでは女子生徒の数十名が嘆きの声をあげながら走り去っていく。

「どうしたんだろうな？」

「知るか」

零治とオルカがそう言う。そして女子が去った後に、簞が一人だけ残っており、一夏がそれに気づくと近づいて話をしている。すると突然

「そんなことだろうと思ったわ！」

と簞の大声とともに一夏に正拳がはいり。さらに爪先が鳩尾にささる。

「だ、大丈夫かな？」

シャルロットは心配そうに言い

「おい、蹴りで浮かせたぞ………すげえな」

「ああ、蹴りで浮かせるとは………興味、ありだな」

オルカと零治はそう言って感心している。そこから一夏が復活するのは十五分後であった。

そして一夏復活すると山田先生がやってくる。

「あ、織斑くんたち。ここにいましたか良かったです」

「どうしたんですか？」

一夏がそう聞くと

「それがですね。今日から男子の大浴場使用が解禁になりました！」

その言葉に一夏が歓喜する。

「では、四人とも。早速お風呂にどうぞ。今日の疲れを癒してくださいね。では、私が大浴場の鍵を持ってますので——あっ！」

山田先生はふとシャルロットのことを思い出す。

「ん？どうしたんですか、先生」

一夏が山田先生のことを心配する。

「い、いえ！そ、その〜」

あたふたと困っている山田先生。そんな状況をみて軽く肩をすくめる零治。

「山田先生。確か俺とシャルは、ISの書類について書かなければならないことがあったと言いませんでしたっけ？」

零治が助け舟をだす。

「そ、そうでした！すみませんが織斑君とリンクス君。鍵を渡しますので使用が終わったら、すみませんが届けに来てください」

「そうですか。じゃあオル力、早速行こうぜ」

一夏は鍵を受け取るとオル力を連れて行こうとする。

「ま、待て。俺とお前の二人だけでか！？零治、お前は来れないのか」

「残念がらな、諦めてくれ」

「まあ、別にいいじゃないか。零治達がいらないのが残念だけど、せつかくだし男同士裸の付き合いと行こうぜ」

「は、裸の突き合い。だと！？た、助けてくれ！」

オル力は逃げようとするが一夏に掴まれて引きづられてしまう。

「か、管制室なにやってるんだよ！？う、うわああああああ！！」

と断末魔を上げながら連れて行かれたオルカであつた。その光景に山田先生とシャルロットは苦笑いをした。

「では、山田先生。俺らは部屋に戻りますんで」

「は、はい。三嶋君たち、ごめんね」

と謝ってくる山田先生。

「仕方ないですよ。僕のせいなんですから」

「で、でも」

二人を見ているとこのままずっと続きそうなので

「明日からは変わるんですから気にしないで行きましょう」

零治がそう言うのと二人は納得しおさまり、零治とシャルロットは部屋に戻るといつも通りに過ごし寝ることにしたのであつた。

□

そして次の日、朝のホームルーム。

「みなさん、おはようございます」

山田先生がそう言うところから挨拶が返ってくる。

「今日は、ですね……その、転校生といいますが、なんといいですか、すでに紹介は済んでいるんですが……」

山田先生はシャルロットのことをどうやって説明しようか迷った挙句

「と、とりあえず。入ってください」

諦めたのであつた。

「失礼します」

するとクラスメイトは聞き覚えのある声にざわつく。そしてスカート姿、すなわち女子の制服で入ってくるシャルロットの姿があつた。「シャルロット・デュノアです。皆さん改めてよろしく願います」

「ええと、デュノア君はデュノアさんと言うことですので皆さん

よろしく願います」

シャルロットの自己紹介が終わり、山田先生の説明も終わると周りの女子達は

「え？デユノア君って女の子？」

「おかしいと思ったよ！美少年じゃなくて美少女だったんだ！」

「あああ！夏コミの薄い本。もう男の娘で書き上げちゃったのに！」

「待つて！三島君って同室だから知らないって事は——」

「ちよつと待つて！昨日は確か男子達が大浴場を使ってたわよね！？」

そう言いながらざわつき始める。すると

「零治いつ——」

教室のドアがスパーンツ！と開かれ鈴が入ってくる。零治は本能的にヤバイと感じていると肩に手を置かれる。そして、その手の主を見ると

「零治さんには、ここで果てていただきます。理由はお解かりですかね？」

リリウムであり満面の笑みでそう言っているが目が少しも笑ってないなかった。

（くっ！こんなのが俺の最後だと！？認めん、認められるかこんなこと！）

零治は心の中でそう思っていた。

そしてこのカオスな状況の中に一人の人物がはいってくる。その人物は

「オルカ。オルカ・リンクスはいるか！？」

ラウラであった。そしてラウラはオルカを発見すると一直線に歩み寄っていく。

「ん？ああ、なんだ？俺にな——むぐっ！？」

突如オルカの顔を掴みキスをするラウラ。オルカは何が起こったか解らない様子であった。

「お、お前は私の嫁にする！異論は認めん！」

「よ、嫁え！？」

オルカが突然の発言に更に驚く。

「そうだ。この日本の文化では、気に入った、もしくは気になる相手のことを嫁にするのだろう？」

とドヤ顔で言うラウラ。するとオルカの真後ろに不気味な影が立つ。

「おほほ、おほほほほほ」

セシリアが不気味な笑い方をしながらオルカの真後ろに居た。

「ど、どうした？」

「いえ、後でじっくりとお話を、と思ひまして」

セシリアのあまりの気迫にオルカは

「だ、駄目だ！撤退する！」

そう言つて逃げようとするが

「どうした、わが嫁」

ラウラに掴まれて逃げることが出来なくなってしまいセシリアに肩をがっちり掴まれてしまう。

「AMSから光が逆流する。ギャアアアアアアアアア！」

こうして六月の大きな出来事は幕を閉じたのであった。

第22話（後書き）

やっと二巻の内容が終わりました。それにしても長い……

そして、もうすぐACVの発売まで一ヶ月きりますね！
ものすごいテンションが上がってきます！早く欲しいお！

んでもって次の話は日常回になります。
ええ頑張りますので、どうぞよろしく願いします。

第23話（前書き）

前回言ったとおり今回は日常回です。

第23話

第23話

七月のある日の日曜日。

「七月になると、さすがに暑いな」

「そ、そうだね」

この日零治とシャルロットは次週から行くことになる臨海学校の準備をしに、買い物へ来ていた。そして二人が歩いていると目の前に見覚えのある人影が映る。

「お、零治にシャルロットじゃないか。零治達も臨海学校の買い物か？」

オルカと一緒にいる一夏が聞いてくる。

「ああ。自分の水着が無くてな、必要みたいだから買いに来ただ。因みにお前らもか？」

「いや、オルカのただだぜ」

「ほう、オルカも水着とか気にするタイプなのか」

一夏のこたえに少し意外そうに言う零治。

「違う。俺は無くても良いと言っただが、あの鬼教師が『水着が無い場合はパンツ一丁で授業を受ける』と脅迫されたからだ」

オルカは生気の無い声そう言った。

「どうした、なにかあったのか？」

その様子に対して零治は聞いてみる。

「今日の朝も、俺のベッドに眼帯口リ娘がいたんだ」

オルカは力なくうなだれる。そう、あのVTシステムの事件（トーナメントの事件）以来、ラウラは毎朝オルカのベッドに潜り込んで睡眠をしているらしいのだ。全裸で。

〈回想〉

トーナメント事件の翌日。オルカは、いつものように軽く目を覚ますと時間を確認するためにゴロンと寝返りを打つかのようになると、手が何か軟らかいものを掴む。

「ん……」

そして自分のもの以外の声がする。

（なんだ、この感触は……？）

そう思いもう一度、手に力を入れてみるとまたもや、ふにっと軟らかい感触がする。そして声も

「ん、んっ……」

と聞こえる。

（嫌な予感しかしない。まさか、まさか……！）

オルカはそう思い、もう片方の手で布団を勢いよくめくる。するとそこにはラウラがいた。もちろん全裸で。

（あ、ありのままに起こったことを話すぜ。俺は昨日、記憶では確かに一人で寝たはずなんだ。だが朝、起きると隣には、全裸のラウラが居やがったんだ！な、何を言ってるか、わからねえと思うが、俺もわからねえ……頭がどうにかなりそうだぜ。催眠術だとか妄想だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……）

オルカが頭の中でそう思っているとラウラが目を覚ます。

「ん……。どうした……？」

「いや、どうしたじゃねえよ！」

「そうか……朝か」

ラウラは一人納得したように言う。

「そ、それにしても、朝からその……だ、大胆なんだな」

と顔を赤くしモジモジと言うラウラ。オルカは一瞬なんのことだと

思うが、自分の今掴んでいるものを思い出す。

「そ、そのだな。そのようなことを、したいので、あれば、な――」

「ええい、黙らんか！俺はそこまで物好きではないわ！」

とつさに手を放しそう言うオルカ。

「も、物好き……」

ラウラはオルカの言葉に軽いショックを受けたようであった。

「そ、そうか。私はやっぱり発育が……」

涙目になり始めているラウラ。その様子を見てオルカは罪悪感を覚える。

「ち、違うぞ、そういう意味でなくてだな……そ、そくだ！朝からそんなことをするのは嫌だという意味だ！決してお前の発育は普通だ。そう、普通だ！」

オルカの必死の言い訳を聞くとラウラは、表情が明るくなる。

「そ、そうだったのか。安心したぞ我が嫁」

「それはよかった。ってそうじゃなくてだな！」

オルカは忘れかけていた疑問を思い出す。

「ラウラ。俺の質問に答えてくれ」

ラウラの肩をがしつと掴みそう言う。

「あ、ああ」

「ラウラ。俺とお前は昨日どうしたんだ？」

「どうしたって、一緒に寝ただけだが？」

ラウラの言葉に驚愕するオルカ。もちろんラウラは寝るの意味を純粹に眠りにつくことを言っているのに対しオルカは別の意味でとらえていた。

（寝たああああ！？ま、待て……落ち着くんだ。ラウラは純粹に眠る意味で言ってるかもしれないぞ。そくだ、きつとそくだ！）
オルカは必死に自分を落ち着かせるとラウラに再び質問をする。

「な、なあ。昨日のお前の行動を教えてください」

最後の希望を託しラウラに聞く。

「うむ、教えてやろう。私は昨日、こっそりこの部屋に忍び込みお前のベッドに潜入をしてそのままぐっすりと眠って今に至るのだ」

ドヤ顔でそう言うラウラにオルカはほっとした。

「よ、よかった……」

「む、何がよかったのだ？」

「いや、何事も無くてよかったと思ったんだ」

「そ、そんなに心配しだったのか（私の身が）？」

「あ、ああ。そりゃあとても心配だったさ（社会的な問題で）」その言葉にラウラは頬を赤くし「そ、そうか」ともじもじしながら言う。オルカは何のことかわからずにいると、部屋のドアが開く。

「オルカさん。朝食をとらなければ遅刻して——」

そう言いながらセシリアがドアを開けていた。そしてセシリアの目に映る光景は、

オルカがラウラ（全裸）の両肩をがっしりと掴んでいて、ラウラはそれに対し頬を赤くさせてモジモジとしている。

「な、なな、なんてことを、していらっやいますの！？」

セシリアはわなわなと肩を震わせてそう言った。

「ご、誤解だ！俺は何もしてない！」

オルカは慌てて言うのと両手を放す。

「ふん。夫婦の朝の時間を邪魔するとは、不躰なやつめ」

ラウラは急に入ってきたセシリアに対してそう言う。

「何を世迷言をおっしゃっているのかしら？」

セシリアが言うのと、ラウラとの間に火花が散り始める。

「まあ、貴様がどんなに頑張ろうとも、私の魅力は勝てないがな」ラウラがセシリアの前に腕を組み仁王立ちをする。

「ふつ。そんな貧相なスタイルで魅力があるとおっしゃいまして？」

セシリアはラウラの体（特に胸）を見て、鼻で笑う。

「くっ……」

その視線と言葉に悔しそうにするラウラ。

「まあ、わたくしは、あなたのようにいちいちと全裸にならなくても女の魅力が出せますの」

セシリアは胸を強調するように腕を組み勝ち誇ったような顔をしている。

「ふ、ふん。そんな無駄な脂肪のどこが魅力だ」

セシリアのポーズに負けじと頑張るラウラ。

「む、無駄な脂肪ですって！？この、まな板娘！」

「な、なんだと！？この、牛乳めが！」

二人ともそう言うのと更に火花が激しく散る。すると二人とも同時にオルカの方を向き

「あなたは、胸の大きい女性と小さい女性のどちらが好きなんですの！？」

「どっちだ！我が嫁え！」

セシリアとラウラがほぼ同時に言ったが、そこにオルカの姿はすでに無かった。

「オルカさん！？」

「嫁！？」

二人はそのことに驚きオルカを大声で呼び、ラウラに関しては全裸で外に出ようとする始末であった。

（回想終了）

オルカはそのことなどなど思い出すと、一人黄昏ている。

「な、なあ、せつかくだから皆で買い物に行かないか？」

と一夏がオルカの黄昏ている姿をみて、とつさに提案をしてくる。

「そうだな、一夏ならこの辺りをよく知っているのだろう?。」

零治が一夏に訊く。

「ああ、殆ど知ってるぜ」

「なら、頼のめか。シャルもそれでいいか?。」

そう言いながらシャルロットのほうを見るが、シャルロットは軽く落ち込んでいた。

「どうした、シャル。体調でも崩したのか?。」

「別に――」

シャルロットは若干拗ねているように見える。しかし零治をはじめ、オルカと一夏も理由がわからないでいた。

「もしかして、無理に付き合わせてしまったか?。」

「……」

零治の言葉に無言であるシャルロット。どうやら違うらしいようだ。零治は全くわけがわからず、どうしたものかと考えている。そして、オルカや一夏に小声で聞いてみる。

「俺はどうしたらいいんだ……?。」

「わからねえ……」

一夏はわからないみたいである。そして今まで死んだ魚のような目をしていたオルカが何かひらめいた。

「あれだ、とりあえずケーキなどをご馳走しておけばどうにかなるんじゃないか?。」

「そうだな。そうしてみるか」

オルカたちとの内緒話が終わる。

「シャル。その、なんだ……今回のお礼に美味しいケーキを食べに行こう」

「ケーキだけ?。」

「いや、好きなものをいくらでもいいぞ」

「ん。あと、はい」

シャルロットはそう言うといきなり手を差し出すシャルロット。し

かし零治含め三人には訳が解ってない様子である。

「手、繋いでくれたらいいよ」

「なんだ、そんなことか」

零治はそう言うと言手を繋ぐ。するとシャルロットは妙にそわそわし始める。

「どうした？」

「な、なんでもないよ！うん。なでもないよ！」

と慌ただしく言ってくる。それを見て零治、オルカ、一夏は何のこ
とだかわかっていないまま歩き出した。

□

「……」

零治たちが歩いていくのを無言で見つめる三つの影。その正体は鈴、
リリウム、セシリアであった。

「……あのさあ」

「……なんですか？」

「……あれ、手を握ってない？」

「……奇遇ですね。私も同じように見えます」

「はあ……なぜわたくしまで……」

鈴とリリウムはどす黒いオーラを出しながら見つめている二人にセ
シリアは、完璧に巻き込まれていた。セシリアはオルカが他の女性
とイチャコラしていたのであれば行動してたが、零治がそうなって
いても関心が無いのである。

「すみませんが、わたくしは帰らせてもらいますわ」

セシリアがそう言って立ち上がると突然声がする。

「ほう、楽しそうだな。私も交ぜるがいい」

そこにはラウラが立っていた。

「あ、あんた！」

鈴はその姿に驚く。鈴は先月のことを思い出し、敵意を見せる。

「鳳鈴音」

ラウラが呼ぶと鈴は身構える。

「すまなかつた」

ラウラは鈴に対し頭を下げる。

「遅くなつてすまないが、あのときの事は申し訳ないと思っている。許してくれとは言えないが、謝罪の気持ちだけは受け取って欲しい。本当にすまなかつた」

あまりの出来事に鈴は驚く。因みにセシリアには既に謝っているのである。鈴もいきなり素直に謝られると彼女の性格上、文句を言いたくても言えないのである。

「ま、まあ、いいわよ。同じ間違いを起こさなきゃいいんだからラウラはその言葉を聞くと安心し「ありがとう」と言った。

「では、私はこれで失礼する」

「何処に行くの？」

鈴がラウラに聞く。

「ああ、我が嫁が前に歩いているのでな、交ぜてもらいに行くのだ」

「少しお待ちになつて」

セシリアがラウラを止める

「どうした、牛乳」

「ここは、いったん様子を見て、然るべきのところでアプローチをしたほうが効果的かと思ひまして」

ラウラの言葉に耐えそう言うセシリア。するとラウラは少し考え

「確かに、一理あるな。では、追跡をしようじゃないか」

こうして四人の尾行が始まる。

□

零治たちはショッピングモール二階の水着売り場に来ており、シャルロットとは30分後にと約束する零治。

そして零治とオルカは意外にすんなりと終わると早めに待ち合わせ場所に行き、一夏は他の買い物をするからといい後ほど合流することになった。

「おや、シャル。もう買い終わったのか？」

零治が先にいたシャルロットに声をかける。

「え、えつと、ちよつとね、零治に選んで貰いたいなあって」

「そうか。俺でよければ、いいぞ」

「うん。もちろんだよ！」

「オルカ。すまないが、ここで待っててくれ」

零治がそう言うのとオルカは軽く手を振りわかったとのサインをする。

そして零治とシャルロットが女性用水着売り場に行くとシャルロットと水着選びをすること数分。

「こ、これなんてどうかな？」

と言って持ってくるが、それを見て零治は啞然とする。

「シャル。それは、流石に……まずいんじゃないか？」

零治の言葉を聞いて自分の持ってきた水着を見るシャルロット。

「えっ？……………ああっ！」

と持っている水着をよく見ると、普通の水着を持ってこようとしたが間違えて大胆というか痴女の一步手前の水着を持ってきてしまったことに気づき大声をあげてしまう。

「ち、違っんだよ。僕はこんな趣味じゃないからね！」

シャルロットは慌てて弁解する。そして零治はシャルロットのてんばっている姿を見て軽くこめかみを押さえる。

「やれやれ……」

零治は周りの水着を軽く見ると、手に一つ取る。

「これなんてどうだ？個人的だが、シャルに似合いそうなものと、思ってた」

そう言つてシャルロットに渡す。

「まあ、嫌なら選びなおすが」

「う、ううん。そんなことないよ！」

シャルロットはそう言う満面の笑みになる。

「じゃあ、これにするね」

「試着はいいのか？」

「うん。零治が選んでくれた奴だからね」

「やれやれ、そこまで期待に応えられるかわからんぞ」

「大丈夫だつて」

シャルロットはそう言つて会計に持つていこうとする。

「シャル。それは俺が払おう」

「い、いいよ。そんな、悪いよ」

「まあ、礼の中の一つだと思つてくれ。なに、プレゼントだと思つて受け取ってくれ」

「そ、そういうなら……」

シャルロットはそう言つと零治に水着を渡す。零治はそのまま会計に行くのであつた。

□

一方そのころオルカはベンチでまったりとくつろいでいた。すると急に声を掛けられる

「あれ、リンクス君じゃないですか」

その声の方を見るとそこには、山田先生と千冬がいた。

「どうも」

オルカは軽く挨拶をする。

「リンクス君も水着を買いに来たんですか？」

「まあ、そんなところです。先生達もですか？」

「はい。せつかなので私たちも買いに来ました」

「え？織斑先生もですか？」

「ほう、何が言いたい……？」

オルカの言葉にある意味、楽しそうに言う千冬。

「いえ、普段の暴君の鬼教師からは想像が――」

と言いかけたところスパンツ！と音とともに言葉が遮られる。

「誰が暴君だ」

（あ、鬼教師は否定しないのね）

オルカがそう思っているともう一発叩かれる。

「何故叩かれるのですか？」

「今、かなり失礼なことを考えただろう？」

「なぜバレた……」

「顔を見ればわかる」

（セレンさんといい、こういう人は顔を見て考えが読めるのだから…… あっ、だから嫁の貰い手などがないのか）

オルカがそう思っていると千冬は

「言ったそばから……」

ともの凄い気迫を出している。山田先生はそれを見ると

「で、では、わ、私は先に行つてますね。お、織斑先生」

そう言う山田先生は早歩きで水着売り場とは別の方向に去っていく。すると

「まあ、そんなことはさて置いて」

と話題を変えようとする千冬。

「ラウラの件だが、ありがとう」

とオルカに言ってくる。

「なんのことですか？」

「お前が、私が気づかせることが出来なかったことをラウラに気づかせてくれたことだ」

「ああ、そのことですか。それは俺が気づかせたとかではなくて、あいつが勝手に気づいただけです。俺は何もしてません」

「……そうか」

オルカがそう言うのと千冬はそれ以上何も言わずにそう言った。

「では、そこに隠れている小娘どもも出てきたほうがいいんじゃないか」

千冬が急にそう言う。と柱の陰からセシリア、鈴、リリウムが出てくる。そしてタイミングよく零治とシャルロット、水着売り場と反対の方向に行ったことに気づき戻ってくる山田先生、そして個人的な買い物が終わった一夏がやってくる。千冬はその光景をみてやれやれと言った感じであった。そして山田先生は一夏の姿を見ると適当な理由をつけて一夏と千冬以外を連れて行く。山田先生の考えは姉弟水入らずという気遣いであった。

□

そのころラウラは、これ以上の尾行は意味ないと思い、適当に歩いていると水着売り場に辿りついた。

（水着か……まあ、学校指定のいいだろう）

と思っていると、とある看板が目に入る。

“この夏は、新しい水着であなたの思い人のハートをゲット！”
と書かれたものであった。

「思い人のハートをゲット……」

ラウラはそう呟き妄想する。

『ラウラ。その水着、全裸なんかよりも似合っているよ。そ

んな姿を見ることが出来るなんて、俺は幸せ者だな。キリッ!」
と妄想の中のオルカはそう言っていた。そしてそれを実現させよう
と考えた。するとラウラはISのプライベートチャンネルを開いた。

□

ドイツ国内軍施設。そこではラウラが隊長を務めているシュバルツ・
ハーゼ。通称、黒ウサギ隊が訓練をしていた。

そしてその中の副隊長クラリッサ・ハルフォールのISに緊急暗号
通信と同義のプライベート・チャンネルが届いた。

「――受託。クラリッサ・ハルフォール大尉です」

《わ、私だ……》

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、何か問題が起きたのですか?」

《あ、ああ……。とても重大なことだ……》

その言葉にクラリッサは部隊の人間に緊急招集をかける。

「――部隊を向かわせますか?」

《い、いや、部隊は必要ない。軍事的ではなくて、だな……》

「では?」

《オ、オルカのハートを、ゲットするには……ど、どのような水
着が、いいのだ?》

「……はい?」

思いもよらない言葉に思わず変な返事をする。

《だ、だから……。我が嫁、オルカのハートを、ゲットするに
は、どんな水着が効果的なのだ?》

オルカと言う単語を聞いてようやく理解するクラリッサ。

「オルカとは、隊長が思いを寄せているという彼ですか」

《う、うむ。オルカのハートを手に入れるには、ど、どの水着が
いいんだ?》

「水着……。そういえば来週は臨海学校でしたね。隊長はどのような水着をお持ちで？」

《が、学園指定水着だが――》

「何をバカなことを！」

《！？》

突然の声にビックリするラウラ。

「たしか、IS学園は旧型スクール水着でしたね。たしかにスクール水着はいいでしょう。しかも絶滅危惧種といわれる旧型。新型とは違い、下腹部のあたりにある謎のポケットがいいと思う男もあり、そして新型のあの太もを全体的に強調したスクール水着の方がいいと言う男もいて、派閥までできて対立し戦争に近いものが起こるほどのマニア心をくすぐられる最高の一品ですが、それでは――」

《そ、それでは……？》

「色物の域を出ない！」

《なん……だと！？》

「隊長は確かに豊富なナイスボディで男を籠絡というタイプではありません。ですが、そこで際物に逃げるようでは“気になるアイツ”からは動かないのです！」

《な、なら……一体どうすれば……》

「そんなこともあるつかと、私に秘策があります」

クラリツサはニヤリと笑い自信満々にラウラにそう言った。そしてラウラはその声がとても頼もしく聞こえた。

こうして皆は臨海学校に向けての買い物を済ませたのであった。

第23話（後書き）

ああ、後二日でアイツがやって来るとは、鬱だ・・・orz

誰だろうか、クリスマスをキリストの生誕祭ではないように情報操作したの・・・

第24話（前書き）

今回はいつもより短い？かもしれません

第24話

第24話

臨海学校初日。移動中のバスの中。

「おお、海だよ！」

クラスメイトたちが嬉しそうにはしゃいでいる。

「広いなー」

「まあ、海だからな」

バス内が盛り上がっているなかで零治とオルカはいたって普通だった。因みに席は公平を記すため、くじで決めた結果、隣である。

「どうした二人とも。せっかくの海なんだしもっと楽しもうぜ」と通路を挟んで隣から一夏が言ってくる。その言葉に適当に「そうだな」みたいなことを言っただけで流しているが、零治とオルカは別に海が嫌とか、そういう訳ではなく、4月からこういった大きな行事にことごとく事件が発生しており今回もなにかあるんじゃないかと思うと自然と溜め息が出てくる状態なのだ。

そして零治とオルカが、なにも起こりませんようにと思っていると

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと座っている」

千冬がそう言い、少しするとバスが目的地の旅館前に到着し、バスが四台停まると生徒が全員出てくると整列する。

「皆のもの、今日から三日間この花月荘にお世話になる。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

千冬が生徒に注意をすると

「『『よろしく願います』』」
一年生、全員がそろって挨拶をする。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があっていいですね」
と旅館の女将が微笑ましく言う。

「あら、こちらが噂の……？」

零治たち三人を見ると千冬に訊く。

「ええ。今年は男子がいるせいで、去年より手間をかけさせてしまつて、すいません」

「いえいえ、そんな。それに、しっかりしていそうな男の子たちじゃないですか」

「まあ、右と真ん中の二人はそうですが、左のはそう見えるだけです。ほら、挨拶をしる」

「三嶋零治です」

「オルカ・リンクスです」

「お、織斑一夏です」

「『『よろしく願います』』」

三人とも同時に挨拶をする。

「うふふ、ご丁寧にどうも。清州景子です」

女将が挨拶を返すと、女将の指示に従い旅館内に案内される。

「織斑、三嶋、リンクス。お前たち三人はこっちだ」

と千冬に言われ、ついていくとそこは“教員室”と書かれた場所であつた。

「こ、ここなんですか？」

一夏は不思議そうに訊くが零治とオルカは、納得していた。

「個室にすると馬鹿者どもが就寝時間をやぶって押しかけてくるだろう。だが、これなら近づかないだろう」

千冬の言葉に納得する一夏。そして零治達は部屋の中に入り、荷物を置くと千冬から大浴場の説明を受けると「今日は一日自由時間だ。好きにしる」との許可を得た。

「じゃあ、零治、オルカ。早く海に行こうぜ」

と一夏に誘われて一緒に更衣室のある別館に向かう。すると途中で地面にウサミミが生えていた。

「……」

三人はそれを無言で見ている。

「これって、引つ張っていいのか？」

一夏が疑問に思ったことを口に出す。

「知らん」

「俺も知らん」

零治とオルカはきっぱりと言った。

「で、でも、立て札には引つ張ってくださいって……」

「さあな、悪いが先に行かせてもらおう」

「俺も先に行ってる」

零治とオルカはそう言うのと更衣室のほうに歩いていった。

□

着替えて零治とオルカが海につくと少し遅れて一夏がやってくる。因みに零治とオルカはパーカーを羽織っており、首のAMSをちゃんと髪の毛の襟足＋パーカーのフードで隠してある。

「あ、織斑君たちだ！」

「う、うそっ！私の水着おかしくないかな！？」

「織斑君も体、引き締まっているけど、三嶋君とリンクス君なんてもっとすごい！」

「あの肉体で薔薇が咲き誇るのね！」

「三嶋君たち、あとでビーチバレーでもしようよ」

「ああ、時間があればな」

そんなやりとりをしながら進む。すると

「れ、い、じゅっ！」

と、そう言いながら元氣よく零治に飛び乗ってくる鈴。

「おや、鈴か。どうした」

「どうしたって、そりゃあ海に来たんだから、一緒に泳ごうって誘ったのよ」

鈴はそう言いながら零治の体を駆け上がり肩車の体制になる。

「やっぱ、零治は背が高いから遠くまでよく見えるわね」

「そうか。で、このまま海に行けと？」

「あたりまえじゃない」

楽しそうに笑いながら言う鈴。

「り、鈴さん。もう来ていたのですか」

リリウムがそう言いながら来る。そして鈴はリリウムに勝ち誇ったような顔をする。

「一足遅かったですか」

ぼそりと呟くりリリウム。

「ん、なんか言ったか？」

「い、いえ、なんでもないです」

リリウムは慌ててそう言った。

「そ、それよりも。この水着。ど、どうですか？」

白を基調とした水着を見せてくる。

「ああ、肌が白いリリウムには似合っていると思うぞ」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

頬を少し赤くしながら言うリリウム。

「ちよつと、あたしの水着はどうよ？」

突然、鈴が上から聞いてくる。

「あ、ああ、似合っていると思うぞ」

「ちよ、ちよつと、それだけ！？他に無いの？」

「いや、急に背中に乗られたからな、一瞬しか見えなかったんだ。すまない」

鈴はすぐにでも零治の目の前にでて水着姿を見せようと思ったが、

それだとこの特等席（？）から降りることになってしまうと悩んでいた。そしてもう一度リリウムの方を見る。するとリリウムは鈴に向けて勝ち誇った顔をしていた。

（こうなったら、仕方ないわね……）

鈴はそう思うと零治から降り、目の前に立つ。

「ど、どう？これでよく見え——」

「あ、零治。ここにいたんだ」

と鈴の言葉をさえぎられる。鈴はそのさえぎった人物を見ると、そこにはシャルロットがいた。

「ほら、ラウラ。そこにオルカがいるよ」

「う、うむ。だが、わ、私にも心の準備というものがあつてだな

……」

シャルロットの横にいるバスタオルをぐるぐる巻きの人物はラウラである。シャルロットは、いつまでもバスタオルをはずさないラウラを見ていると

「あつ。オルカがどっか行っちゃうよ」

と、軽い嘘をつく

「なっ！そ、それは困る。ええい！」

半ばヤケクソ気味にバスタオルをとる。

「わ、笑いたければ笑えばいい……！」

ラウラはもじもじと恥ずかしがりながらそう言う

「へえ、意外と似合ってんじゃないか」

オルカはすんなりとそう言う。

「そ、そうか。だが、あ、あまりジロジロと見ないでくれ。これでも、は、恥ずかしいのだ」

ラウラはそう言うがラウラが全裸でベッドに潜り込んだりしていることを知っている人物は

（いや、全裸のほうが恥ずかしいだろ。普通）
と思っていたのだ。

「ね、ねえ、零治。僕のは、どうかな……？」

シャルロットが後ろに腕を組みながら零治に聞いた。

「ああ、似合っているぞ、シャル」

「そ、そっか。えへへ」

と零治の答えに満面の笑みを浮かべている。鈴とリリウムはその光景を少しつまらなそうにみていて、何かが自分たちに足りないと考ええる。

（（なにか……そう、大切なものが……））

そしてとうとう気づく。すると二人とも自分の体を見て、次にシャルロットの体を見る。そして鈴とリリウムは信じたくないといった表情になり、もう一度自分の体を見る。“ぺたくん”次にシャルロットを見る。“たゆん”そしてまた最後に自身の体を見る。“ぺたくん”

すると鈴とリリウムは

（（力（＝胸のサイズ）が欲しい！））

と知っている。鈴とリリウムは目が合うと、同じ考えだとわかったのか、アイコンタクトをして、がっちりと握手を交わした。

「あら、オルカさん」

セシリアがやって来る。

「ん？セシリアか」

「そ、その、サンオイルを塗っていただけじゃないでしょうか？」

突然の申し出に周りの人（主に女子）が驚く。

「まあ、別にいいけど」

オルカがそう言う

「ず、ずるいー！」

「きつと、交代制よ！」

「じゃあ、私はサンオイルとってくる！」

「私は、シートを！」

「私は、パラソル！」

「なら、私はサンオイル落としてくる！」

などと女子が一斉に走り出す。そんな力オスな状況を作っており、零治のところには

「あ、いたいた」

「さつき言ったとおり、ビーチバレーをしようよ！」
と女子がやって来る。

「ああ、そうだったな。では、チームを分けをしよう」

零治がそういうと、じゃんけんでチームを決めた。因みにチームは零治、シャルロット、クラスメイトA、B対鈴、リリウム、一夏、クラスメイトCである。

「えへへ、零治と一緒にのチームだね」

「ああ、そうだな」

シャルロットが幸せオーラを出しているのを鈴とリリウムを見ると

「ねえ、リリウム。今だけ協力をしない？」

「ええ、とても同感です」

二人とも黒いオーラを出しながら言っている。

「じゃあ、行くよー！」

クラスメイトAがそう言っただけでサーブをすると、試合が始まる。

「ほい」

一夏が来たボールを拾う。

「鈴さん！」

リリウムが鈴に綺麗にボールを上げると

「任せて！」

と言いながら勢いよく跳ぶ。

（狙いはシャルロット！）

そう思うと全力でシャルロットに向けてアタックをする。

シャルロットは思ったよりも早いボールになんとかレシーブをしようとする。

「きゃっ」「ぼよん」

しかしミスして尻餅をついてしまうシャルロット。

「……」

点数が入ったのに無言の鈴とリリウム。

「大丈夫か、シャル」

「うん、全然平気だよ」

零治がシャルロットにそう言いながら手を差し伸べ、その手を取り立ち上がるシャルロット。

「それにしても、強いんだね。僕たちも負けてられないね」

「そうだな」

そんなやりとりを見ている鈴とリリウム。

「やったね。先制点取っ——ひいっ！」

クラスメイトCが鈴とリリウムに話しかけるがものすごい気迫にビツクリする。

「あはは、あはははは」

「うふふ、うふふふ」

鈴とリリウムは不気味な笑みを出しながらビーチバレーを再開していったのであった。

□

そして時間はあっという間に過ぎ、夕食も終わり、就寝時間までの自由時間、リリウム、鈴、シャルロット、セシリア、ラウラ、箒の六人は千冬の部屋に来ていた。因みに零治たちは部屋から外出中である。

「どうした、いつもの馬鹿騒ぎはどこいった」

「お、織斑先生とこうして話すのは初めてですし」

とシャルロットが皆の代わりにそう言う。

「しかたない、私が飲み物をおごってやろう。何がいい？お前ら」
突然の言葉に皆、言葉が出てこない。

「ほら、これでも飲め」

そう言つて冷蔵庫から飲み物を六本出すと適当に渡す。

「……い、いただきます」……

と全員が同じことを言い、渡された飲み物を口にする。

「よし、これで私もやつと飲めるな」

そう言つと千冬はビールを取り出し飲み始める。

「どうした、おかしい顔をして。私だつて酒ぐらいは飲む。因みにお前らに飲ませたのは口止め料としてだ」

そんなことを言っている千冬を皆は啞然と見ている。

「やれやれ。さて、前座はこのくらいで肝心の話をするか」

二本目のビールを開けるとともにそう言う千冬。

「お前ら、あいつらのどこがいいんだ？」

いきなりの質問だが、皆はあいつらとは誰か理解しているようであつた。

「わ、私は以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

「あたしは、相談によくのつてもらっているだけだし……」

「わ、わたくしは、もつとしつかりとしてほしいだけです」

箒、鈴、セシリアの順に答える。

「そうか。では、そのようにあいつらに伝えておこう」

「……言わなくていいです！」……

三人とも千冬の言葉に一齐に詰め寄つた。その様子を千冬は見ると笑う。

「ぼ、僕は——いえ、私は……すべて諦めていた私に、再び自分の道を歩くチャンスを与えたから、です……」

シャルロットが小さな声ではあるがそこには力強い意思が感じられたようであつた。

「そうだな、デュノアの言うとおりだな。だが、あいつは困っている奴がいれば同じことをしそうだな」

「ま、まあ、そこが悔しいかなあ」

シャルロットは照れ隠しをするように笑つた。

「で、お前は？」

千冬がラウラに尋ねる。

「わ、私は、教官以外に始めて自分のことをしっかりと見つめて個人として見てくれた事と、空っぽだった私に手を差し伸べてくれたことでしょうか……」

「そうだな、お前のことをちゃんと見ていてくれたな」

千冬はラウラの若干嬉しそうな顔をみるとやれやれと言った感じで軽く笑う。

「さて、最後にお前だが」

「私は、あの人は自分がどんなに絶望しても決して生きること諦めないところですかね」

リリウムは助けられたのもあるが、そのときに話を聞いていて、その時代での地上の人々は自分を含め殆どは、どこか生きること諦めたようであつたのに対し、零治の必死になつて生きる姿はとてもまぶしく見えたのであつた。

「……そうか」

リリウムの言葉に他の五人は少し理解できていなかったが、千冬はリリウムのその言葉だけを聞いて理解したようだった。

「まあ、せいぜい他の女に取られないように自分を磨けよ小娘ども」

三本目のビールを開ける千冬表情はどこか楽しそうであつた。

こうして臨海学校初日は、何事も無く終わるのであつた。

第24話（後書き）

もうすぐ年末、大掃除が大変だ・・・orz

掃除なんかよりACf aをやったりACVの動画を見てみたいです

（・ω・）

第25話（前書き）

今回もいろいろと酷いかもです（汗

第25話

第25話

合宿の二日目は、午前中から夜までと丸一日、ISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。

「ようやく全員集まったか。遅刻者はいないな」

千冬がそう言って生徒を見ると全員きっちり並んでいた。

「よし、それでは各班ごとに振り分けられたIS装備試験を行うように。専用気持ちは、専用のパーツテストだ。全員迅速に行え」

千冬の言葉に一同は返事をする、早速作業に取り掛かる。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

箒が打鉄用の装備を運んでいると、千冬に呼ばれ、そちらに向かう。

「お前には今日から専用——」

「ちーちゃ~~~~ん!!」

千冬が箒に何かを言いかけたが、こちらにやって来る別の声に遮られる。

「……束」

走ってくる人物をみると千冬はその者の名前を言った。

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、愛を確かめ合うためにハグを——ぎゃふんっ！」

飛び掛る篠ノ之束を容赦なく顔を片手で掴む千冬。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦の無いアイアンクローだねっ」

そう言いながら難なくアイアンクローを抜け出すと箒のほうに向く。

「やあ！」

「……どうも」

「久しぶりだね。大きくなったね、箒ちゃん。特にその豊満な胸がさらにでかくなっただね！」

そんなやりとりを啞然と眺めている一同。

「え、えっと、この合宿では関係者以外——」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。IS関係者と言うのなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」

篠ノ之束がそう言っていると

「おい束。自己紹介ぐらいしろ。うちの生徒たちが困っている」
千冬が篠ノ之束に対してそう言った。

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

「はあ……。もう少しまともにできんのか、お前は——っ！」
篠ノ之束の自己紹介が終わると、一瞬殺気のコもった鋭い視線が突き刺さる。その視線の近くにいた千冬は恐怖を感じゾクツとした。そしてその視線を送るものを見るとそれは、零治であった。

零治は篠ノ之束と聞くと無意識の内に殺気を込めた視線で睨みつけていた。零治は自身の行動に気が付くと、やれやれと呆れる反面ある意味安心していた。

（どうやら、俺はまだ、ヒトであるのだな）

零治は自分の心の奥底にある黒い塊のようなもの、復讐心のような感情が目の敵があらわれると滲み出ること若干安堵している。過去に起きたときには、そんな感情が表面上に出てこないことからとうとう自身の心はおかしくなったのだと思い、更に復讐をしても何も戻ってこないと理性が止めていたが、改めて敵があらわれることでにじみ出て来る黒い塊を実感することができたのだ。

千冬は言葉が一瞬止まるがすぐに

「ほら、一年。お前たちは、これのことは無視してテストを続ける。山田先生も気にせずに各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

と固まっている一年や山田先生に指示をだした。

「それで、頼んでいたものは……？」

箒がためらいがちに篠ノ之束に尋ねる。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

そう言つて篠ノ之束が真上に指をさす。すると金属の塊が砂浜に落下した。そしてその塊の外装がはずれて中身をみせた。

「じゃじゃーん！すごいでしょ。これぞ箒ちゃん専用機こと“紅椿”！全スペックが現行上回る束さんお手製ISだよ！」

（また争いの火種を悪戯に生み出すとは……）

その言葉に対して冷静を取り戻した零治は殺気は込めずに厳しい目で見る。

篠ノ之束は先ほどの視線に初めて恐怖を味わった。そして先ほどと違い厳しい目で見られているがおそらく先ほどの人物と同じだろうと予想をする。そしてその視線を表情には出さないように流しながら箒の紅椿を調整していく。すると周りの生徒達から

「あの専用機つて篠ノ之さんがもらえるの……？身内つてだけで」「だよねえ。なんかずるいよねえ」

そう言つてくる。因みにその生徒達は三組の生徒である。

「おやおや、歴史の勉強をしたことが無いのかな？有史以来、世界が平等であつたことなど一度も無いよ」

篠ノ之束が女子生徒の言葉に反応してそう返すとその女子生徒は気まずそうに作業に戻る。

「あとは自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくん、白式を見せて。束さんは興味津々なのだよ」

「え、あ。はい」

一夏はそう答えると白式を展開する。そして篠ノ之束は白式にコードを刺し、ディスプレイが表示されるとそれを見る。そしてぶつぶつと言っている間に作業が終わる。

「ありがとね、いっくん」

そう言うのと零治とオルカの方を振り向く。

「じゃあついでにその君らのISも見せてよ」

篠ノ之束はそう言うが

「断わる」

と二人に一蹴されてしまう。

「ふん」

断われたのに対してもつと言ってくるかと思われたが、その言葉でいっつきに興味が無いようになる。

（まあ、いいや。興味があるのは君たちじゃなくてISの方だからね。そうだ、勝手にハッキングしちゃおう！あの二人の背の低い方は箒ちゃんのことを蹴ったし、その仕返しでアレ（・・・）と同じようにウイルスまで流しちゃえ）

篠ノ之束はそう思うと、作業をすると見せかけて空中のディスプレイをいじりオルカのISにハッキングする。

（あ、あれ……？おかしいなー）

オルカのISに確かにハッキングしているが中身がほぼ全て見れないのである。そしてウイルスも流したのだが

（なにも起こらない？しかも、データも見れないや）

篠ノ之束はそのことに驚きさらに関心を持ちデータを探ろうとするがエラーの文字が出てきて何も出来ないのである。そして少しすると

（あれ、こっちにクラッキングし返されているよ！？）

突然の出来事に急いで接続を完全に断ち切る。

（危なかったな）。もう少しで乗っ取られるところだったよ。でもなんか面白そうなのは見たかも）

篠ノ之束はオルカの中のデータで搭乗者の首のところから接続するというものだけが唯一手に入れた情報である。

（でも、データが取れずにこれだけじゃよくわかんないからね。後にしよう）

そう言ってディスプレイを閉じると

「あー……ごほんごほん」

箒が気まずそうに咳払いをする。

「こっちはまだ終わらないのですか？」

「んー、もう終わるよー。はい三分たった。あ、今の時間で力ツプラーメンができたね、惜しい。んじゃ試運転も兼ねて飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

箒はそう言つとまぶたを閉じ、意識を集中させると、紅椿はもの凄い速度で飛翔した。

「どうどう？ 箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

「え、ええ、まあ……」

それを聞くと篠ノ之束は箒に紅椿の武器“雨月”と“空裂”を一通り説明すると

「じゃあ、これを空裂で打ち落としてみてね、ほーいっ」と

そう言つと十六連ミサイルポッドを呼び出し発射する。

「箒！」

一夏がその光景に心配をして名前を呼ぶが

「——やれる！ この紅椿なら！」

箒はその言葉どおりにミサイル全て撃墜する。

「すげえ……」

爆煙が晴れ、圧倒的なスペックを見せた紅椿が浮かんでいる。その姿に篠ノ之束は満足そうに頷く。

「……」

皆が驚いているなかで四人だけは厳しい目で見つめていた。そしてその中でも零治は手のひらの肉に爪が食い込み血が出るほどに拳を握り締めていた。

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

山田先生が慌てて駆け寄ってくる。

「どうした？」

「こ、これをつ！」

千冬は渡された小型端末の画面を見ると表情が曇る。

「特命任務レベルAだと……！」

「は、はい。先ほど試験稼動を——」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

「す、すみません……」

「専用気持ちは？」

「ひ、ひとり欠席していますが、それ以外は」

山田先生と千冬が少し手話で会話すると

「そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。——全員、注目！」

千冬は生徒の注目を集める。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

その言葉に生徒達はざわつく。

「とつとに戻れ！以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！！」

千冬が騒ぐ生徒達を一喝すると、生徒達は急いで撤収作業にはいる。

「専用機持ちちは全員集合しろ！——篠ノ之も来い」

零治はすぐさま現在の状況を推測し、篠ノ之束をチラッと見るとこの大変な状況で篠ノ之束は一瞬ニヤツと笑っているのを見逃さなかった。

□

「では現状を説明する」

旅館の一番奥の部屋に急遽、作戦会議室が設けられた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS“銀の福音”が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

その言葉に筭と一夏以外は険しい顔つきになる。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった。教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用気持ちに担当してもらう。それでは作戦会議をはじめ。意見があるものは挙手するように」

「はい」

その言葉に早速、手を挙げるのはセシリアである。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、けして口外するな。情報が漏洩した場合、

諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

セシリアをはじめ、皆がそう言うデータが開示され、そのデータを元に相談を始める。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した期待ね。厄介だね。しかもスペック上ではあたしの甲龍を上回っているから、向こうのほうが有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴアイヴ用の防御パッケージが来ているけど、連続しての防御は難しいかもね」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキ

ルもわからん。偵察行えないのですか？」

セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの順に意見を交換して、ラウラの質問を零治がすぐさま答える。

「無理だろうな。二時間前ハワイ沖を離れて、あと五十分で二キロ先の空域を通過するんだ。単純に計算してもマツハ2は超えている」

「そうすると、アプローチは一回が限度ってところか」

「なら、一撃必殺の威力で撃墜するしかありませんね」

零治のあとにオルカ、リリウムがそう言う

「じゃあ、織斑くんの単一使用が適任ですね」

山田先生がそう言って一夏を見ると他の人も一夏を見る。

「え……？」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「そうするとエネルギー問題ですわね。移動にエネルギーは使えませんもの」

「なら、目標に追いつける速度を出せるISでなきゃいけないね」

「そして超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

鈴、セシリア、シャルロット、ラウラの順で言っていく。

「お、俺が行くのか！？」

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら無理強いはいしない」

千冬が一夏にそう言う。

「やります。俺が、やって見せます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから“ストライク・ガンナー”が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

「あと、俺とオルカのISも、もともと軍用を主観として開発されたものなので出力リミッターをはずせばいけます。さらにVOB

というIS本体のエネルギーを使用せずに超高速で移動ができる装備もあります」

セシリアと零治がそう言う。しかし零治はあやしまれないために軍用を主観と置いたと言っただけである。

「オルコット、三嶋、リンクス。超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二〇時間です」

「既に五〇時間は超えてるか」と

「俺も同じく」

「ふむ……。それならば適任——」

適任だと言おうとした千冬の声を

「待った待った。その作戦はちよつと待ったなんだよ——！」

とその場には似合わない程の明るい声が遮る。その声の主は篠ノ之束である。

「……山田先生、外室への強制退去を」

「ちょ、聞いて聞いて！ここは断・然！紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿の展開装甲をいじればパッケージを使用しなくても超高速戦闘が可能なのだよ。ようするに第四世代型で最強なのだよバイー！」

その言葉に皆が黙る。

「それにしてもアレだね。海で暴走っていうと、十年前の白騎士事件を思い出すね——」

ニコニコしながら喋る篠ノ之束。その横で千冬は“しまった”という顔をしてしまった。そして零治はその表情を見逃しはしなかった。

「いやー、世界があんなにバカだとは思わなかったね。うふふ、私の才能を信じないくせに神様を信じるなんて、偶像崇拜もいいところだよ。束さんは実像なのにね」

その言葉はあからさまに自分がやりましたと言っているようなものである。

「ぶった切ったんだよねえ。ミサイルの約半数を。あれはかつこ

よかったな。それにしても白騎士って誰だろうねー？ね？ちーちゃん？」

篠ノ之束の言い方はまるで昔読んだ楽しい本の内容を思い出すかのように喋っている。その事件で死んだ人間がいるのに、そんなことを気にしないかのように。

しかし零治は自身を落着かせようと必死になっている。

（落ち着け……復讐をしたところで誰も帰ってこない）

自身の中の理性がそう呼びかけるが、心の奥底にある黒い塊は、――今すぐ殺せ！自分の家族を奪った奴を。お前には力がある。それ成し遂げるだけの力がある――

そう言っている気がするのである。もしかしたら零治の幻聴などかもしれないが確実に自身の心の声だろうと思う零治。

（確かにそうだ。しかし、だからと言って殺してなんになる！？）
そう必死に考えていると

「――じ。零治！」

隣の鈴の声が聞こえハッと我に帰ると同時に手のひらに痛みを感じる。

「ちょっと、手から血が出てるじゃない！」

零治はそう言われて自身の手を見ると強く握りすぎて、爪が食い込み血が出たのだと理解した。

「どうしたんですか？」

リリウムが心配そうに聞いてくる。

「あ、ああ……。いや、な。軍の不甲斐なさに少し苛立ちを感じただけだ」

零治はとつさに誤魔化したのである。そしてその言葉とともに千冬は「話を戻すぞ。……束、紅椿の調整にはどれくらいの時間がかかる？」

と篠ノ之束にそのことを聞き、話を戻した。

（なっ！？こいつは馬鹿か……！）

「七分もあれば余裕だね」

「よし。では本作戦では織斑、篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は三〇分後。各員はただちに準備にかかれ」

「織斑先生。作戦の変更を要求します。最低でも、俺、オルカ、セシリアの三人の中から一人は保険で入れるべきだと思います」

「はあ？なんだよ君は。私が作った筈ちゃんの紅椿といっくんの白式だけで充分だと言っているんだよ」

「確かにスペックは最高峰のもですね。しかし、それに乗るパイロットは良質と言えるのですか？」

零治の言葉に篠ノ之束はイラッときている

「超高速下での戦闘訓練をまともに行っていないものを実戦に出すとはバカバカしい。いくら機体が最強だろうが乗り手次第では、ただの鉄屑だ」

「うざったい奴だね君は」

「そこまでだ」

更に険悪になりかけたところで千冬がストップをかける。

「作戦変更は認められない。ここでの最高指揮権は私にある。いいな」

（この女は、とうとう脳みそまでカビたか……！？）

「……はい」

零治は静かに言うど部屋を出て自分の持ち場へ行くのであった。

□

時刻は十一時半。場所は砂浜。そこに一夏と紅椿がいる。

「来い、白式」

「いくぞ、紅椿」

二人がそう言うのと光が体を包み込みISを装着した姿へと変わる。

「ほら、早く準備しないか。今回は特別に乗せてやるのだ」

「あ、ああ」

「ん、どうした？怖いのか？」

「そうじゃなくてだな、筭——」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」

「……」

一夏は浮かれすぎている筭が不安であつた。

「織斑、篠ノ之、聞こえるか？」

オープン・チャネルで千冬の声が聞こえる。

「今回の作戦は一撃必殺だ。短時間での決着を心がける」

その言葉に二人とも「了解」と返事をする。すると突如一夏だけに千冬からのプライベート・チャネルが届く。

《——織斑》

《は、はい》

一夏は慌てて回線を切り替えると返事をした。

《どうも篠ノ之のは浮かれているな。あんな状態ではなにかをし損じるやもしれん。いざというときはサポートしてやれ》

《わかりました。ちゃんと意識しておきます》

《頼むぞ》

千冬はそう言うのと回線をオープンへと戻し

「では、はじめ！」

作戦を開始の合図をするのであつた。

□

そのころ作戦会議室では他の関係者がモニターを通して見ていた。

「白式が銀の福音をハイパーセンサーで確認したようです。接触まで十秒です」

二人のISの情報をこちらにリンクさせて状況を報告している。

「四、三、二、一。駄目です初撃はかわされました。敵IS、迎撃モードに移行をしたようです」

画面では銀の福音が避けて光弾の雨を降らせている。

「さすが軍用ね」

鈴がふいに言葉をもらす。

「あれほどの性能では一太刀当てるのにかなり苦労するぞ」
「ラウラもそう言う。」

「もらった！」

モニター越しに箒の声が聞こえる。箒は光弾の中を掻い潜り福音のほうに迫るが一夏は真逆のほうに向かう。

「一夏!？」

「うおおおおっ!!」

そして一夏は一発の光弾に追いつくと零落白夜でかき消す。

「なにをしている!？せっかくのチャンスに——」

「船がいるんだ!海上は封鎖したはずなのに——ああくそっ、密漁船か!」

一夏がそう言っていると零落白夜がエネルギー切れで刃が消える。

「馬鹿者!犯罪者などをかばって……。そんなやつらは——!」

「箒!——!」

「ッ——!？」

「箒、そんな——そんな寂しいこと言うなよ。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……。どうしたんだよ、箒。ら

しくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は……」

箒は動揺を隠すかのように顔を手で覆った。そしてそのときに落とした刀が具現維持限界がきて光の粒子となり消えた。つまりエネルギー切れである。そしてここは訓練ではなく実戦だ。

銀の福音は箒に照準を絞って一斉射撃の体制にはいり光弾が放たれる。そして箒に当たる直前で何者かが間に割って入る。

「ぐあああつ！」

その正体は一夏である。

「一夏！」

画面の向こうの箒、それを見ているセシリア、鈴、ラウラ、シャルロットは、その光景を見て叫ぶ。そして画面の向こうでは力なく、水面に真つ逆さまに落ちていく一夏。

「作戦は中止だ。織斑と篠ノ之の救助を急げ！」

千冬は救護班に指示を出していく

「お前らは各自現状で待機している。変化があればすぐに召集する」

そこにいる専用機持ちは黙ってうなずいた。

（もし、このまま市街地に行ったら間違いなく死人が出るな。ならその前に手を打つか）

零治はそう思い懷から小型通信端末を取り出し緊急回線として連絡をする。

「おい、三嶋。勝手な行動は——」

千冬がそう言いかけたが手で静かにというようにして言葉をさえぎる。

「突然で申し訳ない。私はレイレナード社代表、三嶋零治だ。悪いがアメリカ大統領に連絡を繋いでもらえないだろうか」

「は、はい、かしこまりました」

零治の突然の連絡に電話口の相手は驚くが、緊急回線でレイレナード社の代表と言われ意味を理解したのだ。

「緊急回線で繋がったと思ったら君か。ミスター・ミシマ」

「突然申し訳ありません。今起こっている件に関してなんですが」

「そのことか。まだ福音は健在。どうやらIS学園は失敗したようだな」

「ええ。ですから、福音の件をこちらの企業連に任せてもらえないでしょうか？」

「何を言い出すかと思えば、そんなことかね。悪いがそれは――」

「もちろんアメリカにはデメリットがない話だと思いますが」

「なに？」

「簡単な話です。日本とIS学園に借りを作らなくて済む。しかも企業連はアメリカヘータなどを渡しているんです。それによって今回の件が起きたと後々言われたら困りますからね。まあ、どちらかというアメリカのほうが得すると思いますが」

「なるほど、なるほどな。いいだろう、許可してやる」

「ありがとうございます」

「私が国防長などに手続きをとらせるから時間がかかる。しかし幸いなことにこちらから確認したが福音は動いていない。しくじるなよ」

「ご心配なく。それと、福音の操縦者に関してですが」

「ああ、可能なら生かして回収してくれ。最優先はコアだ」

「わかりました。コアの確保を最優先として、操縦者の生死は問わないと」

零治のその言葉にオルカ、リリウム以外の周りの者が驚く。

「そうしてくれ。いい報告を待っているよ」

その言葉と同時に通信が切れる。

「おい、三嶋」

千冬が零治を呼ぶ。その声は怒りが含まれているようであった。

「なんですか？」

「殺すというのか!？」

「ええ、必要であれば殺します」

その言葉に千冬はさらに怒りを増す。

「ふざけるな。貴様も学園の生徒の一人だ。だから――」

「だから、人殺しをさせる訳にはいかない。ですか？」

「そうだ」

その言葉に若干呆れている零治。

「あなたは、今の状況をわかっていてののですか？このまま放っておけば市街地に行き多くの死人が出るかもしれない。多くの人間を救うのなら人一人の命を殺しますよ。それに福音の操縦者も軍人だ。死ぬ覚悟ぐらい出来ているだろう」

「だからと言って、お前のような子供に人を殺させるなど――」

「人なら既に殺しましたよ。この手で」

千冬 of 言葉を驚愕の一言でさえぎる。そしてその言葉にオルカ、リウム以外が再び驚く。

「なっ！」

「俺は既に両手では数え切れないほどの人間を過去に殺しているがな」

そう言うのと零治は髪 of 襟足を上げて首についているAMSを見せる。

「これ of せいで俺は十年前にもとある研究所で人を殺しているんだ。今更一人増えたところで何も変わらない」

零治 of 言葉を聞きそれを見ると驚いている。

「そして俺は今、企業連 of 人間として依頼を受けている。残念ながらIS学園 of ものがとやかく言えるものではない」

千冬は正論を言われると何も言い返すことができずに、悔しい顔をする。

「あと、先ほどの作戦だが。失敗 of 原因 of 半分以上は織斑一夏にあるぞ」

零治が軽くそう言う。

「ふむ、わからないようだから、説明してやろう。まあ、相手の目の前で棒立ちになる篠ノ之箒も悪いが、状況判断は最適だった。

密漁船など気にせず福音攻撃を当てていればそれで終わっていた。なのにそのチャンスを活かすに失敗した挙句に仲間の心理状態を揺さぶって混乱させた」

「で、ですが。あのままでは密漁船は助からなかったのでは」
セシリアが口を挟んでくる。

「さっきも言ったとおり市街地にいったらどうする。密漁船の数を助けるために、多くの人間の命を犠牲にするつもりか？」

「そ、それは……」

皆頭ではわかっていても受け入れたくないようであった。そのなかでもラウラは軍に長くいたために、その言葉が軍人として正しいかわかっている。

「これ以上の言い合いは時間の無駄だ。俺は作戦指示を待ちながら機体の調整に入らせてもらう」

零治はそう言う外に出ていった。

第25話（後書き）

年末……実家に帰らなければ・・・orz

第26話（前書き）

秘儀、予約掲載！

すいません調子に乗りました。

いえ、実家帰る前に一度、一日後に予約掲載というのをしてみたかっただけです。

今年最後の駄文ですが、よろしくお願いします。

第26話

第26話

時間は午後四時前、旅館の一室に負傷した一夏が眠っており、その隣に箒が座っている。

箒は海から引き上げられ作戦失敗を言われた。そして箒は待機する部屋に向かう途中に零治と会つと

『お前の判断は悪くなかったから自分を責めるな』
零治はそう言つて去つていった。

箒はてつきり非難の言葉を言われるかと思つたが、そうでなかった。むしろ責められないことが何よりも辛かった。

（違う。私は、ただ力に溺れていただけだ……！）
そう思うと悔しくてたまらなかった。

（私はもう……ISには……）
すると部屋の襖が勢いよく開きその音に箒は驚くが顔を向けようとはしない。

「あー、あー、わかりやすいわねえ」

鈴がそう言いながら箒の隣まで近づく

「あんたさあ。自分のせいでこうなつたと思つてるんでしょ？」

箒は鈴の問いには答えずに黙つたままである。

「別にあたしは、誰のせいとかは言えないわよ。ただどね、只単に落ち込んでますよってポーズをしてたつて。なんにもならないでしょうが！」

鈴はそう言つと箒の胸倉を掴む。

「やるべきことがあるでしょうが！今！戦わなくて、どうすんのよー！」

「わ、私は……もう、ISは……使わない……」
「ッ——!!」

箒のその言葉に鈴は怒りが抑えきれず、平手を打つ。

「甘ったれてんじゃないわよ……。専用機持ちつてのはね、その力に対して義務があるのよ。それともアンタは、そうやっていつまでも被害者面して閉じこもっていて、戦うときに戦えないような、ただの臆病者か」

その言葉に箒は肩を震わせる。

「なら、ならばどうしろと言うんだ！敵の居場所もわからない！戦えるなら戦っているさ！」

「そう、なら行くわよ。場所はラウラがわかるわ」

「出たぞ。ここから三〇キロ離れた沖合上空だ。ステルスモードになっているが光学迷彩は使用されてなく衛星での目視で発見したぞ」

「さずがドイツ軍ね。あたしもパッケージはインストール済みよ。セシリアとシャルロットは？」

「わたくしのほうもストライクガンナーがインストールし終わりましたわ」

「僕もいつでもオツケーだよ」

部屋の外にはラウラ、セシリア、シャルロットがいて箒のほうに視線を送る。

「で、あんたはどうするの？」

「私は……私も戦う。そして今度こそ勝つ！」

「じゃあ、早速作戦会議よ。今度こそ確実に仕留めるわよ」

鈴がそう言うのと作戦会議を始めたのであった。

□

「大変です、零治さん」

そう言って入ってきたのはリリウムである。

「どうした？」

「先ほど鈴さんたちがISを装備して発進したようです」

「……チツ。アメリカはまだ許可が取れないのか」

零治は珍しく苛立ちを表に出していた。

「まず衛星で確認を取る」

「ですが、福音はステルスモードでレーダーでは」

「なら専用気持ちたちの位置を元に映像を撮れ」

「わかりました」

そう言うのと鈴たちのISの位置情報を元にして映像を映し出す。

「どうやら、戦闘が始まっているみたいです。……！」

「今度は何だ？」

「いえ、ここから急速に発進するISが……白式？」

「なんだと？」

「識別コードは白式のもんです」

「オルカ！」

零治そう言われると一夏の寝ている部屋に行くオルカ

「もぬけの殻だ」

オルカからそう通信が来ると、零治は溜め息をこぼす。

「いつの間に……」

そしてモニターに目をやると

「どうやら、終わりそうですね」

箒が福音の翼を叩き切ったところである。しかし福音が奇声をあげると再び稼動した。

「……！？」

さすがの零治たちもそれに驚く。

「まさか、セカンドシフト……！？」

オルカがそう言うが

「わかりません。ただ一つ言えるのは更に強力になったようです」
リリウムがそう答えた。画面では次々に専用機がやられていき、第
がやられそうになると

「一夏が戦線に入ったようだ」

一夏が助けたのであった。そして零治の小型通信端末に連絡が入る。

「すまない。やっと許可が下りてな。では、頼んだぞ」

その連絡を受けると三人ともすぐに砂浜に出てISを装着する。

「では、行くぞ。俺から順にオルカ、リリウムで出る」

そう言つと零治はVOBを装着した状態である程度まで浮遊すると
VOBを点火し、少しづつ加速していき、ある程度まで行くと急加
速をする。

零治は急に襲い掛かるGの不快感を我慢し、意識を集中させる。そ
してそれに続きオルカとリリウムもVOBで発進する。因みに零治
とオルカのVOBの速度は時速三六八〇キロであり、リリウムは生
身の体なので時速二〇五〇キロである。

□

零治たちがこちらに向かっているころ一夏たちは

「くそ、強すぎる」

福音にかなりの苦戦を強いられていた。するとレーダーにこちらに
向かってくるISが3機との情報が入った。その3機の機体を確認
すると零治たちであることがわかった。

「よし、零治たちがもうすぐ来る。これで――」

「うそ……」

一夏が言おうとしたのをさえぎり、そう言ったのは鈴である。一夏

は鈴のほうを見ると援軍が来たのにもかかわらず喜んでいなかった。むしろ悔しさで泣きそうな顔である。そして箒以外のものも悔しそうな顔である。

「ど、どうしたんだよ？」

一夏はわけがわからず、皆に聞く。すると

「こちらストレイド。オルカ・リンクスだ。参戦するっ！」

「ご苦労だった。後はこちらに任せてくれ」

オルカと零治はVOBをパージする。そして数秒遅れて

「アンビエント、目標を確認しました。作戦行動に移ります」

リリウムもやってきてVOBをパージする。

「一夏、箒。悪いがセシリアたちを安全なところまで非難させてくれ」

オルカがそう言うとその指示に従い一夏は鈴とシャルロットを箒はセシリアとラウラを安全な場所まで連れて行こうとすると

「離しなさいよ、一夏！」

必死にもがく鈴である。

「どうしたんだよ？」

そう言いながら無理やり安全圏まで運んでいる。

「いいから、離しなさいよ！」

「訳がわかんねえよ！いったいどうしたって言うんだよ！？」

「零治は、福音の操縦者を殺すかもしれないんだよ……」

その言葉に答えたのはシャルロットであった。

「あいつ、どうしようもないときには福音の操縦者を殺すって……」

……

鈴はそう言いながら泣き始める。

「どうしてだよ？」

「もし、止まらずに、市街地にも行ったら、多くの、死者が出るからって……」

「だからって、殺していいわけないだろう！」

一夏は思わず怒鳴ってしまう。

「一夏、そうは言ってもこれは仕方がないことなのだ」

「ラウラ！」

「我々軍人というのは、そんな綺麗ごととは言えなのだ。100の命を救うためには1つの命を切り捨てる。それが我々軍人なのだ」その言葉に箒は零治があのとくに言った言葉が理解できたのであった。

「じゃあ、お前たちはそれでいいのかよ？あいつらが人を殺しちまってもいいのかよ！？」

「零治は、零治はもう人を殺したことがあるから一人増えたところで変わりは無いって……」

「「なっ！？」」

シャルロットのその言葉に一夏と箒が驚く。

「昔、違法な研究所で実験のために人を殺させるように命令されたりしていますわ。もし殺さなかったら殺されていたでしょう」セシリアがそう話す。

「なら、お前たちはそうやって、黙って見ているのかよ！？そんなんでいいのかよ！」

「よくないわよ！けど、あたしたちにはどうすることも出来ないのよ！」

鈴の悲痛の叫びは他の皆のものと同じだった。

「くそっ！本当になんもできねえのかよ……！」

一夏たちはそう言いながら零治たちの戦闘を見守ることしかできなかった。

□

福音と零治たちの戦いは壮絶なものであった。全員が異常なスピー

ドで動き回っている。そして綿密な作戦など無しに、即興の連携でも誤射をしないのは、三人の今までの戦闘経験の賜物だろう。

「思ったより、しぶといな」

零治がそう言いながら目標を支点にしながら垂直になるようにして福音を後ろから追いかけて、両手でアサルトライフル04-MARVEを撃ち続ける。そして福音は零治のことを引き離そうとするが完璧に後ろに付かれていた。

福音は零治の張る弾幕を直撃だけを避けて、それ以外は掠っても仕方ないという避けかたである。そして零治は右手をレールガンRG01-PITONEに変えると狙いを定めて引き金を引く。すると福音はロールをしながら減速をして、弾丸を避け更に零治の後ろへ付くとすぐさま射線上に入れて光弾を撃ち出す。

零治は、放たれた光弾を徐々に減速をせずに、二連QBを後ろへと急激に吹かしながらOBにエネルギーをまわす。QBの反動で来るGを歯を食いしばりながら光弾を避けると、同時にOBが点火し福音へいつきに詰め寄る。

零治は先ほどのGの衝撃にさらに上乗せされる衝撃に意識を持ってられないようにし、福音にいつきに肉迫するとRG01-PITONEを紫電を纏った弾を撃ち込む。福音は高速移動の身で強い衝撃に当たったためバランスを崩す。零治は追撃をするべく福音に向かおうとしたが、福音は操縦者が乗っているにもかかわらず、無理矢理バランスを直そうとしながら零治を近づけさせまいと、光弾をばら撒く。

零治は光弾のために追撃を止めるが、反対から超スピードでオルカが接近してくる。オルカは両手のレーザーブレードLB-ELTANNINを振るった。福音は完全に避けきることが出来ないと判断すると致命傷部分を避けて手足に掠らせて流した。

「——チッ」

オルカは軽く舌打ちをしながらも旋回をし福音に斜め下から取り付

こうとする。すると福音は真正面からオルカに向かっていく。そして二人は切り結び、すれ違うとオルカは流れに乗り上昇をした。福音はもう一度オルカに下から向かう。そして福音は両手両足の四箇所同時着火の瞬時加速で突っ込む、オルカもOBを吹かし突っ込むと、今度は鰐迫り合いの形になるが、その行為は福音の最大のミスであった。

福音は相手より下の位置から攻撃の不利を補うため瞬時加速を使ったのだが、オルカもそれを先読みし、自身もOBを使うことによって相手の爆発的な瞬時加速の補足をプラスマイナス0にする。そして出力がほぼ同じなら、位置エネルギーが上のほうに軍配が上がる。つまりオルカのほうである。そしてオルカは力で押し切り一太刀入れる。

福音は大きなダメージを貰いバランスを崩す。するとそこにリリウムが分裂ミサイルSALINE05を発射し、分裂した合計一六発のミサイルが福音に襲いかかる、福音は回避行動に再び移る。するとリリウムは、レールガンRG03-KAPTEYNを両手に呼び出し福音に向けて撃つ。福音は自分に当たるコースの弾丸を避けるために速度を落とし回避するが、直後爆発に巻き込まれる。

突然の爆発に福音は驚くが状況を分析するとすぐに理解した。リリウムが撃ったもう一発の弾丸がミサイルを爆破させたのだと。

そうリリウムはもとも福音に弾丸を当てる気は全く無く減速させて後ろのミサイルの爆発に巻き込みバランスを崩させるのが目的であった。

そして福音が完全にバランスを失ったところに。零治が背中中の装備を追加ブースターACB-O710に変え両手をレーザーブレード07-MONLIGHTにして、ブースターを高出力にしてQBでいっきに詰め寄る。その速度は時速三〇八〇キロである。

普通の人間だったら体がもたないだろうが、零治はAMSの移植手術をしており、体のほうも強化されているが、負担はかなりのものである。

零治は押しつぶされる不快感を我慢し、意識がブラックアウトしないように耐える。そしてすれ違いざまに07-MOONLIGHTを文字通り一閃である。そして福音の機体にスパークが走ると周りの装甲が粒子になり消えていく。そして操縦者を近くにいたリリウムがキャッチをした。

「操縦者はなんとか生きています」

リリウムが操縦者の生死を確認すると零治に伝える。

「一件落着だな」

オルカがそう言いながら近づいてくる。

「ああ、そのようだ。では、帰るとしよう」

零治がそう言うで一夏たちのいるところへ向かった。

□

一夏たちは戦闘圏外で零治たちの戦いを見ていた。そして誰もが「あの戦いに入ることができない」と思ったのである。そして戦闘が終わると。

「どうやら、終わったみたいだな……」

一夏がそう言う。そして向こう側から零治、オルカ、リリウムの三人が来る。

「みなさん、作戦は終わりましたので、帰還しましょう」

リリウムがそう言う

「操縦者はどうなったの……？」

鈴が恐る恐る聞く。

「命に別状は無く、目立った外傷も見られませんが、内臓を怪我をしているかもしれないので早く医務室に運んだほうがいいかと思えます」

その言葉を聞くと皆は安心する。

「本当に……よかったですわ」

セシリアががそう言った。

「なんだ、俺たちが負けるとでも思っていたのか？」

オルカがそう言う

「そうじゃなくて……。あ、あんたたちが、どうしようもないときは殺すって……」

「ああ、もちろんそのつもりだったさ」

零治がしれつとそう言うとその場の空気が重くなった。

「なに、だからと言ってすぐに殺そうとは考えてない。最善をつくして駄目だったらの話だ。普通は人殺しが好きな奴なんていないさ」

零治の言葉に皆は安堵の表情になった。

「だがまあ、お前らのとった行動は命令違反をはじめとし色々と付いて、厳重な処罰が下されるかもしれないというのは理解しているか？」

一夏たちはその言葉に表情を暗くする。特にラウラは命令違反はどんなに厳しい罰かを知っているようである。

「ふつ。安心しろお前達に処罰が下されることは無いようにしてある」

その言葉に一夏と箒は安心してはいるが、他の四人は？マークを浮かべている。

「なぜだ？いくらIS学園と言えども軍用IS相手に勝手な行動を起こしたんだぞ。アメリカやイスラエルが黙っちゃいないだろう」
「そういう軍事関係などに一番詳しいラウラが聞いてきた。」

「ああ、そのことは——」

零治が答えようとすると、零治のISに通信が入ってくる。

「ミスター・ミシマ。先ほどまで確認していた福音の戦闘信号が無くなったがどうなったのかね？」

通信を入れてきた人物はアメリカの国防長である。

「ご安心を、福音の活動を停止させ、操縦者も生還させました」

「そうか、よくやった。感謝するよ。だが、そちらに許可を出す前に戦闘があつたようだが何かあつたのかね？」

「そのことですか。それは、私が雇った専用機持ちたちを作戰領域ギリギリのところで待機させて、許可が下りたと同時に交戦に入る予定でしたが、福音が市街地に行く素振りを見せたので、軍の機密保持と市民の安全を考慮した結果です。なので責任なら私に申し付けてください」

「そうだったのか。なに、別に責任をどうこう言つつもりはない。なんせ操縦者を生還させてくれたのだからな」

「寛大な処置、ありがとうございます」

「うむ。では、作戦が無事に完了したことを大統領のほうにも伝えておこう」

そう言つと通信が切れた。

「ま、そういうことだから安心しておけ」

零治は不適な笑みを見せてそう言った。

こうして福音の暴走は無事に解決したのであつた。

□

福音の暴走を解決し、旅館に帰還してから数時間後、一夏は夕食の後に旅館を抜け出し夜の海に来ていた。そしてボーっとしていると

「い、一夏……？」

と、声がして、その方向を向くとそこには、水着姿の篤がいた。

「あ、あんまり、まじまじと見ないで欲しいんだが……その、落ちつかないというか……」

「す、すまん」

一夏は先ほどまでなんとも無かったが箒に言われると急に気恥ずかしくなる。

「……」

「……」

しばしの沈黙が流れると

「そ、その水着、似合ってるな。……うん、いいと思う」

「そ、そうですか……」

箒は一夏の突然の言葉に驚き、敬語で喋ってしまふ。

「ど、どうしたんだよ。急に敬語なんて」

「う……」

そう言うのと再び沈黙が流れる。

「まあ、その、なんだ。これ、誕生日プレゼント。今日、箒の誕生日だろ？」

一夏がそう言ってリボンの入った袋を渡してくる。

「う、うむ……」

「その、渡すの遅くなっちゃったけど……」

「い、いや。私は嬉しいぞ！」

「そっか、じゃあ改めて、誕生日おめでとう」

「ああ、ありがとう」

箒はそういわれるととても嬉しそうにしている。そして箒は、この雰囲気ならいけると思いきなり勇気を振り絞る。

「そ、そのだな。一夏……」

「うん？」

「私は、お前の——」

「ふざけるなっ！」

箒が一夏に思いを告げようとした瞬間、どこからかとても大きな怒声が遮った。

「な、なんだ？」

一夏はその声に驚くが、聞き覚えのあるような声でもあった。そし

て箒はせつかくのチャンスを邪魔されて面白くないような顔をしている。

「箒。俺、ちょっと見てくる」

一夏はそう言うのと声のした方向に向かって行く。

「ま、待て、一夏」

箒もそう言いながら一夏に付いて行く。

□

一夏が箒とあう数十分前。

零治は、今回の件の報告をレイレナード社にしたりするために、旅館を抜け出していた。

「ええ、今回の件で思ったのはそれぐらいです。あとはなんとも言えません」

「わかった。こつちでも色々と探ってみるよ。じゃあ、また今度」

「はい。では」

そう言うのと零治は携帯を切り帰ろうとすると見覚えのある姿を発見し、よく見るとそれは千冬と篠ノ之束であり、どうやら何か会話しているようであった。零治は今回の件の確証にいたると思い、こつそりと会話を聞くことにしたのだ。

零治は会話を聞いていると白式のコアは白騎士と同じであり、今回の件も紅椿を披露させるために仕組んだことだとわかった。

「へえ、不思議な例え話だね。凄い天才がいたもんだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、十二力国の軍事コンピューターを同時にハッキングするという歴史的な事件を自作した、天才がな」

（やはりな、白騎士事件を起こしたのは篠ノ之束で間違いない。

そして、白騎士は織斑千冬か)

零治は心の中でそう呟いていると、心の奥底で黒い塊がうごめくのを感じ取っていた。そう昼と同じように

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ」

篠ノ之束がそう言うつと風が少し強く吹き

「――」

その中、束は何か呟くと姿を忽然と消した。

「……」

千冬は溜息を漏らし樹に寄りかかる。

「それにしても、今回も死人が出なくて良かった……」

千冬は篠ノ之束の起こす騒動にヒヤヒヤさせられていて、今回の事件もなんとか無事に終わり、ほっとする。

(今回もだと……？白騎士事件で大勢の命を奪っておいて、よくもぬけぬけと……!!)

零治は千冬のその言葉に、今まで理性が復讐は良くないなどと言いついて聞かせて押さえていた感情が表に出てしまう。

「白騎士事件で誰も死んでないだ……？本気でそう思っているのか？」

「誰だ!？」

零治はそう言いながら出てきてしまった。

「なんだ……三嶋か。旅館を抜け出すのは生徒全員に禁じたはずだぞ、今回は見逃してやるから早く――ッ!」

千冬は零治の出す怒りに驚き、途中で言葉を言うのをやめる。

「白騎士事件は、本当に死者がでてないと思っているのか？」

「ああ、ミサイルは白騎士と軍で全部打ち落としたと教科書にも載っているだろう」

「バ力を言え、実際は最低でも二発は落ちてきてる。そのせいで俺の家族は死んだのからな……!」

千冬は零治の言葉に驚く。

「悪いが先ほどの会話を聞かせてもらった。そしてあの事件の中心人物が篠ノ之束と織斑千冬の二人だと言うこともな」

「本当、なのか……？ミサイルが落ちたというのは……？」

信じられないといった顔で聞いてくる千冬。

「まさか、こんな所でこれを使うことになるとはな。まあいい、これを見てみる」

零治はそう言うのと小型端末を渡し、そこに自身のISから10年前にいた研究所で非道な実験とはいえ自分が殺めた者への罪を忘れないために実験のデータをISに入れていたのである。

そして千冬はそのデータを見ると手を口に押さえ驚愕の表情に染まっていた。

そこに書かれていた内容を簡単に表す。

- ISを男性が操縦するための装置開発 -

我々はISが出てきて、その性能に魅了されたが一つだけ欠点があった。

それは女性にしか扱えないというものである。

これだと兵器として不完全すぎるために男性でもどうにか操縦が出来ないかと考えてみることにした。

そしてデータ上で調べるのには限界があるため実験体が欲しいが手に入らない。ストリートチルドレンでためそうかと思っていたが、病気にかかっている確率が9割以上のために却下。

やはり健康体でなければ正しい実験が行えない。しかし、最近政府が白騎士事件で破壊することが出来ずに落下したミサイルの被害で一人身になった子供たちを口封じのために表向きは養護施設の収容所に行き政府と交渉し実験体を手に入れる。我々は今回手に入れた16人子供たちのことをS-01からS-16の番号をつけた。そ

してその中に首に金属のようなもの埋め込んでいる少年がいた。名は、三嶋零治である。以降はS - 02と呼称する。

S - 02についている金属を調べていきわかった事は、ISの適性がつくということである。

そして我々は、男にはS - 02がつけているのを元にして作る装置を移植していくことにし、女には、ISを使って訓練をさせて、そこからへんの者に壊さないようにと言い、任せた。

そしてS - 02と同じ装置ができS - 01につけて、ISを動かさせることに成功した。

しかしオリジナルのように精神に異常な負荷がかかり数十分稼動したら廃人になってしまった。

以後は改良をしていき繰り返し返す。

そしてS - 02には精神負荷を耐えている状況を生身でも知りたいために、壊れる寸前の被検体と死合いをしてもらうことにした――

と、このように書かれているものを千冬は読んでいくと、吐き気が少しした。ここに書かれている内容は信じたくないと思っているが、目の前の零治を見る限り全て本当だと理解した。

「そんな、バカな……」

「どうだ、わかったか。貴様らが、白騎士事件など起こさなければ、父さんも母さんも、由利香も死ぬことなんて無かった!」

零治はそう言いながら千冬の襟を掴み挙げる。

「そして貴様らはあの事件で被害がどうなるなどと考えもしなかったのか!？」

千冬は零治の言葉に、確信を言い当てられた気がした。昔、自身はあの事件がこの後どのような状況をもたらすかなどとは考えもしていなかったのだ。そして無意識のうちに

「すまない……」

と謝っていた。

「ふざけるなっ!」

零治は千冬のつつさの言葉に怒鳴る。

「さらに貴様らはわかっていない。世界全体に影響を与えるとすることは必ず仕返しがあるのだよ。例えその対象が自分自身でなくてもな!」

その言葉にはつととする千冬。

「どうせ貴様のことだから、そのようなことを考えてすらなかったんだろう」

零治はそう言つと千冬の襟を放す。

「そして、俺には、今ここで織斑千冬に復讐するという選択肢もある」

零治はそう言いながら懷から護身用に持っていた拳銃を出すと、安全装置をはずし銃口を千冬に向ける。

「——っ!」

千冬はそれを見て驚くが、これは自分への贖罪なのだと思うと抵抗する気は起きてこなかった。

すると零治は銃を下げる。

「そうだな、俺と同じ絶望を受けてもらおうか。そう、貴様の唯一の家族を——」

そう言いかけると何者かが零治の銃のトリガーとグリップの間に指を挟み、頬に拳を思いっきり殴りつける。

「落ち着け。それだけはやっては駄目だ。それは復讐ではない……」

……

その正体はオルカであった。

「いつから、いた?」

「お前が、小型端末を渡すところからだ。昼のときから、いつもと違うと心配してきてみればな……」

「そうか……」

零治はそう言つと銃から手を放し、それをオルカが手に取り、安全

装置を再びつけると零治ではなく、オルカの懷にしまった。そしてしばしの沈黙の後

「どうだ、落ち着いたか？」

「ああ、すまないな」

オルカの問いに答えるときは先ほどの怒りは無くいつもの零治に戻っていた。

「織斑千冬。俺のお前に対する復讐はオルカに止められて終わった。しかし、貴様らが犯した罪は決して軽いものではないぞ。そしていつか世界を変えた代償を支払うことになると憶えておけ」

零治はそう言々と旅館へと帰ろうとすると一夏と箒がやってくる。

「お、零治にオルカ。それに千冬ね——じゃなくて織斑先生。怒鳴り声が聞こえたんですけどどうしたんですか？って零治、頬が腫れてるぞ！？」

「ん？ああ。オルカと喧嘩をしてしまったな。それで殴られてな」

「喧嘩って……」

「安心しろ、織斑先生が仲裁に入り、もう仲直りした」

オルカはそう言々と零治に肩を組み仲直りをしたと見せる。

「そっか、まあ喧嘩するほど仲がいいって言うもんな」

一夏はうんうんと頷き納得したようにいう。

「一夏、すまないが、頬を冷やすため旅館に先に行って冷やすものを貰っておいてくれないか？」

「ああ、わかった。箒、戻ろうぜ」

零治がそう言々と一夏は箒と一緒に旅館に戻って行く。

「さて、俺たちも行くか」

オルカがそう言って零治と歩き出そうとする姿を千冬は不安そうにみている。そして零治はその視線に気づくと

「さつき行ったとおり、あなたに復讐はもうしませんよ。もちろん一夏を含めてです。まあ、安心しろと言っても通じないでしょうが、俺は自分の友を殺したくはありませんから……」

零治はそう言ってオルカとともに歩いていく。そして千冬は不安は

無くなったが、それと入れ替えに罪悪感に包まれる。

「私は、いったい何をしたかったんだ……。私は……」

千冬は心の中で嘆き、静かに涙を流す。そして数分し、少し落ち着くと

（私は、私なりに罪を償うしかない……）

そう思い、決意すると旅館へ戻っていた。

第26話（後書き）

起源はきつと厨二病の人だ。

これを読まれている頃、私は既に実家に帰り大掃除の手伝いをして
いるだろう。

そして、これが年内最後の更新となります。

こんな駄作でも読んでくれている人には申し訳ないです。

そして感想を送ってくれる心優しい人達には、多分家に帰るまで返
信できないですが、なにとぞよろしくお願いします。

そんなこんなで、家に帰るのは多分遅めだと思えます。そして帰っ
てきても4月に向けてやることが多忙になり更新が不定期になりま
す。まことに申し訳ありません。

それでも、こんな無能な作者が書く小説の更新を待っていただけ
のなら、嬉しいかぎりです。

それではまた来年ということで、皆さんよいお年を。

第27話（前書き）

皆さん、あけましておめでとございます。そして今年もよろしく
お願いします。

てなわけでやっと家に帰ってきた！一週間振りなのに懐かしい我が
家です。

そして今回はかなり短いです。すいません（汗

第27話

第27話

零治 side

「ここは……?」

右を向いても左を向いても、真っ暗な空間。浮いているのか沈んでいるのか、それとも立っているのか横たわっているのかもわからないような空間だ。

突如、目の前が光に覆われると光景が変わった。

「れいじお兄ちゃん、どうしたの?」

ふと、とても懐かしい声が聞こえ、慌ててそちらを向くとそこには、由利香がいた。そして前には父母がいる。

「由利、香……?」

「ん?どうしたのれいじお兄ちゃん。もしかしてねぼすけさん?」

「はは、零治が寝ぼけているなんて、こりゃあ雨が降るかもしれないね」

「ええ。本当に珍しいわね。でも、雨が降ったら外で遊べなくなってしまうわよ」

「ええ〜!外で遊べないの!?」

「うふふ。冗談よ、冗談。ね、零治お兄ちゃん」

「やったー！今日はね、川の近くで遊ぼう！」

（もう、いない筈の家族がなぜ？これは夢……？それともISなんてものが夢だったのか？……そうだ、向こうの世界で戦争を続けて精神が疲れたから家族がいなくなるといふ夢を見てしまったんだな。そうだ、夢だったんだ……。）

「どうしたの……？元気ないよ、れいじお兄ちゃん」

「あ、ああ。ちょっと、怖い夢を見たんだ……」

俺がそう言つと由利香は頭を撫でてきた。

「れいじお兄ちゃん、これで、怖くない……？」

「……！ああ、大丈夫だよ。ありがとう由利香」

（温かい手だな……）

そう思い軽く手を握り返した。

「えへへ。ねえ、れいじお兄ちゃん」

「ん、どうした？」

「その、怖い夢つて、どんなのだったの？」

「ああ。俺ら家族皆が事故に巻き込まれてしまっんだ……」

「……。それって、こんな感じに？」

由利香がそういつた瞬間、目の前の由利香の体が消えて、握っている手だけが残った。そして、周りの光景は瓦礫と火の海。

「あ、ああ、ああああああアアああアアアア……！」

（嘘だ！嘘だ！嘘だあああああ！）

「ねえ、れいじお兄ちゃん。なんで、わたしの敵を討ってくれなかったの？なんで？」

由利香が責めるように言ってくる。そして残っている片方の手で首を絞めてくる。

そう言いながら自分の首に手を触れると、確かに首を絞められた感覚が残ってた。

（なんで、あんな夢を……）

零治は考えるのを止め、目覚めの悪い夢を忘れるため、シャワーを浴びにいった。

□

「暑い……」

八月の頭。時刻は午前11時の少し前。鈴は廊下を歩いて零治の部屋に向かっていた。映画のペアチケットをポケットに入れながら。

（なんで、こんな暑いよ。廊下もエアコンぐらいつけなさいよ。）

愚痴りながらいつもより長く感じる廊下を歩く。因みにIS学園の半数以上は家に帰ったりしている。

（第一、なんであたしから誘いに行かなきゃならないよ、甲斐性なし……）

鈴はそう言いながら軽く頬を膨らませる。しかし、自分が部屋で待っているとシャルロットやリリウムに先を越されるために待っていることが出来ない。

（めげちゃだめよ、あたし！）

自分を励まし、心の中でガッツポーズをとる。そんなことを考えているうちに零治の部屋の前に着く。

（あいつ、いるわよね？）

「零治」。いるー？」

鈴がノックして、そう言うが反応が無い。それに少しムツとする鈴。

「ちょっと、聞いているの？」

再びノックするが反応はなし。

（まさか、リリウムやシャルロットに……？違うわね。リリウムは、今日と明日はISの整備やらなにやらで動けない。シャルロットは明日までフランスに帰国中だったわよね……。）

鈴はそんなことを思い出しながらドアノブに手を掛けるとカチャリという音と、ともにドアが開いた。

（あれ……？ま、まあいいわよね。もしかしたら鍵を掛け忘れたかもしれないし、もしそうだったらあたしが代わりに留守番してあげるんだから！）

などと無理矢理な理由で入っていく。

「おじやまするわよ……」

部屋に入ると風呂場の方から水の音が聞こえる。その音から風呂に入っているのだと理解する鈴。そして少しすると脱衣所と部屋間のドアが開く。

「おじゃましてるわよ」

鈴はドアの方向を見るとそこには、髪は濡れたままで下半身にはジーンパン、上半身には素肌の上から半袖のワイシャツに首からタオルをさげている零治の姿があった。鈴はそれを見て頬が少し赤くなる。

「ん？ああ、鈴か。早い時間から珍しいな」

「ま、まあね。ていうかあんた、早い時間って言っても、もうすぐ11時よ」

「ほう、もうそんな時間だったか。にしても午前中からは珍しいな」

「な、なによ。来たら不味いことでもあるの？」

「いや、そんなことは無い。新鮮だなと思ったただけだ」

「そ、そう。ならいいわよ」

照れくさそうに言いながらベッドに腰掛ける鈴。そして内心では

（ど、どうしよう。すんなりと映画の誘いをするつもりだったのに、あんな姿を見せられたらこっちが恥ずかしくて言い出せなかったじゃない。うっ……）

などと思っていた。

（だ、大丈夫よ。今は誰もいなくて二人きりなんだから、あせらずとも……。ん？ふ、二人きり……。）

二人きりと自覚した瞬間、鈴は自分の顔が赤くなるのがわかるほど熱を持ち始める。

「鈴」

（ど、どうしよう……。お、落ち着くのよあたし！）

そう思っていると、零治が鈴の額に手を軽くあてる。

（え、ええ！？あ、あたし汗臭くないわよね？て、ていうか、か
かか、顔近いわよ。こ、これって、あ、あれよね……。うゝ、更に
ドキドキしてきた……）

「鈴……？」

「ふえっ！？にや、にやに？」

「よかった。熱中症ではないらしいな」

「へ？」

鈴はそういう零治を見ると、零治のもう片方の手は彼の額にあてているのが見えた。零治は顔を赤くしている鈴が無反応なのを心配し、熱中症になっているのではないかと額に手をあてて簡易的に熱を測っていたのである。

（も、もしかして、あたし、すごい勘違いしてた？）

勘違いしてたことに気がつくの数秒前の自分をぶん殴りたくなる鈴である。そして、この勘違いのもやもやを半分作った零治にガツンと言ってやろうかと思うが

「さつきから、何度呼んでも反応が無いから心配したぞ」

と、少し真面目に心配されると何も言えなくなってしまふ。

「だ、大丈夫よ！あ、あんたがいつもより元気が無いように見え
たから、どうしたのかなって考えていただけよ」

「そうか……。まあ、ちょっと夢見が悪かったただけだ……」

とつさに口から出た誤魔化しの言葉が当たってしまったようである。

「じゃ、じゃあ。明日映画に行かない？その、落ち込んだ気分を
吹き飛ばすには、パアツと遊ぶのが一番よ！ま、まあ嫌ならいいわ
よ」

「いや、せっかく誘ってくれたんだ。断るはずが無いだろう。そ
れにしても気を使わせてしまつてすまん」

「べ、別にこのぐらい当たり前よ！も、もともあんたと行きたか
つたし……」

（よ、よし！よくやったわ、凰鈴音！今までで一番輝いてるわよ
！）

鈴の言葉の最後のほうがゴニョゴニョとして零治にはよく聞き取れ
なかったが誘ってくれたことは素直に嬉しかった。

「じゃあ、明日は駅前に集合ね！」

「そうだな、それがいいと思う。集合時間はどうする？俺はいつ
でも構わない」

「そうね、１０時にしましょ」

「わかった」

「あ、明日遅れるんじゃないわよ！」

鈴はそう言い残し部屋を出て行き、軽い足取りで自分の部屋に向か
っていく。

「たっただいまあ！」

鈴は自分の部屋のをいつもの三倍近い勢いで開けると、ベッドの上でくつろいでいたルームメイト、ティナ・ハミルトンが何事かと思いい、目を丸くして

「お、お帰り……」

ワンテンポ遅れて、読んでいる雑誌を片手に鈴のほうを見ている。

「ふ、ふつ、ふつふつ……」

「あ、あの、鈴？ついに暑さでおかしくなった？」

「そうよねー」

ティナの言葉を適当に流す鈴。そしてベッドにダイブすると布団をぎゅうつと抱きしめる。

「……な、なに？布団を絞殺する気？」

「そうよねー」

「鈴、適当に返事してるでしょ」

「そうよねー」

「……はあ。もういいわ」

ティナはやれやれと呆れた様子で雑誌に再び目を戻した。

（早く明日になんないかしら！？まだ昼時だから余計長く感じるわ……。そうだ！明日の準備をしよう）

鈴はそう思つと早速準備にかかる。

（服は新しく買ったやつを出して、それからそれから——）

——下着とか——

（……………）

鈴は頭の中をその単語がよぎると一瞬沈黙する。

（こ、これは何かあったときの念のための準備なのよ！そう、備えあれば憂いなしって昔のヤツはいいことを言うわね！えらい、えらい！）

「ねえ、ティナ！えらいわよね！」

「そーねー」

（む。ティナってば人の話を聞き流して。しかも前に太る太るってばやいていたくせに、そんなにお菓子食べちゃって。しょうがないわねゝまったく。その点、あたしは大丈夫！）

そう鈴は臨海学校前からスタイルを調整してきたのだ。

（やっぱり、日ごろからの行いが大切よねゝ。これならいつ見られても——）

そう思ったところで、またもや一旦止まる。

「いやあ、ティナ！」

「な、なに……………？」

「なついわねえ、あつは！」

「そ、そう……………ね」

ティナは鈴の言動のおかしさに心配しながら見つめるのであった。
…。

第27話（後書き）

新年早々、短文な上に駄文で申し訳ございません。

そして三月いっぱいまでは不定期更新がかなり続きそうです。本当に申し訳ないです。

ACV発売まであともう少しです。でも買ってもやる暇が無いかもしれないという・・・orz

そしてファンタジーもの、ネギまらへんを書きたいと思う最近です。本当に無能な作者ですいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7031y/>

IS 何回か転生(?)する人の物語

2012年1月5日20時51分発行